
左翔太郎探偵物語

XN-RISER

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

左翔太郎探偵物語

【Nコード】

N1798N

【作者名】

XN - RISER

【あらすじ】

主人公 左翔太郎は風都の探偵である。悪の秘密結社、ミュージアムから翔太郎は風都を守るため今日も戦うのだ！！

Sの最後ノビギンスナイト（前書き）

はじめて小説書きました。この小説では翔太郎一人が主人公です。でフィリップは悪い役です。フィリップを愛されている方々、クレームつけてくれても構いません。

Sの最後ノビギンスナイト

2008年12月24日 - - -

「追えっ!!」 「逃がすなっ!」

風都郊外 - - -

「困いこめ!!!!」

「ケースを取り返すんだ!!」

GMコーポレーション本社 - - -

二人の男が二十人以上の黒いスーツの男に追われていた。

「逃がすかあ!」

スーツの男達が二人の男を囲む。

「ケースを大人しく渡せ」

「くそっ……………どうすんだおやつさん!？」

二人の内の一人　左翔太郎は、ケースを持った男、
鳴海壮吉に言った。

「さすがに逃げられる数ではないな……………」

そう言うと壮吉は翔太郎にケースを渡した。

「それを持って隠れている、翔太郎」

「隠れろって言われても……………」

翔太郎は周囲を見回した。
スーツの男達がものすごい剣幕で睨んでいる。

「無理でしょ…（涙）」

「ウルアアア！！」

スーツの男が飛びかかってきた

「うわあっ！！」と翔太郎は悲鳴を上げた。

しかし、壮吉は冷静に飛びかかってきた男の顔面に拳を叩き込んだ。

男が倒れこんだのと同時に、周りの男達が襲いかかった。

「うおおおお！！？」

翔太郎は転がりながら包囲から抜け出す。

「おやつさんは！！？」

振り返って後ろを見ると

「うわああっ！！」「なんだこいつは！！？」

スーツの男達が壮吉の攻撃でぶっ飛んでいく。

数人でもかかって壮吉の人間離れした動きとパワーで圧倒されてしまっ。

「ギヤアアアア！！」「ぐおっ」

想像を絶する光景に翔太郎は

「スゲエ……………」
と呟くしかなかった。

男の頭部に壮吉の回し蹴りが炸裂する。

「くそっ…………こうなったら…」

スーツの男の一人がポケットからUSBメモリのようなものを取り出した。

それを見た他の男達も同様にUSBメモリのようなものを取り出す。

『マスカレイド』 『マスカレイド』 『マスカレイド』 『マスカレイド』
『ト』

電子音が響いたかと思うと男達は一斉に自分たちの体に挿した。

「ガイアメモリ……………」

壮吉が呟くと男達が異形なものに変化した。

翔太郎は驚きの声上げた。

「なんだありゃあ？……………ん！？」

翔太郎は窓の外の何かに気づいた。

ガシヤアアアアン！！！！

その何かが窓ガラスを突き破って飛び込んできた。

「うわっ！」

「幹部のお出ましか……………」 壮吉は飛び込んできたものに向かって言った。

それは紅く、下半身が芋虫のようで、そしてそれは宙に浮いていた。

翔太郎は驚き過ぎて声も出ない。

壮吉は

「フンッ……………化け物め」と呟く。

「このタブー・ドーパントに向かって化け物とは…フツツ…ご挨拶
ねえ…」

そう言うと、タブー・ドーパントは
「殺れっ！」

指示と同時にマスカレイド・ドーパントが攻撃を仕掛けてきた。

素早い動きで壮吉は攻撃を避ける。
そしてマスカレイド達と少し距離をとった。

「このままでは少しキツいな…」

そう言うと壮吉は何かを取り出した。

「ロストドライバー!?!」
タブー・ドーパントが驚きの声をあげる。

壮吉はロストドライバーと呼ばれたものを腰にあてる。
するとロストドライバーからベルトが飛び出し、壮吉に装着される。

「ガイアメモリを使うのは流儀に反するが………」

壮吉はポケットからガイアメモリを取り出す。

「仕方がない……………」

『スカル!』

「変身……………」

そう呟くとロストドライバーにガイアメモリを挿し込んだ。

途端に壮吉の全身に貼り付くようにして、黒い装甲が現れた。

「おやっさん……………!?!」

壮吉の帽子を被ってはいるが、その顔はまるで骸骨のようだった。

「何故お前がロストドライバーを!?!」

タブーは驚きを隠せない。

「答える必要が有るのか…?」

壮吉はマスカレイドの集団に突っ込んでいった。

マスカレイド達も突っ込むが、

ガンツ! スドンツ!!

先程よりも強烈な壮吉の拳に為す術無くただ吹き飛ばされていく。

「もう…何が何だか…」

翔太郎は驚き過ぎて腰が抜けてしまった。

「風都どうなってんの？マジで…」

「それで…お前は見てるだけか？」

マスカレイド達を全て薙ぎ払った壮吉はタブーを見上げながら言った。

「貴様ア……」そう言うとタブーは光弾を放った。

壮吉は銃を抜き、光弾を撃ち落とす。

ズドドドドドンッ…！

「その程度かしら!?!」
タブーは更に光弾を放つ

ドドドドドドド!!

壮吉は爆炎と煙に包まれた。

翔太郎は悲鳴に近い声を上げた。

「おやつさああん!!」

タブーは攻撃を止めた。

「何故反撃してこない…!?!」

煙が晴れると、そこに壮吉の姿はなかった。

「「なつ…!?!」」

翔太郎とタブーは驚く。

「くっ……奴は何処に!？」

辺りを見回すが何処にも見当たらない。

「ここだ」

タブーが見上げると、壮吉がタブーの顔面に膝蹴りを入れた。

ドオオオオン!

タブーは地面に叩きつけられた。

「くっ……」

タブーは苦悶の表情を浮かべるが

横たわるタブーの腹部に壮吉は踵落としを決める。

ズドオン!

「があっ……!!」

壮吉はゆっくりと再び銃を抜く。

「くっ……」

その隙をついてタブーが起き上がり、全力で後退した。

「あいつ逃げる気か!?!」

翔太郎が叫ぶが、壮吉は落ち着き払って、

ロストドライバーからメモリを抜き、銃に装填した。

『スカル!!マキシマムドライブ!!!!!!』

「さあ…」

壮吉は銃を逃げるタブーに向ける。

「お前の罪を…」

ゆっくりと引き金を絞り…

「数えろ!!」

ドゥンッ!

銃から大きなエネルギー弾が放たれた。

Sの最後ノピギンスナイト(後書き)

しんどーい!!

でも続き頑張ります!!

Sの最後／運命のメモリ（前書き）

初めて書いたんで温かく見守って下さい。

Sの最後／運命のメモリ

エネルギー弾は真っ直ぐタプーに向かっていく。

ダメージの為に、タプーの動きが鈍い。

「いや、いやあああああああ！……！……！……！」

タプーの絶叫が響く。

その時

『サイクロン！』

電子音と同時にタプーを護るように竜巻が起った。
竜巻はエネルギー弾を巻き上げていく。

「何だと!？」

これには壮吉も驚きを隠すことができなかった。

翔太郎も信じられなかった。

「こんな…屋内で竜巻…？バカな！」

「悪いけど、姉さんは殺らせないよ」

タブー、壮吉、翔太郎は声のする方を見た。

このフロアを支える柱の近くに人影が見える。

が…翔太郎の位置からでは柱が邪魔でよく見えない。

「お前は誰だ…？」

壮吉は声の主に銃をむける。

「答える必要があるのかい？」

「答える…！」

「ああ！そつだ、アレは君のだったね。返してあげるよ」

タブーを護っていた竜巻が巻き上げたエネルギー弾ごと壮吉に突っ込んでいく。

なんとか回避しようとする。

が

「避けきれん!!」

壮吉はガードを固めた。

ドオオオオオオオオオオ!!

「うわああっ!!」

翔太郎は爆風に吹き飛ばされてしまう。

ビキビキビキ...

衝撃で壁や天井に亀裂がはいる。

「くっ...おやつさん...」

翔太郎は体を起こすが、全身が軋む。

今の爆風で照明が壊れたのか、暗くなっている。

壮吉は倒れることなく立っていた。

ガードを固めたおかげで、なんとか堪えることができた。

しかし、左腕があり得ない方向を向いている。

肋骨も何本か折れている。

折れた肋骨が刺さっているのか、うまく呼吸できない。

「ウツ…グ……………くそ……………」

戦える状態ではない…

パンツ
パンツ
パンツ

「いや、素晴らしいな君は！」

さっきの奴が拍手をしながら歩み寄ってくる。

「君の技に僕の竜巻を加えたから、てっきり粉々だと思ったのに」
壮吉は転がっている銃を拾おうとする。

「させないよっ」

腹部に蹴りをもらって壮吉は体をくの字に曲げて宙を舞った。

「があっ！」

そのまま壁に激突し、変身を強制解除されてしまう。

「おやっさん！！」

翔太郎が駆け寄る。

「まったく…美しい師弟愛だね。感動したよ。」
顔は見えないが翔太郎は奴が笑っているのがわかった。

「そんなにお師匠様が好きなら、一緒に地獄に墜ちたまえ！」

『サイクロン！マキシマムドライブ！！！！』

だが

「止めなさい!!」

止めたのはタブーだった。

「姉さんどうして!?!」

「ここはもう崩壊するわ。そうなる前にここを出るわよ」

「ちえっ」

わがままな子供のようなことを言っていると奴は変身を解除し、人間の姿に戻った。

その瞬間だけ

ほんの一瞬だったが

翔太郎には見えた

「まさか……本当に子供!?!」

うろたえる翔太郎にその少年は

「命拾いしたね。まあ、ここから出られたららの話だけど」

そう言って少年はタブーと窓から出ていった。

途端に

ドオ
ン

轟音をたてて天井が崩れだした。

「ゲホッ…ゴホッゴホ」

壮吉は大量の血を吐いた。

「早くしねえと……」

翔太郎は壮吉を背負おうとした。しかし

「やめろ……翔太郎……」

壮吉は拒んだ。

「はぁ！？こんな時に何を言ってんだよー!!」

翔太郎は壮吉の手を掴みそのまま背負った。

「ケース……」

「ケース！？ケースが何！？」

「あれ…ちゃんと持って…帰れ…よ」

「こんな状況でできねーよ！？」

「いいか…あれは……お前のための……」

「いいから黙ってるよ！！」

翔太郎は出口を探す。

「そつだ…翔太郎…俺の…形見をやらんと……な……」

「要らねーよ形見なんて！！」

だがどこも崩壊で塞がっている。

「つまり…んものだが……」

壮吉は自分の帽子を翔太郎に被せた。

「何してんだよ！それおやっさんのだろ！？」

「お前に…託す」

「やめろよ！！」

「お前なら…俺の…跡つげるよ」

「やめろって!!」

壮吉を背負う翔太郎の目から涙がこぼれる。

「依頼…人は絶対に…危険な目に…」

「やめろ!!」

「さ…らすん…じゃねえ」

壮吉の声が小さくなる。

「ケースに…お前の…イバーと…ガイ…リが…」

その時

翔太郎と壮吉の真上に天井が落ちてきた。

「やべえ…」

翔太郎にはその様子がスローモーションで見えた。

これは避けられない……

そう悟った壮吉は力を振り絞って翔太郎を蹴飛ばした。

翔太郎は何が起こったのかわからなかった。気付けば、翔太郎は前のめりになって転がっていた。

さっきまで自分のいたところには天井が落ちている。

背負っていた壮吉がいない。

「おやつさああああああん……………!!」

ドズウウウウウン

壮吉を助けに行こうとするが、落ちてくる天井が行く手を阻む。

「何だよ！何でこんな真似！！」

前に進もうとするが、壁のようになってしまっている。

ドオオン

ドオオン

翔太郎は座り込んでしまった。

「おやっさん…俺どうしたら…」

ビシッ　　ビシッ

落ちた天井の重みに耐えきれず
床に亀裂が入る。

「くそっ」

おやっさんは俺を助けてはくれたが出口が無い。

「どうしたらいい！？どうしたらいいんだ！？」

翔太郎はさっきまで持っていたケースを見つけた。

壮吉は何度もケースのことを言っていた。

「何でケースなんか…？」

翔太郎はケースを拾い、開けた。

そこには

「ガイアメモリ……………
と、ロストドライバー…？何でこんなものが…」

ビキィッ

翔太郎の足下が崩れた。足場が不安定になり、翔太郎の体勢が崩れる。

「うおおお！？」

翔太郎は必死にケースを掴みまだ崩れていない足場に飛び移る。

しかしガイアメモリが何本か落ちてしまった。

「俺のためってことは……………使えってことか…？」

翔太郎はケースのロストドライバーを装着した。

「これにガイアメモリを挿せばいいんだな!？」

しかし、ガイアメモリはさっき落ちてしまった。

「メモリ…メモリ…メモリがないと…」

しかしケースにはメモリがもう入っていない。

「マジかよ…」

そう呟いた途端、足下が崩れ、逃げ場がなくなった。

「どっか無いのかよ!」

そう言うと足下が完全に崩れ

翔太郎の体が落下を始める。

「くあつ…！死ぬ…！」

しかし、翔太郎の目には自分と一緒に落ちてくる黒い小さな物体が映った。

「ガイアメモリ…」

翔太郎は手を伸ばした。

「来いよ…ガイアメモリ…こっちに来い！！来い！！！！！！」

叫びに応えたかのように黒いガイアメモリは翔太郎の手に収まる。

下の階に叩きつけられる直前に

翔太郎はガイアメモリをロストドライバーに挿し展開させて叫んだ。

「変身!.....!」

Sの最後／運命のメモリ（後書き）

やっぱりしんどいですね。

次も頑張るんで指摘などございましたらよろしくお願いいたします。

奴の名はJノこの街の探偵（前書き）

いきなり亜樹子と照井がやって来ます。

奴の名はJ / この街の探偵

2009年 - - -

「ここが……風都……」

12月24日 - - -

「この街にお父さんが……」

PM10:25 - - -

少女は叫んだ。

「……………」

風車多っ！！」

PM10:39 - - -
左探偵事務所 - - -

この事務所の探偵、左翔太郎はラジオに耳を傾けながら、朝刊を読んでいた。

- - またしてもミイラ化遺体
今月で5件目 - -

「物騒だな…この街も…」

【…長野県のペンネーム
ゴーマさん（19）からのお便りです!!
「最近、長野では黒い四本角の化け物と白い四本角の化け物が殴り
合いをしているらしいんです!」】

「化け物ねえ……長野も大変だな……」

新聞を机に置き、ラジオを聞きながら呟く。

【まあっ、長野も一大事ですね。でも私はどちらかはいいい人だと思
いますよ!?!?】

「だといいいんだがな…」

【続いてのお便りは…】
バンツ と勢いよく扉が開いた。

翔太郎が見ると、入り口に少女（中学生くらいだろうか）が立っていた。

「依頼かい？」

そう言うと少女は

「やっぱりここ、左探偵事務所であってるんだね!？」
と目を輝かせながら言った。

「ちょっとお父さんを探して欲しいの!?!」

「お父さん？お嬢ちゃん、迷子かい？」

「ハアアア!？迷子オ!？私が!？」
急に大声をあげる。

「違うのか？」

「違うわっ!! 確かについさっきこの街に来たばっかやけども!!」

よく見ると少女は大きなリュックサックを背負っている。

リュックサックのポケットから何故か緑のスリッパ見える。

「お嬢ちゃん…どっから来たの？」

「私？大阪！」

「大阪！？そりゃまた随分遠くから来たな…」

「それより、お父さん探してくれないの!？」

少女は荷物を置きながら言った。

「ああ、そうだったな。ところでお嬢ちゃん名前は？」

「私は鳴海亜樹子!!んでお父さんの名前は鳴海壮吉!!」

「……………」

.....」

翔太郎はフウツと息を吐き出した。

「んなあにいいいいいいいいいい……！……？……？……？……！……？……？……」

翔太郎の絶叫に事務所が震えた。

机の上の新聞や書類が舞い上がり

本棚から本が勢いよく落ちていく。

ラジオはショートし

亜樹子は耳を塞いで縮こまっていた。

「おやっさんの娘えええええ！?!?!?!?!」

さらに事務所が震える。

「何!?何!?なん…何なの!?!」

「はっ!いかんいかん…」

翔太郎は我に帰る。

「失礼…見苦しいところ見せちまったな…」

「あ、いやお構い無く…」

それより、お父さんの知り合いなの?」

亜樹子はソファに座り、目を丸くして質問した。

「ああ…おやっさん、いや君のお父さんは俺の師匠だ」

「じゃあお父さんの弟子なんだ!!
それでお父さんは!?!」

「……………」
翔太郎の表情が曇った。

「……………どうしたの?」

そして机の引きだしから新聞を取り出し、亜樹子に渡す。

「何これ?」

日付は2008年12月25日

「一年前の新聞じゃん」

「その新聞の5ページ目、右下の記事を見てくれ」

「なになに……………?」

――GMコーポレーション本社ビル 原因不明の崩壊事故 死者
40人以上

昨夜12月24日、

GMコーポレーションの………

「俺とおやつさんはその時そのビルにいた……」

「えっ!?!」

翔太郎は窓から見える風都タワーを見ながら続ける。

「俺とおやつさんはある依頼を受けて、そのビルに潜入した。

だが、潜入がばれて敵と交戦………

おやつさんは俺を庇ってビルの崩壊に巻き込まれた……」

「何それ………私聞いてない……」

亜樹子は今にも泣きだしそうだ。

「だが」

翔太郎は亜樹子の方を向いた。

「どついうわけか、おやっさんの遺体は見つからなかった」

「……………え？」

「事故の後、俺も警察も血眼になって探した……」

でも見つかることができなかった」

「それじゃまだ生きてるってこと!？」

「生きてるって断言することはできない。

だが、死んだと断言することもできない……」

だから俺は今でもおやっさんを探してる」

「そっかぁ……………」

亜樹子は残念そうに言った。

しかし表情は先程よりほんの少し明るかった。

「でも依頼って一体どんな依頼」

「翔太郎!!!!!!」

バンツと亜樹子が言い終わる前に扉が開き、

一人の青年が勢いよく入ってきた。

「竜!?!」

竜と呼ばれた青年は亜樹子に気がついた。

「ん? あっ…邪魔したか…?」

「いえ、お構い無く」

亜樹子は笑って言った。

「どうかしたのか、竜?」

「ああっ、そうだった。

翔太郎、お前の力を貸してほしい。」

奴の名はJ／この街の探偵（後書き）

才能が無さすぎて泣きそうです。
指摘等ございましたらお願いします。

奴の名は「ノ連続」「ミイラ殺人」事件（前書き）

今回もご確認ください。

奴の名はJノ連続「ミイラ殺人」事件

12月24日 - - -

「俺の力を？」

PM 11:13 - - -

「ああ。今度の事件もお前の力が必要かもしれない」

左探偵事務所 - - -

「よしわかった!!明日にしてくれ!!」

「いや、なんでやねーん?」

亜樹子がリュックサクサクからスリッパを取り出して翔太郎の頭を叩く。

「あだっ」

「今きけやあぁー?」

竜は突然のことではなにがなんだかわからないようだ。

「翔太郎、話を聞いてくれない理由を聞く前に、

この娘誰だ!？」

亜樹子は敬礼をしながら

「申し遅れました!!先程大阪から来ました!!鳴海亜樹子です!
!?!?!」

「あ……丁寧にどうも……」

完全に亜樹子の勢いに圧倒されてしまう。

「俺は風都警察署の照井竜だ」

竜は握手をしようと手を差し出す。

「警察!?!警察が何の用!?!」

「おおっ、そうだった。」

おい翔太郎、なんで話聞いてくれないんだよ？」

竜は頭を擦っている翔太郎の方を見た。

「あ？なんでかって？」

そう言うと翔太郎は時計を指差した。

P M 1 1 : 2 0 - - -

「クリスマスイブだぞ！？もうすぐサンタがくるんだぞ！？」

「.....何言ってるの？」

竜と亜樹子は文章では表現できない顔をしている。

「ん？なんだその、えもいわれぬ顔は？」

亜樹子のスリッパを持つ手が震える。

「ハア……子供がお前？」

溜め息混じりに竜は言った。

「お前、いつまでそんなこと言ってるんだ！？」

「初対面でこういうこと言いたくないけど……だいがイタイよ？」

なかなか辛辣なことを言ってくる。

「馬鹿野郎！サンタはいるんだぞ！？」

「いい加減大人になれ翔太郎！！」

「そーだそーだ！！」

「いいか！？あと少いでサンタが来るんだぞ！？」

「来るかぁ！来るのは！子供の家だけだぁ！！」

「そーだそーだ！！」

「初対面なのに失礼すぎませんか！？」

その時

突然事務所の扉が開いた。

三人の視線が扉に集中する。

「メリークリスマス！！！！！！！！」

入ってきたのはサンタの格好をした男だった。

「「そんな馬鹿な……」」
竜と亜樹子がそう言つと

翔太郎は誇らしげに

「な？俺の言つたとおりだろ？」

12月25日 . . .
AM9:47 . . .
風都警察署 . . .

「ミイラ殺人？何それ？」
目を丸にして亜樹子が言う。

「なんでここにいるのかな？君は……」

竜はにこやかに言う。

「お父さんの弟子の仕事を見てみよつと思つて〜」

同じようににこやかに言う。

「お父さんの…弟子？」

「竜、いいから説明してくれ」

翔太郎が言うと竜は説明を始めた。

「ああ、そうだな。」

最初の被害者は

木戸 十蔵

(きど じゅうぞう) 52歳 株式会社三木エレクトロニクス
の重役だ。

二人目の被害者は

佐伯 庸一 (さえき よういち) 45歳

同じく三木エレクトロニクスの重役

三人目の被害者 日下部 也一 (くさかべ なりかず) 40
歳

四人目の被害者 小倉 大造 48歳

五人目の被害者 木村 則子 43歳

三人も三木エレクトロニクスの重役だ」

「全員重役……か」

「そういうことだ……」

「ねえ！」

亜樹子が手を挙げて言った。

「ミイラ殺人ってどういうこと？」

亜樹子がそう言うと竜は翔太郎に数枚の写真を渡す。

「それが遺体が発見された時の状態だ」

写真を見た亜樹子は手で口を覆った。

「確かにミイラだな……」

「五人全員が体の水分をすべて抜かれている」

「どつやったらこんな死に方すんのよ、もお」

「短期間でこんな状態になることはまずあり得ないらしい」

「じゃあ、なんでミイラになっちゃったの？」

「俺の予想だがおそろしく」

「ドーパント……か」

竜より先に翔太郎が答えた。

「?????ドーパント?何それ?」

亜樹子の疑問に答えずに翔太郎は立ち上がった。

「そんじゃ、調査に行きますか!?!」

黒いソフト帽を被って部屋を出ていく。

「俺も行く!?!」

竜も翔太郎のあとを追って出ていく。

そんな二人を亜樹子は

「ドーパントって何?!!?」

と叫んで追いかけていった。

奴の名は「連続」「ミイラ殺人」事件（後書き）

仮面ライダーでなくすいません。
でもそろそろ変身します。

奴の名はJノ黒の仮面(前書き)

一番ぐだぐだになってしまいました。

奴の名はJ／黒の仮面

12月25日 - - -

「あれ？真倉さんじゃないですか！
どうしたんすか、こんなところで？」

AM10:38 - - -

「こんなところで？じゃねーよ照井！
仕事サボリやがって！！」

三木エレクトロニクス本社前 - - -

「あれ？マツキーじゃん」

翔太郎を見た途端、本社前にいた刑事、真倉は険しい表情をした。

「探偵！？なんでお前が来るんだよ！？」

「アンタの可愛い部下からの依頼だからだよ」

「お前なんかいらん！！帰れ！！」

翔太郎と真倉が子供のような喧嘩をしていると

「あーはいはい、やめろやめろ！
顔合わせる度に喧嘩しやがって…」

「お疲れ様です！刃野刑事！！」

竜は二人の仲裁をする刃野刑事に敬礼をした。

「おう。やっと来たか照井。」

「刃さん、何してるんすかこんなところで？」

「何って、この会社の人間ばかり被害にあってるんだ。
パトロールに決まってるんだろ？」

「そういう翔太郎は何してんだ？」

「ちょっと調査にね……」

本社ビルに目を遣りながら答えた。

「そうか。それじゃなんかわかったらいつもみたいに教えてくれ」

そう言つて真倉を連れて周辺のパトロールを再開した。

真倉は翔太郎を睨みまくっていたが、敢えて無視する。

AM 10:58 - - -

三木エレクトロニクス本社受付前 - - -

「社長にですか……?」

受付嬢は怪訝な表情をしている。

「失礼ですが、アポの方は……」

「無い」

翔太郎が即答する。

「無いんかい!!」

後ろで亜樹子がずっとこけた。

「あれ、いたの？」

「今更かい！！」

ゴホンツと咳払いをして竜は警察手帳を出した。

「少しの間でいいんですが…」

「しかし、アポがないと…」
すると

「まあいいじゃないか！」

初老の男が歩み寄ってきた。

受付嬢は男を見ると

「社長！？」

と慌てて頭を下げた。

「警察の方かな…？話しことは話尽くしてしまったんだが…」

「あ、いえ、話を聞きたいのは……」

竜が翔太郎の方を見ると、翔太郎は一步前出た。

「アンタが三木社長か……？」

「いかにも私が三木だが……君は？」

A M 1 1 : 1 2 - - -
社長室 - - -

「死んだ五人についてかね？」

三木は紅茶を飲みながら訪ねる。

「ああ、会社での人望や人柄とか……」

紅茶を飲みながら翔太郎は答える。

「ねえねえ…翔太郎君はいつもこんな失礼な感じなの？」

亜樹子が小さく竜に耳打ちする。

「まあね…生意気なのは生まれつきかな…」

三木は窓に目を遣る。

「彼らは皆、優秀だった。
人望も厚く、正義感に溢れ
いつも私を助けてくれた…」

「それじゃ殺される動機は無いと…?」

視線を翔太郎に戻すと

「そうとも言い切れん…」

「何故？」

「実はこの会社は近年の不況のため、先月の下旬に約100人の社員をリストラした。

そしてその決定を下したのが……」

「その五人ってわけか……」

AM11:41――

三木エレクトロニクス本社前――

「ねえ、犯人わかったの？」

気だるそうに亜樹子が言う。

「いや、まだだ」

「そうか……それじゃ俺は刃野刑事達に合流するから、

なんかわかったらいつもみたいに教えてくれ」

そう言っただ竜は去っていった。

「百人も調べらんないしな……」

あいつのどこ行くか……」

「あいつって誰よ？」

亜樹子の問いかけも軽く流して

翔太郎は歩きだした。

P M 0 : 2 4 - - -

喫茶店「ウインドガーデン」 - - -

「エへへへ……」

髭を伸ばした男がデジタルカメラを構えて

喫茶店の女性店員の写真を撮ろうとしている。

「エへへへへへ……」

が、突然カメラを取り上げられた。

「探したぜ…ウオツチャマン」

「ああ！返してよ翔ちゃん！！」

ウオツチャマンと呼ばれた男は
奪われたカメラを取り返そうとするが
翔太郎はそれを避ける。

「おっと……こんなことをしてる場合じゃなかったな」

ウオツチャマンにカメラを返すと

「連続ミイラ殺人の情報が欲しい」

「それって三木エレクトロニクスなの？」

ウォッチャマンは先程撮影しそこねた女性店員にピント合わせる。

「2ヶ月くらい前からかなあ…」

あの会社に議員がよく来てるんだってさ」

「議員？」

「そう。国会議員」

「国会議員ってことは…」

ウォッチャマンを見ると何かに目を奪われている。

翔太郎がウォッチャマンの視線の先を見ると

「ん？私？」

亜樹子だった。

「この娘って翔ちゃんのコレ!？」

ウォッチャマンは小指を立てている。

「いけないなあ〜翔ちゃん。中学生は犯罪だよ？」

「コレじゃないし盗撮は犯罪じゃねーのか!？」

言い争う二人に対し、亜樹子が口を開いた。

「私、二十歳ですけど？」

「……………」

「ええええ……………!？」

店内に二人の叫びが響く。

すかさず店員が

「あの、お客様、他のお客様に迷惑になりますので……」

「「すみませんでした……」」

他の客が凄く睨んでいる。

翔太郎は咳払いをして

「あー……会社に議員が来てたって？」

P M 2 : 3 3 . . .

三木エレクトロニクス前 . . .

「なんだ探偵？もう戻って来たのか？」

真倉に絡まれた。

「悪いがマツキー、お前に用はない！」

「そーだそーだ！！」

亜樹子がそれに続く。

と、翔太郎はいきなり

「お前もだ亜樹子！！お前はここで待ってる」

「そーだそー……………何で!？」

「危険だからだ」

「何が危険なのよ!？」

再び翔太郎は無視する。

そして翔太郎は一人本社に乗り込んでいった。

「あっ！勝手にどこ行くんだ！？」

が、

「あ、そうだ」

翔太郎は足を止めて振り返った。

「マッキー、ひとつ頼みがあるんだが」

P M 2 : 4 6 . . .
社長室 . . .

コンコンッ

誰かがノックした。三木は立ち上がり

「入りたまえ」

と入室を促す。

「失礼します」

入ってきたのは翔太郎だった。

「君は……朝の探偵君じゃないか……どうかしたかね？」

翔太郎は扉を閉めた。

「少し話いいですか？」

朝と違ってかしこまっている。

「まだ聞きたいことでも？」

三木は椅子に座る。

「少し気になることがね…」

最近この会社に国会議員が来てるっていうのは本当ですか？」

「誰がそんなことを？」

翔太郎は答えずに話を続ける。

「社長言っていましたよね？」

死んだ五人は正義感が強かったって」

翔太郎は窓から外を見る。

「俺てつきり五人を殺したのって、
リストラされた元・社員だと思ってました。」

「何が言いたいのかな？」

三木の顔が強ばる。

「最近国会議員が来てるって…」

もしかして社長、
賄賂とか送ろうとかしてました？」

翔太郎は三木に視線を向ける。

「ここからは俺の憶測ですが、

そのことが五人にバレた。

正義感の強い五人がそんなこと知ったら許さないでしょう。

だからあなたは」

「いい加減にしろおっ！！」

三木が立ち上がる。

「なんだ君は！？

私が五人を殺したと言いたいのか！？

私がミイラにしたと言いたいのか！？！？」

「リストラの話、本当に五人が決定したんですか？」

三木は黙って翔太郎を睨む。

「それから社長、ガイアメモリってご存知ですか？」

「なっ！？…何故それを！？」

「持ってるんですね？」

翔太郎が詰め寄る。

三木が扉に向かって走った。

「逃げようとしても無駄ですよ。」

すでにこのビルは包囲されてんだから」

「何だと！？」

三木が窓から外を見ると
多くのパトカーがビルを囲んでいた。

「逃げ場はないぜ……」

「くっ……………」

……………

ははははは

ははははははははははははは

ははははああああ……!!

だからどうした!?

わかっているんだろう!?

こんな包囲など意味がないことをお……!!……!!……!!

三木は胸のポケットからガイアメモリを取り出した。

『ドライ……!!』

「お前もミイラにしてやるっ……」

三木はメモリをうなじに挿し、朱色の化け物「ドライ・ドーパント」に変貌した。

「もっとカッコいい台詞無いのかよ……」

翔太郎はロストドライバーを取り出し、装着する。

「ぬっおおりゃあ!!」
ドライ・ドーパントが突っ込んでくる。

それを避けると翔太郎は黒いガイアメモリを取り出した。

「なっ………貴様…まさか!？」

『ジョーカー!!……!!』

「変身……」

黒いガイアメモリをドライバーに挿した。

途端に翔太郎を光が包みだす。

「貴様あ…貴様もドーパントか!？」

「お前と一緒にするな…」

俺は…」

光が弾ける。

「ジョーカーだ」

全身が黒く、赤い複眼の”戦士”、ジョーカーが現れた。

「おおおお!!」

雄叫びをあげ、ドライ・ドーパントの顔面に左の拳を叩き込む。

「がっ！」

ドライ・ドーパントが壁に衝突する。

「立て。五人の苦しみはこんなもんじゃない……」

ジョーカーの拳がドライ・ドーパントの顔面を再び捉え、更に連打を浴びせる。

ガンツッ！ ガツッ！ ガンツッ！！

ドライ・ドーパントは防御することもできない。

「ぐ……………くそ！」

ジョーカーから飛び退き、床に手を押しつける。

「なんの真似だ……？」

「悪いが……ハア……逃げさせてもらおう！」

次の瞬間、ドライ・ドーナツの足下が砂になった。

そしてどんどん下の階に降りていく。

「逃がすかよ……！」

ジョーカーもあとを追って下の階に降りていく。

P M 3 : 0 0 . . .

三木エレクトロニクス本社前 . . .

「真倉よお、いつまで待ってりゃいいんだ？」

刃野が真倉を睨みながら言った。

「いや、だってあの探偵が包围しろって…」

ドオオオオーン！！

「なんだ！？」「なんの音だ！？」

「どうしたあっ！？」「

警官達が轟音に動揺する。

「ビルの玄関に何か落ちてきましたあー！！」

その一言で警官達が玄関に向かう。

竜と亜樹子はその様子を見守っている。

「何だ…？」

「なになに？何なの！？」

玄関は土煙で何も見えない。

「何だ！？一体何が落ちてきたんだ！？」

突然

「ア、ア、ア、アアア！！」

ドライ・ドーパントが飛び出した。

「うわっ！？」

「ドケエエエ！！」

と警官達を蹴散らしていく。

「ドーパント！？」「回避い！！回避だあ！！」

ドライ・ドーパントは竜達の方に向かってくる。

「何あれ！？こっち来るよ！？
私聞いてない！！」

土煙の中から何かが飛び出し、ドライ・ドーナツに飛びかかった。

「翔太郎……………」

竜は飛び出したジョーカーを見て呟いた。

P M 3 : 0 3

三木エレクトロニクス駐車場

「らあっ！！」

ドザアアアアア

ジョーカーのハイキックにドライ・ドーナツは吹き飛ばされる。

「グッ…ガアッ…！キサマナンゾニィィ…！！…！！！」

まだ立ち上がるドライ・ドーパント

「メモリに呑まれてんな……」

ジョーカーはメモリを抜き取り、ベルトの右についているスロットに挿した。

『ジョーカー…！マキシマムドライブ…！！…！！』

「アアアアアアアアアアアアアアアア！」

ドライ・ドーパントは真っ直ぐ突っ込んでくる。

「さあ、お前の罪を…」

ジョーカーの右腕が青白く発光していく。

「さて、あとは竜に任せるか…」

P M 3 : 1 6 - - -

三木エレクトロニクス前 - - -

「被害状況は!?!」

「死者0、ほぼ全員が軽傷で済んでいます!?!」

「ねえ………おっきの何…?」

亜樹子は訊ねる。

「朱色の方はおそらくドーパント、黒いのは
「ジョーカーだ」

いきなり翔太郎が二人の間に割って入ってきた。

「うおっ！！翔太郎！？お前……ここに居るってことは片付いたの
か！？」

「まあな。ここからは警察の仕事だろ？
あとは任せませ」

「わかった。
報酬は今度持っていくからな！！」

竜は手錠を持って駐車場に走っていった。

「さてさて……仕事終わったし、
とっとと帰ろうかね……」

翔太郎は歩きだす。

「えっ？……あっ……もう帰るの！？」

亜樹子は翔太郎を追って走りだした。

「ちよっと……ドーナツって……ジョーカーって何よお……！」

奴の名はJ / 黒の仮面 (後書き)

詰め込み過ぎた感じが…

次回がんはります。

暴走するCノ迷子の外国人（前書き）

今回はペース配分を考えて書きました。

暴走するC / 迷子の外国人

12月25日 . . .

「じゃあ、そのガイアメモリって言うやつで…」

PM 6 : 29 . . .

「ドーパントっていうあんな怪物になっちゃったの!?!?」

左探偵事務所 . . .

「ちよっ……顔近づ」

翔太郎は寄ってくる亜樹子の顔をなんとか押し退ける。

「まあ、そういつことだ」

コーヒーを用意しながら続ける。

「ところでこれからどうすんだ?」

「どつするって何が？」

「大阪に帰らないのか？」

亜樹子は腕組みをしてふんぞり返り

「風都がこんな状況なのに帰れるわけないでしょうが……！！！！！！！！！！」

「はあ……そうすか……」

コーヒーを啜る翔太郎はうんざりしたような顔だ。

「それに……」

「それに？」

「お父さん見つかるまで帰らない」

「……………そうか」

またコーヒーを啜る。

「でも風都にガイアメモリばらまいてるのってどんな人だろ？」

亜樹子は外を見ながら呟いた。

P M 6 : : 2 9

とある豪邸

「義兄さん！！霧彦義兄さん！！」

霧彦と呼ばれた男は声のした方に振り返った。

「やあ。来人君」

来人という少年が走ってくる。

「今帰ってきたのかい？」

「うん。霧彦義兄さんは今日は早いね？」

玄関の扉が開いた。中には大勢のメイドが並んで頭を下げている。

「お帰りなさいませ」

「今日はクリスマスパーティーだからね」

メイドが霧彦の荷物を受けとる。

「若菜姉さんは何時頃帰るの？」

「さあ…若菜ちゃんは忙しいからわかんないな」

二人は階段を登っていく。

「来人君も仕事忙しいだろう？」

「霧彦義兄さんに比べれば大したことないさ」

「そうかい？私はそんなに忙しくないぞ？」

そう言うと霧彦は大きな扉を開けた。

「ちょっと！遅いわよ霧彦義兄さん、来人」

「あれ？」

「若菜姉さん！？帰ってたの？」

「仕事放り出して帰ってきたのに、
一時間も待たせるなんて、あんまりだわ！」

既にバカみたいに大きなテーブルに料理が並んでいる。

来人と霧彦は席につく。

「いいじゃない。二人は遊んでたわけじゃないんだし。」

若菜の向かいに座る女性、冴子は言った。

「でも姉さん!!！」

その時、再び扉が開いた。

「母さん！」

「若菜、何を騒いでるの？」

彼らの母親、文音が入ってくる。

「聞いてよお母様！！来人と霧彦義兄さんったら、一時間も待たせるのよ！？」

「いいじゃない。まだ来てない男だっているんだから」

30分後 . . .

「はっはっはっは！皆ただいまあ〜！！」

この豪邸の主、園咲琉兵衛が入ってきた。

が

「ん？どうした皆？何故黙っている？」

誰も琉兵衛と目を合わそうとしない。

ただ一人、若菜の髪が逆立っている。

「……………おおおおお遅い!!!?」

突然若菜が叫んだ。

「おお!?!」

突然のことに琉兵衛は驚く。

「何してたのよ!?!私たち一時間半も待ってたのよ!?!
仕事放り出して早く帰ってきたのよ!?!」

「仕事放り出して早く帰ってきたのは若菜姉さんだけじゃないか」

来人が小声で言った。

「何か言った??」

若菜が睨んでくる。まるで悪魔だ。

「なんでもございません
すぐに謝る。」

「いや、待たせたのは悪かった。だが何をそんなムキになる必要があるんだ？」

琉兵衛は12月とは思えないくらい汗びっしょり。

「だってクリスマスよ！？サンタが来るのよ！？」

「……………」

「何よ？そのえもいわれぬ表情は？」

「姉さん、子供かい？」

「それに25日だからサンタは来ないぞ」

来人と霧彦が静寂を突き破る。

「来るわよサンタは!!」

「ハア……姉さんだけだよ？」

その年でそんな子供じみたこと言っつもの

PM7:05 - - -

左探偵事務所 - - -

「ヘエックシヨイ!!」

「どうしたの翔太郎君？風邪ひいた？」

「いや、大丈夫だ……」

12月26日 . . .

AM6:33 . . .

園咲家「来人の部屋」 . . .

ドンドンドン

「はいはい、今開けるよ…」

ドアを開けると寝間着姿の若菜が誇らしげに立っていた。

「見なさい来人!!」

若菜の手には赤いリボンでラッピングされたプレゼントが握られている。

「ね？私の言ったとおりでしょ？」

来人の視界は、若菜にバレないように自室に戻る琉兵衛を捉えていた。

「あー…うん、よかったね…」

AM 10:13 - - -

左探偵事務所 - - -

【東京都の、びちまる子さんからのお便りです!!】

事務所のラジオから流れているのは

「園咲若菜のヒーリングプリンセス」だ。

【最近町中で、警察の大型トレーラーから
ガトリング銃を持った青い装甲の警官が出てくるのを見かけます。】

「風都警察署にも配備してくれねーかな…」

【それに先週、
ミサイルランチャーを持った黒い装甲の警官がヘリコプターから飛
び降りてたんです!!】

「二つあるなら一個くれないかなあ……」

「翔太郎君、

イタイ人に見えるから独り言やめてよ」

反論することなくコーヒーを飲み干す。

すると

ガチャ

「Excuse me?」

「…はい?」

聞きなれない言葉に翔太郎と亜樹子は扉の方を見た。

「なっ……!!」

「外国人!？」

入ってきたのは長身の外国人だった。

「どーすんの翔太郎君!？」

「どーすんのって…俺英語わかんねえよ……!!」

「私だってわかんないよ……!!」

外国人は心配そうに二人を見ている。

「あー…と、あい、あいきやんとすぴーく……」

翔太郎ができない英語で会話をしようとするど、

「Oh, sorry! 僕なら大丈夫ですよ?」

なかなか上手な日本語だ。

「……………日本語お上手…ですね」

AM 10:21 - - -

園咲家地下 - - -

「それで若菜は上機嫌だったのね?」

園咲家の長女、冴子は藍色のガイアメモリを机に置いて言った。

「そうなんだ。何も朝早くに起こさなくなつて……………」

何も書いていない本をめくりながら

園咲家の長男、来人はぼやく。

「そんなことより姉さん、新型ガイアメモリの製造の方はどう？」

「まだ全然よ。来人の方は？」

「起動実験もできないね」

園咲家……

風都に流通するガイアメモリを製造、販売を取り仕切る。

そして数多くの事件、

悲劇を引き起こす諸悪の根源。

それが園咲家。

「来人、あなたはプレゼント貰わなくてよかったの？」

「僕もう17だよ？」

若菜姉さん22なのに……

あんな子供みたいなの22歳は若菜姉さんだけだね」

AM10:50 - -

左探偵事務所 - -

「ヘエックシヨイ!!」

「風邪ですか？」

「いえ大丈夫……」

で、早い話あんた迷子なのか？」

「Yes……サユルくんの誕生日に何ヲPresentしようかとこの街に来て……」

「そして、そのゴダイさんとはぐれたと……」

「そのトオリです…」

「ねえ！」

亜樹子が話に割って入る。

「どうして警察いかなかったの？」

「一応、行つてみたけど…皆慌ててどっか行ってシマイマシタ……」

AM 10:51 - - -

風都インターチェンジ付近 - - -

そこには多くのパトカーが急行していた。

「こちら真倉！！被害にあった車両を確認しました！」

刃野は無線を取る。

「被害状況は!?!」

「車両が3台。どれも乗っていた人間ごとグシャグシャで……」

「クソ……」

おい照井!?!」

「はいつ!?!」

白バイで急行する竜は応答した。

「相手はかなりの暴れん坊だ!?!絶対無茶はするなよ!?!」

「了解!」

そう言つとスピードを上げた。

暴走するC / 迷子の外国人（後書き）

なんか余計な話が長い気が……

暴走するCノ仮面のライダー（前書き）

今回の依頼

依頼人

ジャン（外国人）

依頼内容

はぐれてしまったゴダイさんという男を探して欲しい

メモ

人を探すだけなので非常に楽な依頼である。

翔太郎

暴走するCノ仮面のライダー

12月26日 - - -

「そつえば、まだあんたの名前聞いてなかったな」

AM 11:20 - - -

「僕はジャンと言いまス」

左探偵事務所 - - -

「それじゃジャン、そのゴダイさんを探そうか！」

翔太郎は黒いソフト帽を被る。

「サユルくんにおモチヤをプレゼントしようとしたんだろ？」

「だったらゴダイさんは玩具店周辺にいる可能性が高い」

「Oh！それもソウですネ！」

「とりあえず、しらみ潰しに探そう」

翔太郎は事務所を飛び出しバイクに乗って捜索にむかった。

「それじゃボク達もいきまシヨウ」

「ちやちやっと見つけるわよー!!」

二人も事務所を出た。

AM 11:39 - - -

玩具店「子供の樂園」風都支店 - - -

自動ドアを通過して翔太郎が出てきた。

「ここにはいないな……」

次の店に……ん？

翔太郎の目に止まったのは店の外に置かれた、オモチャの宣伝用のテレビ。

【……………して決める！！必殺技！！DXデンカメンソード！！】

「必殺技……………か。なんかいいな……………」

ヘルメットを被り、バイクにまたがる。

「そうか…必殺技か……………カッコいいな……………
ジョーカーの必殺技ってなんだろ……………」

マキシマムパンチとかか……………？

いや、じっくりこないな……………」

バイクにまたがったまま独り言を言う翔太郎を

行き交う人々は冷ややかな目で見ている。

「おかしーん！あの人変だよー！」

「シッ！ー！見ちゃダメよ！ー！」

そんな親子の話し声も翔太郎の耳には入らない。

「ジョーカーパンチ！」

「いまいちな……」

AM 11:51 - - -

風花町四丁目 - - -

「あそこのデパートにはいなかったね……」

亜樹子とジャンは川沿いの公園のベンチに座っていた。

「どこにいるんデショウか……ゴダイさん、心配してるだろうナ……」

…」

先ほどからやけにパトカーのサイレンが聞こえてくる。

だが距離は遠いようだ。

「? ……そういえば、警察署って皆どっか行っちゃったんだよね?」

「サイレンが聞こえてきますネ……」

耳を澄ますと、サイレンがわずかだが大きくなっているのがわかる。

「なんかあったのかな?」

さらに耳を澄ます。

「……………ン……………ヤン」

「ん？」

二人は顔を見合わせた。

誰かが叫んでいるのが聞こえる。

「ゴダイさん？」

ジャンは立ち上がって辺りを見回す。

「……………ヤン！！ジャーーン！！」

はっきりと聞こえた。

声のする方を見ると、一人の青年が手を振りながら走ってくる。

「ゴダイさん!?!」

「オーイー!! ジャーーン!!」

「あれがゴダイさん!?!」

こちらに向かって走ってくる青年、
ゴダイは遠くからでもわかるくらいイケメンだった。

「あっさり過ぎる早さで見つけたよ……」

亜樹子は呟いた。

「ハアツ…ハアツ…ジャン…やっと見つけた……」

「ゴダイさんごめんなさいね〜!」

「どこ行ってたんだよ、もう……」

ゴダイはその場に座りこんだ。

「探偵サンにゴダイさん探すの手伝ってもらってたんデスよ」

ゴダイは亜樹子を見た。

「この女の子が探偵さん？」

「あ、はい!!左探偵事務所の鳴海亜樹子です!!」

亜樹子の声がつわずつている。

「それじゃ……これ、俺の名刺です!!」

ゴダイは一枚の名刺を差し出した。

「????」

2001の技を持つ男?

五代…雄介…」

「どうもジャンがお世話になりました。

それじゃ、行こうかジャン?」

五代がそう言うと、ジャンは

「それが……ゴダイさん、
まだゴダイさんを探してる探偵サンがいるんですヨ…」

「あつ!!翔太郎君!!」

忘れてた……」

P M 0 : 0 0 - - -
風都ブリッジ前 - - -

「へエックシヨイ!!」

……やっぱり風邪かな……」

忘れられていた翔太郎はヘルメットを被る。

パトカーのサイレンが聞こえる。

「なんかあったのか…?」

サイレンから判断すると、そう遠くなさそうだ。

「ちょっと行ってみるか……」

P M O : 0 0 . . .

風花町四丁目 . . .

パトカーが列をなして走る。

「くそ……町の方に逃げられるとは……」

刃野はパトカーの中で悪態をつく。

「スピード出せ真倉ア!!」

「はいっ!!」

「……………サイレン近くなってるない？」

五代はジャンと亜樹子の方を向く。

「アっ…本当ダ……………」

だが聞こえてきたのはサイレンだけではない。

「なんか人の悲鳴が……………」

悲鳴だけでなく、地響きもする。

そしてそれはどんどん近づいてくる。

「なんだ？何かこっちに来てるのか？」

と、その時

ズダアアアン！！

何かが三人のすぐ近くに落ちてきた。

「な……何よあれ！？私聞いてない！！」

P M 0 : 0 6 . . .

園咲家地下 . . .

「ところで冴子姉さん、それはなんだい？」

来人は藍色のガイアメモリを指差した。

「ああ……これは最終調整前のメモリよ」

「どんなメモリなの？」

「キョクロプス……一つ目巨人の記憶のメモリよ」

P M 0 : 0 6 . . .
風花町四丁目 . . .

亜樹子達三人の前にいるもの

それは目が一つ

身長は目測5メートルほどの巨人だった。

「It's big……」

「なんだこれ……?」

三人は呆気にとられる。

パンッ！パンッ！

二発の銃声が響いた。

「そのの三人！早く逃げる！！」

白バイに乗った男が銃を構えている。

亜樹子にはそれが誰かわかった。

「竜君！？」

「こっち向けドーパント！！」

竜はさらに発砲する。

しかし

「こっちに来マスよ！？」

ドーパントは三人の方へ向かっている。

「こつちを向けってんだ!！」

さらに発砲するがドーパントは歩みを止めない。

「ヤバい…早く逃げよう!！」

三人は一斉に走りだした。

しかしドーパントも走りだす。

「なっ!?!」

「What!?!」

「嘘でしょ!?!」

ドーパントはどんどん迫ってくる。

「まずい！…このままじゃ…」

追いつかれる

そう思ったとき

一台のバイクがドーパントと三人の間に割って入った。

「翔太郎！！！！」

現れたのは翔太郎だった。

「なんだこいつ？ドーパントか？」

懐からロストドライバーを取り出し、装着する。

「翔太郎君危ない！！逃げて！！」

翔太郎は亜樹子の叫びに耳を傾けもせず

ジョーカーメモリを取り出す。

その様子は亜樹子からでもわかった。

『ジョーカー！！！！！！』

「あれ？もしかして…ガイアメモリ？」

「変身……」

バイクにまたがったまま、メモリをドライバーに挿す。

翔太郎は光に包まれ、ジョーカーに変身した。

「!?!?!? 翔太郎君がこの間のジョーカー!?
私聞いてない!!」

「ブオオオオオオオ!!」

ドーパントが雄叫びをあげる。

「やる気満々だな……じゃ、こっちからいくぜ」

ジョーカーはバイクに乗ってドーパントに向かっていく。

「ブオオオ!!」

ドーパントは異常な太さの腕をブンブン振るう。

しかしジョーカーはそれを華麗なテクニックで避ける。

「そらっ！！」

ドーパントの股をぐぐり抜けるのと同時に右足にパンチを放つ。

殴られた右足が浮き、バランスを崩したドーパントは膝をつく。

ジョーカーは飛び上がり、巨大なドーパントの顔面に飛び蹴りを浴びせる。

「らあっ！！」

が、

「ブオオオオオオ！！」

ドーパントは反撃に転じ、宙に浮くジョーカーをわしづかみした。

「なっ！？」

「ブオオオオ！！」

ドーパントはジョーカーを地面に投げつけた。

ジョーカーは受け身をとれず、そのまま叩きつけられた。

ズガン！

「があっ……」

「翔太郎！！」

するとドーパントは足を引きずりながら移動を開始した。

その方向は市街地

「そっちはまずい！！」

竜は再び銃の引き金を引く。

カキンッ

「弾切れ!？」

「ブオオオオオオ！」

ドーパントは市街地に向かっていく。

「くそぉ!!！」

竜は白バイでドーパントを追いかけた。

だがドーパントは止まることなく、ずんずん進む。

「うわあああ！バケモンだあああああ！」

悲鳴をあげながら逃げる一般人。

それでも歩みを止めない。

と、数台のパトカーが道を塞いだ。

「好き勝手させるかよー!!」

刃野や真倉、他の警官達はパトカーを降り、銃を構える。

「撃てえー!!」

ドウンッ！ドウンッ！ドウンッ！ドウンッ！ドウンッ！

「ブオオオオオオオオオオオオ！」

ドーパントは銃弾を浴びながら目の前のパトカーを持ち上げた。

「はああ!?!」「避けるお!?!」

「ブオオオオ!?!」

グシャアッ!

持ち上げたパトカーを勢いよく他のパトカーに叩きつけた。

更にもう一台、パトカーを持ち上げる。

「もう一度くるぞ!?!」

ブオオオオオオオオオン

「おおおおおー!!」

パトカーを持ち上げたドーパントの後頭部に、

ジョーカーがバイクごと突っ込んだ。

ドスンッ

着地してジョーカーはバイクから降りる。

「なんだ？あの黒いのは？」

「あのライダー、バイクごと突っ込んできたぞ……？」

その様子を見ていた一般人がざわめく。

「うーん……ジョーカーパンチ……ジョーカーキック……
いまいち……」

ジョーカーはまだ必殺技に悩んでいた。

「ブオオオオオオオオ！」

「あ、悪い。忘れてたなお前のこと……」

ドーパントを見上げ

「ソッコー終わらせてやるよ……」

「ブオオオオオオオオ！」

ドーパントが腕を振り上げる。

ジョーカーは降り下ろされるよりも速く、懐に入りこんだ。

「さっきのおかえしだ」

ドドンッ

二発のパンチを腹部に撃ち込む。

「ブアッ……！」

「もう一発だ」

ズドンッ

今度は蹴りを叩き込む

「ブアアアア……！」

さすがに効いたのか、ドーパントが悲鳴をあげた。

ジョーカーはメモリを右側のスロットに挿す。

「ブオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

『ジョーカー！！マキシマムドライブ！！！！』

ブウン

ドーパントが右腕を振るった。

が、ジョーカーはそれを避けず右腕に飛び乗っていた。

「さあ、お前の罪を…」

「ブオオオオオオ！」

今度は左腕を振るう。

それより速くジョーカーは一気にドーパントの眼前にまで跳んだ。

「数える!!」

ズガアン!!

渾身の右ストレートにドーパントは宙を舞う。

ドスウウン

「やっぱりこの台詞がぴったりな気が……」

まだ悩んでいる。

「ん……？」

ジョーカーはドーパントの方を見た。

おかしい

いつもなら

マキシマムドライブをまともにくらったドーパントは
爆炎とともにメモリが砕けていた。

だがこのドーパントは何も起こらない。

「まさかまだ…？」

その時

ドーパントの全身に亀裂が入り、そのまま砂となって崩れた

辺りを見るがメモリが見当たらない

「なんだっ たんだこいつは……………」

突然、

パチパチパチパチパチパチパチパチ…

「ん？」

「ありがとう！！仮面のライダー！！！！！！」

戦いを見ていた一般人が拍手をして感謝の言葉を叫んでいる

「ありがとう！！ライダー！！」

「ありがとう！！！！！！」

何もできず、見守っていた警官達、竜も拍手をしている。

「ガラじゃないんだよな……」

そう言うとバイクにまたがる

「あっ!?!」「帰っちゃうの!?!」「待ってよ!もう少し…!」

しかし、ジョーカーは何も答えずバイクを発進させた。

まだ感謝の言葉をずっと後ろで叫んでいる。

「仮面のライダーか…!」

そう呟き

スピードを上げた

P M 2 : 3 9 . . .
左探偵事務所 . . .

五代とジャンは
最後は腕が取れるんじゃないかと思うぐらい
手を振ってかえっていった。

「はいコーヒー」

亜樹子は机にコーヒーをドンツと置いた。

「なんで翔太郎君がジョーカーなのか教えてよ!!!」

「だから顔近いって」

亜樹子の顔を押し退ける。

「それはまた今度な……」

「ケチ!!」

そう言つて、部屋を飛び出していった。

「今日は、依頼早く終わったのになあ……スゲー疲れたなあ……」

翔太郎はコーヒーの入ったカップを持って外を眺めた

「仮面のライダー……か」

そう呟き、コーヒーを一口飲む。

「不味いな……これ……」

繋がるAノ生意気小学生

12月30日 - - -

「竜!!」

AM7:18 - - -

「竜!!」

照井竜のアパート - - -

「起きなさいっての!!」
ガンッ

「あいたっ」

照井竜 只今起床
後頭部にこぶがでている

「次起きなかつたら家から追い出すからね!!」

年末の早朝からご立腹のこの方は

安西 春子

同棲して10ヶ月の竜の恋人である。

「あれ？ここ俺の家だよな？」

「ええそうですよ？でも追い出すってんでしょ文句ある!？」

「ごいません」

竜は腫れた頭をさげた

「それより刃野さんだっけ？外で待ってるよ」

「ええ!?!早く言えよ!?!」

「起きなかったの誰よ!?!」

「ワタクシです」

5分後 - - -

「おっ、やっと起きたか寝坊助」

「どうしたんですか刃野さん？俺今日は非番ですけど…」

「それはわかってんだが…人手がな…」

刃野、真倉、竜の三人の所属する

風都警察署超常現象捜査課

は風都警察署で最も人手不足だ

ちなみに三人しかいない

「真倉さんはどうしたんですか？」

竜はパトカーに乗りながら聞いた

「真倉は先日の灰になったドーパントの報告を聞きに鑑識のとこだ」

「それじゃ俺達は何を？」

「以前から話題になってた行方不明事件だ」

刃野はゆっくりとパトカーを発進させる

「他の課の仕事だったんだが…うちに回されてな…」

「それで俺の休暇が……」

「まあ、今度飯おごるから年末はおっさんに付き合ってくれよ」

二人は風都警察署へむかう

A M 8 : 1 5 . . .
左探偵事務所 . . .

「仮面のライダー……ジョーカー……」

「いや仮面ライダー……ジョーカー……仮面ライダージョーカー……」

翔太郎は新聞を広げ、ぶつぶつ言っている

「おー…はよう…翔太郎君…」

亜樹子が目を擦りながら入ってきた

「ライダー…ライダーパンチ…キック…

ライダーキック……」

「無視すなあー!!」

亜樹子はスリッパで翔太郎の頭を叩く

「あだっ

何すんだ亜樹子ー!!」

「おはよう」って言うてんねやから」「おはよう」って返さんかい
「!!」

「んだとてめ……え？」

翔太郎の動きが止まった。

「ん?どうしたの翔太郎君？」

「お前……その格好……」

亜樹子の格好はウサギのロゴの入ったピンクのパジャマだった

「???パジャマがどうかした?」

「なんでパジャマなんだ?」

「今起きたからよ」

「どこから?」

翔太郎の手が震えている

「どこからって……下の階……」

「ガレージか……?」

「なんでやねん」

「お前……俺のハードボイルダーに傷つけたんじゃ……」

「違う言ってるやる!!てかなんやねんハードボイルダーって!」

「俺の愛すべきバイク……じゃなくて、なんでお前事務所に住み着

「いてんだよ!?!」

「泊まるところないからよ!?!」

「さっきから関西弁使ってるけどずっとーしいから」コロコロ切り替
えんな!?!」

「なんですとお!?!」

ガチャ

「!?!」

二人は扉の方を見た

そこには

「ここ探偵事務所だよな?」

マフラーを巻いた小学生

「……………亜樹子

着替えてこい……………」

「……………ラジヤ……………」

亜樹子は敬礼をすると静かに部屋から出ていった。

A M 8 : 3 2 . . .

園咲家 . . .

「やっぱりおかしい……………」

「どうかしたのか冴子？」

冴子の机には多くの書類が散らばっている

「先日の巨大ドーパントの事件なんだけど……………」

そう言って霧彦に書類を渡した

「あのドーパント…キュクロプスのメモリ、調整前だったから製造したはずがないのよ」

霧彦は書類に目を通す

「確かに製造した記録もないな……ということは……」

「別の何かが私達より先に完成させた」

「いや……」

霧彦は書類を冴子に返す

「完成には程遠い。」

メモリと使用者が灰と化すんだ……大したことはないさ」

「でも何か引つ掛かるのよね……」

「しかし、このドーパントはすでに倒された。
だから今注意が必要なのは……」

そう言うと霧彦は新聞を広げ指差した

「コイツだ」

それは「仮面のライダー」の記事

「この仮面のライダーが腰に着けているこれは

どう見てもロストドライバーだ」

「確かにロストドライバーにも見えるわね……」

「なら、早急に回収しないとね」

霧彦はポケットから携帯電話を取り出し、電話をかけ始めた

すると

「失礼します」

一人のメイドが入ってきた

「井坂先生がお見えになりました」

A M 8 : 3 2 . . .
左探偵事務所 . . .

亜樹子がよつやく着替えを終え

「えっと……コーヒー淹れるね！」

とお湯を沸かし始めた

「そんじゃ、君の名前は？」

「俺？美杉太一！」

「太一君、今日はどんな依頼を？」

「この年末にさあ、うちの近くの神社から夜な夜な悲鳴が聞こえるんだよね」

太一は足を組んで続けた

「なんか危なくてさ……新年にお参り行きづらいだろ？」

だから新年までに悲鳴の原因を突き止めて欲しいんだよ」

「……なんて生意気な口調……」

亜樹子が聞こえないように呟いた

が

「聞こえてるよ、オバサン!!」

「なっ……オバサン!？」

「ああそう言ったよ！」

「何度も言ってるのかオバサン？」

「このガキヤああ?!?!」

「亜樹子が太一に飛びかかる

しかし翔太郎が仲裁に入る

「はいヤメロー。」

「話が脱線したな…」

「オバサンのせいだね」

「このガキヤああ?!?!」

「はいヤメロー。」

「その神社っていうのは？」

「何て言う神社だ？」

「太一は立ち上がったって

「案内するからついてこいよ…!」

AM 10:02 - -

「……?」

「うん」

「風魔神社……」

翔太郎は鳥居を見上げ

「魔ってダメだろ！
悪魔の魔じゃないか！
本当に神社かい!?」

その隣の亜樹子は

「私は忍者だと思った……」

「……………いいから行くっぜ」

太一は呆れつつ鳥居をくぐる

「あっ！待ちなさいよー！！」

亜樹子も後に続く

「本当に神様いるのか…？」

翔太郎も続く

「で、悲鳴って何時頃から聴こえるようになったんだ？」

「今月ぐらいからかなあ…近所の人も四回くらい聴こえたって人もいるし」

三人は散策をはじめた。

「神社の神主さんとか、なんか言ってたの？」

「新しく来た人だからあんまりわかんないってさ」

先頭の太一が本堂を指差す

「あの中入ろうぜ！」

「開いてんの？」

二人が本堂の扉に手をかけると

「あ…開いてる…」

「お邪魔します！」

「だから待ちなさいって…！」

そんな二人の様子を見て翔太郎は

「賽銭泥棒みたいだ……」

と呟いた瞬間

「賽銭泥棒おーーーーー!!!」

翔太郎が後ろを振り返ると

「神主…さん…?」

「ど、ど、泥棒があんたら!?!」

【説明中……………】

「悲鳴ですか…?」

「ああ、なんか知らないか?」

「いえ…最近来たばかりで…」

「なっ?俺の言う通りだろ?」

太一は腕組みをして言った

「とりあえず本堂見せてもらっていいか？」

「ええ、どうぞ」

そう言われ、三人は本堂の中に入った。

「臭いなこじ…」

翔太郎は鼻を手で覆う

「なんの匂いよ……」

「くっせえ」

亜樹子も太一も完全に参っている顔だ

「なんか腐った匂いだな……」

「ここ年季入ってるもんね」

三人は本堂を出た

「あゝ臭かった……」

外の空気がすごく美味しく感じる

「あゝ……」

神主が近寄ってきた

「言い忘れてたんですが…早朝に警察の方が来たんですよ…」

「警察？なんでまた？」

「なんでも…この近くで行方不明の人がいるとかって…」

「行方不明？この近くで…」

翔太郎は腕組みをして、黙ってしまった

「おい、翔太郎くん…翔太郎くん」

突然顔をバツと亜樹子の方に向け

「亜樹子、俺ちょっと情報集めてくるわ」

「はい？」

「じゃ、太一君よろしく！！喧嘩すんなよ？」

そう言って翔太郎は走り去っていった

「ええ〜……こんな生意気なのと……？」

「うっさいオバサン！！」

「て言うか翔太郎君バイク乗って来てなかったのに……」

走って行くのかな？」

繋がるAノ生意気小学生（後書き）

今更ですが、この小説残酷な描写がない…

一つも…

次はぶちこみたいと思います

繋がるA／ちっちゃんのこと（前書き）

今回の依頼

依頼人

美杉太一（小学生）

依頼内容

近所の神社から悲鳴が聴こえたので原因究明してほしい。

メモ

行方不明事件も気になるのでとりあえず情報を集めよう。

亜樹子と二人きりにしてしまったが、

まあいいや。

翔太郎

繋がるAノちっちゃんこと

12月30日 . . .

「それにしても、琉兵衛さん遅いですね……」

AM 10 : 33 . . .

「もうそろそろ戻ってくるかと……」

園咲家 . . .

冴子と話している人物は井坂深紅郎
園咲琉兵衛の掛かり付け
の内科医である

本日も診察のために園咲家まで足を運んだのだが

「二時間もお待たせして…本当にすいません…」

二時間も待っている

「まあいつものことですよ……」

AM 10:33 - -

喫茶店「ウインドガーデン」

「あつ、翔ちゃーん！こっちこっちー！！」

女子高生が手を振っている

「よう！エリザベス！！」

翔太郎はエリザベスの向かいの席に座る

「あれ？クイーンはどうした？」

「クイーンなら……」

突然翔太郎の視界が闇に覆われた

「だ〜れだ!!!?」

「.....」

「あれ?翔ちゃん?」

「おい翔ちゃん!誰か当ててみなよ」

返事がない

「あれれ?どうしたの翔ちゃん?」

翔太郎は全く動かない

「あっ!?!?」

クイーンが何かに気づいた

「どづしたの？」

「あたし……翔ちゃんの目に指つつこんでた……」

「……………え？」

おそろおそろクイーンが手を離す……………

と

「「イヤアアアアアアアアアア……」」

5分後……………

「あのね……人の目に指つつこんじゃいけないんだぞ？知ってた？」

翔太郎は血の涙を拭う

「なんで無事なの!？」

「さつきすごいことなつてたよ!？」

翔太郎は答えることなく

「風魔神社の噂なんだが…」

「いや無視しないでよ!」

「なんか知らないか？」

やはり答えようとしない

「エリザベス…諦めよ………」

クイーンは観念したような表情で

「行方不明事件のこと？」

それだつたら守備範囲外だから知らなくらい」

「いや、悲鳴のことなんだが…」

「「悲鳴？何それ？」」

二人は同時に同じ方向に首をかしげた

「何も知らないのか？」

「今はじめてきいたよ。ねー」

「ねー」

今度は左右対称に首をかしげる

「うーん…となると…」

AM 11:12 - -

屋台「風麵」 - -

「へいお待ち!!」

大将が山盛りのラーメンをドンツと置いた

山の天辺の麵はおそらくスープと絡んではないだろう

「おほーー!! いったきま」

「見つけたぜ、ウォッチャマン」

翔太郎はラーメンをとりあげた

ラーメンに伸ばした箸が虚しく空をきる

「ああっ!!返してよ翔ちゃん!!」

翔太郎からラーメンを奪い返そうとするがあっさり避けられる

「おっと、こんなことしてる場合じゃなかった」

そう言って翔太郎はラーメンをドンツと置く

「じゃあなんで取り上げるの!?!」

ラーメンにがつつき翔太郎を睨む

「実は風魔神社の情報が欲しいんだ」

「風魔神社?」

ウォッチャマンはラーメンを置き

「それって行方不明事件のこと？」

「いや、悲鳴についてだ」

「悲鳴？」

「やっぱ知らない……か」

翔太郎はウォッチャマンのラーメンのチャーシューをつまみ、

自分の口の中に放り込む

「ああー！ー！食べないでよ翔ちゃん！ー！」

「そっだ、行方不明事件についても聞きたい」

ウォッチャマンは翔太郎の手の届かないところにラーメンを置いた

「いや僕もね、そんなに詳しくないんだけど……」

女性が三人行方不明だって」

「女性が三人か……」

「詳しく聞きたいなら、お巡りさんに聞いたら？ ほう」

ウォッチャマンが指差す方向を見ると

「おっ？ 翔太郎じゃねーか？」

「あ、ホントだ」

「刃さん！ 竜！ ！」

やってきたのは年末も忙しい刑事二人

「大将、チャーシュー大盛り二つ！ ！」

「あいよ！」

刃野は翔太郎の隣に座ると

「お前に調べて欲しい事件があるんだよ」

「俺に？どんな事件すか？」

「行方不明事件だ……」

「今やっています」

すかさず翔太郎は答える

「何！？お前仕事早いな！！」

「でも情報少なくて行き詰まってるですよ……」

それに依頼もあるし……」

「依頼？どんな？」

「風魔神社から悲鳴が聴こえたから調べてくれって……」

「悲鳴……？」

反応したのは竜だった

「確か風魔神社近辺の住人が3、4回程耳したって……」

3、4回……

確か太一君も4回くらい聴こえたと言っていたな……

「何か関係あるのか……？」

「行方不明者三人に悲鳴が聴こえたのが3、4回……」

「だいたい一緒ぐらいだな……」

「確かに同じくらいだ……」

しかし、悲鳴が4回だと数が合いませんよ?」

竜は大将から二杯のラーメンを受けとる

「悲鳴が4回だったらだろ?

3回だったら合うぞ?」

刃野は竜からラーメンを受けとる

「……………合っ」

そう翔太郎は呟いた

「ん?」

「どうしたの翔ちゃん?」

突然翔太郎は立ち上がった

「合っ……合ってる……4人で合っぞ……」

「ん？4人じゃないだろ？」

「違っ………4人だ……」

「いや、だから……」

「……………！」

いけねえ、二人が危ない！！」

そう言うと翔太郎は走り、ハードボイルダーにまたがる

「あ、おい！どこ行くんだ翔太郎！？」

刃野の声に耳を貸さず、走り去ってしまった

「二人で言ったり、三人で言ったり、四人で言ったり……忙しい奴だな!？」

「ああいう奴なんですよ

翔太郎は……」

そう言つて二人は麵を頬張つた

ふと、刃野が

「あれ?あいつ食い逃げじゃないのか?」

「翔ちゃん何も頼んでないですよ」

ウォッチャマンにそう言われ

「あ、そう……」

再び麵を頬張った

P M O : 2 2 - - -

風魔神社 - - -

「遅いなあ…翔太郎君……」

亜樹子と太一は意外と敷地面積の広い神社をくまなく散策した

しかし、特に何も得られなかった

「お腹空いた……」

「だらしねーなオバサン!!」

「このクソガキヤア?!」

もつずっとこんな感じである

「ねえ」

「何?オバサン……」

亜樹子は怒りをぐつと堪える

「太一君さあ……この忙しい時期に外出てて、
お家の人心配してないの?」

「なんでそんなこと聞くんだよ?」

太一は少しムツとしている

「あれ？気に障ったみたいね……」

なんかあったの？」

「答える気はないね！！」

「教えなさいよ」

亜樹子が詰め寄ってくる

「なんで答えないといけないんだよ！？」

「教えなさいよ」

「だから……」

「教えなさい！！」

太一は根負けし

「喧嘩したんだよ……」

「親御さんと？」

「翔一と……」

「翔一？誰？」

「家政婦みたいな奴だよ」

「なんで喧嘩したの？」

「翔一が、いきなり説教始めて……」

「それで？」

「うるせえ召し使いとか言って……」

「それで喧嘩になったと……」

「ずいぶんちっちゃいことで喧嘩するのね」

「ちっちゃいって何だよ!?!」

「ちっちゃいじゃない!?!」

「そんなちっちゃいことで喧嘩ってバカじゃん!?!」

「太一はいきなりぶちギレた亜樹子に呆気にとられる。」

「そんな文脈とか無視したキレ方しなくても……」

「家近いんでしょ!?!今すぐ仲直りしてきなさい!?!」

「はあ!?!なんでそうなるの!?!」

「うるさい早く行きなさい!?!」

「亜樹子お!!」

「うるさい翔太郎君は黙って!!」

ん……?翔太郎君?

二人は鳥居の方見た

「亜樹子!太一君!!」

翔太郎がヘルメットを投げ捨て全速力で走ってくる

「何!?!どうしたの翔太郎君!?!」

「ハアツ…ハアツ…ハツ……」

「どうかしたのか？探偵の兄ちゃん……」

翔太郎は辺りを見回す

「いない……………」

「いないって…なにが？」

翔太郎は本堂に目を向けた

「そつだ……………中は変な匂いが……………」

そう言つて本堂の中に駆け込んでいく

「ちょ…ちょっと待つてよ!！」

中は相変わらず異臭が満ちている

中は何も無い

しかし翔太郎は何かを探す

「この辺りか……」

視線を下に向けると

床の板目に少し隙間ができています

「こいつが……」

翔太郎は床の隙間に手をかけて、思い切り引き上げた

「翔太郎君どうしたのー!？」

翔太郎が引き上げた床の下にあったのは

「行方不明の……」

人骨

衣服

頭皮、頭髪

人間だったことを示すものが転がっていた

中には肉塊がついているものもある

「匂いの原因はこれか……」

人骨や衣服がところどころ溶けている

「亜樹子!! 警察を呼べ!!」

翔太郎が叫んだ時

『アシッド!!』

翔太郎の後ろの壁を突き破り何かが飛び出してきた

「うおっ!？」

翔太郎はそれを回避し、外に出る

「何!?何!?何事!？」

翔太郎、亜樹子、太一の前に現れたのは

「ドーパント………」

黄土色の化け物がゆっくりと迫る

「まさかあれにきづくとはな………」

「あんだけ臭かったら怪しすぎるって普通………」

「何この状況!?!私聞いてない!?!」

アシッド・ドーパントが口から液体を噴射する

「ひゃああああー!!」

「何だあれえ!?!」

亜樹子と太一は全力でそれをよける

翔太郎は動じることなく最小限の動きで避けた。

「お前、神主だな?」

翔太郎はアシッド・ドーパントを指差した

「……………何故わかった?」

「

「この辺りで行方不明者が三人

太一君が言つてた悲鳴は四回

悲鳴が三人の行方不明者のだとすると…

残る一回の悲鳴は

お前が殺した本当の神主の悲鳴ってことになる」

翔太郎はロストドライバーを装着する

「何故四人も殺した…？」

「何故つて？このメモリの力をなあ…

ぶつける相手がいなくてな…」

「そんな理由で…」

「それだけじゃない！！」

アシッド・ドーパントは両手を広げた

「女つてのはなあ……いい悲鳴をあげてくれるんだよ……最高さ
！！」

それがあの神主に見られちゃったって……神主はなくなくだ……」

翔太郎はジョーカーメモリを取り出す

「グズが……」

『ジョーカー！！』

「なっ！？」

「変身……」

ジョーカーメモリをロストドライバーに挿し

翔太郎は光に包まれる

「お前……お前も……ドーパント……!？」

「お前とは違う……」

俺は仮面ライダー……」

指を鳴らすと同時に光が弾け黒い仮面が現れる

「ジョーカーだ!!」

「お前……ニュースの仮面のライダーだったのか!？」

目の前に現れたジョーカーに恐れアシッド・ドーパントは後ずさる

「口を開くな……」

お前みたいなきずの声なんか聞きたくもねえ……」

「いけー！！翔太郎君！！ぶっ飛ばしちやえー！！」

亜樹子が木の陰に隠れて手をブンブンふっている

「おらあっ！！」

ジョーカーの左ストレートがクリーンヒットする

「あがつー！！」

よろめくアシッド・ドーパントにさらに回し蹴りを浴びせる

ゴスンッ

「まだまだあー！！」

ジョーカーの放つ拳は全てアシッド・ドーパントの顔面を捉える

「ぐっ……くそがあああ！」

口から液体を再び噴射する

しかしジョーカーはあっさりと回避した

ジョーカーの後ろにあった木が溶け、音たてて倒れる

「なるほど……強酸か…

なら触んなきゃ意味はねえな！」

ズパン！！

再び拳が顔面を捉えた

「くそ……なんで俺がこんな……こんな……」

『ジョーカー！！マキシマムドライブ！！……！！』

「だからさあ……」

ジョーカーはアシッド・ドーパントを指差し

「口を開くなって言ってるだろ？……」

「きつ………貴様ああ!!」

「さあ、お前の罪を数えろ!!……!!」

「うおおああああ!!」

ドーパントが真っ直ぐ走ってくる

ジョーカーは足をかけ、アシッド・ドーパントが倒れこんだ

「があっ!!」

倒れたアシッド・ドーパントの目はジョーカーが拳を振り上げているのを捉えた。

「やめる…やめてくれ…」

「ライダー……パンチ！」

ズゴォオン！！！！

「ガファッ」

横たわるアシッド・ドーパントに拳を叩き込んだ。

衝撃で地面に亀裂ができる。

そしてアシッド・ドーパントを爆炎が包み、

メモリは地に着く前に碎けた。

「……後は警察だな……」

10分後 - - -

「なんで君の周りにはこうトラブルが多いのかな探偵？」

本日全く出番のなかった真倉が翔太郎に絡んでいる。

「君がもっと頑張ったらいんじゃないかなマッキー？」

「んだとてめえ？表でろ」

「ここ表だろバカ」

そんな二人の仲裁をするのはやはり刃野である。

「ハイハイ、ヤメヤメー」

いい歳なんだから喧嘩すんなよー」

そして刃野は真倉を連れて本堂に入っていった。

「まさか

こんなことになるとはな……」

竜が翔太郎の肩に手を置く

「竜…先日の分の報酬はいつ持ってくるの？」

翔太郎の一言で竜は固まった。

「また今度ということだ……」

竜は苦笑いをしながら本堂へ逃げていった。

すると今度は亜樹子が

「さてと、翔太郎君！！さっさと行くよ！！！」

「どっどこ？」

亜樹子は答えず太一と歩きだした。

「あっ、ちよつと……」

なんで無視すんだよ！？」

三人は住宅街を歩いていた

「どこまで歩きゃいいんだよ……」

「この辺なんだけど……」

「てか今から何が」

「翔太郎君うるさい!!」

太一の足がある家の前で止まった。

「ここが太一君の家？」

太一は黙ったまま小さく頷いた。

「早く家政婦さんところ行って、仲直りしてきなさい」

「いや…でも」

「してきなさい!!」

「家政婦さんって誰だよ？」

亜樹子に背中を押され、太一は玄関の前に立った。

すると

ガチャッ

「太一！」

扉が向こうから開けられ、若い男が出てきた。

「翔一!?!」

どうやらこの男が家政婦らしい。

「おい、あのイケメンの兄さん誰？」

亜樹子は何も言わず

スリッパで翔太郎を叩き黙らせる。

「どこ行ってたんだ太一!!
お前が手伝ってくれないから、おせちの準備できないんだぞ!?!」

「え？いや翔一、今朝の喧嘩……」

「ほら早く入れよ！」

太一は翔一に引きずり込まれていく。

「いや…待ってって！まだあの探偵の兄さんと姉ちゃんに……」

バタンッ

太一が言い終わる前に扉は閉められた。

「良かったね……太一君……」

「いや、どこが？」

亜樹子は来た道を歩きだした。

「あのイケメンの兄さん誰だよ？」

最後太一君拉致られたじゃねーか！」

亜樹子はどこか嬉しそうだった。

「いやいやいやいや！」

なんか話まとめようとしてるけどまとまんねえって！

何があっただよ？あのイケメンの兄さん誰！？」

「翔太郎君、バイク乗ってたってことは……一回事務所戻ったの？」

「亜樹子さん？聞いてる？おーい亜樹子さん？」

え、このまま終わり！？」

PM 4 : 1 0 - - -
園咲家 - - -

「お〜ひ、ただひま〜」

琉兵衛、只今帰宅

「おひゃ？ひさかせんしえじゃないか

どうか……ヒック……ひたかね？」

酔っている。まだ4時なのに

冴子と井坂のいるところまでアルコールの臭いがする。

「お父さん、ちょっと……」

冴子は琉兵衛を連れていく。

バチイイッ

「井坂先生、お待たせしました。診察お願いします。」

それだけ言って、冴子は部屋を出た。

「や、井坂先生、診察お願いします。」

琉兵衛が井坂の前に座った。

「……………一応聞きますが、そのお顔は……………？」

「娘に打たれました」

琉兵衛の顔には真っ赤な平手の跡ができていた。

バルコニー……

霧彦と来人が話しているところに冴子がやってきた。

「霧彦さん、仮面のライダーのことだけど……」

「僕の部下にやらせることにしたんだ」

「大丈夫なの？」

「そんじょそこらのドーパントとは違うぞ」

「ねえ」

今度は来人が口を開いた。

「彼が仮面のライダーという名前なら……」

僕は…仮面ライダーサイクロンってことでいいのかな？」

「仮面ライダー…ね」

霧彦は来人の肩を叩いた。

「いいんじゃないかな？」

「似合つと思つよ、その名前」

しかし冴子は

「いざ呼ぶときになったら呼び辛くないかしら？」

繋がるAノちっちゃいこと（後書き）

急にドーパント出てきて、急に太一の話をして、

途中で自分もワケわかんないことになってしまいました。

反省します

強力タッグF / 新年一発目の依頼

2010年1月2日 - - -

.....
オオオオオオオオオオ

PM 11:53 - - -

.....
オオオオオオオオオオ

風都高速 - - -

二台の車が年始にも関わらず、熱いバトルを繰り広げる

「逃がすかよ！」

後方の車両が一気に先を行く車両との距離を縮める。

「ふんっ！」

しかし追いつかれまいと、アクセルを踏み込みさらに引き離す。

「な……なんてスピードだ……」

「このまま逃げ切つてやるよ……!」

二台の距離は徐々に開いていく。

「ハハハハハハハハ!!俺の勝ちだ!!」

あ………?何だありゃ?」

先を走る車のドライバーが何かに気づいた。

「……………人か?」

何故こんな時間帯に、それも高速道路に人がいるのか
そう考えていた時

スパンッ

ドオオオオオオン

突然、先を走っていた車が爆発した。

「はあ！？何だってん」

ズバンッ

1月3日 - - -
AM9:44 - - -
風都高速 - - -

「あ、刃野さん！こつちです」

真倉が手招きしている。

「ったく……新年最初の事件がこれじゃあな……」

見たところ……車の屋根みたいだな」

「そんなところですね……」

「被害者の身元は？」

「二人とも頬から上しか残ってないんでまだ身元は……」

話す二人の前には車の屋根と人間の頬から上の部分が転がっている。

「車と頬から下はどこ行っただんだ？」

「一台は爆発、もう一台はガードレールを突き破って下に落ちたそうです」

「…で、何がどうなったらこうなるんだ？」

「おそらく、走行中に正面から何か鋭利なものが車ごと切断したんじゃないかと…」

「スパンツて感じですか？」

「スパンツて感じですね…」

二人は転がっている人間だった物体に視線を落とす。頬から上だけしかないそれは目を見開いている。

それが死ぬ間際に一体何を見たのか想像もつかない。

刃野は座り込み

「あんた…何を見たんだ？」

PM 10:20 - -

風都警察署 - - -

風都警察署の三階に、超常現象捜査課は位置する。

照井竜は一人報告書を書いていた。

「遅いなあいつ……」

時計を見て呟いたとき

「こんにちは……」

ドアが開き女性が入ってくる。

「え……？亜樹子ちゃん？」

入ってきたのは亜樹子だ。

「あ、竜君……」

「どろしたの亜樹子ちゃん？」

亜樹子は懐から一枚の紙を取り出した。

「請求……書……？」

「そう！！請求書！！」

この間の依頼の報酬をがつつりもらってこいって、

翔太郎君からお使い頼まれたの！！」

「翔太郎は？翔太郎が来るはずじゃあなかったのかい？」

竜は立ち上がり封筒を用意する。

「それがさあ……翔太郎君、ケータイ壊れてるから買い換えるんだって朝から出かけちゃったよ」

「あいつまだケータイ替えてなかったのか……」

竜は自分の財布を開く。

「いくらだっけ？」

「15万円なり!!」

財布の中には6530円

「……………」

亜樹子の方を見る。

「15万円なり!!」

「……………」

「そつだ!!経費で落とせば!!」

AM 10 : 31 - - -

園咲家 - - -

園咲家豪邸の庭に

琉兵衛、文音、冴子、霧彦来人、そして約20人もメイドが円になつて集まっている。

「はい、それではあー!!」

琉兵衛の怒声が響く。

「新年の餅つき大会を始める!!!!!!!!!!」

メイドが拍手をする。が、

「あなた、寒いからよしましょっ?」

「若菜ちゃんもいないですし……」

「何!?! 若菜いないのか!?!」

「今朝から福袋を買いに行ったよ」

「何だと！？何故早く言わん！？」

あわてふためく琉兵衛の
後ろでメイドたちがあわてふためく。

「ご主人様！！もち米の用意ができていません！！」

「何！？何故もち米の残量を確認しておかんだ！？」

「ほらあゝもうよしましよっお父さん……」

琉兵衛は頭をかきむしり、その場に座り込んでしまった。

そして急に立ち上がり

「えゝゝい！！半分はもち米を買ってこい！！もう半分は若菜を探
すのだ！！」

「急ぐのだ！！」

「「「はい!」「」」

メイドたちは一斉に散らばり、庭を飛び出していった。

「いやいや、中止したらいいじゃないか父さん……」

AM 10 : 41 - - -

風花町商店街 - - -

「あ~~~~オフって幸せ!!」

人通りの少ない商店街を

黒ぶちの丸眼鏡をかけ、髪を束ねた地味な感じの女性が大量の福袋を抱えてスキップしている。

非常に地味な格好をしているのだが、

彼女は園咲若菜、風都のアイドルである。

本日は休日なので変装して福袋を買いに街中を練り歩いている。

「あと何軒まわろうかな」

華麗にターンをして再びスキップをする。

すると

ゴチン

「あ痛っ」

「痛っ」

若菜はぶつけた額を擦りながら前を見ると

「おい！どこの目えつけてんだコラ」

ガラの悪い男二人が鬼のような形相で若菜を睨む。

「どっつて……正面……？」

「そついうことじゃねーんだよネエちゃん？」

「いてえなあ〜」

折れてるかもなあ〜

どうしてくれんのかな〜」

これはきつと多額の治療費を請求されてしまつに違いない。

絶対そつだ。

「私急いでるんで……！」

走り去ろうとする若菜。

しかし

「どこ行くんだよオイ」

首根っこを掴まれて逃げる事ができない。

「まだ慰謝料と治療費払ってねえでしょ？」

「なっ、慰謝料も取るつもり!？」

「文句あんのかコラ!？」

これは本当にまずい。治療費に加え慰謝料はまずい。

若菜は辺りを見回した。

幸い人気はない。

若菜はポケットに手を伸ばした。

その時だった。

「どわっ!？」

一人の男が宙を舞い、地面に叩きつけられた。

若菜と男が見ると、そこには黒のコートにソフト帽のビニール袋を持った男が立っていた。

「新年だつてのに…楽しそうなことやってんな……」

ソフト帽の男は足下に倒れている男を踏みつける。

「俺もまぜろよ……」

ソフト帽の男の気迫に圧され、ガラの悪い男は後ずさる。

「てめえ…何者だ!？」

「あ、お嬢さんは危ないから下がってな」

ソフト帽の男はまったく聞いていない。

「てめえ…馬鹿にしてんのかああ!？」

ガラの悪い男は懐からナイフを取り出した。

「な、ナイフ!？」

これは本当にまずい。まさか凶器を持っていようとは

若菜は再びポケットに手を伸ばす。

しかしソフト帽の男は微塵も動じず

「そんなもん……脅しにもなんねえよ」

と、ナイフの柄を蹴り上げた。

ナイフが虚しく宙を舞う。

「あれ？俺のナイフ」

ナイフが地に着く前に男はパンチを顔面に食らい摔倒した。

「お嬢さん、ケガないか？」

ソフト帽の男が爽やかに言った。

「あつ、はい！！大丈夫です！！！」

「そうか。じゃ今後は気をつけるよ」

男は立ち去ろうとする。

「あ……待って下さい！！！」

「ん？何？」

「あの……良かったら……名前を……」

しかし男は

「よしてくれ。ガラじゃないんだ」

男はそう言って去っていった。

「……………」

誰だったんだろ……………」

若菜が店の窓ガラスを見ると自分の顔が真っ赤になっている。

「やだ私ったら……………」

顔を手で覆い若菜は逃げるように走りだした。

AM 11:00 - - -
左探偵事務所 - - -

翔太郎はコートとビニール袋をソファーに放り、椅子に座る。

「あ〜〜寒っ」

エアコンのスイッチを入れ椅子に腰かける。

ふと、前を見ると

先ほど放ったコートが何かに覆い被さっている。

「……………ん？」

それを見て翔太郎は立ち上がった。

すると

「あの……………」

コートの下から女性の声が聞こえた。翔太郎は思わず身構える。

「依頼に来たんですが…これ退けていいでしょうか……？」

「え？あつ…スマン！！」

慌ててコートを取った。

まさか依頼人が座っていようとは。

て言うかコート投げた時避ければいいのに…

「あ、どうも……」

コートの下にいたのは、
なかなかの美人であった。

「いや、本当に申し訳ない……まさかそんな所に美女が座っている
なんて……」

まさか泥棒！？」

「いや、なんでですか!!」

依頼人ですってば」

普段から関西人のキレのあるツッコミに慣れていたせいか、

この美女は、いまいちツッコミのキレがないように思われる。

「いやいやそうじゃなくて」

「どうかしましたか?」

思わず口から心の声が出てしまった。

「いや、悪い。ところで名前は?」

「あ…佐藤です……」

「佐藤さん、依頼があつて来たんだよな?」

どんな依頼？」

美女の表情が曇った。

「探偵さん……その……ガイアメモリってご存知でしょうか……？」

「ガイアメモリ？」

翔太郎の表情が変わる。

「一応、知ってはいるが……それがどうかしたのか？」

「実は……私の友人が先日それを購入したんです。」

最初、私はそれが何なのかよくわからなかったんですが……

それを手に入れてから友人の様子がおかしくなってるんです……」

「おかしくなってる……」

「どんなふうに？」

「なんて言うんでしょうか……こつ…性格が荒々しくなったというか……」

どうやらメモリの力に呑まれているらしい。

「だから……友人と仮面のライダーを探して欲しいんです!!」

「仮面ライダー?」

「ご存知ないんですか?」

ガイアメモリで暴走したら仮面のライダーしか止められないんですよ?」

「なるほど……わかった。友人も仮面ライダーも見つけてやるよ。」

それで友人の名前は?」

PM0:00 - - -

喫茶店ウインドガーデン - - -

「で、そのガイアメモリを持つてる友人の名前は合川恵美だそうだ」

依頼の説明をする翔太郎の右手には何故かデジカメが握られている。

「ああ〜！返してよ翔ちゃん！！」

ウォッチャマンが翔太郎に襲いかかる。

どうやらウォッチャマンのデジカメのようだ。

「なんか情報ないか？」

デジカメを乱暴に返す。

「もつ……新品なんだから勘弁してよ……」

「情報は？」

「せっかちなあ翔ちゃん……」

その写真の合川って女の人は風花町三丁目によく見かけるね」

「三丁目か…意外に近いな……」

よしわかった！サンキューな、ウォッチャマン」

翔太郎は席を立ち、店を出ようとした。

「待って翔ちゃん!!」

情報料いつ払ってくれるの?」

一瞬足を止めた。

が

「ふっ……」

不敵に笑っただけで、素早く店を出ていった。

PMO：13 . . .

風都警察署 . . .

竜はなんとか15万円を用意し亜樹子がそれを確認する。

「うん、ぴったり15万円！」

亜樹子は大金を封筒に入れそれをバッグに入れた。

「ところで竜君てさ……」

「ん？どうしたの？」

「翔太郎君とどういう関係？」

翔太郎君がジョーカーって知ってたみたいだけど……」

亜樹子は椅子に座りくるくる回転しながらたずねた。

「ああ……そのことか……」

俺と翔太郎は高校の時の同級生なんだ」

「ええ！？同級生だったの！？」

翔太郎君……同級生から15万もとるの！？」

「あいつ不良だったから……」

その一言で亜樹子は吹いた。

「翔太郎君が不良！？何それ！？」

私聞いてない！！」

「まあ……意外だよな……」

そして一年前、
俺がドーパントに襲われたときに翔太郎が変身して助けてくれたっ

てわけ」

「なぐるほど……高校の時の友達だったんだ……」

二人が話をしていると

「照井！戻ったぞ！！」

刃野と真倉が入ってきた。
二人は亜樹子を見ると

「なんだ？照井、浮気か！？」

「なっ！！違いますよ！！」

「浮気？」

亜樹子には何のことかわからない。

「実はこいつ、同棲中の彼女がいるんだよ!」

真倉は子供のように叫ぶ。

「えっ!? そうだったの!？」

そつとは知らずに……どうもすみません……」

「すみませんってどういう意味!？」

この後四人は竜の彼女の話で何時間も盛り上がった。

刃野と真倉にいたっては、完全に事件の話をするのを忘れていた。

P M 2 : 0 8 . . .

風花町三丁目 . . .

「なんで三丁目にばっかし来るんだろ…?」

翔太郎はハードボイルダーで三丁目をくまなく探す。

「そんな簡単に見つかるわけないか…」

と、その時

翔太郎の目に馬鹿みたいに大きなサングラスをした女性が映った。

翔太郎は持っていた写真を見る。

「うーん……ぼいな……」

翔太郎はハードボイルダーから降り、その女性の後を追った。

尾行開始から一時間……

「うーん…見れば見るほどぼいな……」

女性は商店街を歩いていく。

そして翔太郎は物陰に隠れつつ、女性を尾行する。

「ママー！あのお兄ちゃん変だよー！」

「見ちゃダメよ！！見えないふりしなさい！！！」

親子のやりとりに反応しては、尾行がバレてしまう。

ここはグツと堪えた。

女性は徐々に人気のないところを進んでいく。

翔太郎もバレないように尾行を続けた。

「どこ行くんだ……？」

突然、女性が全力で走りだした。

「なっ!？」

翔太郎も後を追う。

女性は路地に入ったところで足を止めた。

「さっきからつけてるアンタ、姿を見せたら？」

バレていた。

いつからだろう。親子のやりとりの時からだろうか

そんなことを考えつつ翔太郎は姿を見せた。

「合川恵美……さんかな？」

女性はサングラスを外す。

「そうだけど……アンタ誰よ？」

「俺は……」

翔太郎は答えようとしたが

「あっ……そうかそうか……」

「アンタが探偵だね……？」

「?????なんで知ってたんだ？」

合川はポケットに手を突っ込む。

「どづだっっていいわよそんなこと！」

で？仮面のライダーはどこ？」

合川はガイアメモリを取り出した。

『ソード！…！』

「なんだいきなりかよ……」

「早く言わないと……」

合川は鎖骨にメモリを挿した。

そして両腕が剣のドーパントに変身した。

「バラバラにするよ？」

翔太郎はポケットからロストドライバーを取り出し、装着する。

「安心しな……目の前の俺こそが……」

『ジョーカー！！！！！！』

「仮面ライダージョーカーだ……」

ドライバーにメモリを挿しジョーカーに変身した。

「な……お前が仮面のライダー！？」

「なんだ？不満か？」

ジョーカーの問いかけにソード・ドーパントは

「フツ……探す手間がはぶけたね」

「そいつはよかった……」

「じゃ、こっちからいくぜ……！」

ジョーカーはソード・ドーパントめがけて飛びかかった。

強力タッグF／新年一発目の依頼（後書き）

模試のため少し間があいてしまいました。

駄文ですがどうか最後まで読んでくださいます。

強力タッグFノこれで対等(前書き)

今回の依頼

依頼人 佐藤(美人)

依頼内容

メモリでおかしくなった友人と、友人を止めるために仮面ライダーを探して欲しい。

メモ

仮面ライダーは俺だから、後は友人を見つけるだけで正直ちよろい。

かと思ったがいきなりドーパントになったからちよつと疲れそうだな……

翔太郎

強力タッグFノこれで対等

「らあっ！！」

ジョーカーは飛び蹴りを放つがあっさり避けられる。

「案外鈍いのね…」

「なんだと？」

「今度はこっちの番！！」

ソード・ドーパントは両腕の剣を振るう。

ジョーカーも身を翻して回避する。

「なんだ……言うほど早くねえな……」

ジョーカーはソード・ドーパントに向かって走る。

右腕の剣を上体を反らしてかわし、その勢いで今度は膝蹴りを放つ。

「鈍いって言うってんでしょ!！」

ソード・ドーパントは左腕で防御する。

そのまま腕を振るったが

ジョーカーはまたも避けてみせた。

「へえ……なかなかやるじゃん……」

「アタシをその辺の野良ドーパントと一緒にしないでよ」

野良ドーパント？

「どついう意味だ!?!お前には飼い主がいるってのか!?!」

ソード・ドーパントは左腕の剣をジョーカーに向ける。

「アタシに勝ったら喋ってやるよー!!」

剣を縦に振り抜いたがジョーカーは転がりながら避ける。

「ならっ!!」

再び転がり、ソード・ドーパントめがけて蹴り上げた。

「そんな攻撃！」

両腕の剣を交差させて防ぐ。

「もう一発だ」

すかさずもう一方の足で蹴り上げた。

「がっ!!」

蹴りを食らい、ソード・ドーパントの体が浮く。

「やっと一発か……てこずりそうだな」

よろめくソード・ドーパントにハイキックを浴びせる。

「くっ……くそー！」

「口が悪すぎるぜ、お嬢さん」

反撃、防御の暇を与えず一気にたたみかける。

「おらあっ!!！」

ガンッ!

ジョーカーのアップパーが綺麗にソード・ドーパントの顎に入った。

ドザアアア

「あああっ!!！」

ソード・ドーパントは地面を転がっていく。

「なんだ、思ったほどじゃあ…ないか…」

「で……飼い主は誰だ？」

「勝ったら喋ってくれるんだろ？」

右腕の剣を支えに立ち上がるソード・ドーパント。

「誰がお前なんか……」

「……まあ、いいや…」

詳しいことは刑務所で聞くから」

『ジョーカー！！マキシマムドライブ！！…！！』

ジョーカーの右腕が青白く発光する。

「さあ！お前の罪を数えろ！！」

「……………なめるなああああああ!!」

両腕の剣を前に突きだし突っ込んでくる。

それを発光している右腕で素早く叩き落とす。

「ライダー…パ」

ドオオオオオオン

「うおあっ!!」

「っああああ!!」

突然、二人は何かに吹き飛ばされた。

ジョーカーは後頭部を擦りながら起き上がる。

「ってえ……………なんだいきなり……………」

周囲を見回した。

その時、目の前に何かが降り立った。

「ハッ！」

降り立った何かいきなり顔面を蹴られ、ジョーカーは転がっていった。

「がっ……は……」

見上げると、そこには

「ドーパント……もう一体いたのか……」

白いボディで背中に金色の輪がついたドーパントがジョーカーをみている。

「どうして……？アタシ一人でやるって言ったのに……」

ソード・ドーパントはよろめきながら立ち上がる。

「アンター人じゃ無理よ…それにはじめから二対一でやるって言ったでしょう？」

ジョーカーも立ち上がる。

「二対一ね…上等だ」

「と、いききたいところだけど…今は退くわ」

「「はあ！？」」

思わずジョーカーとソード・ドーパントが同時に声をあげた。

「今のアンタはダメージが大きすぎるでしょう？」

「でも二人なら…」

「任務を完遂するためには万全の状態でないと無理よ」

「オイ……」

ジョーカーが口を挟む。

「任務ってなんだ？」

「一体誰の差し金だ!？」

謎のドーパントはソード・ドーパントの腕を掴んで

「いいわ、教えてあげましょう……」

「待つて! 教えていいの!？」

「問題ないわ。」

私達はミュージアム………人類を更なる進化へ導く者」

「ミュージアム…だと？」

「そして私達の任務は

あなたのメモリとロストドライバーよ」

「な……俺だと!？」

「今日のところは退かせてもらおうわ

大切なパートナーが怪我したんだもの」

そう言うと二人のドーパントの体が浮きはじめた。

「しぎげんよう、仮面のライダーさん……」

「ちよっ……逃がすかよ!」

『ジョーカー!!マキシマムドライブ!!……!!』

ジョーカーが飛び上がるようにするが

「フンッ!」

謎のドーパントの手から発せられた衝撃波に吹き飛ばされる。

「……………くそ!」

ジョーカーが辺りを見回した時、二人のドーパントはすでに消え失せていた。

「ああ……くそ……逃げられた……」

PM3:29 . . .
風都警察署 . . .

ブルルルルルルル

「はいこちら超常現象捜査課……」

竜が電話に出た。

「はい？……はい……三丁目ですね！？……はいわかりました！！」

「おい照井、誰からだった？」

竜は受話器を置く。

「風花町三丁目でドーパントがらみの事件です」

それを聞いた刃野は

「あつ、そつだ。事件あつたの忘れてた」

顔を赤らめ頭を掻いた。

「ねえ竜君、この人本当に刑事さん？」

P M 4 : 1 1 - - -
風花町三丁目 - - -

「なあ探偵、教えてくれよ

なんでお前がここにいるんだよ!？」

「マツキーの仕事が牛並みに遅いから俺が先に来てんだよ……」

「あんだと？お前牛がめっちゃ動きが早いっての知らねえのか？」
ものすごい剣幕でメンチを切る二人の間に

「ハイハイ、もうその手の喧嘩は見飽きたんだよ……」

刃野が仲裁に入る。

「ねえ、竜君」

亜樹子が竜に耳打ちする。

「あの二人は翔太郎君がジョーカーって知らないの？」

「あの二人は翔太郎が変身したところ見たことがないんだ

ていうか……なんで亜樹子ちゃんついてきたの？」

「で、翔太郎、ここで何があつたんだ？」

「仮面ライダーとドーパント二体が交戦

ドーパントは二体とも逃走つてとこだな……」

竜が翔太郎に近づき耳打ちする。

「お前…取り逃がしたのか!？」

「そこそこ強めだった…」

それに不意討ちくらってね」

「大丈夫なのか？」

「そこでだ……ちょーっとお巡りさんの力借りたいんだよね」

「????」

「よし！そのドーパントを探さんとしまらん！

真倉！！他の課に要請してドーパントを探せ！！」

「はい！刃野さんは……？」

「俺も探す！！」

二人はパトカーに乗り、風都警察署に戻っていった。

そんな二人を見て

「ねえ、本当にあの二人って竜君の上司なの？」

「まあ……うん……」

「そういえば……」

「?どうしたの翔太郎君」

「あのドーパント、なんで俺が探偵だって……
名乗ってないのに……」

「それはあれか？」

「お前の情報が漏れてたってことか？」

「うーむ……」

翔太郎は考えこみ、俯いてしまった。

「ねえ、長くなりそうだから明日にしない？その話」

亜樹子はある程度かんと口をつた。

「明日って、亜樹子ちゃんそれはさすがに……」

なあ、翔太郎？」

1月4日 - - -

AM 10:02 - - -

風花町三丁目 - - -

「まさか本当に日付変わってから動き出すとは……」

竜はだいたい呆れている様子。

「だがそのおかげで大体わかったぜ……」

「ドーパントの正体か!？」

「ああ……もう呼んである」

「……………知り合いなのか？」

「まあな……………」

「仲いいのか？」

「バカか!!」

「ところでそっちの準備は？」

「万端！いつでもいいぜ」

二人がそこそこ大きめの声で話していると

「探偵さん！」

遠くから美人の佐藤が走ってくる。

「翔太郎、あの美人さん誰！？」

「今回の依頼人だよ」

息を切らしてやってきた佐藤が翔太郎にたずねた。

「あの…ハア…なんでしょう？急用って…」

急用？

竜は翔太郎を見る。

「お前が呼んだ…のか？」

翔太郎は答えず

「もう芝居はいいんじゃないか？」

ドーパントさんよ

竜と佐藤は目を見開いた。

「この人が…ドーパント!？」

「なっ、急に何を言い出すんですかですか探偵さん!？」

「あなたのパートナー、俺が名乗ってないのに

俺が探偵だってわかってたんだぜ？

そしてあんたも、パートナーも仮面ライダーを探してた

あんたのパートナーは三丁目を中心に仮面ライダーを探して、

あんたは探偵の俺を使って探すって段取りだったんだろ？

だからあのドーパントは俺が探偵だってわかったんだ」

「そんな無理矢理な推理で……根拠もないのに……」

「根拠ならあるさ……」

そう言って、ソフト帽を被る頭を指差し

「探偵の勘だ……」

「「ええー……………」」

あまりにも頓狂な推理に目眩がしそうだ。

「翔太郎、話の尺なら気にしなくていいから

まともな推理しようぜ？」

そんな竜の一言に翔太郎は

「話の尺？何言ってるんだお前」

「あーもういいや……」

竜の意味不明な発言を気にせず

「佐藤さん、さっさと投降してくれないか？」

「いや、だから私は……」

その時

ズンッ

何かが竜の目の前に落ちてきた。

「なんだ!？」

竜は半歩さがり銃を抜く。

「恵美……」

落ちてきたのは合川恵美

「もういいや…佐藤、さっさとこいつらバラバラにしよう」

「ちよつと恵美!！」

「もうバレてんだからいいでしょ?」

合川は懐からガイアメモリを取り出す。

『ソード……』

「もっ……」

佐藤はポケットから白いガイアメモリを取り出した。

「探偵さん、あなたのわけのわからない勘の通りよ」

『フライト!!』

二人は同時にメモリを挿した。

「まさか……あんな……お前の勘が当たるなんて……」

二人はソード・ドーパント、フライト・ドーパントに変身した。

「悪いけど、昨日言った通り二対一でやらせてもらっわ……」

「ところが二対一じゃないんだなこれが」

翔太郎が言い終わったのと同時に竜はパチンツと指を鳴らした。

カンッ カカンッ

二人のドーパントの足下に何かが転がってきた。

「……………何これ？」

ボシユッ

突然転がってきたものから大量の煙が吹き出した。

「なっ……………煙幕!？」

「これでは視界が……………」

ドーパントが喚く一方で

「ちょ……煙きついぞ!？」

「いいから早く分断しろって!

場所はわかってるな!？」

「オツケーだ

けどそっちは大丈夫なのか？」

「警察ナメンなって。

足止めくらいできるぞ」

ドーパント達は予想外の事態に混乱している。

「くっ…煙幕から出ないと…」

フライト・ドーパントは飛び上がり、煙幕を突破した。

「一体何が!?!これでは…!」

ドンドンドンドン

突然、フライト・ドーパントは銃撃を受けた。

「な…どこから!?!」

その時

「あああああ!?!」

ハードボイルダーがソード・ドーパントを押しだし、そのままどこかへ運んでいく。

「そんな無茶苦茶なことが！」

フライト・ドーナントは手をかざす。

パアンツ

その手を銃弾がかすめる。

発砲したのは白バイに乗り煙幕を突破した竜。

「お前はこつちだぜ？」

「あなた一人で私と戦うの？」

その問いかけに竜は

「一人じゃないってば」

ザザザザザザ

その言葉を合図に一斉に警官達が姿を見せた。

「なっ！？こんな人数どこから！？」

警官達が一斉に拳銃をフライト・ドーパントに向ける。

「こっちの方が数多いけど……そっちはドーパントが二人だから

これで対等だろ？」

風花町三丁目廃工場 - - -

キキキィ！

「ぐああっ」

ハードボイルダーが急停止し、勢いでソード・ドーパントが吹っ飛んでいく。

翔太郎はハードボイルダーから降りて周囲を見回した。

「あれ？おかしーな……」

刃さんとマツキーいないな……」

翔太郎は転がっているソード・ドーパントを見る。

「まあ、いいか…別に」

『ジョーカー！！』

「変身………」

装着していたロストドライバーにメモリを挿し、

仮面ライダージョーカーに変身する。

「さっ……いくぜ!」

ジョーカーは横たわるソード・ドーパントの頭部めがけ踵落としを放つ。

「鈍いってば!」

地面を転がり回避するソード・ドーパント。

「あああああ!」

両腕の剣で鋏むように斬りかかってくる。

「お前もそんなに速くねえんだよ！」

ジョーカーはその両腕をがっちりと掴む。

「なっ!?!」

「オラアッ!」

そのまま蹴りとばす。

「くっ……」

「やっぱ……」

大したことないかもな……拍子抜けしたぜ」

さらに顔面に右のストレートを打ち込む。

あまりの衝撃に後ずさる。

「くそっ!くそっ!調子にのりやがって!」

眩くジョーカーに四本の剣が襲いかかる。

「シャアアアアアアアア！」

四本の剣を必死でいなす。

「くそ…手数がかつても多いと……」

一本の剣がジョーカーの右肩を捉えた。

ザンツ

「ちっ！」

「隙ありい！！」

ソード・ドーパントは一気に四本の剣で攻め立てる。

「があああああ！！」

ソード・ドーパントの斬撃を全て食らい、ジョーカーはその場で片膝をついてしまう。

「仮面ライダーってのも

あっけないのね」

「……言ってくれるな……たく……」

「あっそ。じゃ、バイバイ」

ソード・ドーパントは剣を振り上げた。

パンッ パパンッ

三発の銃弾がソード・ドーパントに命中した。

「よお、仮面ライダーさん遅刻しちゃったぜ！」

二人は声の方向を見た。

「刃さん…マッキー!!」

刃野と真倉が拳銃を構えている。

「警察!? 何でこんな時に…」

「ちょっと! 刃野さん!! 早く援護!!」

「おっ、そうだった!!」

二人は缶のようなものを投げた。

そしてそれは煙を噴出した。

「また煙幕!? 芸がないね!!」

ソード・ドーパントには二人の刑事の方向がわかっていた。

真っ直ぐ二人の方向へ駆けていく。

「バラバラにしてやる!!」

勢いよく煙幕から飛び出た。

しかし、

「よお、待ってたぜ」

「仮面ライダー…!?!」

「お返しだ!!」

完全に無防備だった顔面にハイキックが炸裂する。

「がっ……!!」

ソード・ドーパントは勢いよく地面に叩きつけられる。

「やめて、止めとこじつか…」

『ジョーカー!!マキシマムドライブ!!!!!!』

ジョーカーの右の拳が発光する。

「さあ!!お前の罪を数えろ!!」

ジョーカーはソード・ドーパントに向かって走る。

「くっ…」

ソード・ドーパントは四本の剣を重ね、防御の姿勢をとる。

「ライダーパンチ!!」

「はあああああ!!」

ジョーカーのライダーパンチを四本の剣で受け止めた。が

「あまいー!!」

ガシャアアアア

ライダーパンチは四本の剣を砕き、ソード・ドーパントの顔面にヒツトした。

「がああああああああー!!」

ソード・ドーパントは爆炎に飲み込まれメモリは音をたてて砕け散った。

「あたしの…メモリが…」

合川はそう言って気絶した。

「じゃ、後任せていいすか？」

ジョーカーはハードボイルダーにまたがる。

「もう一体いるんだろ？」

早く皆のところへ行ってくれ……」

刃野がそう言うと、ジョーカーは竜達のもとへ急いだ。

「ちてと……真倉！その女を罫に連行するぞ……！」

「はい……！」

真倉は無線を置いて、倒れている合川のところまで走った。

その時

「ギャシャアアアアアア！」

「な……」

「なんだ!?!」

合川に駆け寄ろうとした真倉の行く手を阻むかのように謎のドーパントが現れた。

「なんだこのドーパントは!?!」

「ドーパントは二体のはずじゃ……」

二人は拳銃を抜く。

しかし、ドーパントは二人を無視し合川のもとへ歩み寄る。

そして倒れている合川の首に手を伸ばした。

「な!？」

「おいやめる!！」

ボギン

嫌な音が響いた。

「シャアアアアア!！」

「てめえ!！」

真倉が発砲する。

しかしドーパントは脅威的な速度で全ての弾丸をかわし、その場から立ち去っていった。

二人が合川に駆け寄る。

「首の骨を……」

すでに合川の息はなかった。

「くそつたれが!!」

刃野は地面に拳を打ちつけた。

「でも何でドーパントがドーパントを……?」

謎のドーパントが襲来するほんの少し前……

「どわあああ!」「うおっ!」

フライト・ドーナツの放つ衝撃波で警官達が吹き飛ばされる。

「ひるむなあ!」

警官達は引き下がらず発砲する。

「っ…………っ!」

銃弾を衝撃波で弾く。

しかし全てを弾くことはできず少しだが被弾している。

「本当に効いてんのか、この神経麻痺弾は!」

警官の一人が悪態をつきながら発砲する。

「神経麻痺……？どうりで右手が……」

衝撃波を放つフライト・ドーパントだが最初に被弾した箇所、

そして竜の発砲で被弾した右手は満足に動かせなくなっている。

「わずかだが…効いてるみたいだ…なっ！！」

白バイにまたがったまま竜は発砲する。

その時竜の白バイの無線から声がした。

「こちら真倉！！ドーパントの撃破に成功！！」

今そつちに仮面のライダーが向かったから
もうひとふんばりしてくれ！！」

「撃破!?!」 「残るはアイツだけだ!?!」

突然の朗報に警官達の士気が上がる。

「まさか…恵美が負けた…?」

フライト・ドーナツは周りを見る。

警官が30人程、このまま神経麻痺弾を受け続けたら、飛行するこ
とができなくなるだろう。

そうなれば仮面のライダーにメモリを壊される…

「く……仕方ない……」

フライト・ドーナツは上昇した。

「なっ!?!」 「逃げる気だ!?!」

フライト・ドーナツは市街地の方へ飛んでいく。

「逃がすかよ！」

竜は白バイでその後を追った。

「…まだ追ってくるの!？」

竜は離されないように必死で追う。

そして片手で発砲する。

パアンツ

「くそ！片手じゃ照準が！」

フライト・ドーナツは市街地の中心へ逃げていく。

中心では車が障害となり、思うように先へ進めない。

「くっそー!!」

竜は白バイから降りて走ってフライト・ドーナツを追いかける。

だが徐々に距離が開いていく。

「さすがにここまでは無理かしら?」

竜が走って向かってくる。

「一人で勝てるっても!?」

フライト・ドーナツが手をかざした。

オオオオオオン

ガシャアアアン

ガシャアア

「……………何?」

エンジン音とガラスが割れるような音がする。

「それに……これは……悲鳴？」

よく耳を澄ますと、人の悲鳴が混じっている。

「一体何が……」

ガシャアアアアアン

突然、背後の窓ガラスが砕ける音がした。

フライト・ドールパントが振り返ると

「うおおおおおおらあー!!」

ハードボイルダーに乗ったジョーカーがビルの窓ガラスを突き破り突っ込んできた。

「なっ……」

不意討ちにガードもできずハードボイルダーと衝突する。

「あゝあっ！」

ジョーカーは衝突した後、勢いで再びビルに突っ込んだ。

下からその様子を見ていた竜は

「あんのバカ！！誰が修理費を払うと……」

「何であんなところから……」

フライト・ドーナツは空中でよろめきながら逃げる。

「逃がすかよ……」

ジョーカーはハードボイルダーを全速力で発進させ、窓ガラスを突き破り他のビルへどんどん移っていく。ビルに移っていく度に人が悲鳴をあげる。

「どいたどいたあー!!」

悲鳴などお構い無くビルに突っ込んでいく。

そして飛行するフライト・ドーパントを追い抜き

「今回はとっておきだ…」

『ジョーカー!!マキシマムドライブ!!……!!』

ハードボイルダーの向きを変え、フライト・ドーパントめがけて飛び出した。

「な!?!」

突然飛び出したジョーカーに驚き動きが止まる。

「ライダー!!」

ハードボイルダーを踏み台にジョーカーは高く飛び上がる。

そして紫色に発光する右足をつきだす。

「キック！！！！」

ライダーキックは動きを止めたフライト・ドーナツの腹部に炸裂した。

「あゝあゝあゝあゝ！！」

ドオオオオオン

ジョーカーは佐藤を抱え、着地した。

「あつ！ハードボイルダー！壊れたかな……」

佐藤をゆっくり地面に置き愛車のもとに駆け寄る。

「お！？良かった〜壊れてない！！」

なかなかの高さから落ちたハードボイルダーは奇跡的に傷一つない。

そこに竜がやってきた。

「うおい！！何してくれてんだバカ野郎！！」

「あ！？ば…バカ野郎だと！？」

「何窓ガラス突き破りまくってんだよ！？」

「修理費誰が払うと思ってんだ！！」

「お前じゃないだろ！」

「俺じゃないけど警察が払わないといけないんだぞ！？」

「うるせーな！！早く検挙してこいバカ！！」

「お前に言われなくても検挙するっての!!」

竜は手錠を取り出し佐藤の倒れているところへ向かった。

その時

「ギャシャアアア」

「うお!?!」

「!?!」

ドーパント!?!」

新たに現れたドーパントに二人は後ずさった。

ドーパントは合川の時と同じように佐藤の首に手伸ばす。

「何すんだてめえ!!」

ジョーカーが飛びかかる。

しかしドーパントは振り向きもせず裏拳で吹き飛ばした。

「うがっ!!」

「翔太郎!!」

地面を転がるジョーカーのもとに竜が駆け寄る。

ボギン

その音は離れていた二人にも聞こえた。

「なっ……」

「殺りやがった……」

ドーパントは二人を見る。

ジョーカーは身構えた。

が、そのドーパントはその場からものすごい速さで去った。

「なんだアイツは……」

竜は拳銃をホルスターにおさめる。

「アイツ……ドライバーしてた……」

ジョーカーは変身を解除した。

「知ってるのか？あのお前とは違う形のドライバーを……」

「一年前におやっさんが言ってた幹部が使ってたのと同じだ……」

「てことは……今も組織の幹部……」

二人は幹部の襲来にただ立ち尽くすばかりであった。

PM 8 : 4 4 - - -

園咲家 - - -

「おかしい……」

琉兵衛は言った。

「お義父さん？」

「どつしたの？」

夕食を終え、残っているのは琉兵衛、霧彦、来人の三人のみ。

「若菜だ……」

「若菜姉さん？」

「若菜ちゃんがなにか……？」

テーブルをバンツと叩き、琉兵衛は立ち上がった。

「二人は気づかないのか！？若菜の様子がおかしいことを……！」

「「はあ………」」

琉兵衛は続ける。

「間違いない……文音も冴子もあんな感じだった……」

「……何が……でしょうか？」

もう一度テーブルを叩いた。

「若菜は

恋をしている……!!!!」

その発言に來人はずっこける。

「そ……そんなこと!?!」

「わかっておらん來人!

どうする!?!もしも耳に穴あけてピアスして……

おまけに鼻にもピアスするよつな奴だったら!?!」

「いやいや……若菜姉さんの自由じゃないか……」

「許さん…許さんぞ……」

お父さんは許さんからなああああ!?!」

強力タッグFノこれで対等（後書き）

バトルシーンとか入れ過ぎて話長くなっちゃいました。

前編のほうも長かったなあ……

次回は短めです。

多分。

Mのために／アイドル追跡調査

1月5日 - - -

「…で、探偵は何て？」

P M 8 : 4 1 - - -

「翔太郎の話では、合川はおそらく

風都警察署 - - -

仮面ライダーがよく現れるので風花町で探していたのではと…」

竜、真倉、刃野の三人が昨日について会議をしている。

「で、佐藤のほうは翔太郎を使って仮面ライダーの搜索を試みたってわけか…」

刃野は黒のマジックを持ちホワイトボードの前に立つ。

「となると、二人が同じ目的で動いてたから…二人は何らかの組織に属していたってことか？」

佐藤と合川の顔写真をマジックで囲む。

「多分そうでしょう」

「でも二人は何で殺されたんだ？」

真倉は竜にたずねた。

「仮面ライダーを倒すことができなかった二人への失敗の罰ということでは？」

「失敗したら処刑かよ…」

刃野はマジックを置いた。

「その処刑人ドーパントについては？」

「翔太郎の話だと処刑人という立場、他のドーパントにはない装飾から

組織の幹部ではないかと……」

「あれが幹部……か……」

真倉はホワイトボードの合川の顔写真を指さし

「この間の車とドライバーの切断事件の犯人はこの合川ってことなのか？」

竜は切断事件の資料に視線を落とす。

「確かに、合川のドーパント体の能力なら可能ですが……」

「目的がはっきりしていない」

刃野が竜よりも先に言った

「この事件と仮面ライダーでは関係性が見えんな……」

「じゃあ、もしかしたら違うドーパントってことですか!?!」

「おそらく処刑人ドーパントでもない……」

「数が多すぎますね……」

三人は口を閉ざしてしまった。一日中会議をしても、全く前に進めない。

「とりあえず、神経麻痺弾はわずかだが効果はあったんだろ？」

「はい。ほんのわずかですが……」

「それじゃ更に強力な神経麻痺弾を配備するよう上層部に掛け合ってみる。」

そして、組織のドーパントを確保する……！

「でもまた処刑人ドーパントが来るのでは？」

「わかってねえなあ、照井」

真倉は立ち上がり

「それを餌に処刑人ドーパントを誘き寄せて処刑人を捕まえんだよ！」

「あつ、なるほど…」

「まあ真倉の言う通りなんだが情報が少なすぎる。

明日から調査やなんやらで忙しくなるから、二人とも今日は帰っていいぞ」

竜も立ち上がり

「お疲れ様でした刃野さん」

二人は刃野に礼をして荷物をまとめはじめる。

「そうだ、今から帰るって春子に伝えないと…」

竜は携帯を開いた。

「んなっ！なんじゃこりゃああああ！？」

着信が122件

確認すると

春子

春子

春子

春子

春子

春子

春子

(途中省略)

春子

春子

全て春子からの電話

全身の震えが止まらない。

「なんでなんでなんで!？」

おそらく、春子は大変怒っているのだろう。

が、何故これほど春子が怒っているのか全くわからない。

「俺は帰るべきなのか…?」

呟いてはみたが、答えは最初から決まっている。

竜はただならぬ不安を胸に抱き風都警察署を後にした。

P M 9 : 3 0 . . .

園咲家『琉兵衛の部屋』 . . .

「それで、話って何かしら?」

文音はゆっくりとソファに腰を下ろし琉兵衛に呼び出された理由

をたずねた。

「若菜のことだ」

「若菜？あの子がどうかした？」

「お前は気づかないのか！？」

若菜が誰かに恋をしていることに！！」

琉兵衛は両手を広げ叫んだ。

「どうする！？もしも耳にピアスをつけて……終いには鼻にもピアスがあるような男だったら！？」

琉兵衛とは対照的に文音は落ち着き払って

「若菜が選んだ男ならよろしいでしょう？」

「いいやダメだ！！」

琉兵衛は壁に拳を叩きつけた。

「もしそんな男だったら……」

あああああああ！！」

『テラー!!』

琉兵衛を黒い粒子が包み込み
巨大な王冠のような頭部を持つドーパントに変貌した。

「必ず…必ず見つけだしてやるっつうっ!!」

ぬっう ああああああ!!」

そんな様子をドアの隙間から覗く二つの影が…

「冴子姉さん、よく霧彦義兄さんと結婚できたね…」

一人は来人、もう一人は冴子だ。

「霧彦さんはお父さんの紹介で知り合ったから……」

もし見ず知らずの人だったらあんなことになるのね…」

琉兵衛を中心に黒い物質が広がっていく。

「親バカ……」

1月29日 - - -

AM 10:13 - - -

左探偵事務所 - - -

【……きな白い蜘蛛が鏡に映ってたんです！それに赤い龍が火を吹……】

今流れているのは【園咲若菜のヒーリングプリンセス】のお便りを
読み上げるコーナー。

「…それで俺はこのラジオから流れている声の主の調査をしろってことか？」

翔太郎は向かいに座る二人の男女に言った。

「しかし、わかんねーな…今まであんたら…」

えーと……」

「桃井です」

女性の方が答えた。

「桃井さん達事務所の連中と
園咲若菜の家のメイド達で意中の男を探してたんだろ？」

何故俺を頼ろうと？」

「確かに私たちは仕事、家での若菜を探ってきましたが、

成果は無く若菜のお父様が大変ご立腹なんです。

ですので左さんには仕事から家までの若菜を探っただきたいのです。」

桃井は翔太郎の目から視点を一切動かさず述べた。

「桃井さん達じゃいけないのか？」

「若菜は鋭い娘です。私やマネージャーの城戸君が後をつけてもすぐ気づくでしょう…」

桃井の隣の城戸は翔太郎の手を掴み

「お願いします！！風都の敏腕探偵と言われる左さんの力を貸して下さい……」

城戸の熱い思いに圧された翔太郎は

「おお……そこまで言っなら……」

依頼を受理することにした。

「それではこれが今日の若菜のスケジュールです。」

スケジュールのプリントを受け取り目を通した。

「今日は午後1時半で仕事は終わりか……」

「私たちは仕事場で若菜を見張らないといけませんので、この辺で……」

城戸と桃井は翔太郎に礼をして事務所を出ていった。

「ねえ翔太郎君！」

背後から亜樹子が顔を出す。

「この依頼って早い話、ストーカーだよな？大丈夫なの？」

「……………竜には黙ってるよ」

翔太郎はそう言って、コートを羽織り、ソフト帽を被る。

「ん？もう出かけるの？」

「情報屋の தொட

お前も来るか？」

AM 11:47 - - -

喫茶店『ポレポレ』 - - -

「ちょっと翔太郎君……………」

「こんな女子高生が情報屋？」

「そつだよ〜〜！」

亜樹子の目の前で女子高生の情報屋、エリザベスは手を振る。

「というわけだが……クイーン、なんか知らないか？」

翔太郎の隣に座っているのは同じく女子高生の情報屋クイーン。

「そついう情報は無いけど」

確かにテレビとかで見ると前よりちょっと雰囲気変わったかな〜

って感じかな？」

「そつか……」

視聴者も異変に気づいていることから、誰かに恋をしてるのは間違いない。

「翔ちゃんってこんな中学生が好みなの？」

エリザベスは亜樹子の頬を引っ張りながら言った。

「あ？んなわけねーだろ

それにそいつは二十歳だ」

「ええ！？」

「そうなの！？」

二人は目を丸にした。

「それじゃカラオケ行こうよ！！」

「はあ！？」

エリザベスの発言に今度は亜樹子が目を丸にした。

「いやいや！意味わかんないし君たち学校あるでしょ！？」

「行ってこい亜樹子」

翔太郎は爽やかにサムズアップをする。

「はあ！？何言ってるの翔太郎君！！」

「それじゃカラオケ行こう！」

「行こう行こう！！」

クインとエリザベスは亜樹子の両手をがっちり掴んで店をそのまま出ていった。

遠くで亜樹子の

あたしきいてなーーーーい

と聞こえた気がした。

自分でもよくわからなかったが翔太郎は亜樹子に敬礼した。

PM 1 : 3 2 . . .
ラジオ局『ウインドウエーブ』 . . .

翔太郎は局の裏口近くの物陰に隠れていた。

「お、出てきたな……」

裏口から園咲若菜が現れた。

やはりアイドルは一般人と違ってオーラが違う。

と、若菜は近くに止まっていた黒いワゴンに乗り込んだ。

同時に運転席から城戸が降りた。

「何やってんだ……?」

10分後 . . .

ワゴンのドアが開いた。

「な……なんだあの格好？」

ワゴンから降りたのは

丸いビン底眼鏡をかけ、長い髪をみつあみにした大変地味な格好をした若菜。

「変装のつもりかな……？」

誰にも若菜とはわからないだろうが、
逆に目立つんじゃないかと思うくらい地味だ。

変装した若菜は城戸に挨拶をして街の方へ歩いていく。

「ストーカースタート……」

翔太郎も後を追っていった。

P M 2 : 1 8 . . .
ウインドスケール . . .

ここでは、若菜は商品を眺めていくつか手にとったりしたが何も買わなかった。

「ここでは男の影は無し…」と

P M 2 : 5 1 . . .
喫茶店『ポレポレ』 . . .

「あれ？戻って来ちゃったぞ………」

本日二度目の喫茶店に入り若菜を監視する。

若菜はカレーを食べ、代金を払うと店を出ていった。

「ここでも男の影は無しか………」

P M 4 : 4 2 - - -
銀杏町一丁目 - - -

もう夕方になったが、これまで男と接触することは微塵もなかった。

「収穫ゼロか……」

その時

「ん……？誰だあの男……」

一人の男が若菜の前に立っている。

二人は何か話し、そのまま路地へ入っていった。

「おつとととと!？」

翔太郎はあわてて後を追う。

男は見た目から判断すると40代前半、頭部が大変輝いていらっしやる。

「まさかあんなのが？」

翔太郎の位置からでは二人が何を話しているのか全く聞こえない。

突然、男が花束を取り出して、膝をついて若菜に差し出した。

「ええー！プロポーズかよ!？」

が、若菜はそれを叩き落とした。

「あー、あっさりと……」

二人はまだ何か話している。

男は胸ポケットから小さなものを取り出した。

『マスカレイド!!』

「何!？」

その電子音は翔太郎にも聞こえた。

男の顔が徐々に変化し、マスカレイド・ドーパントに変貌した。

「こいつはいけねえ!!」

翔太郎は尾行を忘れて飛び出していった。

若菜の目の前で、求婚してきた男がドーパントに変貌した。

「結婚する気にさせてやる!!」

しかし若菜は

「そんな下級中の下級メモリで私に敵うと思ってるの?」

落ち着き、持っていたバッグに手を伸ばす。

「危ない!!」

若菜とマスカレイド・ドーパントの間に一人の男が割り込んだ。

黒いコートにソフト帽

「あっ!!あなたは……!!」

休日に悪漢に絡まれた時に助けてくれた男……

「危ないからどっかに隠れてろ!!」

男は叫んだ。

「はい!!……!!」

若菜は言われた通り路地裏のほうへ走って隠れた。

「またあの人に助けられた……」

もしかして運命!？」

若菜は真っ赤になった顔を手で覆った。

「あ、しまった」

若菜は重要なことに気がついた。

あの人は確かに強い。

しかしあくまで人間相手の話。
相手は下級とはいえドーパント。

とても敵うとは思えない。

「……………私が助けるしか……………ない」

若菜はバッグから銀色のドライバーと金色のガイアメモリを取り出した。

「私しかいない……………助けられるのは私しかいない……………」

若菜はドライバーを装着する。

『クレイドール!』』

「変身するところなんて……………見せられないな……………」

ドライバーのバツクルにメモリを挿した。

途端に若菜を光の粒子が包み、まるで土偶のようなドーパント、クレイドール・ドーパントに変身した。

「よし……………がんばれ私……………」

クレイドールは路地裏を飛び出す。

「そこまでよー!」

しかしそこにはさっきの男の姿はなかった。

代わりにいたのは

「ライダーパンチ!!!!」

ガンッ

「ギャアアアアアアアア」

ドッカアアアアン

Wの形をした銀色の角

赤い複眼

漆黒のボディ

肩と胸の紫色のライン

最近テレビなどで有名な…

「か……仮面ライダー……？」

クレイドルの力の抜けた声に仮面ライダーが反応する。

「あ……ドーパントだ……」

Mのためにノアイドル追跡調査（後書き）

今度は短くまとめすぎたかと思います。

不器用なんで極端にしかありませんね……

もうそろそろライダー出さないとな……

Mのために／四本のメモリ（前書き）

今回の依頼

依頼人

桃井（事務所代表取締役）
マネージャー
城戸

依頼内容

事務所のアイドル、園咲若菜の追跡調査をして欲しい。

メモ

最近誰かに恋をしているらしい園咲若菜を尾行することになったが、若菜の前にドーパント出現。

若菜を逃がしドーパントを撃破したが、別のドーパントがひよこひ

よこ現れた。

倒しているのかコイツは？

翔太郎

Mのために／四本のメモリ

「」
.....「」

P M 4 . . 5 9

どうしてこんなことになるのだろう。

銀杏町一丁目

ただ気になるあの人を助けたいがためにこの姿となって飛び出したのに

出てみればあの人はいない。

代わりに仮面ライダー。

「神様ってひどい……………」

クレイドール泣きそうな声で呟いた。

「ん？何か言った？」

仮面ライダージョーカーは間の抜けた声で聞いてくる。

「うっさいわね！…何も言っていない！！」

「……………スマン」

ドーパント相手に謝ってしまった。

しかし、このドーパントはなんだ？

普通のドーパントと違って悪意などが一切感じられない。

「でもドライバーついてるしな……………」

向きは今まで見たのと違うがドライバーには間違いない。

「て言うかこんなことしてる場合じゃねえのに……」

早く逃げた若菜を探さねば

ジョーカーは焦っている。

が、それはジョーカーだけではない。

「私こんなことしてる場合じゃないのに……」

先ほど逃がしてくれたあの人を探さねば

クレイドールも焦っていた。

「時間かけてる暇はねえ……」

「時間かけてる暇はない……」

同じように思考する二人。

行き着いた答えは

「一撃で決める……!!」

二人は同時に走り出した。

『ジョーカー!!マキシマムドライブ……!!』

「ライダーパンチ!!」

右腕を突き出すジョーカー

ほぼ同じタイミングでクレイドルは左腕を突き出した。

二人の拳がぶつかる。

「ぬっっおおおお!!」

「はあああああ!!」

ビシッ

「なに!?!」

先に拳が悲鳴を上げたのはクレイドール。
どンドン腕に亀裂が入っていく。

「そんな!!私の腕が……」

「おおおおおおらああっ!!」

クレイドールの腕が弾け、そのままジョーカーの拳は胸まで抉り貫
通した。

「かつ……は……」

胸に穴があき、クレイドールは膝をついて倒れた。

「あら？……死んだのか？」

見るからに幹部クラスなのにピクリとも動かない。

何よりメモリがブレイクされていない。

「この間のデカブツと一緒になのか？」

「つつあああああー!!」

突然クレイドルが起き上がった。

「うおっ!?!」

貫通した胸の穴、弾けた腕がどんどん再生していく。

「んなのありが！？」

突然の出来事にジョーカーは飛び退いた。

「ハア……………一回死んじゃった……………」

「どうなってんだこいつ！？」

傷は無くなったがクレイドルはよろよろしている。

「私はね……………よく死んじゃうんだけどすぐ生き返っちゃっのよ…

…」

「不死のドーパント？

対処のしようがねえじゃねえか！！」

対処のしようがないと言いつつもジョーカーはクレイドルに回し蹴りを放った。

「そんな攻撃！！」

クレイドールはそれを防いでみせた。

「それじゃとつておきだ」

回し蹴りを放った脚を上げたまま

『ジョーカー!!マキシマムドライブ!!!!!!』

「ライダーキック!!」

発光した脚を振り抜きクレイドールを真っ二つにする。

「これならどうだ!?!」

しかし今度は先ほどより早く再生した。

「言ったはずよ?死なないって」

「ちっ…」れじゃ……」

これでは園咲若菜を探せない。

しかしクレイドルも似たようなことを考えていた。

早くあの人を探さねば

「お前に構ってる暇なんてないのに!!」

「急いでんの？」

ジョーカーの間の抜けた声が路地に響いた。

「……………はい？」

「はい？」

「じゃなくて急いでんのかって!」

「……………急いでます……………」

そしてジョーカーは衝撃の一言を放った。

「今日は止めようぜ?」

「いやいや、私が言うのもなんだけど

それはマズイでしょ!??」

「……………ああ、マズイさ…」

けど俺もお前も急いでいるし、お前はなんか悪い奴じゃない気がする……」

「仮面ライダーって馬鹿なの？」

ジョーカーは答えることなく一歩ずつさがり始めた。

「え！？本当に止めるの!？」

「また今度!!」

ジョーカーは高く飛び上がりその場から逃げ出した。

仮面ライダージョーカー

初の撤退

「えー……あんなのが仮面ライダー……？」

拍子抜けしたなあ……」

ドライバーのバツクルからメモリを抜き、変身を解除した。

「あつ、あの人探さないと！」

ドライバーとメモリをバツグにしまい、路地を走り抜けた。

P M 5 : 5 1 - - -

「やっと見つけた……」

先に見つけたのは翔太郎

翔太郎は電柱の影に隠れて若菜の様子を伺う。

若菜は何か探しているのか辺りをキョロキョロと見回している。

「誰か探してんのか…?」

「ママー！あのお兄ちゃんまた変なことしてるー!!」

「もう！今日はカレーなんだから変なのは見ちゃダメー!!」

P M 6 : 3 9 . . .

園咲家 . . .

「結局、収穫無しか…」

若菜が園咲家の豪邸の門をくぐるのを見届けると、翔太郎はケータイを取り出し電話をかけた。

「もしもし、亜樹子か？
今から帰るわ。」

あ？お前まだ歌ってんの？いい加減やめとけよ」

2月1日 - - -
PM 3:44 - - -
園咲家「琉兵衛の部屋」 - - -

部屋にいるのは琉兵衛と霧彦の二人。

「…では、この数日間、若菜に近づいた男はなかったということかね？」

琉兵衛は紅茶を一口飲み、霧彦に視線を向ける。

「どつやらそのようですね

調査に加わった探偵によると若菜ちゃんは誰か探しているように見えたことから

誰かに恋をしているのは間違いなさそうです。

しかし連絡をとる素振りのなかったため、あまり親密ではないでしょう…とのことです。」

「……………そうか。」

ありがとう霧彦君、戻っていい。」

琉兵衛に促されて霧彦は退室した。

「親密ではない……………か…

それでも許せん……………」

琉兵衛は一気に紅茶を飲み干した。

「義兄さん、どうだった!？」

霧彦が部屋を出ると来人が待っていた。

「まだ相手がわからない以上、お義父さんも殺しに行くことはないな。」

「そっか!よかったよかった…」

「でも来人君なら地球の本棚ほしですぐわかるんじゃないか?」

そう言われ、来人は手を×の字にして

「義兄さん、プライベートを覗くのはプライバシーの侵害だよ」

「まさか君がそんな返しをするとは……」

二人は地下へ降りていく。

「ところで頼みって何かな？」

二人は階段を降りた先の扉を開けた。

その扉を開けた向こうには何に使うのか見当もつかない機械、

底が緑色に輝く井戸のような穴、

そして部屋の隅の机にはたくさんのガイアメモリが転がっている。

この部屋は「開発実験室」

来人がメモリ製造やドライバーの実験を行っている。

「実は、仮面ライダー討伐を僕に任せてほしいんだ」

「ついに『仮面ライダーサイクロン』殿が直々に討伐かい？」

「まさか！僕はそんなことしないよ」

来人は大きなケースを取り出した。

ケースを開けると中に入っていたのは

「これは……ロストドライバー……しかも4つも……？」

「それだけじゃないよ」

来人は机に

赤、青、金、銀の4つのガイアメモリを並べた。

「随分カラフルなメモリだね……」

しかも全て純化したメモリとは……」

「目には目を、仮面ライダーには仮面ライダーを……」

「なるほどね……それでこれらは一体だれが使うんだい？」

来人はケースを閉じ

「それなんだけど、義兄さんの部下で手練れを4人貸して欲しい」

「4人が……………」

まあ、なんとか手配しよう」

P M 6 : 3 0 - - -
左探偵事務所 - - -

亜樹子は封筒の中の札束の枚数を数えている。

「ちよつと翔太郎君…」

いくら何でももらい過ぎじゃない?」

ここ数日の若菜追跡調査の報酬を城戸からもらったのだが、

封筒がはち切れんばかりである。

「亜樹子…よく見る」

「何を？」

「報酬」

「報酬？」

再び報酬を数え始めた。

すること

「あっ！！これ一万円札じゃない！！」

五千円札と千円札しか入っていない。

そんな札束を丁寧に整理して

「五万二千円しかないじゃん!!」

あのマネージャあああ!

このスリッパでしばいたらあああ!!」

「どこ行くんたテメーは」

事務所を飛び出そうとする亜樹子をねじ伏せてソファーに腰かけた。

「不死のドーパント……あれが幹部クラスだとするとやるせねえなあ……」

今後も幹部クラスのドーパントと対峙することになるだろう。

俺勝てるのか？

Mのために／四本のメモリ（後書き）

今回も極端に短くなりました。

ですが次回はガッツリ書きます！！

Hの始まり／熱き戦士

2月5日 - - -

【ペンネーム、アセチルコリンさんからのお便りです】

AM10:19 - - -

【先日、夜中にドライブしてたら剣を持ったケンタウロスがもうス
ピードで追い抜いてったんです!!】

左探偵事務所 - - -

【これって夢ですか!?それとも僕の頭がおかしいんですか!?教
えて若菜姫!!】

「お前の頭がおかしいんだよ!!!!!!」

翔太郎は我慢できずラジオのコンセントを引っっこ抜いた。

「やかましいわ!!」

突然奇声を発した翔太郎の頭をスリッパで叩く亜樹子

「ラジオに何キレとんねん!!」

「お前…助手の分際でええ!!」

コンコン…

二人は扉の方を見た。

「聞いた？」

「ああ……この遠慮がちなノック……十中八九依頼だな……」

二人は気をつけをして待つ。

「すみません……」

入ってきたのは見ず知らずの男。

「キター……!!」「\ (。□\) (/ □。) /

「ええ!?!」

「捕まえる亜樹子!!」

「アイアイサー!!」

亜樹子が依頼人の男に飛びかかる。

「え！？ええ！？いや…ちょ…つわあああああ！！」

数分後 - - -

「菊地さんだっけ？」

先ほどは失礼した」

翔太郎と亜樹子は揃ってお辞儀した。

「いえ…お気遣いなく…」

そろそろ依頼の方を……」

「あ、忘れてた！…どうぞどうぞお話しください！…」

亜樹子は慌ててコーヒを用意する。

「それで、どのようなご依頼で？」

「実は僕、クリーニング店を経営しております…」

「1日だけでいいんで仕事の方を手伝って欲しいんです…」

「断る」

翔太郎は一蹴した。

AM 10:37 - - -
照井竜のアパート - - -

「竜！いつまで寝てるの…！よう！」

ガツン

昨日、というより今朝帰宅した竜はたった今起きたところである。

「4時間しか眠れてない…」

今日は特別に刃野から許可をもらっているので、もう少し寝ていた
いが

春子にどつかれたので二度寝する気にはなれない。

「て言うか一体何を使って俺を起こしてるの？」

「はいこれお弁当!」

春子は質問に答えず乱暴に弁当箱をつきだす。

「教えてくれないのな…」

A M 1 1 : 2 3 . . .

クリーニング店「菊地」 . . .

「いらっしやいませ！」

「そう！鳴海さん、その挨拶だよ！..」

「なるほど、こんな感じなんですね!？」

亜樹子は菊地から指導を受けながら接客業をこなしていく。

一方翔太郎は

「すみません。クリーニング菊地ですけどー。」

「あら、新しいバイトの子？」

クリーニングで預かった衣服を配達していた。

「いや今日1日だけなんすけどね…」

「あらそうなの」

菊地君とこは男前ばかりねー！

「男前？」

「あら知らないの？」

あそこで働いてる、
たっくんっていう子がまたカッコいいのよー！

「たっくん、ね……」

クリーニング「菊地」……

「バイトの子が喧嘩？」

客のいない内に亜樹子達は休憩をとっていた。

「そっなんだ……」

「なんで喧嘩しちゃったの？」

「いつも女の子のまりちゃんって子が料理を作ってるんだけど……」

男の子のたっくんって子が料理が熱すぎるって言って出ていったんだ……

そしたらまりちゃんもたっくん追って……」

「そんだけの理由で飛び出してったの!？
アホだねえ…そのたつくんって人」

「たつくんはすごい猫舌なんだ…」

「でもダメでしょ？」

それに店長が喧嘩とめないといけないでしょっ?」

鳴海亜樹子のお説教の時間がやってきた。

話が長くなりすぎるのでなくななく割愛。

園咲家 - - -

正午ちょうどから昼食をとっているのは来人と冴子の二人きり。

「霧彦義兄さんはどうしたの？」

「霧彦さんなら今日は会社の方に行ってるわ」

「姉さんは会社いいの？」

「お昼休みに家に寄っただけよ」

「社長の特権？」

「違っわよ」

特になにも盛り上がることもなく二人は淡々と料理を口に運ぶ。

「そうだ、もし霧彦義兄さんに会うなら伝えておいて欲しいんだ」

「何かしら？」

「この間の新しい仮面ライダー、もう既に一人投入したよ…って」

その言葉に冴子の手が止まった。

「新しい仮面ライダー？」

「言ってなかったっけ？」

仮面ライダー討伐に

同じように仮面ライダーを投入することにしたんだ」

来人は食事をあつという間に終わらせ、フォークを置く。

「よく用意できたわね。」

例のドライバー完成したの？」

「いや、そっちは開発中さ」

新しいドライバーを作るのに余剰パーツが増えすぎたから、ロストドライバーを4つ造ったんだ」

「ふーん……余剰パーツでロストドライバーって出来るものなのね」

冴子も食事を終わらせて席を立った。

「来人、言っておくけど」

「なんだい？」

「ナマコ残しちゃダメよ」

それだけ言っただけで冴子は出ていった。

冴子に言われ、来人はナマコと対峙する。

「やっぱり無理!」

P M O : 1 2 . . .
銀杏町三丁目 . . .

「お?あれは……」

翔太郎は何かを見つけ、ハードボイルダーから降りた。

「よっ！久しぶりだなサンタちゃん！」

「あっ！翔ちゃん！」

サンタちゃんと呼ばれた男はプラカードを持って翔太郎のところまで走ってきた。

サンタちゃんは名前の通りサンタクロースの格好をしている。

「クリスマス以来だな。」

また新しいバイトか？

いい加減真剣に就活しろよな」

「今度のバイトは何だと思う？」

サンタちゃんはプラカードを見せた。

そして翔太郎は吹き出してしまった。

「ちょ……お前……これ読んでる人たちに見せられない仕事の宣伝してるのか!？」

「定職につけないから……」

サンタちゃんは遠くをしみじみと見る。

「子供にオモチャ配る前に仕事探せって」

P M 1 : 0 0 . . .
クリーニング「菊地」 . . .

「……というわけだから店長がしっかりしなきゃ!……!」

「……………うん、俺なんとか二人の喧嘩止めてみるよ」

1時間以上にも及んだ亜樹子の説教がようやく終了した頃、

「ただいま、配達終わったぜ」

翔太郎が配達から帰ってきた。

「いや、しんどいな意外に…」

たつくんがバイト辞めたのがなんとなくわかったよ」

「辞めてないですよ？」

「え？」

「辞めてないってば」

今度は亜樹子が言った。

「え？いや…なんか常連のオバサン達は辞めたみたいなのを……」
「辞めたんじゃないくて、バイトの人たちが喧嘩して出ていったんだ
つてば！」

二人がそこそこ強い口調で言うので、何も言えなくなった翔太郎。

椅子に座る二人の隣に座ろうとすると

「左さん、まだ配達あるんでお願いしていいですか？」

「ええ〜！まだやんの〜!？」

菊地が店の奥からビニールで包装した衣服を手渡す。

「ったく……しょうがねえな……」

しびしび引き受け、店を出ようとした。

その時、翔太郎の携帯が鳴った。

「おつと失礼……」

「もしもし？」

「翔太郎か!？」

かけてきたのは照井竜。

「誰の電話にかけたのかわかんねーのかお前は？」

「今すぐ風都タワーまで来てくれ!!!」

何か慌てているようだ。

「どっかしたのか？」

『近隣の住人が複数のドーパントを見つけたらしい!!』

「……何だと？」

『だから早く来てくれ!!』

「わかった……任せろ……」

翔太郎は携帯を切ると渡された衣服を菊地に返した。

「悪い!!急用ができた!!」

「ええ!？」

「急用って何よ翔太郎君!!」

翔太郎は亜樹子を見向きもせず店を出た。

「ちょっと…あれどついでと？」

「さあ…私聞いてないから…」

すると店の前に二台のバイクが止まった。

二人の男女が降り、店に入る。

「「ただいまー」」

「たっくん！まりちゃん！」

たつくんとまりちゃん

この二人がバイトの人たちのようだ。

「てか、たつくんすごいイケメン……」

「ちょっと聞いてよ啓太郎!! 巧何してたと思う!!?」

かき氷食べてたんだよ!」

「かき氷!?!」

ただいま2月

「っるせえな……何食おうが俺の自由だからいいんだよ!」

「たっくん、よくかき氷作ってるお店見つけたね……」

三人が話すので完全に蚊帳の外状態の亜樹子。

「翔太郎君……こんなことなら私も連れてってもらえばよかった……」

翔太郎は

「変身……」

走行中にジョーカーに変身。

風都タワーへ急いだ。

P M 2 : 0 1 - - -
風都タワー - - -

そこでは六体のマスカレイド・ドーパントを相手に必死で応戦していた。

その中には竜の姿も。

「くそっ……ただの鉛弾じゃ効果なしか……」

相手は下級とはいえドーパント六体

通常の弾丸では意味がない。

マスカレイド達は警官達を薙ぎ払っていく。

「くっ……まだか……まだなのか翔太郎!？」

「おい！あれ！！」

一人の警官が何かを指差した。

他の警官、マスカレイド・ドーパントの視線が指差す方向へ集中する。

「あれは……」

「やっと来たか……遅いんだよ」

ハードボイルダーに乗った仮面ライダージョーカーが真っ直ぐマスカレイド・ドーパントを跳ねていく。

「ぐあっ……！！」

「ギャアア」

六体全て綺麗に跳ねるとジョーカーは竜の前に止まる。

「よっ、待ったか？」

「いいから行ってこい……」

ジョーカーは残念そうな感じで

「お前は真面目だね相変わらず……」

ハードボイルダーを発進させ、再びマスカレイド・ドーパントを跳ねる。

「数が多いからハードボイルダーでいいや！」

ハードボイルダーに跳ねられただけで爆発し、メモリが碎けていく。

「ヒッ……ヒアアアアア!!」

いとも簡単に倒れていく仲間を見て、一体が逃げだした。

「ハッ………逃がすかよ」

ジョーカーはその後を追う。

「ハア…ハア…ハア………」

「鬼ごっこは終わりか?」

全力で逃げても足とバイクでは話にならない。

ジョーカーはゆっくりとハードボイルダーから降りる。

「ほら…かかって来いよ」

しかしマスカレイド・ドーパントは逃げよつとする。

「鬼ごっこは飽きたから…これで決まりだ…」

ジョーカーがドライバーのメモリに手を伸ばした。

その時

『ゴート…』

「ん？」

聞き慣れない電子音に手を止めた。

「あ……あ……あ……」

「……ん？」

マスカレイド・ドーパントの前に赤い何かが立っていた。

「いけないなあ……敵前逃亡だなんて……」

「あ……ああ…………」

赤い何かに怯え、マスカレイド・ドーパントは後退りをする。

「敵前逃亡するような奴はいらない………死刑だ」

その瞬間、赤い拳が発火しマスカレイド・ドーパントの腹部を貫いた。

「じあっ……………」

「なっ!?!」

マスカレイド・ドーパントが炎に包まれていく。

「それじゃバイバイ〜イ」

バアンツ

マスカレイド・ドーパントの肉体が破裂しメモリごと四散した。

「てめえ……………」

「ん?」

「何してやがる……………」

「敵前逃亡するダメな部下にお仕置きしてたんだよ」

言い終わる前にジョーカーは殴りかかった。

が、簡単に受け止められた

「何すんのいきなり!!」

「お前、何者だ!？」

「何で俺と同じ姿を!？」

それはジョーカーと同じく赤い複眼で、

Wの形の角、

唯一異なるのは炎のような赤いボディ。

「何で同じ姿なのかって？」

同じドライバー使ってるからだよ!!」

ジョーカーの手を放し、ハイキックを放つ。

ジョーカーはしゃがんで避け、後退した。

そして相手のドライバーを凝視した。

「……………ロストドライバー…?」

腰に巻かれていたのはロストドライバー、

そしてスロットに挿してあるのは赤いガイアメモリ。

「私はヒート……………」

仮面ライダーヒートだよ」

「仮面ライダーだと?」

「そう。君を倒すために送りこまれた仮面ライダーさ」

Hの始まり／熱き戦士（後書き）

今回はガッツリ書くと書いてたのに、実際はそうでもなかったです。

有言実行できるようになりたいです…

Hの始まりノもう一つのビギンズナイト(前書き)

今回の依頼

依頼人

菊池(店長)

依頼内容

1日仕事を手伝って欲しい

メモ

いやいや、探偵のすることじゃないってば。とか言いつつも手伝うことだ。

しかしドーパントが現れたとの一報を聞き、急行したらそこにいた

のは

俺のそっくりさんでした。

翔太郎

Hの始まりノもう一つのピギンズナイト

2月5日 . . .

「仮面ライダーだど？」

P M 2 : 3 6 . . .

「そう。君を倒すために送りこまれた仮面ライダーさ」

風都タワー付近 . . .

色は違えど、同じ出で立ちをしている二人。

「送りこまれたってことはやはりお前ミュージアムの……」

「ミュージアム以外で誰が君を狙うのさ!！」

ヒートは炎を纏い、ジョーカーに向かってくる。

「暑苦しいからこっち来んじゃねえ!！」

ジョーカーが右ストレートを放つが、ヒートは簡単に回避し攻撃に転ずる。

「りゃっ!！」

今度はヒートが右ストレートを放ったが、ジョーカーの頬を掠めていく。

ヒートの右腕を掴み

「うおるああ!！」

そのまま一本背負いにもっていく。

「させないよ！」

更に炎を全身から吹き出しジョーカーは手放し、後退する。

「くそ……ここまで強いとはな……」

「恐れ入った？」

「いやまだまだだ」

ジョーカーは一気に間合いを詰め左腕を振りかぶる。

それに反応したヒートは防御の姿勢に。

しかし

「あまいな」

ジョーカーは左腕を止め、防御で右腕を上げているため、
がら空きになった右の脇腹に膝蹴りを放った。

ガッ

「あまいね」

ヒートは右膝でそれを弾く。

弾かれたジョーカーがバランスを崩した。

そこに発火した両腕で殴りかかる。

「うおっと!!」

ジョーカーは上体を反らした。

「な!?!」

「おりゃあ!!」

今度は両腕を掴んで巴投げをした。

炎を吹き出す暇もなく投げられたヒート。

しかし綺麗に着地する。

まったくの互角

こんな調子では勝負はつかないだろう。

「意外と強いね」

この街の仮面ライダーって「

「キャリアが違っただよ……」

「ふーん……どれくらい仮面ライダーやってんの？」

「かれこれ一年だ……」

ジョーカーの動きが止まった。

一年前

このドライバーを手に入れたとき、

ドライバーとジョーカーメモリが入っていたケースには他に何本かメモリが入っていたはず……

そして目の前の相手が持つ赤いメモリ

それには見覚えがあった。

「お前、なんでそのメモリを……？」

「これ？上司からもらったの？」

「あげないよ」

『ヒート！！マキシマムドライブ！！！！』

電子音と共にヒートの右足が炎に包まれる。

「ボーツとしていいの？
真面目に防がないと………」

消し炭にするよ？」

急にヒートの声のトーンが下がった。

同時にとてつもない殺気が放たれた。

ジョーカーの全細胞が警鐘鳴らす。

「じつはまずい……」

『ジョーカー！！マキシマムドライブ！！』

ジョーカーの右腕が発光する。

ヒートは高く飛び上がり右足をつきだす。

それにピンポイントで合わせてジョーカーは右腕をつきだした。

「ライダーパンチ!!」

ゴッ

二人の攻撃がぶつかった。
その瞬間

ドオオオオオオオオッ

とてつもない破壊力の一撃がぶつかり、その衝撃で周囲のアスファルトに亀裂が入っていく。

「っあああー!!」

ジョーカーは衝撃に耐えられず吹き飛ばされた。

ジョーカーの右腕から煙が出ている。

「ああ…少し威力が強かったかな？」

ヒートが歩み寄る。

ジョーカーは悶え苦しんでいる。

「どう？強烈だった？」

ヒートは愉快そうに笑いながら近づいてくる。

「ハア……ハア……そいつはあ……こっちの台詞だ」

「何だつて？」

突然ヒートが膝をついた。

「あれ？おかしいな……」

さっきの攻撃でヒートの右足は悲鳴をあげていた。

『ジョーカー！！マキシマムドライブ！！！！』

ジョーカーは右腕の激痛をこらえて立ち上がる。

「ハア……こいつで決まりだ……」

ジョーカーの右足が紫色に輝く。

「はは……止めってこと……？」

「そうはさせないよ……」

ヒートがアスファルトを左腕で叩いた。

するとそこから炎が出て、ジョーカーの周りを囲んだ。

「野郎……こんな技まで……」

ジョーカーは炎を飛び越える。

しかしそこには既にヒートの姿はなかった。

「くっそお……逃げられた……」

P M 4 : 5 2 . . .

クリーニング「菊池」 . . .

翔太郎はおいてけぼりの亜樹子を迎えに来た。

翔太郎がハードボイルダーを止めたと同時に亜樹子が飛び出てきた。

「翔太郎君!!!!!!」

何故か泣いている。

「ええ!?! なんじゃありゃあ!?!」

亜樹子が翔太郎の胸に飛び込んだ。

もしかして……俺の心配を……？

「うああ〜翔太郎君!!」

「お……おつ……何で泣いてんだ？」

「皆が……皆が酷いんだもん!!!!」

「ん？どついでいってと？」

翔太郎は亜樹子と共に店に入った。

「だから何でバイト雇ってんだよ!? バカかお前!!」

「忙しい時に二人が出ていったからじゃないか！」

「そつよ！あんたがあたしの料理を熱いって言って食べなかったからこつなつたんでしょ！？」

「お前だつて悪いんだから黙つてろよ！！」

て言うか探偵をバイトに使つてんじゃねえ！！

バイトは探偵の仕事じゃねえだろ！？」

三人が大喧嘩している。

「三人とも私を無視して喧嘩するんだよ！？」

寂しかったよー!!」

「あーもう…わかったから離れるよ!」

亜樹子を払いのけて喧嘩の中へ飛び込む翔太郎。

「ハイハイ、喧嘩終了!!」

「あつ、左さん!!」

菊池がそう言ったので

「……あんた探偵か…?」

「そうだが……」

あんたはたっくんか?」

「たっくん?何でその呼びか……た……」

巧は言いかけたが途中で菊池の方を見た。

「お前だな？ たつくんって呼ばせたのは……」

「ええ！？ いや俺は別に何も」

「あとで覚えてろ……」

菊池に釘を刺し翔太郎の方を向く。

「迷惑かけたな……」

報酬だがこんなもんでどうだ？」

巧は財布から三万円を出し翔太郎に渡した。

「ああ……」りゃどつも」

丁寧にお辞儀をする二人。

すると

「ちよつと巧！」

「そつだよたつくん、それは多いよ……！」

「そついつつとじゃない……！」

真理は菊池の頭をおもいつきり叩いた。

「いったあ……！何すんのさあ……？」

「うるせえなお前らは……！」

人様の前でも喧嘩やめらんないのか……？」

三人は子供のように喧嘩をする。

それを遠い目で見つめる亜樹子と翔太郎。

「帰ろっか……」

「そうだね……」

二人は物音一つたてることなく店を出ていった。

PM6:00 - - -
東京都警視庁 - - -

今回出番の無かった刃野は東京に出張していた。

「とりあえず…強化型神経麻痺弾は配備されることになった」

『本当ですか!?!』

刃野の電話の相手は、同じく出番の無かった真倉。

「ああ…それに加えて長野県警が神経断裂弾つてのを風都署にプレゼントしてくれるそうだ」

『神経断裂弾?なんですかそれ』

「専門的なことは俺にもわからんが、読んで字のごとく神経を断裂させちまう弾丸らしい。」

そいつがあればドーパントを倒せるかもしれん」

『そんな代物がうちに!?!?』

電話の向こうでテンションが上がりまくる真倉。

「それで……お前の話ってなんだ?」

『あつ、忘れてました!』

電話の向こうでがさがたと書類をあたる音がする。

『刃野さん、GMコーポレーションという会社はご存知ですよね?』

「ああ、2008年のクリスマスの事故が原因で倒産した会社だろ？」

『その会社、どこからか莫大な投資をしてもらってたんです』

「莫大な投資？どこから？」

『それが、半日調べてもわかりませんでした』

「なんだそりゃ……」

『でも他のことを見つけたんです』

「他のこと？」

『ディガル・コーポレーションという会社はご存知ですか？』

「ディガル・コーポレーション？」

聞き慣れない会社の名前に刃野は眉をひそめた。

『実はその会社もGMコーポレーションと同じように』

どこからかわかんないところから莫大な投資を受けてたんです。

それもどちらの会社もほぼ同じ額で』

「きな臭いな……」

そのディガル・コーポレーションってのはどこにあるんだ？」

『五年前に倒産しています』

「倒産！？なんでまた……」

『その会社、倒産前に暴行殺人事件で絡んでたんです』

五年前の……暴行殺人事件

「あ！あの六人が死傷した……」

『それです。』

犯人の動機が恋人を失ったのはこの会社のせいだからっていう……』

「そつだそつだ……たしかそんなことを……」

『それでその犯人が何か知ってるんじゃないかと……』

「なるほどな……」

その犯人って今は……」

『関東拘置所で服役中です』

「よしわかった。明日俺が行ってやる」

『お願いします』

「ところで竜はどうした？」

『照井ですか？俺は半日調査に当ててたんで詳しくはわかりませんが

ドーパントを仮面ライダーと撃破したそうです。

ついさっき始末書書いて帰りましたよ。』

「そうか……お前も今日は早く休め」

『わかりました。ではこれで……』

「あつ、待った！」

その事件の犯人の名前なんだっけ？」

PM 6 : 47 . . .
波樹町二丁目 . . .

竜は春子の待つアパートへ徒歩で向かっていた。

本来ならバイクで帰るのだが調子が悪かったので整備に出している。

「ああ……家が遠いなあ……」

竜のアパートは波樹町四丁目

分りにくいので距離で説明すると約7km

「遠いなあ……春子に怒られるなあ……」

もう怒られるのはわかっているので近くの公園の自販機でコーヒー
を買い、

一休みすることにした。

なんとなく携帯をあけると

着信45件

相手は……………

言うまでもない。

「「「えーよー……………帰れないよお……………」

「帰らなくていいのですか?」

突然、どこからか声がした

「なんだ？」

「照井竜さんですね？」

自分の名前を知っている…

「誰だ！？出てこい！！！」

「早く帰った方がいいのでは？」

「……………どついうことだ？」

「あなたの愛する人に危険が迫っています」

「愛する人？」

竜の頭に浮かんだのは

「……春子……」

謎の声は続けた。

「急いでください。早くしないと取り返しがつかなくなります」

「どづいつことだ！？何でそのことを俺に伝えるんだ！？」

しかし応答は返ってこなかった。

「くそっ……」

竜はコーヒーク缶を投げ捨てて走りだした。

「春子……間に合ってくれよ……！」

竜は全力で走る。

今朝春子がいつものようにどつき起こしたことが走馬灯のように頭の中を駆け巡る。

「勘弁してくれよ……！」

竜は更にスピードを上げた。

波樹町四丁目……

「ハア…ハア…ハア……」

竜は波樹町四丁目に着いた。

「なんだよこれ……」

竜の目に映ったのは波樹町四丁目

しかし

「なんで家が……町が……凍ってんだよ……」

雪が降って積もったのではない。

家や電柱、車の一つ一つが結晶となっている。

信じられない光景が広がっているが竜に驚く暇など無かった。

「春子……」

全力を振り絞り、自分のアパートへ走る。

「いやだ……いやだいやだいやだ……こんなの……！」

竜のアパートが見えた。

しかし、他と同様に結晶と化している。

「春子!!」

自分の部屋の扉を蹴破り、中に飛び込むように入る。

「ハア……ハア……」

家の中まで氷の結晶

「春子お!!」

竜が叫ぶも返事がない。

「やめてくれよ………いるんだろ春子!？」

中を見回す。するとキッチンの扉が開いている。

「春子!？」

竜はキッチンに入った。

両手に夕食のハンバーグをのせた皿を運んでいる春子の姿が。

しかし春子は氷の結晶となっていた。

「春子？おい……きこえてるんだろ？」

結晶となった春子が返事をするには無かった。

「おれ……携帯開けたら……お前から着信が……」

だから……バイクないのに……
ここまで……」

涙が溢れはじめたが竜は涙をこらえた。

「なあ……ハンバーグ……」

作って………待ってたんじゃないのか………

春子………」

竜は膝をつき拳を凍った床に何度も打ちつけた。

「春子お……春子……」

「うああああああああああああああああああ……!」

Hの始まりノもう一つのビギンズナイト(後書き)

今回も短い感じに……

それに加えて内容も薄く……

誰かアドバイスください。

Rなんてできない／囁く復讐

2月12日 . . .

「拘置所で聞いてはみたが…」

AM9:32 . . .

「それで……どのようなことを言っていましたか？」

風都警察署 . . .

「恋人が死んだのは、そのディガル・コーポレーションの仕業だ、の一点張りだ」

「そうですか……」

真倉は残念そうな声だ。

「ただな……」

「……なんですか？」

「そいつは、一度だけ」

『あんなメモリを造った会社』

って言ったんだ」

刃野は眉間にしわを寄せて言った。

「メモリって……ガイアメモリですか!？」

「もしそいつの言つとおりだとすると」

ディガル・コーポレーションはガイアメモリに関与してたってこと

になるな……」

「それじゃGMコーポレーションとの因果関係は!？」

「GMコーポレーションについては何も知らないんだそうだ。

俺達で調べるしかない……」

「わかりました」

真倉は鞆とコートを掴んで立ち上がり

「早速調べてきます!……!」

しかし刃野は首を横に振った。

「今は駄目だ。

人手が足らんからな………」

一つ席が空いている。

「あの事件から一週間経ったんですね」

一週間前

波樹町四丁目が凍結するという事件が発生した。

事件現場の第一発見者は風都警察署の照井竜。

四丁目の何から何まで全て凍るといふ幻想的で摩訶不思議な事件の死者は152人。

その中には照井竜の恋人、
安西 春子も含まれていた。

事件以来、竜は一度も顔を見せていない。

「あいつ……大丈夫ですかね……？」

「さあな……」。

どこで何してんだか……」

A M 9 : 4 0 - - -

波樹町四丁目 - - -

照井竜は一人、公園のベンチに座っていた。

以前はこの時間帯でも子供がよく遊んでいた。

しかし今では遊んでいる子供などいない。

竜は何かをするわけでもなく、ただ座っていた。

「春子……………」

二度と会うことのない恋人の名を呟く。

「やはりショックが大きいようですね……」

どこからか声がした。

しかし竜は微動だにしない

「言ったはずですよ？」

危機が迫っていると」「

竜の眼は虚ろなまま。

「悔しくないのですか？」

その言葉に竜が少しだけ反応した。

「理由もわからず、

自分の目の前に愛する人の亡骸を突きつけられて、

悔しくないのですか？」

「……いか……」

「ん？」

「悔しくないはずがないじゃないか!!」

突然立ち上がり叫んだ。

「春子を……春子をあんな……あんなことで失って……」

悔しくないはずがないだろ!?!」

どこにいるのかわからない声の主に向かって叫んだ。

「あなたの恋人の命を……大勢の命を奪ったのは

ガイアメモリを製造、販売している組織

ミュージアムです」

「ミュージアム……あいつらが……？」

以前翔太郎の持つメモリとドライバーを狙って襲撃してきた連中。

そして平気で仲間の命を奪うような組織だ。

「あなたが復讐するべき組織です」

その一言に竜は目に涙を浮かべて叫んだ。

「復讐！？俺にできるものか！！！！」

「何故です？愛する人の仇を討ちたいと思わないのですか？」

「討ちたいさ……」

でも俺には……奴らに……ドーパントに対抗なんてできない！！

勝てないんだ……」

今まで何度もドーパントと対峙することがあったが、

歯が立たずいつも翔太郎に助けられている。

「そんなんで勝てるわけない……」

それに俺は」

「力が欲しいですか？」

「……………え？」

ドンッ

何か重たいものが落ちたような音がした。

辺りを見ると

自分の足下にケースが落ちている。

「なんだこれは……………」

ケースを拾おうとした時、

ズドッ

音のした方向を見ると地面に垂直に何か刺さっている。

「私からのささやかなプレゼントです。

それがあれば復讐をすることができる……」

「なっ……おい！…どういっつもりだ！？」

しかし返事は返ってこなかった。

竜は落ちているケースを拾い、それを開けてみた。

AM 10 : 11 - - -
左探偵事務所 - - -

「竜君大丈夫かな……」

窓から外を見ながら亜樹子は呟く。

「ねえ翔太郎君、先週の事件ってやっぱりドーパントの仕業なのかな……」

翔太郎は新聞を広げて

「あれは間違いなくドーパントだな……」

「竜君… 仇を討とうって言ってドーパントに戦いを挑んだりしないよね？」

「あいつはいくらなんでもそこまでバカじゃねえ…」

「自分じゃ勝てないってわかってるさ」

亜樹子は翔太郎の方を向く。

「じゃあ、翔太郎君が代わりに仇討つの？」

「多分俺でも駄目だな……」

「!？」

どうして!？」

予想外の返答に亜樹子は目を丸にした。

翔太郎は新聞をたたんで

「いいか？あの日、事件の直前に四丁目を出た人がいたんだ。

そしてその人が出た時間と竜が四丁目に着いた時間の差はほんの数分だったらしい……」

「つまりどういふこと？」

亜樹子の理解力の無さに思わずずっとこける翔太郎。

「つまり……犯人のドーパントは数分で四丁目全域を凍結させたんだ。」

こんな規模で、しかも数分でこんな芸当ができるのはかなりヤバイドーパントだ」

「そんな……」

「それだけじゃない。」

その出た人も竜も怪しい人物を目撃していないそうさだ。

事件の直前と直後で目撃されないとすると、透明人間じゃなきゃ無理だ」

「透明人間……」

「一体のドーパントが複数の能力を持っているとなると……十中八九幹部クラスだ」

亜樹子は正直、翔太郎が何を言ってるのかわからない
しかし事態は最悪の方向へ向かっているのはわかった。

「なんか………ラジオでも聞くか……」

翔太郎はラジオの電源を入れた。

【…のガリマさんからのお便りです!!

先日、友人と大阪に行った際、あるたこ焼き屋でたこ焼きを注文したんです】

「お!？」

亜樹子が大阪に反応する。

【そのたこ焼き屋の店員さんがたこを切ってたたら怪我をしてしまいました。

その時、私見たんです…

その店員さんの怪我した指から緑色の血が流れるのを!！」

「いや—————!！」

「うるせえよ」

普段は亜樹子が使っている緑色のスリッパで

翔太郎が亜樹子の頭を叩く。

亜樹子が文句をつけようとした時

ガチャ

突然事務所の扉が開いた。

「「お！？依頼人！？」」

入ってきたのは少し背の高い青年。

「あの……大丈夫か？」

悲鳴がしたけど……」

先ほどの亜樹子のことだろう。

外まで聞こえていたとわかって亜樹子は顔を赤らめた。

「あー……何か依頼があつて来たんだろ？」

腰かけてくれ」

青年はソファ―に座り

「俺は剣崎…剣崎一真だ。
今日ここに来たのは、

俺の友人の姪がしばらく家に帰ってないらしいんだ」

「じゃあその姪を連れて帰って依頼か…」

「その通りだ……」

剣崎は表情を曇らせた。

何故か翔太郎と亜樹子も表情を曇らせた。

「翔太郎君、何て言ってるかわかる？」

亜樹子は耳打ちした。

「なんとなくな……」

滑舌悪すぎだろ……」

この作品を読んでいる方は剣崎の言っていることがわかるが

実際に話を聞いている二人には大変わかりにくいのだ。

「ちょっと……二人とも話聞いているのか？」

剣崎の声で我にかえる。

「ああっ、聞いている聞いているとも」

「本当に聞いているのか？」

剣崎の表情が険しくなった。

しかし翔太郎の口から出た言葉は

「……………え？オンドウル？」

「…何それ？」

剣崎は聞き返した。

「いやだって今オンドウルって…」

「言っていないぞ？そんなこと」

翔太郎は亜樹子の方見た。

「お前は何て聞こえた？」

「……オンドウル」

亜樹子の発言で剣崎はずっこけ

「そんなわけないだろ!？」

本当に探偵なのかあんたら!？」

「オンドウルに探偵だバカヤロー!！」

「あんた何言つてんだ!？」

それからなんとか剣崎の言葉を理解し依頼を受理した。

しかし剣崎は納得のいかないような顔をして出ていった。

「世の中にはおもしろい人がいるんだね、翔太郎君」

「なかなかいないな……」

オンドウルは……」

すると再び扉が開いた。

「よお、探偵」

「あっ!？」

「マッキー!!」

やって来たのはいつも翔太郎と喧嘩ばかりする刑事、真倉だった。

「マツキーが来るなんて珍しいな……」

依頼か？」

真倉はソファーに座る。

「本当はお前の力なんて借りたくないんだが……」

「じゃあ何しに来たんだよ」

いきなり真倉は土下座をした。

「ええ！？」

「どうしたんだマツキー！？」

「報酬ならいくらでも払う。」

だから……

だから……

照井を助けてやってくれ……」

真倉は床に頭がつくくらい頭を下げた。

その様子を見て二人は黙ってしまった。

「頼む……探偵……」

「わかった……頭上げてくれマッキー」

翔太郎は立ち上がりソフト帽を被る。

「その依頼、引き受けてやる。

報酬は……いらねえや」

その言葉を聞いて頭を上げる真倉。

「本当か探偵？引き受けてくれるのか？」

「俺にしかできないと思ったからここに来たんだろ？」

顔を上げた真倉の目には涙が浮かんでいた。

「だが、先に依頼が入ってるんでね……少し時間かかってもいいか？」

「ああ。何時間かかっても構わない。」

「だから…頼んだぞ、探偵…」

「ああ。任せとけ」

そして真倉は事務所を出て仕事に戻っていった。

「さてと……亜樹子、竜を探してくれないか？」

「翔太郎君はどうするの？」

「オンドウルの依頼の女の子を探す。」

「だから先に竜を見つけておいてくれ」

亜樹子は敬礼して

「まっかせといて!」

と言って事務所を飛び出していった。

AM 10 : 55 - -

園咲家 - -

「なるほど…体調はよくなっているようですね」

本日は井坂が診察に園咲家を訪れていた。

「はっはっはっ…先生の出した薬はちゃんと飲んでいきますからな」

「そうですか。それではまた薬を1ヶ月分をお渡ししておきましたよ
う」

井坂は鞆から錠剤の入った白い紙袋を取り出し、琉兵衛に渡した。

薬を受け取った琉兵衛は表情を曇らせた。

「先生……正直、私はあとどれくらいの命でしょうか？」

にこやかだった井坂の表情が変わった。

「珍しいですね。琉兵衛さんがそんなことを言うなんて」

井坂はカルテなどを鞆にしまい

「大丈夫ですよ。体調もよくなっていますし……心配することはありません」

「もう長くはもたないことくらい、自分でもわかっておるんですよ
先生」

「どうしたんですか？今日はひどく弱気ですね。

この地球を統べる王になろうとしているお方が」

琉兵衛はサングラスをかける。

「最近、次女の若菜が恋をしているようですね……」

若菜の花嫁姿を見れるかどうか不安になったんですよ……」

「地球の王と言えども、やはり一人の父親ですね」

すると琉兵衛は笑いだした。

「いやいや……私は地球の王などではないのですよ」

「??? では一体誰が？」

「息子の来人ですよ」

「ほう…それはまた何故？」

琉兵衛は立ち上がり、窓から外を眺めながら話を続ける。

「来人は聡明で力もある。」

何より地球の本棚のアクセス権を持っている」

地球の本棚 - - -

この地球に関する全ての記憶が詰まっている精神世界

過去の事象、近い将来の事象、個人のプライベートなことまでキーワードさえあれば閲覧することができる。

現在、地球の本棚にアクセスできるのは園咲来人のみである。

「それならば安心だ、というわけではないですよ？」

「ご家族が大切ならしっかりと長生きしてください」

「まさか先生にそんなことを言われるとは……」

サングラスの奥の瞳は少し赤くなっている。

「それに琉兵衛さんに死なれると稼ぎが減りますからね」

「それを言わなければかったいいのに……」

秀囲気が台無しである。

「はっはっはっ…
これで生活しているのですね」

井坂は笑いながら部屋を出ていった。

「しかし、今日は冷えるな…」

独り言を言いながら首にマフラーを巻き、階段を降りていく井坂。

掃除でもしているのか、メイドが見当たらない。

仕方なく自分で巨大な玄関の扉を開けようとした時

「何を企んでいるんだい？」

不意に後ろから声がした。

井坂は振り返る。

「おや、来人君じゃありませんか」

来人は階段の手すりに腰かけていた。

「どうかしましたか？」

「もう一度だけ言うよ？」

何を企んでいるんだい？井坂先生……」

わざとらしくゆっくりと言ってみせる来人。

「企んでいる？私がですか？」

「先生以外に誰がいるんだい？」

「私が何を企んでいるのかな？」

質問に質問で返された来人は溜め息をついた。

「あくまでもしらをきるつもりなら、一つ言っておいっ」

来人はゆっくり階段を降りながら

「君たちが新しく生み出そうとしているものは僕の足下にも及ばない」

その一言で井坂の表情が変わった。

「まして君や、君の仲間でさえ僕を殺すことはできない」

「来人君…君は」

「知らないとも思っていたのかい？」

「君たちのことは…全てとはいかないが……閲覧を終えている」

「フフッ……何のことがさっぱりですな」

井坂は踵を返し扉を開いた。

「それから最後に…」

井坂は再び振り返った。

「覚悟しておきたまえ。」

神が決めたことに逆らうことで……どんな報いを受けるのかを」

「……………」
「うきげんよう」

巨大な扉は大きな音をたてて閉じられた。

「いいんですか？ 来人様あ」

ピンクのフリルがついた、いわゆるゴスロリの格好の女性がどこから現れた。

「なんだったら私があを男を殺っちゃってもいいですよ？」

女性は髪をいじり微笑む。

「よしたまえ。君ではあの男にはかなわない」

「あの男強いんですか!？」

人って見た目じゃないんですね」

「ところで、任務だが…」

女性は髪をいじるのを止めて気をつけをした。

「次はどうすればいいんですか!？」

「明日の午前10時40分頃にはウィンドウエープで待機して
くれ」

「ラジオ局?地球の本棚にそう書いてたんですか?」

「そんなところを……」

頑張ってくれたまえ」

女性は敬礼し

「あいつ……頑張ります……!!」

AM 11:32 - -

波樹町四丁目 - -

「やっと見つけた……竜君」

竜は声のする方を見た。

「亜樹子ちゃん……」

亜樹子は竜の隣に座る。

「皆心配してるよ？」

「マッキーなんて翔太郎君に土下座までして竜君を助けてくれて……」

「真倉さんが……土下座？」

まさかあの人が翔太郎に土下座するとは。

「早く戻って来て……」

「本当に皆心配してるんだから……」

しかし竜はうつむき

「駄目だ……俺は……」

竜は何かいいかけたが、黙ってしまつ。

そんな竜に亜樹子は激励の言葉を投げかけようとした。

が、足下のケースに気づきそれを持ち上げた。

「????? なにこれ？」

「あつ！それは……」

亜樹子を止めようとしたが亜樹子はケースを開けた。

ケースに入っていたのは

「ガイアメモリ……」

バイクのハンドルのようなものとAと書かれた赤いガイアメモリが入っていた。

「竜君…これどついで」と？」

P M O : 2 1 - - -
ライブハウス『ゲイル』 - - -

翔太郎は依頼の女の子を探しに少し古い建物のライブハウスの前にいる。

「ここか？クイーンとエリザベスの言ってたライブハウスって……」

防音設備がきちんとしてないのか、爆音が外にまで聞こえてくる。

「まったく……真っ昼間から何してんだか……」

ソフト帽を深く被り、爆音のする建物に足を踏み入れた。

Rなんてできないノ囁く復讐（後書き）

今回からやっとアクセルについて書けました。

ただこれから読んでくれている方々が

満足していただける話を書けるかどうか不安でいっぱいです……

Rなんてできない／戦う理由（前書き）

今回の依頼

依頼人

オンドウル
剣崎一真

マッキー（真倉）

依頼内容

・オンドウル

家に帰らない友人の姪を連れて帰ってほしい

・マッキー

竜を助けてやってほしい

メモ

二つも依頼が来てしまった。さすがに大変なので亜樹子と手分けしてやることにした。

しかしオンドウルって面白い奴だな。

翔太郎

Rなんてできない／戦う理由

P M O : 2 1 - - -

「まったく……真っ昼間から何してんだか……」

ライブハウス『ゲイル』 - - -

古びたドアをゆっくりと押す。

思わず耳を塞ぎたくなるような爆音が溢れ出た。

「うるせえなあ……」

翔太郎は耳を抑えながら会場のドアを開けた。

中は大勢の人でいっぱいである。

翔太郎はポケットから一枚の写真を取り出した。

「この中にいるのが本当に？……」

ステージでは見たことないようなロックバンドが演奏している。

「はいごめんよー」

人と人の間を肩をぶつけながら通る。

「てか見つけるの無理だろ……」

どこもかしこも人、人、人

はっきり言って無理である

「どこにいるのかね……この……えー……と……」

名前なんだっけこの子？」

翔太郎が悩んでいると

「栗原天音です」

「おっ、そっだそっだ……そんな名前だった。

教えてくれてありがとな」

搜索を再開する翔太郎

「ん？あれ？」

なんで写真の女の子の名前を知っているんだ？

そう質問しようと振り返る。そこにいたのは……

「あ。栗原天音…ちゃん？」

名前を覚えてくれたのは栗原天音本人であつた。

「私に何か用ですか？」

写真と本人を見比べる。

間違いない。栗原天音だ。

「見つけた……………」

このバカみたいな数の人のなかからこんなに早く見つかるなんて奇

跡としか言い様がない。

きつと日頃の行いが良いからだな。

「早速で悪いんだが、君を連れて帰るように言われてる。と言っわけで帰ろう」

「嫌です」

即答である。

しかしこれではへこたれない翔太郎。

「いや帰ろう!」

「嫌ですってば!私この次のバンドが好きだから嫌です!!」

バンドが好きだから帰らないというところは突っ込んだ方がいいのか?

とか思ったが翔太郎が気になったのは

「この次のバンド？」

『レディースエーンジェントルメン!!』

翔太郎がステージの方を見ると、金髪で銀色のコートを来た男がマイクを握っている。

「うわあ……なんちゅうセンスの無さ……」

『今日もこのDaigoro様の美声が聞きたいかあ————
——!?!?』

ワアアアアアアアアア！！

会場は盛り上がるが、この男は冷めていた。

「なんてこった……」

ファッションセンスだけじゃなくネーミングセンスもないなんて……」

Daigoroの演奏が始まると会場は以上なまでに盛り上がる。

翔太郎の隣にいる天音も別人のようだ。

『イエーーーーー……！それじゃ次の曲にいく前に……！』

さらに会場はヒートアップする。

初めて来た翔太郎にはなんなのかわからない。

『ルール!?!』

「ん?」

スピーカーから聞こえたのは聞き慣れた電子音。

Daigoroを粒子が包み化け物へと変貌していく。

「あいつ…ドーナントになってもセンスがないのか……」

Daigoroが変貌したルール・ドーナントは、金色のスパンコ

ールのような上半身に真っピンクの下半身。

正直見るに耐えない。

『それじゃ次の曲ギイイイイイイイン！』

耳を塞ぎたくなるような不快な反響音がスピーカーから響いた。

「なんだ？何が起きた？」

ルール・ドーパントが見回すと、一つのスピーカーが壊されていた。

そして壊れたスピーカーを踏みつけている男を見つけた。

「よお…ドーパントさん」

その男はコートに黒いソフト帽を被っている。

「お前は誰だ!？」

翔太郎は質問に答えず

「ガイアメモリを手放せ。それはお前みたいな奴には手に負える代物じゃない」

「だからお前は誰だって聞いてんだよ!!」

ブウウウウウ!!

会場の皆さんが翔太郎にブーイングを浴びせる。

「俺?俺は……」

ロストドライバーを装着しジョーカーメモリを取り出す。

『ジョーカー!!』

「変身……」

ブーイングをする大勢の人の前で翔太郎はジョーカーに変身したが、

ブウウウウウウ!!

ブーイングの嵐は止まらない。

「ええ!?!そんなに俺のこと嫌い!?!」

ただ一人だけ違うリアクションをとる人物、いや化け物が…

「何い!?!お前みたいなのが仮面ライダー!?!」

そう。これが正しい反応。

「おっかしいな……俺悪いことしたかな……」

頭を掻きながらルール・ドーパントと向き合う。

「くそ……仮面ライダーがなんでここに……？」

「たまたまだよ、たまたま」

ルール・ドーパントは深呼吸をして

「相手が仮面ライダーだろうとなんだだろうと関係ねえ……俺の美声を聞きやがれ……！」

「ウイイイイイイイイアアアアアアアアアアア……！」

ルール・ドーパントの絶叫が会場に響き渡る。

「で？そんだけ？」

あれだけ叫んだのに何も起きない。

ジョーカーは平然としていた。

「な！？何で平気なんだ！？」

「何が？」

ルール・ドーパントはあわてふためく。

「もう一度だ!!」

ウイイイイイイイアアアアアアア!!」

「え? 終わり?」

やはり何も起きない。

「なんで効かないんだ!?!」

どうやら攻撃は始まっていたらしい。しかしジョーカーには効いていない。

ガンッ

とりあえずジョーカーはルール・ドーパントを殴り飛ばす。

「ぐああっ！」

床を転がりステージから転落する。

ジョーカーもステージから降りた。

「お前……弱そうだな……」

ルール・ドーパントは一発殴られただけでへろへろ。

「ぐっ……くそお……」

こうなったら……行けお前たち!!」

「お前たち？」

すると後ろから会場にいた一人の男がジョーカーを羽交い締めにした。

「な…何すんだ!？」

次々と会場の人間がジョーカーに殺到する。

「おい!! やめる離せ!!！」

「ハハハハア!! 無駄だ! そいつらは俺の命令しか聞かない!!！」

ジョーカーは殺到した人間を振り払う。

「そうか………お前のメモリはルール………つまり支配の記憶を内包してんだな?」

「ハハハハハ…その通りだ…」

俺の美声を聞いた人間は意識が混濁した後、操り人形となる！！

はずなんだが……なぜお前は効かないんだ！？」

「俺が仮面ライダーだからとかじゃないのか！？」

ジョーカーはルール・ドーパントに飛びかかる。

しかしジョーカーに再び会場の人間が殺到した。

「くっ……どいてくれ……！」

人間相手に暴力をふるうわけにはいかない。

「ハハハハ！！さすがにただの人間に攻撃はできまい！！」

見ている！今度はこんなライブハウスではなく、もっと大規模に、
風都そのものを操ってやる！！」

「な……おい待て！！」

追いかけてようとしても邪魔されて追いかけることができない。

506

ジョーカーがやっとの思いで抜け出した時、既にルール・ドーパンの姿はなかった。

表に飛び出すも、やはりいなかった。

「あの野郎……風都を操るってどうやって……」

P M 4 : 4 9 - - -
左探偵事務所 - - -

「くそ……全くわからん……」

翔太郎は事務所の一階のガレージにハードボイルダーを止め、扉を開けた。

「あれ？亜樹子帰ってたのか？」

亜樹子は暗い顔でソファアに座っている。

「??？ どうした亜樹子？」

「これ……………」

亜樹子はケースを手渡した。

「え？なんだこれ」

「竜君が翔太郎君に渡してくれて……………」

「竜が？竜に会えたのか？」

亜樹子は黙って頷き

「翔太郎君、明日竜君に会ってあげて……………お願い……………」

「お……おお……でも依頼があるから……少し待ってってくれるか？」

「うん……」

しかし、今回の依頼片付くかな……

不安でいっぱい翔太郎であった。

2月13日 - - -

AM 9 : 55 - - -

屋台「風麵」 - - -

翔太郎とウォッチャマンは二人揃ってチャーシュー麺を頼張る。

「そのDaigorroっていう人の情報はあるにはあるけどたいした情報はないね……」

「どんな些細な情報でもいいんだけどな……」

翔太郎は昨日のDaigorroの言っていた「風都そのものを操るのを阻止するため情報を集めていた。」

「風都そのものを操るなんて……はっきり言って物理的に無理だよ翔ちゃん……」

ウォッチャマンはスープを一気に飲み干す。

「だいたい、本当にそんなことするのかな？」

「やる。奴は必ず……何か仕掛けてくる……」

「なんでそんなはっきり言えるの?」

翔太郎はスープを一気に飲み干して器をドンツと置いた。

「俺の探偵の勘だ……」

ウオッチャマンはなんとも言えない顔をしている。

何の根拠もない翔太郎だが
実際翔太郎の勘はよく当たる。

「あぁっ!!しまった!!」

突然、風麵の大将が慌てだした。

「どーしたの大将？」

「若菜姫のヒーリングプリンセスの時間だ!!」

大将はラジカセを引っ張り出した。

「本当だ。もう10時だね」

ウォッチャマンの時計は10時を指している。

大将がラジカセの電源を入れる。

【最初はロビンソンさんからのお便りです!!】

「よかった!間に合った!!」

「すごい人気だな…園咲若菜は……」

とか言う翔太郎もこの時間帯はヒーリングプリンセスである。

【先日、友人と山にハイキングに行っただんです】

「そりゃそうでしょ？」

風都生まれのアイドルだよ？

この時間帯は風都の人間ならみんな聞いているよ!!！」

「それもそうか……」

【行った山には、エレキギターを持った二人の男性がCDみたいなものを投げてたんです!!！」】

「……………え？」

【変な人たちだなあと思ってたなら、その二人に突然雷が落ちたんです!!！怖くて一目散に山を下りました!!！」】

「いやいや病院に送りなよ、ねえ大将？」

大将とウォッチャマンは大笑いした。

「……………もしかして……………」

【逃げる前に病院に送った方が良かったんじゃないですかね!?!】

ウォッチャマンと同じことを言っている。

「……………ヤバイ……………」

翔太郎は小さく呟いた。

「翔ちゃん、何か言った?」

【それでは次のお便りです!!】

翔太郎は財布から五千円札を取り出して

「釣りはいらねえ!!」

大将に五千円札を押しつけて駆け出し、ハードボイルダーにまたがる。

「ちょっと!?!翔ちゃんどこいくの!?!」

そのまま翔太郎は去ってしまった。

AM10:44 - -
ラジオ局「ウインドウエーブ」生放送スタジオ - -

「…のはまずいんじゃないですか!?!」

ここで園咲若菜のヒーリングプリンセスが生放送されている。

「それでは今月15日発売の新曲です!!どうぞ!!」

園咲若菜のヒーリングプリンセスは午前10時から2時間の生放送番組。

「はい休憩入ります!」

スタッフが次の進行を書いたプリントを若菜に渡す。

「この曲終わったら次この大喜利のコーナーだから」

「はい、わかりました!」

プリントに目を通す。

「めですつて！……りさん！！」

何やらスタジオの外の廊下が騒がしい。

スタッフも若菜も廊下の方が気になる。

「……てください！本番中ですよ！？」

若菜にはこの声に聞き覚えがあった。

「……城戸さん？」

「ああ！ダメですって！！」

間違いない。マネージャーの城戸の声だ。

するとスタジオの扉が開いた。

「……いない？まだ来てないのか？」

入ってきた男にスタッフ一同は

「『『だれ！？』』」

だが若菜はその男に視線を奪われた。

「あの方は……」

「まずいですって左さん!」

城戸が左と呼ばれた男を引きずりだす。

「何考えてんですか左さん!」

「ここで事件が起こるんだってさっきから言ってるだろ!」

城戸と翔太郎は廊下全体に響き渡るくらいの大声で言い争う。

「この間はお世話になりましたけど、これはダメですって!」

「ダメとかそういう問題じゃないんだよ!!!」

「落ち着いてください左さん!!!」

その時

「キヤアアアアアアアアア!!!」

悲鳴は二人にも聞こえた。

「今のは!?!」

「ロビーの方だ……」

翔太郎はロビーを目指して走り出した。

生放送スタジオ……

スタジオ内は騒然としていた。

「あの男はなんだ！？それに今の悲鳴は！？」

「今他のところにいる奴に電話してます！」

スタジオが騒然とする中、若菜は胸の鼓動が早くなるのを感じていた。

「どうしてスタジオに…？」

まさか私に会いにわざわざ！？」

若菜の顔が真っ赤になる。

「え！？化け物！？ロビーに現れたって…！」

スタッフの驚いた声に周りのスタッフが驚いた。

「ば…化け物！？」

「ヤバいですよ…逃げましょう！？」

番組の途中だがそんなことは言ってられない。

「逃げるよ若菜ちゃん!!」

スタッフが若菜の手を引く。

「え!?!ちよっ……と!!私はその人に……」

「何言ってるの!逃げるよ!!!」

やっとあの人に会えたのにこの仕打ち。

若菜はスタッフに引きずられながらスタジオを後にした。

ローリー……

「なんでお前が……」

金色のスパンコールボディのルール・ドーパントは悪態をついた。

周りにいた人たちは全員避難したため辺りは静かであった。

「風都そのものを操る

普通に考えたら物理的に無理だ。

だからお前はほぼ全ての風都の人間が聞いている園咲若菜のヒーリングプリンセスを利用しようとした。

お前の歌声を聞かせて操るんなら直接目の前で歌う必要はない。

ラジオを聞くだけで十分だもんな…」

二人は睨み合ったまま動かない。

そんな二人を見つめる一人の女性がいた。

「うーん……来人様の言う通りだとすると……」

あっちの帽子が仮面ライダーかな……？」

女性はピンクのフリルと前髪をいじる。

「それじゃ、お前の悪事もここまでだな……」

翔太郎はロストドライバーを装着する。

「ここには人もいない、操り人形もない……」

覚悟しろ……」

『ジョーカー!!』

ルール・ドーパントが雄叫びを上げ、口から巨大な光弾を吐き出した。

「そんな技あるなら最初から……出しとけ……！」

バチイーン!!

ジョーカーは光弾を片手で弾いてみせた。

「な……ウソだ……ろ……」

「遊びはここまでだ……」

さあ、お前の罪を数えろ……」

『ジョーカー!!マキシマムドライブ!!……!!』

「やめろ…来るな……」

ジョーカーはゆっくりルール・ドールパンツに近づぐ。

「そつだ、これだけは言わせてくれ」

ジョーカーは拳を振り上げる。

「お前の歌

へタクソなんだよ……!!」

ドガンー!!

「ゴアッ……」

ルール・ドーパントは体をくの字にして吹き飛んでいった。

「ふう……弱くてよかった……」

ジョーカーが変身を解除しようとした時

「君が仮面ライダーだったんだね!!」

声のした方を向く。

そこにいたのはいわゆるゴスロリの格好した女性。

「あんた誰だ？」

すると女性は悲しげな表情をした。

「ひどい！！私のこと忘れてたっていうの！！？」

女性はくるくると回る。

「こんなイタい知り合いいたかな？」

どうしても思い出せない。

「あ、そうか」

女性は回転を止めた。

「この格好で会っの初めてだし、自己紹介もしてなかったね」

「んんなんじゃそら!！」

思わずジョーカーはずっこける。

「それじゃ自己紹介」

私は赤峰ユリだよ

そして……」

ジョーカーは赤峰の腰に巻かれているものに気がついた。

「お前……まさかあの時の……」

『ト……ト……』

「変身……！」

掛け声と同時に赤峰を炎が包む。

「リターンマツチってわけか？」

「まあ……そんなところかな？」

炎を突き破り仮面ライダーヒートが姿をみせた。

「それじゃいくよっ？」

ヒートがジョーカーの目前に迫る。

「はあ!！」

燃え上がる細長い脚で華麗な足技を放つ。

それを紙一重で避けるジョーカー。

「なるっ!！」

反撃するも、ヒートは身を翻して避ける。

「やっぱり強いね…仮面ライダーって」

「褒めてくれるのはありがたいが…嬉しくもななんともねえな!！」

ジョーカーは回し蹴りを放つが、これも避けられてしまう。

「くそ!ちょこまかと!！」

「それはお互いさまだよ!」

ガアアン!

二人の拳がぶつかり合う。

「ったいなあ!」

「くそ!」

お互い後退し距離をとった。

「そろそろケリつけてやる……」

『ジョーカー! マキシマムドライブ!』

「それもいいね……」

消し炭にしてやる」

『ヒート!!マキシマムドライブ!!』

ジョーカーの足は紫色に発光し、ヒートの足を火炎が包む。

その時だった。

「動くな!!警察だ!!」

警官隊が押し寄せてきた。

局の誰かが呼んだのだろう。

「ん？なんで仮面ライダーが二人いるんだ？」

一方はいつも見る黒い仮面ライダー。もう一方は初めて見る赤い仮面ライダー。

どうしたらいいのかと困惑する警官隊。

「あーもう！！いいところだったのに……」

ヒートは踵を返した。

「待てよ！！逃げるのか！？」

ジョーカーの問いかけに振り向くヒート。

「当たり前でしょ？こんなに邪魔者がいたら集中できないよ」

ヒートは床に手をついた。

「まあ、まだやりたいなら

君と戦う前にその警官たちを一匹残らず消し炭にするからね……」

するとヒートを囲むように床から火柱が上がり、

ヒートは火柱が消えるころにはすでに姿をくらましていた。

「逃げるのは得意だな……」

ジョーカーが振り向くと周りを警官隊に囲まれていた。

「あんた……一体何者？」

警官隊がジリジリと近寄ってくる。

「変身を解除してみてくださいませんか……？」

ジョーカーは再び周りを見る。

皆さん目がマジだ。

「急ぎの用があるから今日は勘弁!!」

ジョーカーは警官隊の頭上を飛び越えた。

「あ!?!」 「にがすな!!」

ジョーカーは一目散に局を飛び出しハードボイルダーに乗ってその場から逃げた。

P M 1 : 3 0 - - -
波樹町四丁目 - - -

翔太郎はハードボイルダーを公園の前に停めた。

公園を見るとベンチに座る虚ろな目をした男がいた。

「竜！」

竜は翔太郎がやって来たのに気づいた。

「隣いいか？」

「ああ……」

竜の隣に座る。

「翔太郎…俺」

「これ返しとくよ」

翔太郎はケースを渡す。

「竜、何でそれを俺に預けたんだ？」

「……………」

竜は黙ってしまった。

「中のガイアメモリとドライバー、どうやって手に入れた？」

「……………」

「何で今頃になって俺を呼んだんだ？」

ゆっくりと翔太郎の方を向き、

「そのメモリは昨日何者かが俺にくれたんだ…」

「何者かがってどついう意味だ？」

「そいつは俺にメモリを渡す時、姿が見えなかった。まるで透明人間だ……………」

「透明人間ね……………」

ん？透明人間？どこかで聞いたような……」

何か思いたしかけたが、結局思い出せなかった。

「そして…その何者かはそのメモリを使って春子を殺した奴に復讐をしろ、と言ってきたんだ…」

「復讐って…誰に？」

「そいつはミュージアムという組織が春子を殺したと…」

ミュージアム。

先ほどもミュージアムの一人と交戦したばかり。

確かに奴らなら町一つを凍らせるのは可能だろう。

「それで？お前は仇を討たないのか？」

竜は黙って頷いた。

「何で？」

「もし俺が、春子を殺した奴と対峙したら……」

俺はそいつを殺してしまうかもしれない」

予想外の発言に翔太郎は少し驚いた。

「殺した奴だけじゃない。」

他のドーパントを目にしたら……きっと歯止めが効かなくなる」

「だから俺にメモリを預けたのか？」

「ダメなんだ……」

あれをそばに置いておくといつか使って……ドーパントを殺してしまおう……」

「別に俺は止めないけどな……」

「え？」

翔太郎の方を向いた。

「大事な人を殺されたんだ、殺した奴に復讐するのなら俺は止めない」

しかし竜は

「ダメだ……絶対に……」

「なんで？」

「今までのお前の戦いを見てきたから……」

「俺の戦い？」

「お前は仮面ライダーになっていつも戦ってる。でもお前には……
…その…憎悪とかが感じられない。」

俺と同じで大事な人を失ったのに…」

大事な人

竜が言いたかった大事な人とはおそらく鳴海壮吉

「そうか…違うようで同じような境遇なんだな…俺達」

「お前はどんなに目の前のドーパントが悪い奴でも、感情に流され
ない……」

でも俺にはきつと無理だ……」

「それは俺がドーパントを倒したいって思いで戦ってないからだ」

翔太郎は腕を組み、足を組む。

「あのな、竜。俺が戦う理由ってのは……この生まれ育った風都を守るためだ」

「守るため？」

「ああ……この町には泣いてほしくないんだ。」

だからこの町を泣かせる奴と戦うんだ……」

おそらくこれは本心だろう。そんな眼をしている。

「お前も…何かを守るために戦えばいいんじゃないか？」

「俺が？守るために？」

「そうすれば自分の感情をコントロールできるんじゃないか？」

竜は俯き、

「俺には…もう守るものがないんだ…」

「だったら見つけろよ。何か…こつ…心の支えになるものとかね」

心の支え…そんなものが今の自分にあるのだろうか。

「俺が言えるのはそれだけだ。あとはお前一人で決めろ」

翔太郎は立ち上がり、ゆっくりと公園を出ていった。

竜の視線は昨日からある地面に突き刺さった剣に向けられている。

「守る……もの……か……」

Rなんてできない／戦う理由（後書き）

書きたいこと書いたらいつの間にかこんなページ数。

しかも剣崎の依頼を終えた後の描写を書くの忘れてました。

なので次回に少し書きます…

あの…読むの疲れたら止めてくれて大丈夫ですよ？

感情のB／ストーリーカーと銀の仮面（前書き）

今回は前編にも関わらず話が長いです。

感情のB / ストーカーと銀の仮面

2月13日 - - -

翔太郎が事務所に帰ると

P M 3 : 1 2 - - -

「あれ？天音ちゃんにオンドウルさんじゃないか」

左探偵事務所 - - -

「誰がオンドウルだ!？」

剣崎が眉間にシワを寄せて叫ぶ。

その後ろで天音が剣崎にしがみついている。

「剣崎さん……この人誰？」

「……え？俺のこと覚えてないの？」

シヨックのあまり、倒れそうになる翔太郎。

「あ、いやすまない！天音ちゃん、家出していた間の記憶がないらしいんだ……」

「記憶がない？」

倒れそうになるのを踏ん張ってこらえる。

もしかしたら、ルールのメモリを壊した影響かもしれない。

天音もルール・ドーパントに操られていたのだ。

むしろその時の記憶は無い方がいいのかもしれない。

「あの…本当にすみません!!」

深く深く頭を下げる天音。

「記憶がないならしょーがねえな。でも今度は忘れんなよ？」

「はい！ありがとうございます!!」

もう一度頭を下げて感謝の言葉を述べた。

「俺からも礼を言うよ。本当にありがとう」

剣崎の言葉に翔太郎は首を傾げて

「……………オンドウル？」

「あんたいつまでそれを引っ張るんだ！！」

剣崎は暴れそうになったが天音に引きずられながら帰っていった。

「面白いなあ、オンドウルさん……………」

二人が見えなくなり、翔太郎は事務所に入っていった。

P M 6 : 3 3 . . .

園咲家 . . .

「うっうっうっ………」

獣のようなうめき声をあげたのはこの街のアイドル

園咲若菜である。

「どうしたの若菜？犬みたいな声出して………」

心配そうに顔を覗き込むのは姉の冴子。

「なんでもない………」

「本当になんでもないならそのテンションはおかしいわよ？」

冴子の言う通り、なんでもないわけがない。

遡ること二時間前……

PM4:22 - - -
ラジオ局「ウインドウエーブ」 - - -

「城戸さん、さっきの男の人誰!？」

「さっきの男の人?」

「黒いコートにソフト帽被ってた人よ!!」

城戸はばつの悪い顔をした。

若菜が言うソフト帽の男は探偵 左翔太郎のことだろう。

「え、えーと、知らないなあ……」

城戸がしらばっくれる理由は、

以前左翔太郎に若菜の尾行を依頼したからである。

プライベートとか無視した依頼をしたとバレれば、
いつもくらっている拳骨では済まないだろう。

「嘘！城戸さんその人をなんとかさんって呼んでたじゃない！！！」

「いや、俺は何も言ってないけど……」

「言いなさいよ？」

若菜の両手が城戸の首を捉えた。

「ぐえっ……ちよ……若菜ちゃん……」

「言いなさい？」

更に両手に力をこめる。

「言いなさいって言うてるでしょ??？」

その後5分ほど首を絞められたが城戸は男をみせ、
なんとか口を割らずにすんだ。

そうして若菜のご機嫌が斜めになった。

PM 6 : 3 4 - - -

園咲家 - - -

「何があったか知らないけど、しかめっ面してたらシワになるわよ？」

「姉さんに言われなくてもわかってますっ!」

そんな姉妹の様子をドアの隙間から覗く一つの影。

「若菜の機嫌が悪そうだな……」

親バカ・園咲琉兵衛

「はっ！！まさか…… 失恋！？

……ハハハハハハハハハハ！！よし！！よしよし！！

これで若菜に近づくと愚かな男は0だあ！！」

「娘の失恋を笑わない！！」
ズコーン！！

「ふっ」

後ろから文音が金色のスリッパで琉兵衛の頭を叩いた。

スリッパで叩かれたにも関わらず、琉兵衛は頭部から血を流して倒れた。

「母さん、いくらなんでもやり過ぎじゃ……」

文音の後ろから来人が心配そうに顔を出した。

「大丈夫。この人はこんなことで死にはしないわ。」

それよりもうそろそろ夕食だから行きましょう、来人」

「うーん…母さんがそう言うなら……」

文音と来人は頭部から血を流す琉兵衛を放置したままその場から立ち去った。

2分後 - - -

凄惨な事件現場を通りかかったのは霧彦だ。

「ええ！？お義父さん！！しっかりしてください！！」

誰か、誰か医者を一ー!!」

P M 7 : 1 8 - - -
風都警察署 - - -

「はあ……………」

溜め息をつき、コーヒーを飲む刃野。

「照井がいないところも仕事がかどらんとは……………」

もともと三人しかいない課なので、一人抜けるとほぼ何もできない。

「刃野さん!!」

刃野の数少ない部下の一人、真倉が帰ってきた。

「真倉! お前どこ行ってたんだ馬鹿野郎!!」

「そんなことより…これ見てください」

真倉はポケットから新聞の切り抜きを取り出し、刃野に渡す。

「なんだこりゃ?」

「五年前の新聞を切り抜いたものです」

小さな切り抜きに書かれていた記事には

- - 灰と化したアメリカ人女性 - -

『アメリカ人女性の克蘭ベリーさん(29)が昨日午後8時頃、

喫茶店の前で突然発狂した後に、全身が灰と化して死亡した……。』

「全身が灰と化した？おい……これって……」

真倉は黙ったまま頷いた。

2月14日 - - -
AM 10:00 - - -
左探偵事務所 - - -

【チエケラーー！！】

「……………あれ？」

ラジオから流れてきたのは園咲若菜の声ではなく、野太い男性の声。

「翔太郎君、園咲若菜のヒーリングプリンセスは!？」

翔太郎は新聞を亜樹子に渡し

「今日はバレンタインデーだから午後8時〜11時までの枠で放送するんだそうだ」

「へえ〜…珍しいこともあるんだね」

「クリスマスの時も正月の時もスペシャルで時間帯が違ってたる？」

翔太郎の話の聞かずに亜樹子はラジオの電源を切った。

そして表情を曇らせて翔太郎の方を見た。

「それより…竜君そのままにしていいの?」

翔太郎はコーヒーをカップに注ぎ

「手に入れたガイアメモリと、わけのわからん形のドライバをど
うするかはアイツの自由だ」

カップのコーヒーを一気飲みする。

「それに……悲劇を乗り越えるのは自分自身の力じゃないと意味が
ない……」

再びコーヒーをカップに注ぐ。

「でも、もし竜君がメモリを悪用しようとしたら…?」

「竜はそんなことする奴じゃねえよ」

二杯目のコーヒーを啜る。

「だが…もしそんなことになったら…俺が全力で止めるさ」

亜樹子にとってその言葉はとても頼もしく、

同時に翔太郎がどれほど心の強い存在なのかを理解した。

「翔太郎君……」

「なんだ？」

「コーヒー」

翔太郎がコーヒーの残量を確認すると既に空っぽであった。

亜樹子の方を見る。

「コーヒーは？」

亜樹子から焦点をずらすことなく、カップのコーヒーを飲み干した。

亜樹子は何も言わずに緑色のスリッパを取り出す。

「だあああつ！待て待て落ち着けよ！！」

スリッパを振り上げ迫る亜樹子。

その時

ドンドンン

事務所の扉を叩く音がした。

亜樹子はスリッパを持つ手を止めた。

「もしかして依頼人かな？」

「いや……あの乱暴な叩き方は違うな……」

扉が開き、入ってきたのは翔太郎の予想通り

「ヤッホー！！翔ちゃん！」

「元気してた！？」

入ってきたのは情報屋、クイーンとエリザベスだ。

「元気してた！？ってそんな久しぶりじゃないだろうか？

今日は何しに来た？」

「今日はバレンタインデーだよ？」

そう言うと二人はリボンのついた袋を取り出した。

「まさか…チョコレート!？」

翔太郎がチョコレートめがけて飛びかかる。

が、クイーンとエリザベスはそれを避けた。

そして翔太郎に

「言ひ事は？」

「ありがとうございます！！」

「「よろしい！！」」

男・左翔太郎はチョコレートをもらい、

「俺まだチョコレート貰える歳なんだな……」

と、涙した。

亜樹子は冷たい視線を浴びせ、

「何やコイツ……」

すると

コンコン

四人は一斉に扉の方を見た。

「翔太郎君……今のは？」

「……………依頼人だ！！」

扉が開き、今度は高校生くらいの少年がやってきた。

「すみません……………」

お辞儀をしながら少年が扉を閉めた。

「確保だ亜樹子!!」

「え?」

突然の怒号に少年は驚いた。

「アイアイサー!!」

亜樹子が宙を舞い、少年に迫る。

「ええ!?!ちよつと…何これええええええええ!?!」

数分後 - - -

「スマン。はしゃぎすぎた。許してくれ」

翔太郎、亜樹子、クイーン、エリザベスの四人は揃って頭を下げた。

「何で気の弱そうな人の時は捕まえさせるのよ？」

亜樹子の問いかけも流し、翔太郎は少年の前に座った。

「そんじゃ名前を覚えてくれるか？」

「あ、はい」

少年は背筋をピンと伸ばして

「安達明日夢といいます。城南高校一年です」

「あー!!!」

突然エリザベスとクイーンが明日夢を指差した。

「何だいきなり？でかい声出しやがって…」

「城南高校の安達君って知ってる!!」

「和菓子店の『たちばな』でバイトしてんだよね!？」

二人は飛びはねながら明日夢を指差す。

「な……どうしてそのことを……?」

個人情報が出ていたためか、明日夢は不安そうな顔をした。

「あー…気にしないでいいんだ。」

あの二人が知らない高校生はいないから個人情報が漏れててもしよーがない」

しかし、明日夢には翔太郎が何を言っているのか微塵も理解できなかった。

「…まあ、とりあえずご存知ならこれをどうぞ…」

明日夢は持っていたバッグの中から、おしゃれな感じの小さな箱を取り出した。

「何だこれ？」

「バイトしてる店の饅頭です」

小さな箱の中には三つの饅頭が入っていた。

「おお……すまないな……気を遣わせて……」

あとで美味しくいただくよ……」

翔太郎は饅頭の入った箱を亜樹子に預けた。

「ところで、何か依頼があつて来たんじゃないのか？」

明日夢は神妙な面持ちで

「実は……バイト仲間の女の子がストーカー被害にあつてるんです……」

「ストーカー!?!」

後ろにいた亜樹子が大声を出した。

「それで……なんとかしてほしくて……」

「なるほどね……」

翔太郎は黒いソフト帽を被る。

「俺がなんとかしてやるよ」

「本当ですか!？」

「ああ、任せとけ。それより……」

翔太郎はニヤニヤした顔で

「その女の子のこと好きなのか？」

「……………え？」

翔太郎の後ろの亜樹子、エリザベス、クイーンもニヤニヤしながら笑っている。

「えっと……………それ聞きます……………?」

AM 11:47 - - -
和菓子店『たちばな』 - - -

明日夢の働く和菓子店は波樹町二丁目に位置し、休日は女子高生が列をなして並んでいる。

「ここが『たちばな』です」

明日夢に連れられ、たちばなにやって来た四人。

「ん？亜樹子がいるのはわかるが……クイーンとエリザベスは何しにここだ？」

「和菓子食べるの！ねー！..」

「ねー！..」

二人は満面の笑みで答えた。

「まあ……いいか……」

五人が店内に入ろうとした。

すると、店から大男が出てきた。

「あ、仁志さん……!」

「お、明日夢じゃないか」

仁志と呼ばれた男は身長190cmほどあり、2月にも関わらず半袖のTシャツを着ている。

「……でか……!」

四人は呆然と仁志を見上げる。

「仁志さんはこれから配達ですか？」

「ああ、ちよっくら隣町までな」

仁志は大きな包みを背負って

「じゃあな明日夢！」

そして何か敬礼のようなことをして走って配達に行った。

「あの人…走って配達に行っちゃったの？」

エリザベスの問いかけに明日夢はにこやかに

「あの人、鍛えてますから…」

そうして五人は店内に入った。

「いらっしやいませ！」

迎えてくれたのは明日夢と同じ年くらいの女の子。

「左さん、この人がストーカー被害にあってる…」

「天美アキラと言います」

アキラは丁寧にお辞儀をする。

「探偵の左だ。こっちは助手の鳴海亜樹子」

亜樹子もお辞儀をする。

「早速だけど…話聞かせてくれるかな？」

「ちょっと翔ちゃん!」

クイーンが話を遮った。

「あたしたちの和菓子は!？」

このタイミングで言うことではないが、本人達の目は真剣そのもの。

「あー…明日夢君、この二人の相手してくれる？」

「あ、はい。任せてください」

明日夢はクイーンとエリザベスをテーブルに案内する。

「あ！あたしも！！」

「お前はダメだ亜樹子！！」

ついでにこうとする亜樹子の頭をわしづかみし、翔太郎達は別のテーブルに座った。

「とりあえず、ストーカーしてくる奴はどんな奴だ？」

「はい……以前この店に来た方だと思っんですが……」

「具体的な特徴は？」

「いつも紺色のジャケットにメガネをかけてますね……」

「いつ頃から被害にあってるんだ？」

「年末あたりに……一度その方から告白されて……」

それ以来……バイト終わりにいつも後をつけてくるんです」

「うわあ……気持ち悪……」

思わず亜樹子の口から率直な感想がこぼれた。

「君はいつも何時頃バイトを終えるんだ？」

「午後6時から7時あたりです」

「なるほどね……」

ある程度の話聞き終えた翔太郎はストーカーをどう捕まえるかを考える。

「どーするの翔太郎君？」

「……他を使う」

P M 6 : : 2 5 . . .

「お疲れ様でした」

店の裏口から、帽子を深く被りマスクをした女性が出てきた。

「本当に大丈夫？」

明日夢は裏口から顔を出して訊ねた。

「はい…一人で大丈夫です」

「もし何かあったらすぐに呼んでね？」

それだけ言って明日夢は顔を引っ込めた。

その様子を電柱の影から見つめる一人の男がいた。

「フフフフ……変装したってバレバレだよ……」

男は女性の後をつけていく。

「……………誰？」

誰かに後をつけられているような気がして後ろを振り返る。

しかし誰もいない。

再び歩きだすが、やはり人の気配がする。

「フフフ…」

微かに笑い声がした。

「誰！？誰かいるの！？？」

周囲を見回した。

すると電柱の影から一人の男が姿を現した。

「フフフ…」

男は不敵に笑った。

「イヤ……!!」

男を見て全力で走り出した。

「今日は逃がさないよ……」

男もその後を追いかける。

懸命に逃げるが、足の速さは男の方が速い。

「イヤ…イヤ………」

「喚いてもダメだよ!!」

あっという間に男に捕まってしまった。

「イヤ！ー！やめて！ー！」

「フフフフ…こんな変装して…バレないとも思った！？」

男はマスクを奪い取った。

しかし

「お前は……………誰だ！？」

男が追いかけていた女性は

知りもしない女の子。

「ニヤハハハハハハ！」

突然女の子が笑いだした。

「アキラちゃんだと思った！？バツカだね〜」

「な……お前は一体！？」

「よくやった亜樹子！！」

男の後ろから声がした。

振り返るとそこにいたのは黒いコートに黒いソフト帽の男。

「残念だったな……お前が追いかけていたのは囷だ」

男はうろたえて

「ほ…本物のアキラちゃんはどこだ!？」

「本物は今頃お家にも帰ったんじゃないか？」

翔太郎は男に歩みより、亜樹子は男の後ろにまわる。

「お前のストーカーもこれで終わりだ」

「くそお!！」

男は捕まる前に逃げ出した。

「逃がすか!！」

翔太郎、亜樹子もその後を追いかける。

「ハア…ハア…ハア…」

男は懸命に走った。

先ほどまでは自分が追いかけていたのに、今は自分が追いかけられている。

「こんなところで…！」

しかし、男の逃走も虚しくすぐに建物に阻まれて行き止まりになってしまった。

「残念だったな…」

行き止まりだななんて……もう運がなかったとでも思ってくれ」

翔太郎が近寄る。

「俺は……こんなところで……！」

男が懐から朱色のガイアメモリを取り出した。

「な！？ガイアメモリ！？」

『ボム……！』

男はメモリを頭頂部に挿し全身に黒い球体をつけたボム・ドーパン

トと化した。

「ったく…最近ドーパント多すぎだろ!？」

翔太郎はロストドライバーを装着した。

しかしそれより早く、ボム・ドーパントは後ろの壁を爆破して逃げていく。

「あ!ドーパントが逃げる!！」

「だから逃がすかって!！」

更に追いかける翔太郎と亜樹子。

二人は爆破されて吹き飛んだ壁の穴を通り、煙の中を突っ切った。

「ぶはあー!!」

……アイツ何してんだ?」

翔太郎と亜樹子が見たのは足を止め、その場に立ち尽くすボム・ド
ーパントの姿。

「……どうしたんだろ?」

二人はゆっくりと近づいた。

「……あ！翔太郎君あれ！！」

亜樹子が何かに気づいた。

「どうした！？」

「あのドーパントから…手が！！」

翔太郎は目を凝らす。

よく見るとボム・ドーパントの背中から赤い腕が飛び出していた。

そしてその腕から炎があがる。

「アアアアアアアアアアアアアアアア！！」

ドオオオオオン！！

突然ボム・ドーパントが爆発した。

「うおおおー！？」

「きゃあああー！！」

爆風で亜樹子はしりもちをつく。

「ヤッホー」

聞きおぼえのある声。

相手を貫き内側から炎で焼き尽くす手口。

「またお前か……仮面ライダーヒート!!」

翔太郎の前に現れたのは赤い仮面ライダー、ヒート。

「今日もリターンマッチに来たよ」

「何あれ!? 赤いジョーカー!? 私聞いてない!!」

翔太郎はジョーカーメモリを取り出す。

『ジョーカー!!』

「変身……」

ドライバーのバツクルを展開させ、仮面ライダージョーカーに変身した。

「今日こそケリつけてやる……」

「あっそう。今日は助っ人呼んでるんだけどな……」

「助っ人？」

すると後ろの方から

「おいおい……まさか本当に現れるとはなあ……」

タンクトップの男が現れた。

それを見た亜樹子は

「2月なのに…タンクトップ？」

男は亜樹子の発言を流して

「お嬢ちゃんは危ないから下がってな」

「そいつから離れる亜樹子…！」

ジョーカーにはその男が何者か、腰についているものですぐにわかった。

男の腰についていたもの、それはジョーカーやビートにもついていなかった。

『メタル…！』

「変身んん!!」

男は銀色のメモリをロストドライバーに挿し、展開させた。

「一体何人いるんだよ…」

ロストドライバーのバツクルから銀色の液体が飛び出し、男を包んでいく。

「自己紹介をしておこう。俺は仮面ライダー…」

そして男はジョーカーやヒートと同じフォーム、

赤い複眼で銀色のボディの戦士へと変身した。

「仮面ライダーメタルだ」

感情のB／ストーリーカーと銀の仮面（後書き）

今回はどうしてもメタルを登場させたかったので、話の展開が非常に駆け足になってしまいました。

もう少し話の構造が上手くできれば……

感情のB / 決意と定義 (前書き)

今回の依頼

依頼人

安達明日夢 (高校生)

依頼内容

バイト仲間の女の子がストーカー被害にあっているのだからなんとかしてほしい。

メモ

囷を使つてストーカーを追い詰めたものの、俺たちの目の前でストーカーは爆死

再びミュージアムの仮面ライダーヒート、そして新たな銀色の仮面ライダーと戦うハメに。

翔太郎

感情のB / 決意と定義

P M 6 : 3 9 . . .

「今度は銀色のジョーカー!? 私聞いてないってば!!」

波樹町二丁目 . . .

「お嬢ちゃん、俺の話聞いてたか? ここから離れてくれ」

「早く逃げろ亜樹子!!」

ジョーカーが呼びかけたのと同時にヒートが攻撃を開始する。

「くそ!!」

ヒートの拳をなんとか受け止めるジョーカー。

「二対一とは…よほど一人じゃ自信がないと見えるな!！」

「なんとも言うといい。上司からの命令だからしたがってるだけ
」!

お互い手を払い、後退する。

「本当なら一人でも殺れるのにね!！」

「二度も逃げた奴がよく言っぜ!！」

二人のハイキックがぶつかる。

不意にジョーカーがいる位置に影ができた。

「ぬんっ!！」

メタルが上から棒のようなものを振り下ろした。が、ジョーカーはギリギリ回避した。

「ほう…反応はいいな…」

メタルの持つ棒がアスファルトにめり込んでいる。

「武器まであるのかよ…」

「こいつか？こいつはメタルシャフトって言ってな…
相棒みたいなもんだ」

ゆっくりとメタルシャフトを引き抜く。

「棒が相棒って…つまんねー！」

離れたところから亜樹子が呟いた。

「っさいなあ…消し炭にしてやるっか？」

ヒートが亜樹子めがけて跳躍した。

「くそ！逃げろ亜樹子！！」

ジョーカーも跳躍する。しかし早く跳んだヒートの方が当然早く亜樹子のもとにたどり着いた。

そして炎を纏った左腕を振り上げる。

「やめろおおお…！！」

ズドンッ

亜樹子と襲いかかろうとしたヒートの間をメタルシャフトが通過し、壁に突き刺さった。

「ひっ……………」

突然のことに亜樹子は腰を抜かしてしまう。

「…………ちよつと…………銀ちゃん、何のつもり?」

「任務にその女の子は関係ないからな。むやみやたらに殺すもんじやねえ」

二人が問答する間にジョーカーは亜樹子の前に立った。

「早く行け!!」

亜樹子を立ち上がらせ、逃げるように促す。

「でも翔太郎君!!」

「おしゃべりだなんて余裕だね!!」
再びヒートが攻撃をしかける。

なんとか全ていなし、

「逃げろって言うてんのが聞こえねえのか!!」

亜樹子を一喝する。亜樹子はその場から全力で走りだした。

「へえ〜…優しいんだね」

ジョーカーはヒートから距離をとった。

「はっ……お前らと戦うのに邪魔だっただけだ」

「強がらなくていいよ?」

次の瞬間、ヒートを飛び越えてメタルがシャフトを振り下ろしてきた。

「おっと!」

今度は最小限の動きでよける。

「二対一はあまり好きじゃないが…任務だからな。悪く思つなよ?」

「どつってことねえ……丁度いいハンデだ」

ジョーカー目の前の二人の仮面ライダーに立ち向かっていった。

「ハア……ハア……ハッ……」

狭い路地を全力で駆け抜ける亜樹子。

「……ハッ……ハッ……どうしよう……」

翔太郎が「逃げる」と言ったのだ。

今まで何度か翔太郎が変身し、ドーパントと戦うのを見てきた。

その戦い中で翔太郎は一度も逃げるだなんて言わなかった。

しかし今回は違う。

強く、叫ぶように逃げると言っていたということとは、

あのジョーカーのような二人組はこれまでのドーパントと比べ物にならない強さであると示している。

「どっしょよう……どうしたら……」

亜樹子はケータイを取り出し、警察に通報しようとした。

しかしあの二人組が相手では警察がなんの意味をなさないのは明白だ。

「誰か……誰か翔太郎君を……」

……あ……!」

亜樹子は慌てて道路の標識を見た。

【波樹町二丁目】

それだけ確認して亜樹子は再び走りだした。

「ぬおおりゃあー!」

ドオオオオッ

メタルがシャフトを振るう度に地面や建物の壁が抉れていく。

「こんなの一発でアウトじゃねえか!」

防戦一方のジョーカー。

「はあああっ!」

さらにヒートも攻撃を繰り返すため反撃できない。

「ふふ……足手纏いがいなければ勝てるみたいなこと言ってた割には防戦一方じゃない!?」

「……こっから反撃開始だ!」

ジョーカーは高く跳躍して建物の屋上に着地する。

「逃げる気!?!」

ヒートもジョーカーを追って屋上に着地した。

「らあっ!?!」

ヒートめがけて右ストレートを放つ。

「うわ!」

それをヒートはしゃがんで避ける。が、しゃがんだヒートの顔面に蹴りを叩き込んだ。

ヒートは吹き飛び、建物から転落する。

ドンッ

「ぐえっ」

体を大の字にして情けなく地面に叩きつけられたヒート。

「何してんだお前？」

「銀ちゃんがサボるからこつなっただけど？」

「サボってねえよ」

ジョーカーは上からその様子を見ている。

「まあ見てろ。あの黒い仮面ライダーを叩き潰すから」

そう言うとメタルシャフトを建物に突き立てた。

ビシッ

「ん？なんだ？」

ジョーカーが確認しようとした瞬間、建物に亀裂が入り、一気に崩壊を始めた。

「んな……………！」

足下が崩れ、転落するジョーカー。

その眼前にシャフトを振りかぶるメタルが迫る。

「せいやあああ！」

防御をしたものの、メタルの驚異的な腕力に押し負け他の建物に叩きつけられた。

ズドオオン

「がっ……………は……………」

落下するジョーカーの真下にはピート。

「…おじや」

タイミングを合わせて放たれたパンチを防ぐこともできずに地面を転がっていく。

「……………ぐ……………っそ……………」

倒れているジョーカーが上を見るとメタルが再びシャフトを振りかぶっている。

「ぬっっん……………」

ド
ド
ド……………」

「……………あああああああ……………」

悲鳴をあげるジョーカーにさらにもう一度シャフトを叩きつける。

「がああああああー!!」

「はははっ！チョー面白い！！があああ、だつてさ！」

苦しむジョーカーをシャフトで持ち上げ

「おいおい……こんなものなのか？」

シャフトを振るってジョーカーを投げ飛ばし、メタルは溜め息をついた。

「はあ……もう少し骨があると思ったんだが……買い被りすぎか……」

「それじゃ止め刺そうよー！」

『ピート……！マキシマムドライブ……!!』

「まあ、それもいいか…」

メタルはメモリを抜き、シャフトの柄についたスロットに挿し込んだ。

『メタル！！マキシマムドライブ！！！！！！』

二人はゆっくりと、倒れているジョーカーに近づく。

「バイバイ。仮面ライダー君！」

ヒートが飛び上がり、炎を纏った右足を突き出した。

『ジョーカー！！マキシマムドライブ！！！！！！』

「何!?!」

ジョーカーは体を起こし、発光する右腕を突き出した。

「……っらああ!?!」

ヒートとジョーカーの攻撃がぶつかり、衝撃で周囲の建物に亀裂が入る。

「な……どこにこんな力が!?!」

ヒートを弾き飛ばし、もう一度マキシマムドライブを発動させる。

『ジョーカー!?!マキシマムドライブ!?!!?!』

「おおおりゃああああ!?!」

「うおおああー!!」

今度はシャフトに拳を叩きつけた。

先ほどよりも凄まじい衝撃でさらに建物に亀裂が入る。

「ぬっっおおおおおおおおおお!!」

「あああああああー!!」

ドシッドシッ

「あ……ヤバい……」

ヒートは建物を見上げて眩いた。

建物が二度の衝撃で今にも崩れ落ちてきそうである。

「銀ちゃん!!」

ヒートの声で建物の崩壊に気づき、ジョーカーを蹴り飛ばして飛び退いた。

蹴り飛ばされたジョーカーは体勢を崩し、その場に倒れ込んだ。

そこに崩壊した建物が殺到してくる。

「マジかよ…」

ドドドドドドドドオオーン

P M 7 : 1 3 - - -
波樹町四丁目 - - -

「……………いた…」

亜樹子は波樹町四丁目の公園に来ていた。

翔太郎を助けてもらうために。

「竜君!!」

亜樹子は走ってベンチに座る男の名前を叫んだ。

「亜樹子ちゃん……………?」

血相を変え、肩で息をしながら亜樹子が走ってくる。

「どうしたの亜樹子ちゃん？」

「はあ……はあ……お願い…翔太郎君を…」

「翔太郎？」

「翔太郎君を助けて……」

その言葉に竜は立ち上がり

「翔太郎に何かあったのか!？」

「なんか……ジョーカーみたいな奴らが……とにかく翔太郎君が……」

「わかった。翔太郎の奴はどこに……」

言いかけて、竜は黙ってしまった。

「……………竜君？」

「……………すまない……………やっぱり無理だ……………」

竜はベンチに座ってしまふ。

「……………どうして……………？」

「……………俺には……………守るものがないんだ……………」

「……………え？」

「翔太郎が……………言ったんだ。何かを……………誰かを守るために戦えって……………」

「何よそれ……………」

「今の俺には守るものがない……………戦う理由がない……………」

「すまない……………助けにいけない……………」
「バチイイツ」

唐突に亜樹子は竜の頬を思いつきり叩いた。

「な……亜樹子ちゃん？」

「……んてよ……」

バチイイツ

もう一度竜の頬を叩いた。

「なんでなのよ!？」

亜樹子の目には涙が浮かんでいた。

「なんで助けに行かないのよ!？」

翔太郎君がピンチなのよ!？」

「なんで行かないの!？」

再び叩こうとする亜樹子の手を竜は掴んだ。

「落ち着いて亜樹子ちゃん！」

「落ち着かないといけないのは竜君の方じゃない!!」

「……俺が……？」

「戦う理由がないとか……守るものがないとか……ただの言い訳じゃない!!」

「竜君が現実から逃げるための言い訳じゃない!!」

感情が昂り、ついには涙が溢れ出た。

「守るものがないなんて……そんなわけないじゃない!!」

親友は……翔太郎君は守るに値しないっていうの!？」

翔太郎は教えてくれた

「大切なものを守るために戦え」と…

竜は地面に突き刺さっている剣を見つめた。

道を示してくれた親友に危機が迫っているのなら

自分にできることはただ一つ…

竜は置いていたケースを持って剣に向かって歩いていく。

「……………竜君？」

「ありがとう……亜樹子ちゃん……」

剣の柄に手をかける。

「教えてくれ。翔太郎は今どこだ？」

P M 8 : 0 9 - - -
波樹町二丁目 - - -

ヒートとメタルの目の前には瓦礫の山。

ジョーカーが埋もれて一時間余りが過ぎようとしている。

「死んじゃったかな…?」

「どうだか…」

いくら待っても出てこないジョーカーにしびれを切らしたヒートは
一歩前に出た。

「おーい！仮面ライダー君！！早く出てこないと……」

さっきの女の子追いかけてズタズタにしちゃうよー！？？」

「……何してんだお前？」

「いや……こうしたら出てくるかなあって……」

メタルは呆れて肩をすくめた。

「あのな……そんなバカみたいな嘘に引っ掛かるバカはいな」

ドゴオオオオン

二人の話の最中、突然瓦礫が吹き飛んだ。

そして瓦礫の中から漆黒のボディで赤い複眼の戦士が現れた。

「ほらでてきた……」

ジョーカーはゆっくりと瓦礫の山を下る。

「俺は……仮面ライダー君じゃない……」

「はい？何言ってるの？」

訳のわからないことを言い出すジョーカーを嘲笑いながら訊ねる。

「俺は……仮面ライダージョーカーだ……」

「だから何言ってるの?」

「それから…俺の助手に…仲間に手を出すな」

予想外の発言をするジョーカーに、ヒートはついに笑いだした。

「ははははははは!何それ!?

手を出したらただじゃおかないって言いたいの!?

ボロボロの君に何ができるのさ!?!」

ジョーカーは足を止め

「いいか…:…例えどんなにボロボロになっても、体一つで大切なものを命懸けで守り抜く…:」

その心そのものが仮面ライダーなんだ。

お前らみたいなのは仮面ライダーなんて言わない……

俺が言わせない……」

「……そう。言いたいことはそれだけ？」

ヒートの両腕から炎が吹き出る。

ヒートが攻撃をしかけようとした時、メタルがそれを遮った。

「!?!? 銀ちゃん!?!?」

メタルはヒートより前に出て

「お前……バカだろ？」

けどな……俺はお前みたいなのが一番好きだ」

シャフトを構えてゆっくりと間合いを詰める。

「お前の言う仮面ライダーの強さ……俺に見せてみる」
二人は同時に動きだした。

メタルの振るうシャフトをかわし、脇腹に拳を叩きこむ。

「ふん…そんなものか!？」

メタルはのけ反りもせず、ジョーカーの顔面にパンチを放つ。

体を反転させて回避して今度は回し蹴りを浴びせる。

「効かんな!!」

防御もせずに腹筋の力だけで弾くメタル。

「くそ……まだ力が……」

攻撃が通用しないのはメタルのボディが硬いだけでなく、

ダメージのせいでジョーカーの攻撃に力が入っていないからである。

「はあ!!」

ガンッ

突然後頭部に衝撃がはしった。

「つまんないんだけど!!」

ヒートが一人無視されたのに腹を立てて攻撃してくる。

「はっ!!」

ヒートのアッパーがジョーカーの顎を綺麗に捉え、ジョーカーは力なく倒れた。

「あれ？もう終わり？」

ジョーカーは立ち上がるが、アッパーで脳を揺らされて立ち上がれない。

「銀ちゃん、止め刺していい？」

メタルはシャフトを肩に担ぎ

「……勝手にしろ」

『ヒート……マキシマムドライブ……！……！』

「それじゃ、バイバイ」

その時

「待ちなさい！！！！！！」

ヒート、メタル、ジョーカーは声のした方を見た。

「……亜樹子………なんで？」

ヒートはジョーカーから足を退ける。

「何なの君？死にたいの？」

メタルは何も言わず、その様子を見守る。

「それとも何？君が相手してくれるの？」

「いいえ！！」

亜樹子は堂々と言った。

すると、亜樹子の隣に一人の男が現れた。

「俺が相手だ……」

ヒートとメタルは現れた男をじっと見つめる。

「「……………誰？」」

二人が気をとられているうちにジョーカーは体を起こし立ち上がる。

「竜…なのか？なんで「」に……………」

竜は剣を引きずりながら歩きだす。

「翔太郎…すまなかった…けど、もう迷ったりしない」

竜は懐から不思議な形のドライバー、アクセルドライバーを取り出し腰に装着する。

「何だそのドライバーは……………」

メタルの問いかけに答えることなく、さらに紅いメモリを取り出した。

「……………！ 私たちと同じ純化したメモリ！？」

『アクセル！！』

「変……………身！！」

アクセルメモリをドライバーの中央に挿し、ドライバーの右のグリップを捻る。

その瞬間、アクセルドライバーから紅い閃光が放たれた。

「なっ……………」

「眩し……………」

持っていた剣、エンジンブレードで閃光を切り裂いた。

閃光の中から現れたのは、バイクのホイールのような装甲。
炎を思わせる紅いボディ。

フルフェイスヘルメットのような仮面。

仮面の奥の青い複眼が輝いた。

「一体……なんなんだお前は!？」

「俺は……そうだな……」

俺は仮面ライダー……」

エンジンブレードの切っ先をメタルに向ける。

「仮面ライダーアクセルだ!!」

アクセルは真っ直ぐメタルに向かっていき、エンジンブレードを振るった。

メタルはそれをシャフトで防ぐ。

「何だお前は……お前みたいな奴の存在は聞かされていない!」

「言っただろう?俺は仮面ライダーアクセルだ!」

さらにエンジンブレードを振り、メタルも防ぐ。

「お前……キャラが被ってんだよ!!」

ヒートが後ろからハイキックで攻撃してきた。が、アクセルは足を受け止めた。

「く……その腕を燃やしてやる!」

ヒートの足から炎が上がる。
同時にアクセルの装甲から煙が上がった。

「っああああああ！」

悲鳴をあげ、その場に倒れこむヒート。

「馬鹿な……赤峰のヒートを上回る熱量だと!？」

メタルはエンジンブレードを払って後退する。

「どっした?かかってこないのか?」

「……不確定要素が現れた時点で撤退すべきだからな……」

『ヒート……マキシマムドライブ……!!』

アクセルの後ろから電子音が響いた。

「てめえ………」

振り返るとヒートの全身から炎が吹き出ている。

「ぶつつつ殺してやるつうあぁ!!」

全身に炎を纏いアクセルに突っ込んでいく。

アクセルは落ち着き払ってドライバーの左側のグリップに手を伸ばす。

『ジョーカー……マキシマムドライブ……!!』

アクセルがグリップを握るよりも早く、ジョーカーが飛び出した。

「なっ!?!」

「ライダーパンチ!!」

ズガンッ

完全に無防備なヒートの腹部にライダーパンチを叩きこんだ。

「がっ……」

ヒートは体をくの字に曲げて吹っ飛ばされる。

「悪いな竜、どうしても一発殴りたかったんだ」

「いや、別にいいわ...」

アクセルは地面にエンジンブレードを突き立てた。

メタルは倒れているヒートを抱えていた。

「逃げるのか？」

「さっき言った通りだ。今日のところは退かせてもらおう」

それだけ言ってメタルは跳躍して姿を消した。

取り残された二人は変身を解除する。

途端に、翔太郎が倒れこんだ。

「翔太郎！」

「翔太郎君！！！」

隠れていた亜樹子も駆け寄る。

「竜…お前……なんで？」

「お前に言われた通り…」

お前や亜樹子ちゃん…俺の大切な仲間を守るって決めたんだ。だから助けにきた」

そう言うと翔太郎は何故か吹き出した。

「お前に言ったあの台詞な……ある人の真似したんだよ」

それを聞いた亜樹子が

「それって私のお父さん？」

しかし翔太郎は首を縦に振らなかった。

「いや。おやっさんじゃない。

おやっさんと出会うずっと……ずっと前に会った人のな……」

「一体誰なんだ？」

翔太郎は体を起こし

「俺にもわかんねえ。ただその人は……今思えば、初めて出会った仮面ライダーだったのかもな……」

「「はあ!?!」」

二人の目が点になる。

「「どうということ翔太郎君!?!」」

「「初めて聞いたぞ!?!」」

翔太郎はなんとか立ち上がり

「「いいじゃねーかそんな話。それより早く帰ろつぜ」」

啞然とする二人を置いて歩き始める。

「おい待て翔太郎!!」

「どういふことよ!?!私聞いてな——い!?!?!」

感情のB / 決意と定義（後書き）

今回はアクセル初登場、そしてバトルシーンをいっぱいぶちこみま
した。

その分内容がいつもよりお粗末に…

ちなみに今回の最後に翔太郎が言っていた仮面ライダーは
大した伏線ではないのであまり期待しないでください。

超過保護なOさん／鳴海亜樹子探偵物語

2月17日 - - -

「はいコピー」

AM 8 : 22 - - -

「おう、悪いな…」

左探偵事務所 - - -

この事務所の探偵、左翔太郎は先日の戦いで負傷したためあちこちに包帯が巻かれている。

特に右腕の負傷がひどく、現在包帯でぐるぐる巻き。

まるで青タヌキロボットのよう腕である。

「不便だなあ…ったく」

ここ数日依頼は全く来ていない。事務所的にはよろしくないがこの体たらくでは何もできない。

「亜樹子、饅頭」

「はい」

亜樹子から饅頭を受けとる。

これは先日の依頼人、安達明日夢から報酬としていただいた。

「明日夢君とアキラちゃん、くっつくと思っっ？」

「俺がわかるわけねえだろ……」

饅頭を一口で食べた。

「そついや……今日からあいつ仕事復帰するんだっけ？」

「ああ……確かそうだった気がする。今頃は警察署じゃない？」

AM9:01
風都警察署

「やっと来たか…照井」

竜と同じ課の先輩、真倉は久しぶりに出勤した竜を快く出迎えた。

「お前がいなかったから調査やらなんやらでめっちゃくちゃ忙しかっ
たんだぞ!？」

「迷惑かけてすみません」

竜は自分の席につく。

「あと、これ。重要なこと書いてるから目を通しとけ」

真倉から分厚い書類を受けとる。

「……………あの…」

「なんだ？」

「今日刃野さんは？」

何故かこの課のトップ、刃野がいない。

「あの人なら関東拘置所だ」

「…捕まっただんですか？」
「バカか！！」

AM10:00 - - -
左探偵事務所 - - -

再び左探偵事務所。

【園咲若菜のヒーリングプリンセス!!】

何もできないのでとりあえずラジオの電源を入れた。

【ラジオネーム、ノルアドレナリンさんからの投稿です】

「ねえ翔太郎君」

「ん？なんだ？」

【先日、うちの息子が青いクワガタムシを捕まえてきました】

「どうしてこの事務所にはテレビが無いの？」

【以前も片面が緑、片面が茶色の大きなバッタを捕まえてました】

665

「……………あ！！」

【さらに金、銀、銅のカブトムシも捕まえました。この季節でも捕まるんですね】

翔太郎は立ち上がり、頭を掻きむしる。

「本当だ！なんで気づかなかったんだ！」

【いやあ〜そんなこともあるんですね。

でもこのラジオ局の前にすごい大きな紫色のサソリがいましたよ？】

「そつだ………テレビ買いに行こう！！」

翔太郎はソフト帽を深く被りコートを羽織る。

「買いに行くって…その手でどっやって…?」

「リヤカーを使う」

「リヤカー!?!」

翔太郎は少年のようにスキップをしてドアノブに手をかけた。

バンッ

「ぐえっ」

翔太郎が扉を開けようとした瞬間、勝手に扉が開き翔太郎は顔をぶつけてしまった。

「つてえな……一体なんだ？」

鼻を押さえながら開いた扉を睨みつける翔太郎。

すると一人の青年が入ってきた。

「探偵事務所というのは…ここか？」

青年はゆっくりとした口調で訊ねる。

「あ？依頼人かあんた？」

青年は質問に答えず、事務所のソファアに座り足を組んだ。

「おい。客が来たのにコーヒーの一杯もないのか？」

「なっ……」

清々しいくらいの傍若無人な青年。無礼な態度に翔太郎はぶちギレ寸前だ。

「ちょっと！あなた誰よ!？」

亜樹子はカップにコーヒーを注ぎテーブルにドンツと置いた。

青年は上を指差すように右手を挙げて、

「俺は……天の道を往き、総てを司る男……」

天道……総司だ……」

「いや、ちゃっちやと言つたらええやないか!!」

亜樹子はスリッパを握り、天道の頭を叩いた。

かに見えた。

天道は少し首を傾けてスリッパをよける。

「な!？」

「亜樹子のツッコミを避けやがっただと!？」

「フツ……そろそろ…依頼の話をしているか？」

この男……できる!!

などと二人は思いながら天道の話を聞くことにした。

「……で?どんな依頼だ？」

「実は俺には樹花という妹がいてな…」

その樹花を監視して欲しい……」

「それは……何故だ？」

「樹花に……」

好きな男がいるかもしれん……」

ズテーーーーン

予想外の発言に漫画のようなずっこけをした二人。

「それだけ!？」

「たったそれだけのこと!?!? そんなプライバシーー無視の依頼なんて……」

あれ？こんな感じの理由でこんな感じの依頼があった気が……」

AM 10:22 - -

園咲家 - - -

「ぶえつくしよい……！」

「あらあなた、風邪でもひいたの？」

琉兵衛のくしゃみを心配する文音。

「いや問題ない。少し埃が……」

AM10:22 - -
左探偵事務所 - -

「そんなこと……だと？」

天道の顔がひきつっている。

「そんなことだと！？お前ら、この気持ちかわらないのか！？愛する妹が兄に黙って男と遊んでいたら…気が気でないだろう！？」

さっきまでクールだった天道は急にまくし立て、翔太郎に近づく。

「うおおおー！っちよるなシスコンー！！」

天道は両手で顔を覆って悶絶しはじめる。

「何故だ樹花……………いつも料理作ってやってるし、欲しいものは買ってやってるし、宿題だって手伝っているのに……………」

「あー…なるほど。甘やかされてんのね」

「ところで、あんた職業は？」

翔太郎が質問すると、天道は再び上を指差すように右手を挙げ、クルルに

「俺は…天道を往き総てを司る男……………」

俺にできないことはない。

故に誰にも、仕事も…俺を縛ることはできない……………」

「よーするに無職か」

「めんどくさい人ねー」。

「言うつかよくそれで欲しいもの買えたわね……」

「とにかく監視をしてくれ……。報酬ならいくらでも払ってやる」

「こうして過保護な天道の依頼を受けることとなった。

「いくらでも払ってやるって……あんた無職だろ？」

AM 11:00 - - -

銀杏町三丁目『天道家』 - - -

「ここが俺の家だ……」

「でか!!」

天道の家は意外にも豪邸だった。

「無職の人間がよくこんな家に住めるね……」

亜樹子は口が開きっぱなし。

「……さっきの探偵はどうした？」

天道は周囲を見回すが、翔太郎が見当たらない。

「ああ…翔太郎君はケガしてるから、今日は私が探偵!!」

亜樹子は微笑みながらピースをする。

天道は若干不満げな顔をする。

すると、天道の背中に赤い物体がへばり着いた。

「ひっ!?!なにこれ!?!」

たまらず驚く亜樹子。

「くっ……またお前か!」

天道は懐から殺虫剤を取り出すと、背中の物体に吹きかけた。

そして赤い物体は飛び去っていった。

「びっくりしたあ……何あれ？」

「……………カブトムシだ」

「カブトムシ？」

「最近やたらと俺についてくるバカでかいカブトムシだ」

二人は話ながら玄関まで歩く。

すると、扉が勝手に開いた。

「お帰り……兄さん」

「ああ……ただいま」

兄さん？ということは…

「あの……この人が依頼の？」

「いや、確かに妹だがこの妹じゃない。

こいつはひより……俺の大切な妹だ」

亜樹子は首を傾げる。

ひよりは丁寧にお辞儀をして

「妹の……ひより……です」

確かに喋るとき溜め方が似ている。

「てことは……妹は二人いるの？」

「そついうことだ……」。

ひよりの方は……既に結婚している」

「はあ！？結婚！？」

ひよりの方を見た。

少し顔を赤くしてまたお辞儀をする。

「どういうこと！？一人は結婚しているのに、一人は交際もダメなの！？」

「ひよりの場合は俺が認めた男だからだ…。

容姿、料理、仕事、戦闘能力、どれも俺と同等だ」

「はあ……さいですか……」

ひよりに促され、三人は家に入りリビングにて話をする事になった。

「それじゃまず樹花ちゃんの最近の動向を……」

「待て」

亜樹子の話遮る天道。

「どつしたの？」

「もうひとり…情報提供者がいる」

「誰？」

天道はひよりの方を見て、ひよりはどこかに行ってしまった。

ほどなくして、一人の男を連れてきた。

「紹介しよう…彼が俺の義弟…そしてひよりの夫…」

亜樹子は吹き出した。

「日下部総司です!!」

現れた夫は天道と瓜二つだったのだ。

「ええ!? 双子!?!」

「違う」

「違いますよ」

二人を見比べるが、どう見ても同じ顔。

「…ドッペルゲンガー?」

「違う」

「違いますよ」

たしかに先ほど、料理、仕事、戦闘能力が同等だと言っていた。

まさか容姿が同等って…顔が同じだとは。

「て言うか、二人とも名前が総司って…」

なんだか頭がおかしくなりそうだ。

「そんなことより…依頼だ」

AM 11:50 - -
風都電気店 - -

「どれにしようかな…」

翔太郎は並んでいるたくさんのテレビを眺めている。

「やっぱり地デジ対応型の液晶がいいのか？」

迷っていると

「テレビをお探しですか？」

店員が近寄ってきた。

「ん？ああ…やっぱり地デジ対応型の方がいいのかな…って」

「そうですね。アナログ放送が映らなくなりますから地デジ対応じゃないと…」

翔太郎の買い物はしばらく時間がかかりそうだ。

AM 11:50 - -

天道家 - - -

「なるほど……じゃあひよりさんは樹花ちゃんが男の人と会ってるの見たのね？」

686

ひよりは静かに頷く。

「つまり……男の顔を知っているのはひよりだけだ」

と天道。

ひよりの夫、日下部は…

「この！しつこいってば！！」

殺虫剤を片手に大きなカブトムシと格闘中。

「はあ……今度は黒いカブトムシか……。どこまで似てんのよ……」

日下部までカブトムシに好かれるとは。

ここまで似てたらもう同一人物だろう。

「負けるな総司！」

天道は殺虫剤を日下部に渡す。

「ありがとう！！総司兄さん！！」

お互いが総司と呼ぶという奇妙な光景に亜樹子はただ呆れるばかりであった。

「早く樹花ちゃん探さない？」

AM 11 : 52 - -
風都某所 - -

「ハア…ハア……」

ぼろぼろのスーツを着た男が足を引きずりながら歩いていく。

「ハア…ハア…ハア……」

男の手には「O」と書かれたガイアメモリが握られている。

「ハア……ハア……」

男は何かに突き動かされてただ真っ直ぐ歩いていく。

A M 1 1 : 5 9 - - -
関東拘置所 - - -

多くの罪人が住むこの拘置所。誰もが人生を諦め、廃人のような目をしている。

ある一人の男を除いて…

「おい、923番、立て」

看守に呼ばれ、囚人番号923番は立ち上がる。

「何か用ですか？」

「面会だ」

看守に連れられて923番は面会室に入る。

「なんだ……またあんたか」

「よし」

そこにいたのは

「えーと……刑事さん、名前なんだっけ？」

「だーから、刃野だっていってんだろ？いい加減覚えろ」

「…で？何の用？話すことは前話したけど…」

刃野はポケットから新聞の切り抜きを取り出した。

「今日はまず俺の話聞いてもらおう…」

超過保護なOさん／鳴海亜樹子探偵物語（後書き）

今回はカブトの人達を書いてみました。

何故でしょう？天道を書いてるとめっちゃくちゃ楽しくなります。

シスコンのところとか…

超過保護なOさん/灰と化して(前書き)

今回の依頼

依頼人

天道総司(無職)

依頼内容

妹を監視してほしい。

メモ

今回、俺は怪我をしているということだけで代わりに亜樹子が受け持つことだ。

亜樹子に任せたいが、依頼人からクレームがくるんじゃないかと

心底不安である。

翔太郎

超過保護なOさん/灰と化して

AM 11:59 - - -

「この記事はお前が五年前に起こした

関東拘置所 - - -

ディガル・コーポレーションでの暴行事件の一ヶ月ほど前の記事だ」

刃野は切り抜きを923番に渡す。

- - - 灰と化したアメリカ人女性 - - -

「この灰と化したアメリカ人女性……マリア・S・克蘭ベリーがお前の恋人だったんだろ？」

923番は何も言わず記事に視線を落とす。

「まあ、あれだ。なんでわかったかと言つと…」

刃野はまた記事の切り抜きを取り出した。

「こっちは年末…つい最近の記事だ」

923番は記事を受け取り、目を通す。

それは年末に起きた巨大なドーパントによる事件の記事だった。

「そのドーパントは…灰と化してそのまま死んだ」

923番は切り抜きを置き

「刑事さん、あんた何が言いたいんだ？」

「お前、俺が前に来た時言ったよな？」

恋人はガイアメモリに関わって死んだみたいなのを……」

刃野は深く息を吸って

「簡単に言っと、お前が五年前に起こした事件が原因で倒産したデ
イガル・コーポレーションは……」

名前や組織形態を変えて、今も存在している」
その一言に923番は目を大きく見開いた。

「信じられないって顔だな……」

お前の恋人がもしもガイアメモリが原因で灰と化したなら、
そんなメモリが今も出回ってるってことになるからな……」

何も言わずただ刃野を見つめる。

「それから……ディガル・コーポレーションと

2008年に倒産した

GMコーポレーションは得体の知れない何者かが莫大な投資をして
いたらしいんだが…

何か知らないか？」

「刑事さん……」

923番が口を開く。

「それじゃ…俺の復讐はなんの意味もなかったってことか？」

「……………それは……………」

刃野が何か言いかけたが

「刃野刑事、そろそろお時間です」

看守が扉を開け、刃野に退出を促す。

「っと、すまん。今日はここまでらしい」

刃野は立ち上がり

「また用ができたら来てやるよ」

そう言って看守と共に面会室を出る。

「復讐……か……」

923番の言葉が耳に残っている。

後に923番が事件を引き起こすことを、この時は看守も刃野も、923番自身も予期できなかった。

P M 0 : 3 2 - - -

喫茶店『ウインドガーデン』 - - -

ここで亜樹子、ひより、天道、日下部の四人は件の妹、天道樹花を探していた。

「ひより、本当にここか……?」

「うん…」

四人は店のメニューで顔を隠しながら店内の様子を伺う。

「ここで…樹花が知らない男と…会ってた」

ひよりがそう言うのだからきつとそうなのだろう。

四人は全神経を研ぎ澄まし樹花を探す。

と、

「あっ、樹花ちゃん！」

日下部が声をあげ、入口を指差した。

それを見た亜樹子は

「シーー！バレちゃうってば！」

慌てて日下部の口を塞ぎ、手を押さえる。

樹花は一人で店内に入ってきた。

「樹花め……俺に黙ってこんなところに来るなんて……」

天道は立ち上がって樹花のところに行くところとする。

「だあああ！ダメダメ！！」

尾行がバレちゃうって！！」

なんとか天道を押さえる亜樹子。

樹花は誰かに電話をかけている。

「誰にかけてるんだろっ?」

「多分……男……」

四人は何も注文することなく樹花の動向を伺う。

樹花が電話をして20分後 - - -

「あれ?」

日下部が声をあげた。

「どつした総司？」

「いや、あの人……」

日下部は店に入ってきた一人の男を指差した。

「あ！？」

天道とひよりが同時に声をあげた。

「あの人……」

「あいつは……」

男は樹花の向かいの席に座る。

「え……？何、皆……あの人が知ってんの？」

まずはひよりが口を開く。

「あれ……樹花が会ってた人……」

続いてW総司。

「「加賀美！」」

「……ん？加賀美？誰？」

亜樹子もひよりもW総司を見た。

「あいつは…加賀美新…俺の幼なじみだ…」

「そして僕の職場の同僚…」

二人の目は真剣そのもの。しかし亜樹子は

「えー……どっちの幼なじみでどっちの同僚？」

W総司が一気に喋ったため只今混乱中。

亜樹子の発言に耳を貸すこともなく二人は加賀美と樹花の様子を見る。

「なんということだ…まさか加賀美だったなんて…」

「一体何故加賀美と!？」

W総司はヒートアップ。クールなキャラはどこへ行ったのか。

そうこうしている間に加賀美と樹花は店を出て行ってしまった。

「！！！！店を出たよ総司兄さん！」

「追いかけるぞ総司！！！」

キャラが完全崩壊している天道。

二人は店を飛び出した。

「ちょっと！それ探偵の私の役でしょ！？」

亜樹子とひよりもその後を追って飛び出した。

P M 1 : 2 1 - - -

園咲家 - - -

園咲家のメイド達が念入りに掃除した応接室で、

長男園咲来人はタンクトップの男と話していた。

「…それで？赤峰ユリはあとどれくらいで復帰できるんだい？」

「もう二、三日で復帰できるかと…」

「坂下銀次、君の方は問題なく任務を行えるかい？」

「はい、問題ありません」

それを聞くと、来人は何も書いていない真っ白な本をパラパラとめくる。

「神田蒼太、金堂菜月の最終調整は済んだのかい？」

「まだ少し時間が必要ですが、そろそろ投入できるかと……」

「わかった」

来人は本を閉じて

「次は君一人を行かせよう。」

指示があるまで自分の持ち場に戻っても構わない。」

来人は応接室を出ようとした。

「待ってください」

タンクトップの男、坂下銀次に呼び止められた。

「来人様、あなたは本当は知ってたんじゃないんですか？

あの仮面ライダーアクセルとか言うのを……」

来人は足を止めて振り返る。

「それに、あなたは本当に仮面ライダージョーカーを倒す気があるんですか？」

「……びびりすぎてそう思うんだい？」

「本当に倒す気があるなら俺達四人で一斉に攻めればいいのに、一人や二人で攻めさせて…」

しかも仮面ライダージョーカーやアクセルに関する情報は口外させないなんて…」

来人は少し微笑んで

「それは内緒さ…」

僕にもそれなりに都合があるんだ」

坂下はその答えに顔を歪ませる。

「嫌なら任務から降りても構わない。

任務を解かれたら……仮面ライダーのような素晴らしい相手と闘えなくなるけどね。」

さすがに君もそれは嫌だろう？」

爽やかに笑ってみせる来人。しかし坂下はその表情から何か…畏怖

のような説明し難いものを感じとり、

思わず後退りした。

「それじゃ 良い報告を待ってるよ」

来人は応接室を後にした。

P M 1 : 2 7 - - -
時計店 『風見鶏』 - - -

天道達四人は加賀美と樹花のあとをつけ、時計店の前で隠れていた。

「何で…時計店……？」

「おそろくは……記念日的なプレゼントだな……」

「「あー、なるほど……」」

天道の発言に感心する亜樹子、日下部。

彼らは只今店の外から二人の様子を伺っている。

故に二人が一体どんな会話をしているのか全くわからない。

「これじゃ埒があかないわね……」

「誰か中に入らないとね……」

「誰が中に入る？」

亜樹子はクルッと振り返った。ら、三人がじっと亜樹子を見つめている。

「……………え？何何？」

「君しか……………いない…」

「うん。僕も鳴海さんが適役だと思う」

この中で樹花、加賀美に顔が割れていないのは探偵（仮）の亜樹子一人。

当然といえば当然である。

「いやいやいやいや！無理でしょ！？」

全力で首を横に振る亜樹子。
すると、

「いいから行けって言ってんだよっ!!?」

天道が吼えた。

「お前しかいないんだよ!この状況を打破できるのはお前だけなんだよ!」

「ええええー!?!?」

しびれを切らし亜樹子に襲いかからんとしている。

「ちょ……兄さん!」

「落ちて着いて総司義兄さん!!」

日下部夫婦が懸命に暴走寸前の兄を食い止める。

「総司義兄さんは僕らで押さえるから、鳴海さんは早く店の中に!

「！」

「はっ、はいいい！！！」

逃げるように店に入った亜樹子。

入った途端、

ドンッ

「あいたっ！」

「あっ！？」

なんと店にいた客にぶつかってしまったのだ。

相手の客はぶつかった拍子に、持っていた小さな箱を落としてしまった。

「ああ…ごめんなさい!!」

あわてて箱を拾い上げる。

「あ…いえ。大丈夫です…慣れっここですから……」

相手は見たところ高校生くらいの少年。
こう言ってはあれだが幸が薄そうな……。

「本当にごめんなさい!!ケガとかない!?!」

「はい…もう大丈夫なんで…」

「そう!?!じゃあ私急いでるから!」

無情にも少年を簡単に見捨て、樹花と加賀美を探す。

「って…あれ？二人がいないじゃん……」

なんと二人がいなくなっているのだ。

「え？なんでなんで？」

懸命に辺りを見回すと、入り口に鬼のような顔をした天ど…否、鬼が立っていた。

「……………」

「えーと…天道さん？」

それとも…日下部…さん？」

「きゅ……………」

「さまああああああー！」

「うえええ！？」

「貴様がつ！ボーツとしてる間に一人が出て行ったしまったろっ
が！いい！！？」

怒りのあまり呂律の回らない天道、もとい鬼。

「ひいひい！ごめんなさい！！！」

「貴様だけは俺の上段回し蹴りで首の骨っお！」

すかさず日下部夫婦が押さえつけて店の外へ引きずり出した。

「落ち着いてっつてば！鳴海さんは悪くないでしょ！？」

「早く…樹花を追いかけてよ…」

鬼の怒りがおさまるまで大変時間がかかりそうなのでこの辺の件は
割愛させていただこう。

P M 1 : 3 9 . . .
銀杏町一丁目 . . .

多くの人が行き交う交差点。

車が信号が変わるのを待っている。

周りのビルには化粧品などの広告。

誰も広告などにはめくねず交差点を歩いていく。

信号が変わっても歩いていく人でごった返している交差点の真ん中に

ボロボロのスーツに身を包んだ男が立っている。

男は手に持っていたものを握りしめる。

交差点に悲劇の訪れを知らせる音が響いた。

『オベリスク！！』

「え？」 「何今の…？」

妙な音に気がついた人は周囲を見回した。

その時

メキメキメキメキッ

「ヴアゝアゝアゝアゝアゝ！！」

「えっ…あ！」 「なっ！？何だ！？」

「ば…化け物…？」

交差点のど真ん中に体長約6m、鋭く尖った槍のような頭で四足歩
行の化け物が現れた。

「いやあああああああ！」

PM1:47 - -

風都警察署 - -

ビーン ビーン ビーン ビーン

署内に警報が鳴り響き、ほどなくして非常事態を知らせる放送が流
れた。

『銀杏町一丁目に巨大な化け物が出現した模様。おそらくドーパン
トと思われます。至急現場に急行してください』

「行くぞ照井!!」

真倉は勢いよく飛び出していく。

竜は懐のアクセラドライバーとメモリを確認し

「待ってください真倉さん!」

真倉の後を追って飛び出した。

P M 2 : 0 3 . . .
銀杏町二丁目 . . .

鬼…いや天道の怒りが収まったので四人は尾行を再開していた。

「ほら、二人仲良くベンチに座ってる」

「ああ…これはもう邪魔しちゃいけないんじゃない？」

二人は袋から小さな二つの箱を取り出した。

「あれなんだろう？」

「二人のお揃いの腕時計とかじゃない？多分さっきの時計店の」

「なるほど…」

珍しく的確を得た発言をした亜樹子に感心する日下部。

するとひよりが日下部の肩を叩いた。

「ねえ…」

「何？どうかした？」

「兄さんは………？」

亜樹子が振り返るとひよりしかいない。

「え？え？いないじゃん天道さん！！」

一体いつから、どこに消え失せたのか。

「あ！あれ！！」

日下部が何かを指差した。

指差す方を見ると、天道がズンズンと足音をたてながら樹花たちに近づいていく。

「ああもう!!急いで止めないと!!」

三人は天道を止めようと飛び出した。

しかし時既に遅し。

天道は二人の前で仁王立ちしている。

「げ!て…天道!？」

「お兄ちゃん!?!なんでここに!?!」

天道は再び鬼と化した。

「カガミイイイ……………」

「な……………まさか…バレてたのか!？」

「貴様のくだらない考えなどお見通しだ……………今ここで塵となれ加賀
美しい!—!」

天道が怒りを炸裂させようとした時、

「「「とお—!—!」」」

亜樹子、日下部夫婦が天道をもう一度取り押さえた。

「ええ!?!日下部にひよりちゃんまで!?!」

驚く加賀美。ふと亜樹子を見て、

「あんた誰!？」

しかし亜樹子にそんな余裕はない。

「加賀美!樹花ちゃん!早く逃げるんだ!！」

「嫌よ!なんで私達が逃げないといけないのよ!？」

「総司義兄さんは君たちの交際を阻止しようしているんだ!!
だから早く逃げろ!！」

日下部にそう言われ、二人は顔を見合わせた。

「……なんで逃げないといけないのよ?」

「総司義兄さんは二人の交際に猛烈に反対しているんだ!!」

それを聞いて再び顔を見合わせる二人。

「誰と誰が付き合ってるの?」

加賀美の言葉に、暴れる天道、それを押さえつけていた日下部夫婦、
亜樹子は全員動きを止めた。

「……………加賀美……………お前は何を言っているんだ……………」

「いやいや、お前らこそ何を言っているんだ?」

一同キョトンとして首を傾げた。

「ちょ…ちょっと待って！」

その…加賀美さんと樹花ちゃんは交際してるのよね？」

不安げに亜樹子はたずねた。

加賀美の答えは…

「はあ！？誰がそんな馬鹿げたでたらめを言ったんだ！？」

「『えええええ！』『』」

大きく口を開けて四人は愕然とした。

「待て待て待て！！」

じゃあお前たちが持っているそれはなんだ！？

お揃いの何かプレゼント的なものじゃないのか!？」

天道は二人が持つものを指差した。

「これは……………その……………」

「答えられないものじゃないのか!？」

二人は気まずそうに顔を合わせて、

「これは…誕生日プレゼントだ」

「??？」

誕生日プレゼントだと…………？」

「やだ……」

お兄ちゃんもしかして明後日が誰の誕生日かわかってないの？」

妹の樹花にそう言われて、日下部の方を見る。

「誰の誕生日だ……？」

「やあ……？」

今度はひよりの方を見て、

「誰の誕生日だ……？」

「兄さんに……総司……」

ひよりがそう言つとW総司は硬直した。

「本当にわかつてなかったのか!? 自分の誕生日を！」

加賀美は呆れたように声をあげた。

「すっかり忘れてた……」

「もう…そんな時期だったなんて…」

「て言うか、誕生日まで一緒なんだ」

亜樹子にとってはそっちの方がびっくりであった。

「じゃあお前たちは…付き合っていないのか…?」

「ああ。付き合っていない」

それを聞くと天道は力なく座りこんだ。

「俺はてっきり…お前たちが付き合ってるのかと…」

天道のもとに樹花が歩み寄り、

「誕生日プレゼントね…加賀美さんが考えたんだよ」

「お前が……？」

加賀美の方を見上げると、加賀美は照れ臭そうに笑った。

「いつもお前らには世話になりっぱなしだからな」

「加賀美……」

天道の目には涙が浮かんでいるように見える。

「よかったじゃない。総司義兄さん……」

「ああ。」

わかった。お前たちの結婚を許そう」

「なんでやねん!?!」

訳のわからないことを言い出した天道に、

たいした仕事をしなかった亜樹子が突っ込んだ。

その様子を見て、皆笑いだした。

誰が見ても幸せそうな光景。

そんな幸せそうな光景の目と鼻の先で悲劇は起きていた。

P M 2 : 2 2 - -
銀杏町一丁目 - -

「……………く…くそお……………」

竜は軋む体をなんとか起こした。

周囲を見渡すとひっくり返ったパトカー！

潰れた車。

潰れた人間の肉塊。

響き渡る悲鳴。

ほんの一瞬の出来事だった。

現場に急行する警官たちの目の前に現れた巨大なドーパント。

気がつけばほとんどのパトカーが吹き飛ばされ、竜も白バイごと吹き飛んだ。

「っ……ドーパントは？」

耳を澄ませるとまだ近くで悲鳴が聞こえる。

再び周囲を見渡すが、動けそうな者は誰もいない。

真倉が見当たらないが、心配している暇はない。

竜は懐からアクセルドライバーを取り出して装着し、

ポケットから紅蓮に輝くメモリを取り出した。

『アクセル!!』

「変……身!!」

ドライバーのグリップを捻り、紅蓮の装甲に身を包んで仮面ライダーアクセルへと変身する。

そしてドライバーをベルトから取り外し、高く飛び上がった。

すると、ホイール状の装甲が展開してアクセルをまるでバイクのよ
うな形態に変形させた。

「まさか本当に変形できるとはな…」

バイクのように変形した自分の体を見て少し感動するアクセル。

そしてドライバーのグリップを捻って自身を発進させる。

走り出した自分は、そんじょそこらのバイクなどより速い。

驚異的な加速力

おそらく、今は時速500km以上で走っている。

「まだ……まだ速くなれる」

さらに加速させて惨劇の跡を駆け抜けた。

「……………」

見つけた!!」

ものの数秒でドーパントの後ろ姿を捉えた。

ひっくり返った車の上を走り、ドーパントの正面に回り込む。

しかし

「ゴアッアッアッアッアッ!」

ドーパントは信じられないスピードで動き、アクセルに迫った。

「うおおあー!?」

慌てて方向転換し、紙一重で回避する。

「あの巨体でなんて速さだ!」

ドーパントはスピードを殺しきれず近くのビルに突っ込んだ。

「…!」

「これじゃ被害が…」

ドーパントはゆっくり尖った頭をこちらに向けている。

が、勢いが強すぎて止めることができない。

「ぐっ…！」

アクセルはそのまま弾き飛ばされ、横転していた車に叩きつけられた。

「ぐあっ…！」

地に伏すアクセルに追撃をしようと走ってくる。

それを前転でなんとか回避し、銀色のメモリを取り出した。

続いてエンジンブレードの鏢のような部分を折り、そこに銀色のメモリを挿して

もとの形状に戻す。

『エンジン！！』

電子音が鳴り、刀身から蒸気を発した。

同時にドーパントが襲いかかる。

「これならどうだ！？」

再び攻撃を受け止めた。

確かに銀色のメモリの力でエンジンブレードの強度等は増した。

しかしドーパントとアクセルではパワーが違いすぎた。

「ブルッアッアッアッアッ！！！！！！」

「なっ……………」

ドガガガアッ

今度はそのまま押し切られて建物に突っ込んだ。

信じられないほどの激痛が全身を駆け巡る。

ドッ

声を発することもできずにその場に崩れ落ちるアクセル。

見上げると、ドーパントが大きな前足を上げて今にも踏み潰そうと
していた。

「ハハ……」

くそつたれが……」

動けないアクセルに巨大な足を振り降ろした。

ドオオン！

轟音が辺りに響く。

その轟音は、アクセルが踏み潰された音ではなかった。

見上げると、ドーパントは前足を引きずって後退している。

「……………なんだ？」

急に……………ゲホッ……………どうしたんだ？」

ズダアンッ！

体を起こすアクセルの前に何かが降り立った。

「よう、竜。えらくボロボロだな…」

ま、一回目じゃこんなもんか？」

降り立ったそれは

漆黒のボディ

赤く輝く複眼

「翔太郎……………!!」

仮面ライダージョーカーがそこに立っていた。

「お前…ケガは!？」

「街がこんな状態じゃ、おちおち休んでられねーよ…」

アクセルの腕を引いて立ち上がらせる。

「それにマツキーもボロボロだけど頑張ってたぞ?」

「真倉さん!?!無事なのか!?!」

「ボロボロのくせに怪我人を助けてるよ…」

「そうか…」

アクセルはエンジンブレードの切っ先をドーパントに向ける。

「それじゃ俺も負けてられないな！」

「そういつだった………」

「ヴヴヴウウウウ………」

ドーパントはつめき声を発しながら二人の仮面ライダーを睨みつける。

「いいか竜？」

ああいうデカブーツはまず足を叩くんだ。」

「足を？」

「ああ。最初に機動力を削いでやるんだよ。」

そして二人は同時に駆け出した。
ドーパントも駆け出す。

二人は左右に別れてドーパントを挟み込んだ。

「うおらああー!!」

ジョーカーはすれ違いざまにドーパントの前足に蹴りを叩き込む。

「なるほどな!!」

『ジェット……!』

エンジンブレードの引き金を引くと先ほどとは違う電子音が鳴った。

そして刀身が発光していく。

「はあっ……!」

エンジンブレードを振るい斬撃をドーパントの足めがけて飛ばした。

「ゴアッ……」

二人の攻撃でバランスを崩したドーパントはアスファルトの上を転がっていく。

「まあ…ぞつとこんな感じだな」

ドーパントはじたばたと足を振って起き上がるつとしている。

「そんじゃ、ドーパントが起きる前に止めといいつか」

そう言つてジョーカーメモ리를ベルトの右のスロットに挿し込む。

『ジョーカー!!マキシマムドライブ!!!!』

アクセルはドライバーの左グリップについているクラッチレバーを
きり、

右のグリップを捻る。

『アクセル!!マキシマムドライブ!!!!』

二人の右足が発光すると、二人はドーパントめがけて走り出した。

「ブオッオッオッ！！」

声をあげてもがくドーパント。

二人は同時に飛び上がった。

「ライダーキック！！」

ジョーカーは右足を突きだし、

アクセルは全身を捻る。

「うっおおらあー！！」

ズドオドオオン！！

「ガッ……ア……」

飛び蹴りと後ろ回し蹴りがドーパントの大きな腹部に炸裂した。

じたばたもがいていたが、

やがてピクリとも動かなくなった。

「……………死んだのか？」

「……………さあな……」

二人は動かなくなったドーパントを見つめ、

変身を解除する。

翔太郎はソフト帽を深く被り、

「とじろでせ……」

「…なんだ？」

「お前…ライダーキックって叫ぶのやめろよ」

「……………ダメか？」

「つたりめえーだろーが！！」

周囲に翔太郎の叫び声が響いた。

「なんでダメなんだよ！？」

「俺が考えたんだぞ！？使いたけりゃ申請しろ馬鹿野郎！！」

「同じライダーなんだからいいだろ！？」

「ダメだ！！」

…もしかして『お前の罪を数えろ！』まで使う気か！？」

「それもダメ！？」

「あれはおやつさんから受け継いだ台詞だからもつとダメだ！！」

まるで子供のような言い争いを繰り返す二人。

凄惨な事件の現場でやるのだからなんともかんとも…

「だいたい申請って誰にするんだよ！！」

「東京特許許可局とかだろーが！」

……つてあれ……？」

口喧嘩の最中、翔太郎は動かないドーパントの方に目をやる。

「……急にどうした？」

その時

ビシッ

「！？　なんだ？」

倒れているドーパントの腹部に亀裂が入った。

ビシッ　　ピシピシ　　ヒシヒシッ

そして亀裂は全身にまで広がった。

「なっ……………なんなんだ!？」

「……………これは……………」

バサアッ

不意に、ドーパントは巨大な灰の塊となってしまうた。

「……………灰になったのか？」

翔太郎は駆け寄り、まじまじと眺める。

「どつちやらそつちらしい……」

これで二度目……か」

翔太郎の発言に間髪入れず竜はこう言った。

「違う。三度目だ」

「??? なんだって?」

「今回と年末、そして五年前にも……」

「五年前……?」

二人はこの凄惨な事件を引き起こした犯人の成れの果てを、

ただただ見つめることしかできなかった。

P M 8 : 2 9 - - -
左探偵事務所 - - -

昼の多くの被害者がでた事件で警察が対応に追われる中、

事務所の真ん中にホワイトボード、その前に翔太郎が腕組みをして立っている。

そして翔太郎の目の前には正座をしている亜樹子。

ホワイトボードには大きく

『反 省 会』と書かれている。

「それでは反省会を始めます。」

亜樹子、依頼の報告「

「はい……。とりあえずは天道さんの誤解ということ、最後はめでたしめでたしって感じですよ……」

「まあ結果は良いでしょう。」

ただ問題は……

お前の仕事のぞんざいさだ!！」

翔太郎はポケットから一枚の紙を取り出して亜樹子に見せつけた。

「これ何かわかるか？」

紙には「天」と書かれている。

「今回の依頼人からの手紙だ」

紙をぐしゃぐしゃに丸めてポケットに突っ込み

「」の手紙によると

「お前何も探偵らしいことしてないだろ？」

「……………はい……………」

「お前……………チャンスを与えりゃ、仕事サボりやがって……………」

依頼人からのクレームを受けて、翔太郎が下した決定は……………

「二度とお前に仕事は任せん！！」

「一生助手だ馬鹿野郎！！」

「ええ！？？ちよっとそれは……………」

食い下がる亜樹子。

そんな亜樹子に翔太郎はこう言った。

「あとコーヒーが不味い!!」

二度といれるな!!」

「そ………そんなああ………!!」

閑静な住宅街に響く亜樹子の叫び。

二度と彼女がコーヒーと依頼を任されることはなかった。たそうな………

超過保護なOさん/灰と化して(後書き)

更新遅くなつてすみません!!

そしてその割には詰まっていな話の内容。

重ね重ねすみません……

次回はもっとマシな話を書きたいと思います…

始まりのZノドーパーントじゃない(前書き)

今回はがっつり話にあいつらが絡んできます。

始まりのZノドーパントじゃない

2月25日 - - -

「ZZZZZZZ……」

AM 5 : 1 1 - - -

辺りもまだ薄暗い早朝。

左探偵事務所 - - -

翔太郎は机に新聞を広げたまま、突っ伏して寝ている。

広げられている新聞には先週の銀杏町の事件についてだ。

そして五年前の事件の記事、年末の事件の記事についての新聞も広げられている。

これらの事件の関連性を調べている途中だったのだろう。

疲れているのか、翔太郎は死んだように眠っている。

「きゃああああああ！！」

突然の悲鳴。

翔太郎は悲鳴で飛び起きた。

「はっ？……なんだ今の悲鳴は？」

半開きの目を擦りながら周囲を見回す。

「ど……ど……ドーンとおお～～～～！？」

再び悲鳴がした。

「今のは……亜樹子！？」

間違いなく亜樹子の声だった。

慌ててロストドライバーを装着し、部屋を飛び出した。

悲鳴は一階のガレージの隣の亜樹子の部屋あたりから聞こえた。

「くそ！無事でいてくれよ！！」

階段を飛び降り、ガレージへの扉を開けた。

そこにいたのは

「待ってくれ！違うんだ！俺はドーパントじゃない！！」

顔はなんだか鶏（？）や鷺（？）、鷹（？）のような口に緑色の目、

そして黒いローブ（？）のようなものを纏っている。

「！？　なんだお前は！？」

翔太郎の声に亜樹子、奇妙なそいつは振り向いた。

「翔太郎君！！」

亜樹子は翔太郎の後ろに回り

「部屋をノックされて扉開けたらドーパントが！」

「だから！ドーパントじゃないってば！…！」

奇妙なそいつは全身で自分が無害だとアピールしている。

「うるせえ！どつ見てもドーパントだろ！…！」

『ジョーカー！…！』

「変身！…！」

光に包まれてジョーカーへと変身。

「ええ！？君も変身できるのか！…？」

翔太郎の変身をみてうるたえる奇妙な物体。

ジョーカーは質問に答えることなくメモリを右側のスロットに挿し込んだ。

『ジョーカー!!マキシマムドライブ!!!!!!』

「ライダーパンチ!!」

「ええ!?いや、ちょっと!?ま………待ってくれ!!」

「つつるせえええ!!」

ドッカアアーン!

- ? 月 - ? 日 - - -

? ? : ? ? ? - -

謎の砂漠 - - -

砂漠。

見渡す限り広がる砂漠。

空は虹色のような奇妙な色をしている。

そんな空の下、

砂漠の上を走る…

厳密には砂漠の上のレールのようなものの上を走る白い電車。

そんな電車には奇妙な乗客達が乗っていた。

「……………それで？アイツはどこ行っただ？」

全身が真っ赤の鬼のような乗客は一人の青年に訊ねた。

「時間も場所もだいたいわかってる。

ただ……………」

「ただ……………何？」

同じように電車に乗っている幸の薄そうな少年も訊ねた。

すると

ガシャアーン

「いったあー!!」

「何すんのキンちゃん!？」

全身紫色でヘッドホンをつけた変な物体と、

全身真っ青の亀のようなものが通路を転がってきた。

「キンちゃん」と呼ばれた金色の体格のいい熊のようなそれは首をグキグキとひねり、

「お前らやろ!俺のちり紙盗ったんは!!」

三人(?)はギャーギャーはしゃいでいる。

「うるせえぞおまえら!!」

あまりにも騒がし過ぎて鬼が怒った。

「こっちは大事な話してんだぞ！？それをおまえらときたら…」

鬼が言いかけたとき

ゴスンッ

「あぶっ」

突然現れた小さな女の子に殴り倒された鬼。

そして三人(?)を次々と殴り倒していく。

「あなたたちうるさい！」

女の子は両腕を組みふんぞり返っている。

「姫！今日も一段と麗しいぞ！！」

お次は真っ白な鳥のような物体が現れた。

が

ドスッ

「うっっ」
「…」

女の子は容赦なく拳を鳥のような物体に叩き込んだ。

「あんたもつるさい！」

そんな騒ぎを見ながら青年は話を続けた。

「今回はイマジンは違うものが過去を荒らしているらしい」

「イメージン…とは違うもの？」

「ああ。ドーパントって言うらしいんだが…」

「興味深いですねえ…」

続いて、杖をつきながら老紳士が姿を見せる。

「そのドーパントとやらを調べていた、ということですか？桜井くん」

桜井と呼ばれた青年は黙って頷き

「その途中でアイツを落つことしたんだ」

桜井は肩を落として言った。

「オーナー、どうしたら…」

老紳士、オーナーは杖をくるくる回して

「とりあえず、桜井くんには引き続きドーパントの調査をお願いしましょう。」

そして我々で桜井くんの落とした彼を探しましょう…。」

「わかりました。それじゃ早速…」

電車を降りようとする桜井を少年が止めた。

「待って！まだ落とした場所と時間聞いてないよ？」

「ああ！忘れるところだった。」

時間は2010年2月25日

場所は風都、そこにデネブはいるはずだ」

2月25日 - - -

AM10:05 - - -

左探偵事務所 - - -

「……それじゃあれか？お前は迷子なのか？」

えーと……」

「デネブです！」

早朝に現れた者はデネブと名乗った。

デネブ曰く、イマジンと言う怪人らしい。

「で、一体誰とはぐれたんだ？」

「それは俺の契約者の桜井侑斗という青年で……」

「何ではぐれたの？」

亜樹子はコーヒーを運びながら訊ねた。

「亜樹子お！コーヒーはダメってこないだ言ったろっが！！」

「ひい！ごめんなさい！！」

翔太郎に怒られてコーヒーを片づける亜樹子。

「で？何ではくれたんだ？」

「実は……俺達は時の列車と言うものに乗ってイマジン退治をしているんだ」

「お前もイマジンだろーが」

デネブは首を横に振り、

「あ、いや……俺達が退治するのは時を荒らす悪いイマジンだけだ」

「時を荒らす？」

「そつだ。イマジンというのは現代から過去に飛び、過去で暴れて現代に影響を及ぼすんだ」

「影響つてどんな？」

「過去で何か消滅すると現代ではなかったことになるんだ」

「ああ……わけわかんね」

さすがの翔太郎もよく呑み込めないようだ。

「とにかく、過去で暴れるイマジンを倒すのが俺達の使命なんだが……」

そこまで言ってデネブは肩を落とした。

「今度の事件を調べてたら侑斗とはぐれてしまった……」

ハア……と溜め息をついたデネブ。

すると亜樹子が

「ねえねえ！イマジンってどつやって過去に行くの！？」

「イマジンは契約を無理矢理完了させて契約者を媒介して過去に行くんだ」

「じゃあデネブは過去に行く時はどつするの？」

「時の列車を使うんだ」

「「時の列車？」」

二人は声を揃えて聞き返した。

「そう。俺と侑斗は時を越える列車、ゼロライナーに乗って過去にいくんだ」

「ああ、あの黒いあれか？」

「そう！黒い牛みたいな列車なんだ！」

デネブは翔太郎がようやくわかってくれたことに大喜び。

「ところでさっきから」

「ちょっと待って!!」

いきなり翔太郎の話を亜樹子が遮った。

「なんだよ亜樹子!？」

「今の列車の話、翔太郎君なんでわかったの？」

先ほどのゼロライナーの話。

その時確かにデネブが説明する前に翔太郎は特徴を当てていた。

「そういえば……。」

左、どうしてわかったんだ？」

「あれ？そういやなんでだ……？」

頭が混乱する翔太郎。

「まあ、いいや。そんなこと」

「いいんかい!!」

翔太郎の後ろで亜樹子はずっとこけた。

そんな亜樹子を見殺しにして翔太郎はラジオの電源を入れる。

【……のガドルさんからのお便りです！

先日、うちの娘が金色の蝙蝠と羽の生えた金色のタツノオトシゴを捕まえてきました！】

「さっきから気になってたんだが……」

【これペットショップで売ったら高いですかね!?!】

「今度の事件ってなんだ?」

さっきからデネブが何度も言っている今度の事件。

それが翔太郎は引つ掛かっていた。

「実は、今度の事件はイマジンじゃなくてドーパントと言う怪人の
仕業らしい」

「ドーパントだと？」

「知ってるのか!？」

「そりゃそつよ!?!」

亜樹子はふんぞり返って

「私たちはドーパント退治専門の探偵よ!？」

翔太郎は亜樹子に冷たい視線を送る。

「専門じゃねーし、お前探偵じゃねーだろ……」

「あつ……そういえばそうでした……」

頭を擦りながら引っ込む亜樹子。

翔太郎は咳払いをして

「あー……とりあえず、事件について教えてくれないか？」

AM 11:02 - - -
品川商事本社ビル - - -

「ごつちです刃野さん」

竜が手招きしている。

「おう。これか……」

刃野、竜の二人は30階立てのビルの11階にいた。

今回、二人が担当している事件は

ビルの12〜26階にかけて直径20mの大穴が開けられていると
いう不可思議な事件である。

刃野は調査をしている鑑識の一人を捕まえ、

「どつやったらこんな大穴が開くんだ？」

「穴はおそらく熱で開いたものかと…」

「熱？」

「はい。ほらあそこ」

鑑識が指差す方を見た。

「穴の淵のところかどろどろに溶けてるでしょ？」

何か超高温の熱線で開いたとしか考えられないですね」

刃野は腕を組んで訝しげな顔をする。

「何かの事故とかじゃないのか？」

「事故でも人為的でもこんなことは不可能ですよ」

「…となると、やはりドーパントですかね……」

竜はポケットからメモ帳を取り出して、

「被害者は？」

「被害者は会社が休みということなので0ですね」

「監視カメラに怪しい人物は？」

「それが……カメラには何も映ってなかったんですよ。」

まるで透明人間ですね……」

「……透明人間？」

以前誰かが言ってた気が……」

何か思い出しそうな竜だったが、はっきりと思い出せない。

「刃野さん、今日真倉さんは……？」

「ん？真倉か？」

あいつなら別件だ」

AM 11:10 - - -
銀杏町四丁目 - - -

「おいこら探偵！なんでここにいるんだよ？」

鋭い剣幕で睨んでくるのは刑事・真倉。

「なんでってこれ見たからだ」

翔太郎は今朝の新聞を取り出して広げた。

「見るよこの記事。建物消失事件だよ。」

事件が起きたなら現場に行くのは当然だろ？」

「それは警察の仕事？」

二人は顔を近づけメンチをきりあう。

「ハイハイ、喧嘩おしまい!!」

そんな二人の間に亜樹子が割って入った。

今日は刃野がいないため、亜樹子しか喧嘩を止められる人がいない。

「もう…顔合わせたらすぐ喧嘩なんだから……」

「いや〜大変だなあ。探偵の助手も」

ひよっこり顔を出すデネブ。

顔を出した瞬間、真倉と目が合った。

「探偵………こいつはなんだ？」

デネブはペコリと頭を下げた

「はじめまして！デネブです……！」

デネブは懐から沢山の飴を取り出した。

「お近づきのしるしにどうぞ……！」

真倉は何も言わずに手錠を取り出した。

「うん。ちょっと署に行こうか………」

「だあああ！待て待てマッキー！！そいつは依頼人だからやめろ！」

「馬鹿野郎！よく見る探偵！こいつはドーパントだ！！」

「違う！！惜しいけど違う！！」

怪人の検拳を巡って争う二人。二人の無駄な争いはほんの数分でおさまった。

「で？なんで建物は消えたんだマッキー」

「俺がわかるか！

なんでも突然に透けて消えたらしい……」

「突然ね……」

翔太郎はデネブの方を見る。

「なあ。これはイマジンとどう違うんだ？」

「イマジンの場合は何かが消えたらなかったことになるんだが、

今回は誰もが覚えてるんだ」

それだけ聞いて翔太郎は黙ってしまった。

腕組みをして何か考えているようだ。

「マツキー。他に消失事件は何件あった？」

「ん？あとは……二件くらいだな……」

「よしわかった。情報屋のそこ行こう！」

翔太郎はソフト帽を被り直して歩きだす。

「ねえ、情報屋ってどっちの方の？」

亜樹子は訊ねたが翔太郎が答えることはなかった。

AM 11:39 - - -

喫茶店『ウインドガーデン』 - - -

翔太郎たちが店に入ると、

一番奥の席に見覚えのある髭を生やした男が座っていた。

「いたいた。おーいウォッチャマン！」

翔太郎が呼ぶとウォッチャマン、

そして向かいの席に座るサンタクロースの格好の男がこちらを見た。

「「翔ちゃん！」」

「あり？サンタちゃんも一緒か？」

翔太郎は近くの席から椅子を一つ取って座る。

「実はさ……」

サンタちゃん、またバイトクビになったんだよ……」

「何！？またかサンタちゃん！！」

虚ろな目で頷くサンタちゃん。

すると亜樹子が翔太郎に耳打ちしてきた。

「ちょっと！翔太郎君！」

「この超季節はずれなサンタクロース誰よ？」

「ん？会うのは初めてじゃないだろ？」

「こいつはサンタちゃん。手短かに説明するとフリーターだ」

翔太郎に言われてサンタちゃんの顔をよく見る亜樹子。

「言われてみれば……なんか久々に見た気が……」

「まあ、いいや。そんなどーでもいいことは。」

ウォッチャマン、最近の建物消失事件について何か情報ないか？」

「やっぱりその事件の情報だね……」

そう言うと、ウォッチャマンは持っていたカバンから一枚の写真を取り出した。

写真には一人の男が写っている。

「男の名前は星野一夫。」

最近この辺りでよくうろつろしてて、事件の現場の周辺での目撃情報が多いね」

「さすがウォッチャマン！」

ほぼ犯人かもしれない奴の顔も名前もわかってるなんて!!」

「自分で捕まえればいいのに!!」

感動の声をあげる亜樹子と翔太郎。

デネブは何も言葉を発することもなく、ただただ見守っている。

そんなデネブがふと外をみると、

「あれ？」

左、ちょっとあれ!」

「あ?どうしたデネブ」

デネブは店の外にいる男を指差した。

「ほら、あの男!」

「ん？なんか見たことあるな……」

「いやいや！写真を見て！」

「写真？」

翔太郎はさっきの写真を見る。

そしてもう一度外の男を見た。

「……………顔が似てる」

「そうじゃなくて、アイツが写真の男だ！！」

「あ！！アイツかああ！！」

翔太郎は叫ぶと店を飛び出した。

「えっ、ちよつと翔太郎君！」

亜樹子も飛び出した。

残ったデネブは

「えーと、どうもありがとうー!!」

深々と頭を下げて店を出ていった。

星野を尾行して20分……

波樹町二丁目……

星野を尾行したのはいいがまだ犯人と決まったわけではない。

故に思いきって動くことができない。

「なんて齒痒いんだ畜生……」

悪態をつく翔太郎。

「左。そんなに焦っては駄目だ。もっと慎重に……」

何故かデネブに諭されてしまった。

変なやり取りをしていると星野はあるビルの前で足を止めた。

じっとビルを見ている。

「あの人が何してるんだろ………?」

星野はじっとビルを見たまま、ポケットからまるで
USBメモリのようなものを取り出した。

「………なんでUSBメモリなんか………?」

初めて見るデネブにはそれが何なのかわからなかった。

「翔太郎君、あれ………」

「ああ。ビンゴだ！」

翔太郎は走りだし、星野の前に立った。

「そこまでだ星野！！」

突然目の前に現れた男に星野は驚いた。

「な、なんだお前？」

「どうして俺の名前を……」

「その手のガイアメモリ……」

「お前が一連の建物消失事件の犯人だな！？」

「さらに星野は驚いたが、落ち着き払って」

「……何故お前が俺とメモリのことを知っているのかは知らんが……」

星野は靴を脱ぎ、靴下を捲る。

「とりあえず死んでもらえばどつでもよくなる……」

『パスト……!』

始まりのZノドーパントじゃない(後書き)

今回、電王のキャラがすごく話に絡んできました。

「なんでだよ!!!」

と思った方も多いはず。

しかし、そんなクレームは次回にとっておいて下さい。

次回予告!!!

アイツの変身でクレームの嵐!!!

始まりのZノ幼き日に憧れた背中（前書き）

今回の依頼

依頼人

デネブ（イマジン）

依頼内容

契約者の桜井侑斗を探して欲しい

メモ

デネブがドーパントに見えたためとりあえず攻撃。

後に和解。この世にはいろんな生き物があるんだなあと感じました。

翔太郎

始まりのZノ幼き日に憧れた背中

2月25日 - - -

『パスト!!』

P M O : 1 1 - - -

「おいおい…」

前置きとかないのか？」

波樹町二丁目 - - -

悪態をつく翔太郎の目の前で

星野は頭部に時計のようなモニュメントのついたパスト・ドーナツトへ変身した。

「俺の正体を知ってしまったからには死んでもらうぞ?」

ゆっくりと近づいてくるパスト・ドーパント。

「ええ〜!？」

あんな怪人がドーパント!？」

なんとも言えない風貌にがっかりするデネブ。

「うーん……同じ怪人にそう言われちゃあ、フォローのしようがないわね……」

言いたい放題の二人。

ただ一人、翔太郎の反応は二人と異なっていた。

「お前……」

「なんだ？命乞いでもしたくなっただか？」

「どっかで見た気が……」

「……俺のこの姿をか？」

「あれ？いつ見たっけ……」

「はっきり言うが、俺とお前は初対面だ……」

叫びながら翔太郎めがけて突っ込んでくる。

「おっと！」

それを前転して避け、ロストドライバーを装着する。

『ジョーカー!!』

「変身……」

起き上がりながらバツクルを展開させて仮面ライダージョーカーに変身した。

「……！」

「お前仮面ライダーだったのか!？」

ジョーカーはじつとパスト・ドーパントの顔を見つめていた。

「やっぱり初対面じゃない気が……」

「だから初対面だって言ってるんだろ!!」

今度は殴りかかってきたパスト・ドーパント。

しかしモーションが大きすぎ、ジョーカーにあっさり避けられてしまっ
た。

「くそ！ ちょこまかと避けやがって!!」

「なんかすごい昔に見た気もするなあ……」

「……」

何度も攻撃を繰り返すが掠りもしない。

「この！なんで当たらねえんだ！？」

「まあいいか……」

後で思いたそう」

そう言うとパスト・ドーパントの両腕をがっちり掴んだ。

「っな………！！」

「…それじゃこっちの番な」

ガンッ

ジョーカーの左の拳がパスト・ドーパントの顔面に放たれた。

「あがつ！」

強烈な一撃にのけ反り、がら空きになったボディに膝蹴りを打ち込んだ。

「ぐっ……」

「おらっ！」

一方的に攻め続けるジョーカー。

パスト・ドーパントは文字通り手も足も出ていない。

「いつけー！ー！ボコボコにしちやえー！ー！」

少し離れたところから亜樹子が両手をブンブン振って応援している。

「いやあ……」

左は強いなあ……」

「でしょ！？翔太郎君ってすごい強いんだから！！」

「侑斗並みに強いな……」

「契約者の人？そんなに強いのか？」

「侑斗は少し荒々しいけどとっても強いんだ！」

侑斗の話をしてたらなんだか左の戦い方が侑斗に似てる気がしてきた……」

ドザアアア

地面を転がっていったのはパスト・ドーパント。

「おいおい……もうへばったのか？」

ジョーカーは呆れながらメモリを抜いた。

「……嘗めるなよ……」

「あ？なんだって？」

パスト・ドーパントはよろよろと立ち上がる。

「俺の本当の力をみせてやる……」

途端に、パスト・ドーパントの全身が輝きだした。

「な…なんだ？」

「翔太郎君！！後ろ！！」

亜樹子が大声で叫んでいる。

その時

「後ろがから空きだな…」

「！？」

背後から聞こえた声に驚き振り向き様に裏拳を放った。

が、その拳は受け止められた。

背後にいたのはパスト・ドーパント。

「!？」

「一体どうなって…」

「オラアアッ!!」

パスト・ドーパントの強烈なボディブローが炸裂した。

あまりの衝撃でジョーカーは後退りする。

同時に正面にいたはずのパスト・ドーパントを確認する。

もう一体のパスト・ドーパントはまだ輝きを放っている。

が、突然輝きを放っていたパスト・ドーパントが消滅した。

「なんだこいつは……」

「フハハハハハ……」

再び輝きだすパスト・ドーパント。

「驚いたか？」

またしても背後から声がした。

今度は素早く飛び退く。

見ると、二人のパスト・ドーパントがいた。

うち一方は輝いている。

「どっとなってんだこいつは……」

「左い!!」

デネブが大声をあげた。

「もしそのドーパントが事件の犯人ならきつと過去に行けるはずだ
!」

過去……

「……そうだ。」

あいつのメモリは確かに『パスト』って……。

てことは……」

ジョーカーが思考する間にパスト・ドーパントは輝きだした。

「させるか!!」

ジョーカーは走り、そのまま殴り飛ばした。

「おぶあ!!」

パスト・ドーパントは再び地面を転がる。

「お前のメモリはパスト…」

つまりは過去。お前の能力は過去へのタイムスリップだ。

だから一つの時間にお前が二人いるなんてことになるんだろ?」

「ちっ!」

地に這いつくばったままパスト・ドーパントは輝きだした。

しかし素早くジョーカーはパンチを叩きこんだ。

「ぐあっ!!」

「お前の体が発光するのはタイムスリップの合図ってわけだ。

これだけわかりや仕留めるのは造作もねえ!!」

「ぐ……」

「このままじゃ……」

パスト・ドーパントは這いつくばった状態から前転、

そして走りだしてジョーカーと距離をとった。

「ハア…ハア……ハッ…くそお!!」

そのまま背を向けて逃げ出した。

「あっ！逃げんなコラ！！」

ジョーカーも慌ててその後を追いかける。

「ハツ…ハツ…ハツ……」

懸命に逃げ、パスト・ドーパントは建物の角を曲がる。

「逃げようたってそうはいかねえ！」

ジョーカーも後を追って角を曲がった。が、

「……あれ？いないぞ……」

パスト・ドーパントの姿がない。

辺りを見回すも、どこにもいない。

「ああ！！逃げられた！！」

悔しさのあまり壁に拳を打ちつける。

ガツクリと肩を落として変身を解除した。

「おーい！翔太郎君！！」

声のした方を見ると、亜樹子とテネブが手を振りながらこちらに向かっていてる。

「左、ドーパントは！？」

「…スマン。逃げられた」

「に、に、逃げられたあ!？」

両手をあわせて頭を下げる翔太郎。

「せっかくデネブの契約者見つかると思ったのに…」

「手がかりも無しで本当にスマン……」

ただ……」

「ただ?ただどうしたの?」

「俺多分あのドーパント見たことある」

「え!?!」

二人は同時に翔太郎を見た。

「見たことあるっていつ!?!」

「多分結構前に……」

「ドーパントが過去に来たのを見たのか?」

「それなんだが……そんな風に記憶に残るもんなのか?」

「いやドーパントはちょっと……」

「そうか」

翔太郎はソフト帽を被り直した。

「とりあえず、星野の行方を探さないとな……」

P M 1 0 : 3 6 - - -

園咲家『来人の部屋』 - - -

ドンドンッ

「来人！いるんでしょ！？」

部屋の中の来人は本を閉じて扉を開けに向かった。

「今開けるよ」

扉を開けると若菜が立っていた。

「若菜姉さん？どうしたんだい？」

「無いのよ!!」

突然若菜が大声を出し、来人は驚いて耳をふさいだ。

「……っ。」

無いのよって何が？」

「ネックレス!!」

「ネックレス？」

「クリスマスにサンタクロースからもらったネックレスが無いのよ
!！」

そういえば若菜は琉兵衛…いや、サンタクロースからプレゼントを
貰っていた。

そうか、ネックレスを貰っていたのか…

「いや…僕は何も知らないけど」

「それじゃ見つけたら教えてよ!？」

それだけ言っただけで若菜は勢いよく扉を閉めた。

「……まったく」

騒がしい姉だなあ……」

閉じた本を開く。

その時

ドンドン

またしても扉を叩く音がした。

「やれやれ……またか……」

来人は扉を開けた。

「姉さんまだ何か……」

「ってあれ？父さんじゃないか」

扉の向こうに立っていたのは若菜ではなく琉兵衛だった。

「来人！ミツクを知らんか!？」

「ミック？」

ミックというのは、この園咲家で飼われている猫の名前である。

この名前は園咲家家族会議にて来人が提案、

そして多数決の結果、圧倒的な支持を得てミックに決まったのだ。

「ミックはこっちには来てないよ？」

「そうか…それじゃ見つけたら教えてくれ！」

琉兵衛も勢いよく扉を閉めた。

「…まったく、親子だなあ」

もう一度本を開いた。

すると

「ミャー」

「……ん？」

来人は辺りを見回した。

何もいない。

ズッシブのトをのぞきこむ。

そこには一匹の猫がねっころがっていた。

「…ミック、そこにいたのか…」

ゆっくりにミックがベッドの下から出てきた。

「ミーーー」

「ミーーじゃないよ。たった今父さんが帰ったところなのに…」

おや？
「..?」

よく見るとミックの首にネックレスのようなものがかかっている。

「ミック、これはまさか…」

「ミャーーー」

ミックは可愛らしく首を傾げてみせる。

「まいったな……君が犯人だったとは……」

来人はミックを抱き上げてベッドに腰かけた。

「まあ、黙っておくから返しておいで」

「ミャー……」

愛くるしい表情をするミック。

ミックがネックレスを返しに行くことはなかった。

2月24日 . . .
PM 11:50 . . .
風都タワー周辺 . . .

人気のない風都タワー。

そこに大小様々な4、5人の人影。

「結局!!」

その中の一人の少年が大声を出した。

「どこにもいねーじゃねーか!!」

「ちょっと!先輩声が大きいつて!!」

「っていつかいつまで良太郎の中にいるのよバカ桃!!」

全身真っ青な怪人と小さな女の子が少年の口を塞ぐ。

「それにしても何故私がこんなことを……」

真っ白い怪人は夜空を見上げて嘆いた。

口を押さえられた良太郎と呼ばれた少年は怪人と女の子を振り払い、

「あーもう！！だからなんであいついないんだよ！？」

「確かに……」

「侑斗の話じゃこの時間のはずなのに……」

「おい！！」

体の大きい金色の熊のような怪人が叫んだ。

「大変や桃の字！」

熊怪人はデジタル時計を見せた。

「なんだ熊公！？ただの時計じゃねーか！！」

「あほう！よく見てみい！！」

周りにいた四人は熊怪人の持つ時計を見た。

2月24日 - - -

PM 11:57 - - -

「これがどじつなのよっ」

「何寝ぼけてんねん！…！デネブがおるのは2月25日やろ！…」

「「「あ!」「」」

一日早い時間に来てしまっていたのだ。

「おい!! デンライナー運転したの誰だ!？」

「今回は確か……」

「あの子供ではなかったか？」

デンライナー食堂車……

「わーい\ (^o^) /!!」

一人の怪人が子供のようにシャボン玉で遊んでいた。

この怪人が今回の運転手。

風都タワー……

「あのクソガキがああ!!」

「まあ、一日違ったらいるはずないよね……」

一同呆れつつデンライナーに向かっていく。

ただ一人、この男だけは怒りでいっぱいだった。

「クソガキ!!ぶっ飛ばしてやるからなあ!!」

2月26日……

AM 11:20……

風都警察署 . . .

探偵、左翔太郎は真倉のもとを訪れていた。

「はあ！？建物消失事件の共通点を教えろだと！？」

「頼む！！教えてくれ！」

翔太郎は顔の前で両手を合わせる。

しかし答えは

「駄目だ！！警察が情報を洩らすなんてナンセンスだ！！」

そんなことを言われても翔太郎は引き下がれない。

「いいじゃねえか少しくらい！」

「少しでも駄目なもんは駄目!!」

「そんなに譲らないってことは共通点あるんだろ!?!」

「うるさいうるさい!!」

探偵なら自分で調べろ!!」

やはり警察というのはなかなか手強い。

そこで翔太郎は、

「……そういえば竜の時の依頼、報酬払ってないよな?」

その一言で真倉の動きが止まった。

「……なんですと？」

「だからさあ、報酬払ってないよな？」

「それがなにか？」

翔太郎は不敵に笑った。

「報酬払ってないなら教えろよ」

「いやいやいやいや！」

それは駄目だろ!？」

「まあ教えてくれないなら竜にマッキーが土下座したっていうことをお話するんですけどねえ」(笑)

なかなか悪い顔で笑う翔太郎。

「マツキーの土下座はなかなか見れないよなあ…

しかもマツキーの土下座の理由が竜のためって知ったら竜びっくりするだろっな…」

チラツと真倉を見ると、真倉は顔を真っ赤にしている。

「……………」

「ん？」

「わかった……言います」

「あっさり折れるなよ……」

「じゃあ言っちなよ…!?!?」

AM 11:42 . . .
風都警察署玄関 . . .

「あつ、左が出てきたぞ」

翔太郎が警察署を出ると待っていた亜樹子とデネブが物陰から出てきた。

「お前らそこで何を……」

「そんなことより、情報もらったの!？」

翔太郎はソフト帽を深く被って

「ああ。これで星野を追い詰めることが出来るぜ。

行くぞ二人とも!！」

P M O : 4 9 - - -
佐川電器銀杏支店 - - -

少し規模が大きめの電器店。

その入り口前にフードを被った男が立っていた。

「次はここか……」

男はポケットからPと書かれたガイアメモリを取り出し、それを高く掲げた。

「ちよつと待ったあゝ!!」

声に驚き男は掲げた手を止めて辺りを見る。

すると後ろに肩で息をしている男女と奇妙な物体がいた。

「ハア…ハツ……やっと見つけたぞ星野…」

「お前は昨日の仮面ライダー…」

「ちよつと……疲れたんですけど…」

「左…休んでいいかな？」

真ん中のソフト帽の男を残し、

両端の二人は街路樹にもたれ掛かって座り込んでしまった。

「
.....
」

まあいいや。

とりあえず大人しくガイアメモリを棄てる」

「そんなことより、何で俺がここに来るとわかった？」

そう言われてソフト帽の男、翔太郎は深く息を吸って説明を始める。

「えーと、まず……」

お前が消した建物が全てこれだったからだ」

翔太郎は電器店の看板を指差す。

「聞くところによると、お前は最近この電器店をクビになっただらしないな？」

看板に向けていた指を星野に向けた。

「早い話が復讐なんだろう？この電器店に対する……」

「クソッ！」

翔太郎が話を終える前に星野は逃走を始めたのだ。

「あ！逃げたあ〜！？」

「追いかけなきゃ！！！」

「わかってるよー!!」

三人は星野を追って走り出した。

「ハッ…ハッ…ハッ…ハッ…」

「クソッ!!あいつ逃げてばっかじゃねーか!!」

「そういう私たちは…ハア…追いかけてばっかじゃん…」

懸命に逃げる星野と懸命に追う三人。

「ゲッホ…左頑張って!!」

デネブが走りながら翔太郎を激励した途端に星野が足を止めた。

「あ！止まった！！」

それを見て三人も足を止める。

「ハア……どうした？……ハッ……ようやく観念したか？」

翔太郎は星野に歩み寄る。

「なあ、仮面ライダーよ」

「あ？何か用か？」

「左やら……翔太郎君やらと呼ばれてるが、

『左翔太郎』というのがお前の名前か？」

「それがなんだ？」

すると星野が不敵な笑みを浮かべた。

「ハハハハ……」

そうかそうか……

左翔太郎というのか……

お前、この街に住んでどれくらいだ？」

「何言ってるんだ？俺は生まれも育ちも風都だ！」

星野は口角を上げて大笑いしだした。

「なんだお前？何が可笑しいんだ？」

『パスト……！』

「ハハハハハアツ!!」

大笑いしながら星野はパスト・ドーパントへ変身。

そして全身が光に包まれた。

「!!」

しまった!!まずいぞ左!!」

デネブが叫ぶ。

「わかってる!!」

『ジョーカー!!』

ジョーカーメモリを起動しドライバーに挿して仮面ライダージョーカーに変身する。

「どっからでもかかって来い!!」

余裕たっぷりに構えるジョーカー。

「違う!!そうじゃない!!」

早くドーパントを止めるんだ!!」

デネブが再び大声をあげた。しかし、

「もう遅い!!」

パスト・ドーパントは光に包まれ、そのまま姿を消した。

「あれ？ドーパント……」

攻撃してこないね？」

亜樹子は首を傾げてデネブの方を見た。

デネブは頭を抱えている。

「おい、どうしたデネブ？」

「違っんだ左……」

あいつは攻撃するために過去に行ったんじゃない……」

「……？」

「……？」

「あのドーパントは……」

おそらく過去の……

何年も前の左を殺しに行ったんだ……」

「!?!」

「なんだと!?!」

「さっき左に質問してたのは過去の左を探すために……」

「待て待て待て待て!!」

翔太郎は変身を慌てて解除し、デネブの話を遮る。

「それじゃあれか？」

俺はもうすぐ消えるのか?」

「どれくらい時間がかかるかはわからない……」

でもこのままじゃ……」

「なんとか………なんとかなんねーのか!？」

「なんとかしたいけど侑斗がいないと……」

「………マジかよ………」

翔太郎は膝から崩れ落ちた。

「こんな時に………侑斗がいてくれたら………」

「ねえ……………」

デネブと翔太郎は亜樹子の方を見た。

亜樹子は何かを指差している。

「これ何かな……………」

「これって？」

デネブが確認する。

亜樹子が指差していたのは

「……………線路？」

まるでレールのようなものが地面に敷き詰められている。

「……これは……もしかして……」

その時

ゴオオオオオッ

「iiiiiiiiiiiiiiii!?!」

三人の前に巨大な白い物体が走ってくる。

「デンライナー!!」

デネブが呼んだ白いデンライナーは辺りを一周し、

三人の前で停止した。

「なにこれ……」

私聞いてない……」

「デンライナーが来たということは……」

するとデンライナーの扉が開き、一人の少年が降りてきた。

「やっと見つけた!! 探したんだよデネブ!!」

「野上!!」

デネブは感激し、野上に抱きついた。

「あれ？私あの男の子どっかで……」

懸命に何かを思い出そうとするが何も思い出せない亜樹子。

「侑斗がね、デネブを探すように言ってきたんだよ」

野上の一言でデネブは我に帰った。

「そつだ野上！！大変なんだドーパントが」

「大丈夫だよ」

デネブが言い切る前に野上は微笑みながら

「もう侑斗がドーパントのところに向かったから……」

「え？本当に？」

素早く反応した翔太郎。

彼に一筋の希望が見えた。

1998年5月17日 . . .
PM4:28 . . .
風花町一丁目 . . .

とある廃工場。

一人の少年が悲鳴をあげながら走っている。

「うわああああああ!!」

懸命に走る少年。すると

ガッ

「あっ!!」

少年は躓き、顔からずっこけた。

「あつう……」

少年は後ろを見る。

「ハハハ……鬼ごっこはもう終わりかな!？」

少年を追いかけているのは時計のような頭の怪人、

パスト・ドーパント。

「こつち来んなあー!」

少年は小石を拾い、それをドーパントに投げつけた。

しかしドーパントにそんな攻撃が通じることはない。

「過去に来たら、逃げる側と追いかける側が逆転するなんてなあ……」

…」

不気味な笑い声を出すパスト・ドーパントを恐れ、

足を引きずりながら走りだす少年。

「そんな足で逃げられると思ったか!？」

パスト・ドーパントは跳躍し、少年の前に立ちはだかった。

「あ……………」

「それじゃ……………」

楽しい鬼ごっこをありがとう、仮面ライダー君…」

少年に手をかけようとしたその時だった。

ブオオオオオオ

廃工場内に汽笛のような音が響いた。

「……………？何の音だ？」

パスト・ドーパントが辺りを見回そうとした時、

黒い電車が少年とパスト・ドーパントの間に割って入った。

「！？　なんだこいつは！？」

驚くパスト・ドーパント。

ほどなくして、黒い電車が通りすぎた。

電車が通りすぎたあとに、一人の青年が立っていた。

「……何者だお前……」

青年はパスト・ドーパントの問いかけに耳を貸さず、少年のもとに駆け寄った。

「ボーズ、大丈夫か？」

「……誰？」

少年は泣きそうな顔で訊ねる。

青年は黙ったまま、少年の胸についている名札を見つめた。

『ひだり しょうたろう』

「そうか……やっぱりお前が……」

「おいこら……！」

青年が振り返るとパスト・ドーパントが地団駄を踏んでいる。

「俺を無視するな……！」

お前は誰だって言ってるんだろ……！？」

ゆっくりと青年は振り返り

「うるさい……！さっきからぶつぶつ言ってるけどお前みたいな奴は黙ってる……！」

暴言を吐いて再び少年の方を向く。

「やっぱりお前がオーナーの言ってたジョーカーか…」

「ジョーカー？」

「……まだわかんねえか」

青年はどこからともなく、奇妙な形のバックルのついたベルトを取り出した。

「よおドーパント。待たせたな」

ベルトを装着し、厚い黒のカードを取り出した。

「俺が鬼ごっここの相手してやるよ……」

変身!!」

変身の掛け声と同時に黒いカードをバツクルに差し込んだ。

『ALTAIR FORM』

ガイアメモリとは違った電子音が響くと、

青年を包むように黒と緑色の装甲が形成される。

「お前……お前も仮面ライダーなのか!？」

「仮面ライダー？」

ああ、

そう言えば世界の破壊者さんにも言われたなそんなこと……」

まるで牛のような角で、緑色の複眼の戦士は両腰から下げているのを取り外し

それらを連結させ、出来上がった大剣を振るう。

「最初に言っておく!!」

俺は仮面ライダーゼロノス!!

それからもう1つ!

俺はかゝなり……

強い!!!」

大剣を握りしめ、仮面ライダーゼロノスはパスト・ドーパントめがけて走りだした。

「うおらあ！」

大剣を振り下ろすゼロノス。

しかしパスト・ドーパントは紙一重で避けていた。

「っ……あぶねえ！！！」

「このおお！！！」

さらに攻撃を繰り返す。がギリギリのところまで避けられてしまっつ。

「おわあ！！！」

ゼロノスはパスト・ドーパントの腕を掴み、そのまま引き倒す。

「あぐっ！！！」

倒れ込んだパスト・ドーパントが上を見ると、

ゼロノスが太剣で突き刺そうとしていた。

「うおおお!?!」

なんとか体を反転させて避ける。

「クッソ!逃げんな!?!」

体を起こしたパスト・ドーパントの胸元を袈裟懸けに切り裂いた。

「ぐあつ!?!」

「まだまだああ!?!」

ゼロノスはさらに右手、左足を斬りつけ、そのまま蹴飛ばした。

パスト・ドーパントは地面を転がっていく。

「ハア…ハア……無茶苦茶じゃないか!!」

悲鳴に近い声をあげるパスト・ドーパント。

しかしゼロノスは容赦なく斬りつける。

「づいおっ!!」

「戦いの最中によそ見すんな!!」

何度も何度も斬りつけるゼロノス。

その様子をただ呆然と眺める少年、翔太郎。

ゼロノスの逞しい背中に見とれるばかりであった。

「さてと…逃げられる前に止めというのか……」

ゼロノスはベルトのカードを抜き取り、大剣の柄に差し込んだ。

『FULL CHARGE』

電子音と共に大剣が緑色の稲妻を帯びていく。

そしてパスト・ドーパントめがけて走った。

「ぜええいあああああああ！！」

ザンッ！

「がっ……………」

大剣でパスト・ドーパントを一閃、そのままパスト・ドーパントは業火に包まれた。

「がっ……………はあ……………！」

倒れこむ星野。

持っていたパストのメモリは音をたてて砕けた。

「はあ……………無駄に避けるのが上手いんだから……………」

ゼロノスはカードを抜き、ベルトを外す。

すると持っていたカードが塵となって消えた。

青年は星野のもとへ歩み寄る。

「よお。ドーパントさん」

星野は気絶して何も言えない。

「このままあなたは自分のいた時間に戻される。」

もとの時間で罪を償うんだな」

そして翔太郎の方にやってきた。

「おいおい、泣いてんのか？」

「だって……………」

今にも涙が溢れそうな翔太郎。

青年は見かねてポケットから一つの飴を取り出した。

「ほら…これやるから泣くなって…」

青年は飴を翔太郎に握らせた。

「将来ジョーカーになって戦う男がこんなことで泣くなよな……………」

「戦う…………？」

「どうして…？」

「それは…あれだ……」

まあとりあえず理由は知らん！けど理由が見つからなかったら…

誰かを守るために戦え」

「誰かって……？」

「ええ！？それは……」

困った青年は頭をガリガリと掻いた。

「そつだ。お前、この街は好きか！？」

「???? うん……」

「だったら、この街を守るんだよ！」

この街を泣かすような奴が現れたら街を…街の人を守るために戦えばいいんだよ!！」

「風都を？」

「ああ!だから……お前が守るために戦うその日まで

泣き虫治して、強くなれ!!
なっ!?!」

「うん!僕…強くなる!!」

翔太郎が強く頷くのを見て青年はにっこりと微笑んだ。

「じゃあ俺は帰るからな」

「帰るってあの列車で？」

「そうだ。ゼロライナーって言うんだ」

「僕も乗りたい！！」

青年は間髪入れずに

「ダメだ！！」

「なんで！？」

「お前が泣き虫だからだ！」

「それじゃ……泣き虫治したら乗せてくれる?」

「……………考えとく」

小さく呟いて青年はゼロライナーに乗り込んだ。

ほどなくしてゼロライナーが発進しはじめる。

翔太郎はその様子をじっと見ている。

走り始めて数秒でゼロライナーは時空の彼方へ消えていった。

2010年2月26日 . . .

PM 1:00 . . .
銀杏町二丁目 . . .

「うん。オーナーの指示でドーパントを倒しに行ったから……」

「それじゃ俺は助かるのか!？」

翔太郎は興奮しながら野上に訊ねる。

するとデネブが

「あ!あれ侑斗だ!!」

デネブの見上げる先には時空を越えてやってきた黒い列車、ゼロライナー。

「ほむ……ね？」

ゼロライナーはデンライナーの隣に停車した。

扉が開き青年が降りてくる。

「侑斗おおおー！」

青年が降りてくるやいなやデネブが抱きついた。

「うおおー？デネブうー！離れる暑苦しいー！」

侑斗はデネブを振り落とし野上の方を見る。

「悪いな野上。デネブが迷惑かけた」

「僕なら大丈夫だよ……」

次に侑斗は翔太郎を見た。

「あ……」。

あなたはあの時の……」

「よう。泣き虫は治ったか？」

「……ねえ翔太郎君、あの人とどういう関係!？」

亜樹子の質問に答えることもできずに翔太郎は侑斗を見つめていた。

「フッ……少しは強くなったみたいだな……」

侑斗は微笑むとゼロライナーに乗り込んでいった。

「あ…ちょっと!？」

「侑斗待ってくれえ!！」

デネブも慌てて乗り込む。

それを見届け

「それじゃ……僕もこのへんで。」

どうもお世話になりました」

と言って野上は深々とお辞儀をした。

「いえいえ!そんな大したことは……」

野上もデンライナーに乗り込み、

二つの時の列車は走りだして、あっという間に時空の彼方へ消えていった。

「なんかあっという間だったけど……翔太郎君、さっきの人知り合
い?」

「なんていうか……遠い昔の……」

そこで翔太郎は言葉を濁した。

「いや、やっぱり俺にもわかんねえ……」

二人は列車の消えていった空をしばらく眺めていた。

その数時間後、風花町の廃工場で気絶していた星野が発見され

そのまま警察に連行されたそうだ。

始まりのZノ幼き日に憧れた背中（後書き）

なぜ電王なのか？

電王ならディケイドと同じように自然に世界越えられそうだったからです。

なぜ電王ではなくゼロノスだったのか？

単純にゼロノスが好きだからです。

でもジョーカーが一番好きですよ！？

それでは納得がいかなかった皆さん、クレーム待ってまーす！！

Ｔとの邂逅／二つの事件（前書き）

停滞していた話の進行をそろそろ進めたいと思います。

Ｔとの邂逅／二つの事件

3月3日 . . .

「……でさあ、部長にまた面倒な仕事押し付けられてね……」

P M 7 : 5 3 . . .

「勘弁してくださいって言ったら……あのセクハラ部長、また尻触ってきたのよ!？」

もう訴えてやるのかな……」

株式会社『アース・リフォーメーション』10F 女子トイレ……

愚痴をこぼしながら化粧をするOL。

何度も鏡を見てチェックをしている。

「あ！そっだ、佐知子。この後飲みに行かない？

良い店見つけたのよ！！」

OLは化粧道具をしまいながら振り向いた。

「ってあれ？佐知子？」

しかし、後ろには誰もいなかった。

「あれえ？おーい、佐知子やーい」

とりあえず友人を呼んでみた。が、返事もない。

「もう出てったのかな…？」

呟きながら化粧ポーチを持ってトイレを出ようとした時、

ゴトン

何か重いものが落ちた音がした。

「ん？やっぱりいるのかな？」

「おい、佐知子？」

音のした辺りに行くごとく一歩を踏み出す。

パシヤッ

「ん？」

今度は水の跳ねる音。

しかも自分の足下から音がした。

ふと、視線を足下に向けると

「……！ 何よこね……？」

床一面に真っ赤な液体が拡がっていた。

それを見て初めて気がついたのだが、いつの間にかトイレには血の匂いが充満している。

「なんで……………」

「これ誰の」

ゴロンッ

「……………え？」

ゴロンッ

ベキベキベキッ

ドチャッ

「いや……何よ……何の音よ……!？」

奇怪な音は一つの個室から響いてくる。

大量の血液も同じ個室から流れている。

ギイ……

今までとは違う、無機質な音がした。

扉をゆっくりと開けたような。

OLは開いていく扉を見つめた。

その扉の向こうに

金色に輝く眼のようなもの

それはこちらをじっと見つめている。

OLはもはや声も出せない。

突然、個室の扉が勢いよく開かれた。

「……………化け物……………!!」

グシャアッ

3月4日 - - -
AM 11:23 - - -
左探偵事務所 - - -

「思ったんだけどさあ…」

「どうした亜樹子？」

亜樹子は最近買ったばかりのテレビから目を動かすことなくこう言った。

「なんかこの事務所に来る依頼って地味じゃない？」

「……!!」

お前はなんてことを!!」

翔太郎は持っていた新聞を机に叩きつけた。

「お前からそんな不謹慎な言葉が出てくるなんて……」

恥ずかしすぎておやつさんに顔向けできん!!」

「だってそうじゃない!!」

最近の依頼なんて基本人探しだし、それ以外はストーカーまがいの行為じゃん!!」

その一言に翔太郎は絶句した。

「お前はどつしてそんな…」

もついい！お前の根性叩き直してやる！！」

そう言つと机から長さ120cmほどの巨大なハリセンを取り出した。

「いー！？なにそれ！？」

「これはおやつさんから受け継いだ根性を叩き直すための伝説のハリセン…」

「いやいや！私聞いてないし、伝説つて誰が語り継いでんねん！！」

亜樹子の主張も無視し、翔太郎はハリセンを振りかぶった。

「天！誅！」

「いや————！！！」

と、その時

ガチャ

「失礼する……」

「「！？」」

事務所の入り口の扉が開き一人の男が入ってきた。

あと数ミリのところで二人は動きを止める。

「……依頼ですか？」

「まあ……依頼に来たんだが……」

取り込み中だったかな？」

男の目に映っているのは

コントのようなことをしている男女。

奇妙に思っただけである。

「おっと……これは見苦しいところを見せちゃまったな」
翔太郎はサッとハリセンを片付ける。

「まあ適当に腰かけといてくれ。」

亜樹子、テレビ消しなさい」

「……ラジオは流すくせに」

ぼやきながらテレビの電源を切ると、三人はソファアに腰かけた。

「まずは名前を教えてください」

「……俺は紅 太牙。」

「一応会社を経営している」

「会社を経営!?!」
いち早く食い付く亜樹子。

「てことは社長さん!?!」

目を輝かせて亜樹子は翔太郎に耳打ちする。

「これは報酬弾むんとちがいます!?!」

翔太郎は何も答えずに亜樹子の顔を押し退ける。

「その会社の社長さんが一体どんな依頼を？」

「……現在うちの会社はある会社と契約をしようとしているんだが

……

その契約先の会社で妙なことが起きているらしい」

「妙なこと？」

紅は深く頷いた。

「なんでも社員が会社内で行方不明になっているらしい」

「??? どひいひいと??」

翔太郎と亜樹子は揃って首を傾げた。

「社員が業務中に姿を消して、そのまま行方不明になっている、ということだ。」

「それも一人二人ではなく、十人以上の社員が行方不明になっている
そうだ」

「十人以上も……！？」

「そこで君たちにはその事件の全貌を探って欲しい。」

「このままではこちらの会社もまともに商売できないからね」

「なかなかイラッとする言い方である。」

「だが、そんなことでこの男は依頼を断ったりしない。」

「まあいいや。その依頼、引き受けてやるよ……」

翔太郎は立ち上がり、掛けていたソフト帽を被る。

「早速その会社に行ってみるぞ亜樹子！」

「まちたまえ……」

事務所を飛び出そうとした翔太郎を紅が制した。

「まだどこの会社か教えてないだろう？」

「そついやそうだった！」

「どこの会社なんだ？」

「そんなに慌てなくても今からその会社まで送ってあげよう」

「マジで!?!」

三人が事務所を出ると、事務所の前に大きな白いリムジンが停まっていた。

「はあっ!?!白いリムジン!?!」

興奮を抑えられない亜樹子と開いた口が塞がらない翔太郎。

するとリムジンの運転席から若い男が降りてきた。

その男は一礼して

「御迎えにあがりましたよ社長」

「おいおい…他に社員はいないんだから社長じゃなくていいぞ?」

三人は早速リムジンに乗り込む。

「ねえ、社長さん！」

あの若い運転手さんと仲良いみたいだけどなんで!？」

「ああ……彼は秘書だ」

「秘書?にしては仲良すぎだろ?」

「彼の名前は紅渡……」

「実の弟だ」

「「弟!？」」

二人は運転席側まで移動し弟の顔を覗きこむ。

「あの……何か……?」

紅 弟はまじまじと見られて顔を赤くした。

「似てない……」

「兄弟揃ってイケメンなのに似てない……」

「不思議だね……」

「不思議だな……」

「あの、そろそろ発車してよろしいでしょうか…？」

「おっ、これは失礼した。」

「どうぞ発車してくれ」

二人は車内を移動して

紅 兄の前に座った。

「ところでその会社ってどんな会社なんだ？」

「主に代替エネルギー開発などを中心に行っている…」

アース・リフォーメーションという会社だ」

株式会社『アース・リフォーメーション』――

アース・リフォーメーションのビルの近くにリムジンを停めた。

「ここがアース・リフォーメーション……」

「おっきなビルだね……」

見上げたビルはざっと50階くらいありそうである。

「……社長さんと弟さんは？」

亜樹子が振り返ると二人はリムジンに乗ったまま。

「……え？降りないの？」

すると運転席の窓が開き紅弟が顔を出した。

「兄が会社に顔を出すと今後に支障をきたすので……」

「あ………さいですか………」

紅 弟はにこやかに手を振りリムジンを発車させる。

「仕方ないっちゃあ……仕方ないのかもな……」

社長って大変だし」

「そういうことじゃないと思うよ翔太郎君………」

リムジンを見送り二人はビルの玄関に向かった。

P M O : 3 2 - - -
園咲家 - - -

「な―――い？」

雄叫びをあげているのは園咲家の次女、若菜。

あまりにもうるさいので来人は耳を塞いで顔をしかめる。

「どうしたの若菜姉さん？」

「無いのよ！私のネックレスが！！！」

先日から若菜はネックレスを探していたが、どうやらまだ見つかっていないらしい。

ちなみに犯人は愛猫ミック。

「本当に知らないの来人!？」

「いやあ……まあ……知らない……かな」

来人のあやふやな答えに若菜は動きを止めた。

「……どうしよう?」

若菜の声のトーンが少し下がったのを感じ、来人も動きを止めた。

「……どうしてかと言ってわねても……」

「言いなさい」

なつこは声のトーンが下がる。

「言いなさいって言わねても……」

「言いなさい！」

「いやだから……」

「言いなさいって言ってんでしょ？」

苛立ちが限界に達した若菜の手が来人の首を掴んだ。

「ぐえっ……」

「ちよ……姉さんギブ……」

どどん 来人の顔から血の気が引いていく。

しかし若菜は手を緩めようとはしない。

「言いなさってば？」

ブクブクブク……

「……あれ？」

見ると来人は白目を剥いて口から泡をブクブク吹いていた。

「……………!!」

来人お!!」

若菜が手を放した途端、来人は力なく倒れた。

「嫌あ!!来人目開けて!

来人!! 誰か医者呼んで!!」

30分後、急いでやってきた井坂の救済措置によりなんとか目を覚ましてくれたようだ。

P M O : : 3 3 - - -

株式会社『アース・リフォーム』……

アース・リフォームのビルの前で二人の男が揉めている。

「だから……依頼だって言ってるだろ？」

一人は翔太郎。

「じゃあ誰からの依頼なんだよ？」

翔太郎の対戦相手は真倉刑事。

何故ここに真倉がいて、揉めているのか。

それは亜樹子と翔太郎が入り口まで来た時、

「あ！翔太郎君、あれ！」

亜樹子が指差したのは一台のパトカーと一台の白バイ。

「まさか……あれは……」

二人がパトカーを見ていると、パトカーから二人の男が降りた。

「……刃さんにマッキー……！」

翔太郎の声に反応し、刃野と真倉がこちらの方を向いた。

「おっ？翔太郎じゃねーか」

「探偵！？何故ここに！！」

そして例の如く、二人が幼稚な喧嘩を始めたというわけである。

「ハイハイ、その辺で喧嘩おしまい！」

いつものように刃野が仲裁をする。

「翔太郎、お前がここにいるってことは事件に関する依頼が来たんだな？」

「さっきから依頼って言ってたぞ俺は……」

「そんじゃここは協力しようぜ？」

もうすぐ照井も戻ってくるから、事件についての意見聞かせてくれ」

そういえば竜が見当たらない。

「刃さん、竜はどうしたんだ？」

「白バイがあるからいるんだろ？」

「照井は被害者の関係者と話できるか交渉してんだよ」

「被害者？」

声をあげたのは亜樹子だった。

「被害者ってなんか被害を受けた人がいるの？」

すると刃野と真倉は顔を見合わせた。

「おまえら…ニュース見てないのか？」

今度は亜樹子と翔太郎が顔を見合わせる。

「ニュース？」

「おまえら何しに来たんだよ!？」

「いやいや、今日の新聞は見たが行方不明事件の記事なんてなかつ

たぞ？」

すると再び刃野と真倉は顔を見合わせた。

「翔太郎、行方不明事件ってなんだ？」

「何しに来たんだよ二人とも！！」

翔太郎は真倉と同じセリフを吐く。

「まてまて、行方不明事件？殺人事件じゃなくてか？」

「殺人！？どこで！？」

「この会社で」

真倉は目の前のビルを指差す。

と、ちょうどタイミングよくビルの玄関から竜が出てきた。

そして真っ直ぐこちらに走ってくる。

「おっ、どうだった照井？」

「なんとか話聞けそうです。」

「ってなんで翔太郎が…？」

刃野も真倉も、揃って首を横に振る。

そんな二人の肩を翔太郎はおもいつきり叩いた。

「まあいいじゃねーか！」

とりあえず殺人事件の話と行方不明事件の話聞こうぜ？」

そう言うと亜樹子を連れてビルの中に入っていった。

竜は目を丸くして

「え？」

なんであいつが仕切ってるんですか？」

PM1:00 - - -

『アース・リフォーメーション』営業部 - - -

「それじゃこの部署の社員が一番被害にあってたってことですか？」

メモをとりながら真倉はたずねた。

「はい…どづいつわけか…」

説明をしている営業部の男は活力というものが感じられない。

営業部の社員が一番被害にあっているのだから無理もないだろう。

その後ろで翔太郎は刃野に耳打ちしている。

「刃さん、殺人事件ってなんだ？」

「……………ここ数日で七人の社員が惨殺されていてな…

どの死体もバラバラでどこか体の一部がないらしい」

「体の一部が？」

「そうだ。頭部や左足、内臓、胸部がなくなっている死体もある。

まるで何か猛獣に襲われて食い殺されたような死に方だ」

「……………えげつねえな…」

「もっとも…一番最近の事件じゃ体の一部しか見つかってないらしい」

「体の一部……しか？」

「肝臓と頭皮、右手の薬指が落ちてたそうだ」

そんなやり取りをする一方真倉はもう一つの話題に移る。

「ところで……えーと……」

移る前に真倉は営業部の男の名札を見つめた。

「あ……僕は服部です……」

「あ……すみません服部さん。」

服部さん、行方不明事件というのはご存知ですか？」

すると服部は自分の机に戻ってしまった。

しかしすぐに書類を持って戻ってきた。

「これが行方不明になっている社員のリストです」

「ちょっとそれ貸して!!」

真倉が受けとる前に翔太郎が奪い取った。

「……だいぶ多いな……」

紅からは十人以上と聞いていたが、書類には三十人以上の名前が記されていた。

「……相沢慎二……牧野成実……神田蒼太……金堂菜月……芝山令治

……坂下銀次……」

「くおおらあ！！勝手に読むな！」

真倉が颯爽と奪い返した。

「おい！まだ途中だったのに！！！」

再び争い始める二人。

そんな二人を放って刃野は服部に質問をする。

「この行方不明事件というのは？」

「……2ヶ月ほど前から社員が突然姿を消したんです。」

営業部の他に開発部や経理部などでも……」

「最近の殺人事件との関連性はないんですか？」

「……行方不明事件は一度も死体はあがってません。」

だから二つの事件は全く別の事件じゃないかと……」

「二つの事件が全く別の事件……!？」

思わず刃野は天を仰いだ。

おそらくとんでもない事件にちがいない

刃野はそんな気がしていた。

「……そうだ。一応社長からも話を聞きたいんだが……」

「社長はここ数日出張で、帰ってくるのはいつになるか……」

「……そうですか……」

刃野はため息混じりに呟くと、後ろで喧嘩をする二人の仲裁に入っ
た。

「やめろおまえら!! 他の部署とかにも聞き込みいくぞ!!」

「……はい……」

真倉はリストを服部に返して、翔太郎、刃野と聞き込みに向かった。

服部の受けとつたリスト

翔太郎は最後まで目を通していなかった。

リストの一番後ろから四番目。

その人物は

『赤峰 百合』

翔太郎がこの人物に気付くことはなかった。

Ｔとの邂逅／二つの事件（後書き）

今までバラエティー路線を入れすぎたので、敢えてグロテスクな表現を入れてみました。

さらっと刃野もグロいこと言いましたが…

今回の話で不快に感じたら本当すいません…

Ｔとの邂逅／アホ狙撃手（前書き）

今回の依頼

依頼人

紅太牙（社長さん）

依頼内容

取引先の会社の噂を調べて欲しい

メモ

おやっさん、あなたの娘は酷い女の子に育ちました。
あわせる顔がありません。

翔太郎

丁との邂逅 / アホ狙撃手

3月4日 . . .

「もしもし。お疲れ様です」

P M 2 : 3 5 . . .

「え？俺ですよ俺！

………わからない？」

風都某ビルの屋上 . . .

「神田です神田！」

若い男がビルの屋上の端に腰掛け、上司(?)に電話をしている。

「なんの用かって？」

いや、そろそろ俺の番かと思いましてね……

明日！？結構いきなりですね……」

男は立ち上がり、街を見下ろす。

「いやいや、不満じゃないです！」

………ただ、俺会社どうすればいいですか？

あ、そっちで処理してくれるんですか……

わかりました！任せてください！！！」

意気揚々と電話を切ると、ポケットから青いガイアメモリを取り出した。

「そろそろ出番だつてよトリガーちゃん！

やってやるぜえーーーー！！！」

大空に向かって男は吼えた。

が、その拍子に手からガイアメモリが滑り落ち、そのまま屋上から落としてしまった。

「あゝあゝ ああああ！！」

しまったあああああ！！

今取り行くから待っててねーーーー！！」

男は絶叫しながらビルを駆け降りていった。

P M 4 : 0 3 - - -

『アース・リフォーメーション』 玄関前 - - -

刑事の三人、私立探偵の二人は背中を丸めてビルから出てきた。

「何もわかんなかったな……」

「そうですね……」

「会社の中で事件起きてんに情報少なすぎ……」

今回の調査で得られたのは

殺人事件の被害者の少しの情報

行方不明事件の行方不明者のリスト

のみ。

「……そういや刃さん、鑑識の人がいなかったけど……」

「ああ、会社の方が早く切り上げさせたんだよ」

「なんでそんな真似を？」

「さあな……」

翔太郎は振り返り、ビルを見上げた。

「……どうしたの翔太郎君？」

「この会社……」

なんか怪しい……

まだ何か見落としたことがあるはずだ…」

「それは何を根拠に言ってるんだ？」

「……………探偵の勘」

「はああ……………」

亜樹子が大きいため息をついた。

「もうちょっと何かないの？」

「バカヤロー！！俺の勘は当たるんだぞ！！？」

喧嘩を始めそうな二人の間に竜が入る。

「まあまあ……」

「何がまあまあなんだコラ」

「お前の勘はおいといて、俺達は署に戻ってリストの社員を調べるから」

「お前もできるだけ情報集めてくれ」

そう言って刑事三人は風都署へ戻っていった。

「翔太郎君、私たちはどうするの?」

「うーん……ウォッチャマンに情報集めてもらおうか」

私立探偵の二人も事務所まで歩いていった。

P M 5 : 0 2 - - -
アース・リフォーメーション - - -

「副社長！副社長！！」

会社のただっ広い廊下を一人の社員が駆け抜ける。

「待ってください副社長！！」

ようやく副社長は振り返った。

その副社長はスカーフを巻いた若い男。

「そんなに慌ててどうしたというんだ？」

「先ほど警察がこの会社に……」

「それなら聞いたさ。

それがどうかしたのか？」

「どうかしたのかって……」

「警察ですよ！？このままじゃ我々も……」

すると副社長は爽やかに笑って

「大丈夫だ。警察くらいどうとでもなる。

私に任せておけ」

3月5日 - - -
AM 10:33 - - -
アース・リフォーメーション前 - - -

「情報がない!？」

翔太郎は携帯電話に向かって叫んだ。

相手は情報屋ウォッチャマン。

『そうなんだよ翔ちゃん!アース・リフォーメーションについてはほとんどと言っていいくらい情報が得られないんだよ!-!』

「そんなバカな話があるか!色々開発とかしてるんだろ?

だったら少しくらいは...」

『それが微塵もないんだ。
そもそもそんな開発をしているかも怪しいんだ』

「????？」

『どういうことだ…?』

『色々な会社と契約を結んでるらしいけど、

どこもアース・リフォーメーションが何をしているか全く知らないらしいんだ』

「なんで契約したんだよ……」

『とりあえずその会社は謎が多すぎるから気をつけて!』

翔太郎は電話を切ると、亜樹子と共にビルに入った。

「……亜樹子、お前いたのか？」

「さっきからいたやないか！！
喋ってなかったけども！」

中にはすでに竜、真倉、刃野が待っていた。

「遅かったな翔太郎」

「早速だが、今日も二手に別れるぞ。」

とりあえず、翔太郎と真倉で開発部を……」

「ちょっと待ってください！！」

真倉が話を遮る。

「何故俺と探偵が!？」

真倉は翔太郎を全力で睨みつけている。

「そりゃ翔太郎の探偵としての才能とお前の刑事としての行動力を考慮してだな…」

その言葉に真倉は動きを止めた。

「行動力？」

「ああ、行動力だ。」

俺はお前の行動力を評価してるんだ」

すると真倉の表情が少しずつ明るくなっていく。

「わかりました。やります。やりますとも……！」

そんな真倉を見て翔太郎、竜、亜樹子は

「アホなのかな……？」

「アホなんだよ……！」

「お前達……あの人は俺の先輩だからアホは止めてくれ……！」

アホと言われた真倉はそうとは知らずに意気揚々と

「よおし……いくぞ探偵……！」

「あー……ハイハイ……」

「行きますよ……」

AM 11:00 . . .

36階『営業部』 . . .

「いや……営業部の階は多いね……」

こちらは亜樹子、竜、刃野の三人。

「はい。何しろ規模の大きい会社ですので営業部は五階あります！」

「元気に語るのは営業部の水川さん（ ）（ ）」

「規模が大きいからって営業部が五階に渡ってあるなんて…」

そんな世間話をしつつ調査をする。

「何か死んだ社員に共通点などは…？」

「共通点…ですか…」

全員と親しかったわけじゃないので…

部長だったらしかして…」

と…というので部長の方を見ると、デスクがたくさんのもで囲まれている。

「えっと…大変食べてらっしゃるのが…」

「部長です…」

部長は只今ラーメンにがつついている。

「……………食べ終わってから聞こうか…」

A M 1 1 : 0 0 . . .
2 6 階 『 開発部 』 . . .

「……………」

「……………」

真倉と翔太郎。

黙ったまま立ち尽くしている。

「……………探偵……………」

「……………どうしたマッキー……………」

「俺達は何しに来たんだ？」

「開発部に聞き込み……………」

「今俺達は何してるんだ？」

開発部の前で二人は立ち尽くしている。

「開発部に入れてもらえないでいる……………」

二人は閉め出されていた。

「なんで入れてもらえないんだ？」

「俺が知るか……」

二人は黙ったまま。

「他の階にいこうか……」

二人は肩を落としてエレベーターに向かった。

その時

「うあああああああー!!」

悲鳴が響きわたる。

それは二人にも聞こえていた。

「今のは!?!」

「休憩室からだ…!!」

すると、悲鳴を聞いた社員が次々と出てきた。

「なんだ今の!?!」「悲鳴?」「どうなってんだ…?」

「皆さん落ち着いて!」

真倉が声を大にして

「そこから皆さんごうかないで!」

真倉が社員に指示をしている間に翔太郎は休憩室に向かった。

AM 11:18 - - -
34階『営業部』 - - -

「この営業部でも収穫無しか…」

刃野は何も書いていない手帳を閉じた。

「次の階で営業部は最後ですね」

「次はこの部署にいけばいいんだ………」

これといって情報はない。もう他の部署に行くしかないのだ。

「他の部署に行きたいんだが……」

亜樹子ちゃんどこ行った？」

先ほどまで竜の後ろにいたはずの亜樹子がない。

「ぞっきトイレに行きました」

「……時間かかるのか？」

「……なあ……」

34階女子トイレ……

「はあ……」

亜樹子は個室でため息をついた。

「やだなあ……」

「こつこつという殺人の起きたところでトイレとか……」

殺人事件を思い出し亜樹子は身震いする。

「あゝ怖っ！」

「さっさと出よ……」

個室の扉に手をかける。

その時

「ちよつと何なのよ!?!」

外側から怒鳴るような女性の声がした。

その声に亜樹子は動きを止めた。

「いきなり呼び出して…何の用があんの!？」

私忙しいんだけど!！」

どつやら誰かに怒っているらしい。

「黙っていないでなんとか言いなさいよ!！」

怒りの相手は黙っている。

しかし代わりに

『キャニバル!!』

狭いトイレに電子音が響いた。

A M 1 1 : 0 6 - - -
2 6 階休憩室付近 - - -

「この辺りか!?!」

休憩室付近に到着した翔太郎。

周囲を見回すと、一人の男性社員が倒れていた。

「……………」

大丈夫か!？」

慌てて駆け寄り、社員を抱き抱えた。

「……………助けて……………」

「もう大丈夫だ!何があった!？」

しかし社員は虚ろな目で

「助けて……………」

「だから大丈夫だって!!」

「助けて……助けっあゝあ！！！」

突然、社員の顔に小さな亀裂が入った。

「……………」

「なんだこれ？」

翔太郎が亀裂に触れようとした時、社員の全身が崩れあつという間に塵となってしまった。

「なっ……………！！？」

やがて社員の塵は見えなくなるぐらいまで粉々になった。

「なんだよこれ……………」

そしてふと、顔を上げた時、目の前には全身灰色の奇妙な怪人が立っていた。

「…………ドーパント!!」

「フンッ!」

翔太郎が声を出したのと同時にドーパントが攻撃を仕掛けてきた。

が、翔太郎はそれをギリギリのところまで避ける。

「くそ!ドーパントがらみかよ!」

ドーパントから距離をとる。

ドーパントは翔太郎を見つめて微動だにしない。

その時、

「伏せる探偵!!」

真倉の怒号が響いた。

翔太郎はそれに反応してその場に伏せる。

ドンッドンッ!

真倉は迷わず発砲。

「てめ………マッキー!いきなり銃を撃つな!!」

翔太郎は立ち上がって悪態をついた。

真倉は銃を構えたまま。

「下がれ探偵……」

「……………あ？」

翔太郎が見るとドーパントは平然としていた。

ドンドンドンドンッ！

さらに真倉は発砲する。

しかし、放たれた弾丸はドーパントに命中した途端に塵となった。

「…はあ!？」

さすがにこれにはビックリの翔太郎。

真倉は構わず発砲する。

が、全て命中する前に塵となってしまう。

「…どーなってるんだ？」

「このドーパントの能力か!？」

ドーパントは姿勢を低くして二人めがけて走り出した。

「危ねえ!！」

翔太郎は真倉を蹴り倒し、自分も反対側に転がった。

ドーパントは勢いを殺しきれず、そのまま走ってビルの壁を突き破り

26階という高さから外へ転落した。

「無事かマッキー!?!」

「お前の蹴りのせいだな…」

二人はドーパントが突き破った壁に目をやる。

「なんか……壁を砕いたっていうより……分解してすり抜けたみたいだな」

「分解？」

「さっき社員の一人があのだーパントに殺られた。

この壁や、弾丸みたいに粉々になってな…」

「触れたものを分解するのか!？」

「そんな相手どうやって…」

翔太郎はソフト帽を被り直し、

「対処法はともかく、多分ドーパントはまた上がってくる」

「なんでわかるんだ？」

「勘」

根拠のない一言に真倉は目眩がした。

「まあ……お前の勘は無駄に当たるからな…

だったら俺は社員に逃げるように誘導する」

「ああ。頼むぜマツキー」

二人は同時に別方向へ駆け出した。

AM 11:21 - - -
34階女子トイレ - - -

『キャニバル!!』

「…………え？」

亜樹子は突然響いた電子音に驚いて思わず声を出してしまった。

メキメキメキメキ…

「何…………あなた…

一体何なのよ…」

さっきの女性が泣きそうな声を出した。

亜樹子は個室の扉に耳をくっつける。

次の瞬間

ド
ン
ッ

「ぎゃあー！」

女性が悲鳴をあげたようだが亜樹子には状況がわからない。

「ちょっと……止めて！」

退きなさいって……

イヤ……止めてー！止め……イヤアー！」

ゴ
ロ
ン
ッ

「…………アアアアアアアアアア！」

手エー！私の手があー！！」

思わず亜樹子は扉から離れた。

「ギヤアアアアアアアアアア！」

やめっ…………止めて…………」

ブチブチブチッ

「いやあああ……あ……あああ……！！」

長い悲鳴が響き、そしてピタリとそれは止んだ。

グチャ
…

グチャ
…

亜樹子は耳を塞いだまま動けない。

「……………誰かいるな？」

扉の向こうから声がした。

耳を塞いでいたが、その声はしっかりと聞こえてくる。

「……………」
「……」

声の主は確実に亜樹子の個室の前にいるようだ。

全身が震え始める亜樹子。

「フッフ………」

引きずり出してやる

「亜樹子ちゃん!？」

突然、聞き慣れた男の声が響いた。

「なんだお前は!？」

「……ちっ。」

邪魔者め……」

ガシヤアアアン

「な！？待て！！」

バシヤッ

「…………逃げられた……」

今のは間違いなくドーパント……」

何度聞いても聞き慣れた声。

亜樹子は扉の向こうに

「……………竜君？」

と呼び掛けた。

「亜樹子ちゃん！？無事か！？」

やはり扉の向こうにいたのは竜だった。

「竜君なんだね！？良かった…」

ゆっくりと亜樹子は扉を開いた。

その途端に竜は亜樹子の目を覆った。

「今から連れ出すけど、絶対に目を開けちゃダメだ」

「え？それどういっしょ…」

亜樹子の返事を待つことなく竜は亜樹子を抱き抱えて

そのまま女子トイレを出た。

「照井！！亜樹子ちゃん！！」

女子トイレを出ると、刃野が駆け寄ってきた。

「何があつた!?!」

「……また犠牲者が……」

刃野はそれだけ聞くと女子トイレに踏み込んでいく。

「大丈夫亜樹子ちゃん?」

「あ…うん。何ともない。」

「……その…聞きづらいんだけど…中で何があったかわかる？」

亜樹子は何も言わず首を横に振った。

「そっか…。無理もないもんな…」

ふと亜樹子の顔を見ると今にも泣き出しそうな顔をしている。

「ごめん…危険な目にあわせて…」

「照井!!」

女子トイレから刃野が戻ってきた。

「まずいぞ！犯人は上の階だ！」

それを聞いて竜は眉をひそめる。

「それはどごいじいことですか！？」

「おそらく被害者の返り血だと思っが…それがビルの壁についていて、

しかもその跡が一つ上の階にまで続いていたんだ」

「それじゃまだ上の階に…」

竜は亜樹子の方を向き

「ごめん亜樹子ちゃん。」

少しここで待ってて！」

それだけ言うと刃野と共に一つ上の階に急いだ。

A M 1 1 : 3 8 . . .
3 5 階 『 営 業 部 』 . . .

営業部、いや会社全体がざわついていた。

原因は

「聞いたか！？社内で殺人があったらしいぞ！！」

「ついさっき事件が起きたから早く逃げろって刑事さんが言ってるぞ！！」

この話。

「な……なんだ？」

階段を駆け上がった刃野と竜は首を傾げた。

「照井、お前何か指示を出したか？」

「いえ、何も……」

営業部の社員全員がエレベーターに押し寄せた。

「刑事さん！事件が起きたって本当ですか！？」

二人のもとにやって来たのは営業部の服部。

「え…ええ。ここは危険ですから…」

服部に避難を促す竜。

その隣で刃野は黙って何かを見つめていた。

「?? 刃野さん?どうかしましたか?」

「照井、あれ……」

刃野は何かを指差す。

竜はその方向を見た。

「あれは……………」

竜の目に映るもの

それはラーメンをまだ頬張っている部長だった。

「まさか刃野さん……………」

「確か殺人事件は猛獣に喰われたような死体が転がってたんだよね？」

「いやいや、そんなまさか……………」

刃野と竜はまさかと思いつつ部長のもとに向かった。

残された服部。

「そろそろ僕も……」

エレベーターに乗り込もうと押し寄せる社員の中に入ろうとした。

その時

「待て!!」

誰かが服部の肩を掴んだ。

振り返った服部の前に立っていたのは黒いソフト帽の男。

翔太郎だった。

「あなた……何で避難勧告無視して上の階に上がってきたんだ？」

「……………はい？」

何を言ってるんですか？」

「とぼけても無駄だ…」

気付いてなかったのか？

29階であんたを見つけてから
ずっとあなたの後にいたんだぜ？」

服部は目を大きく開いた。

「どれだけとぼけても無駄だ…」

行方不明事件の犯人はあんただ！」

一方、部長のもとに向かった竜と刃野。

二人がたどり着くよりも少し早く、一人の社員が部長の前に立った。

「部長！！こんな時になにしてるんですか！」

現れたのは営業部の水川。

水川はラーメンの器を抱える腕を引っ張る。

「行きますよ部長！！！」

しかし部長は動こうとしない。

そこに

「動くなあ！」

刃野、竜が到着した。

到着するやいなや、刃野は何故か拳銃を抜いた。

「ええ！？なにしてるんですか刃野さん！！」

慌てて銃を下ろそうとする。が、

「バカ野郎！もしかしたら犯人かもしれないだろうが！！」

刃野は下ろそうとしない。

「何でこんな時にテンパってるんですか！？」

竜は全力で銃を下ろそうとする。

「この人がドーパントなわけないでしょう!?!?」

「……………な、バレた!?!?」

「ほら違つって言ってるじゃないですか!?!?」

と、二人は動きを止めた。

「今…バレたつて…」

ゆっくりと部長の方を見る。

部長の口はラーメンでいっぱい。

続いて水川を見る。

水川は焦ったような表情で

「何故私がドーパントだとわかった!？」

そしてゆっくりと二人は顔を見合わせた。

「なんか…………… 自白しましたね」

「うん、まあ…結果オーライってやつか……………」

そして再び水川と部長の方を見た。

「部長危なああい!!」

二人の大声を合図に水川は素早くガイアメモリを取り出した。

『キャニバル!!』

「こっとなったら…武力行使よ!!」

鎖骨の辺りにガイアメモリを挿すと、大きな口で鋭い牙を持ったキャニバル・ドーパントに変身した。

「本当にドーパントだぞオイ！」

と言っている刃野の顔は何故か笑っている。

「何笑ってんですか!？」

「いいから攻撃ですって!」

二人は銃を抜きキャニバル・ドーパントに向けて発砲した。

ドドドドドッ

「ぐっ……」

どつやら効いているようだ。

「よし照井!俺が部長を避難させる!」

「わかりました!」

竜は発砲し続け、その隙に刃野は部長を避難させる。

「いやいや、この状況でなんでラーメン食えるんだ!?!」

ラーメンを持つ腕を引っ張ってエレベーターに向かっていった。

そのエレベーターの前で翔太郎は叫んだ。

「行方不明事件の犯人はあんただ!?!」

犯人と言われた服部は少しずつ後退りし始める。

そして急に走りだした。

「逃がすかよ!?!」

その後を追う翔太郎。

服部は走り続けて、やがて廊下に出たところで足を止めた。

そして振り返り

『クラツシュ!!!』

「君は何者だ？」

「警察ではなさそうだが…」

服部はガイアメモリを左の掌に押し込む。

「まあ、粉々にするから関係ないな……」

先ほど見た全身灰色のドーパント、クラツシュ・ドーパントに変貌した。

翔太郎もロストドライバーを装着、ポケットからジョーカーメモリを取り出す。

「……俺が何者かって？」

俺はただの探偵さ。

そんでもって……」

『ジョーカー!!』

営業部で対峙するキャニバル・ドーパントと竜。

「水川さん……大人しく逮捕されてくれないか？」

「イヤよ!」

あっさり即答されてしまふ。

見回すと既に辺りには人がいなくなっていた。

竜はそれを確認して、アクセラドライバーを装着し

アクセラメモリを取り出した。

「じゃ…こつちも武力行使だ」

『アクセラ!!』

それを見た途端、キャニバル・ドーパントは後退りした。

「!?!? ガイアメモリ!?まさかあなた…!」

同じようにクラッシュ・ドーパントも後退りした。

「ガイアメモリだと!？」

まさか君も……」

翔太郎はハア……と息を吐き出し

「おいおい……お前と一緒にするな。俺は……」

「え? あ、いや……」

竜は手をブンブン音たてて振った。

「似てはいるけど、少し違うな。
俺は……」

「仮面ライダーだ!!」

二人は同じタイミングでメモリを挿し

同じタイミングでバックルを展開、グリップを捻った。

再び二人の声が重なる。

「変身!!」

翔太郎はジョーカーに、竜はアクセルへと変身した。

アクセルはエンジンブレードを抜き、切っ先をキャニバル・ドーパントに向ける。

「覚悟できてるよな？」

そう言うとエンジンブレードを素早く横に振るった。

が、キャニバル・ドーパントは紙一重で回避する。

「な……」

「遅いわよ……」

ドミ

キャニバル・ドーパントの蹴りがアクセルの腹部に炸裂した。

「ぐあ………！！」

よろめくアクセル。そんなアクセルからキャニバル・ドーパントは距離をとる。

「フフ……キャハハハハ！」

甲高い笑い声をあげて、キャニバル・ドーパントは跳び跳ねてその場から離れた。

「くっ……待て！」

エンジンブレードを担ぎ上げその後を追って走りだした。

クラッシュ・ドーパントと対峙するジョーカー。

ジョーカーは今、悩んでいた。

どうやって攻撃しよう……

クラッシュ・ドーパントは人間から壁、飛んでくる弾丸をも粉々にしてみせた。

そんな相手にパンチしようものなら恐らく腕がなくなるだろう。

「……どうしよう……」

思わず心の叫びが口から飛び出す。
クラッシュ・ドーパントは両手を広げ

「さすがに仮面ライダーでも俺に触れないんだろ!?!
だったら……」

姿勢を低くしてジョーカーめがけて突っ込んでいく。

「……おおう……!」

なんとかジャンプして避ける。

やっぱり勢いを殺しきれないクラッシュ・ドーナツは壁を砕きながら転倒した。

「……………転んでもあれかよ……………」

クラッシュ・ドーナツは起き上がり、ゆっくりジョーカーに近寄る。

すると、クラッシュ・ドーナツが転んだ辺りの床が崩れて穴ができた。

「……………超便利な能力ですね」

「フフ……………君ももうじき粉々だ」

再び姿勢を低くして体当たりをしてくる。

「おっとー！」

しかしまたしてもジョーカーはあっさり避ける。

「なるほど…能力が良くても使用者がポンコツなんだな？」

ジョーカーの的を得ていて心ない一言。

クラッシュ・ドーパントの眼がどこにあるのか作者にもわからないが

きつと睨んでいるにちがいない。

「まあ…このままじゃ決着着かねーな………」

と、その時

ドザアアアア

「うおおおおおお！？」

ジョーカーの背後に何か、いや誰かが転がってきた。

そしてそれは素早く起き上がる。

「くそ！！ちょこまかと！」

転がってきた人物（？）、それは仮面ライダーアクセル

「……………竜？何してんだ？」

「キャハハハハ！あなた本当に仮面ライダー？」

甲高い笑い声をあげているのはキャニバル・ドーパント。

視線をアクセルからジョーカーに移した。

「つてえええええ！？」

仮面ライダー！？」

ジョーカーはキャニバル・ドーパントをじっと見つめた。

さらにクラッシュ・ドーパントを見る。

そしてアクセルに耳打ちした。

「おい竜。あの口のデカイドーパントの能力はなんだ？」

「能力？」

よく食べ……ね……る?」

「よしわかったー!」

ジョーカーはアクセルの肩を掴んで立ち位置を入れ替えた。

「……………ん?」

アクセルの目の前にはクラッシュ・ドーパント。

ジョーカーの目の前にはキャニバル・ドーパント。

「翔太郎、これはどういつ……」

「あの灰色ドーパントは触れたもの全て分解する。」

だから剣とか腕とか分解されんなよ!」

それだけ言っつてジョーカーはキャニバル・ドーパントに飛びかかっていった。

アクセルは目の前のクラッシュ・ドーパントの方を見る。

「触れたもの全て分解？」

無理だろそんな相手…」

「オラアッ!」

勢いよく飛びかかったジョーカーはキャニバル・ドーパントを投げ飛ばす。

「うあっ！ー！」

キャニバル・ドーパントは床を転がっていく。

ジョーカーはゆっくり近寄り

「まったく…こんな弱そうなドーパント相手に何してんだか…」

「…………私が弱そうですって!？」

キャニバル・ドーパントは起き上がりざまにパンチを繰り出した。

が、ジョーカーはいとも簡単に受け止めてみせた。

「なっ…!？」

さらに驚くキャニバル・ドーパントの顔面に裏拳を叩き込む。

「がっ！」

仰け反ってがら空きになったボディに膝蹴りをいれた。

が、キャニバル・ドーパントを放さずそのままもう二発膝蹴りをいれた。

そして顔面をボールを蹴るように蹴り飛ばした。

「ぐああああ…！」

キャニバル・ドーパントはボールのように弾んで転がっていく。

「悪いな…さっきの仮面ライダーは新米だからまだ慣れてねえんだ
よ」

ジョーカーはバツクルのメモリを抜く。

「だが俺はベテランだ。」

だからスーパー強い…」

『ジョーカー!!マキシマムドライブ!!!!!!』

「ちあ……」

ジョーカーの右腕が発光する。

「お前の罪を数えろ！！」

一気にジョーカーはキャニバル・ドーパントとの間合いを詰めた。

「ひっ……」

悲鳴に近い声を洩らしながらジョーカーめがけて拳を放った。

それを上体を反らして回避して懐に飛び込み

「ライダーパンチ！！！！」

発光する右腕でキャニバル・ドーパントの顎にアッパーを撃ち込んだ。

バキバキバキッ

強烈なアッパーで牙を砕かれ、宙を舞った。

同時に排出されたガイアメモリも宙を舞い、粉々に砕け散った。

「ふっ……」

竜はちゃんと倒せたかな？」

「っおおおー！？ちょっと待ってー！ー！」

「待ったなしだ!！」

ジョーカーの心配していたアクセルは逃げ回っていた。

「こんな能力反則だろ!？」

アクセルの頭上をクラッシュ・ドーパントの蹴りが通過する。

「仮面ライダーと言うのは腰抜け共のことを言うのか!？」

防戦一方。

というよりも防いでもない。

「こんな触れないドーパントなんか倒せるか!……!」

あー!!」

アクセルは大事なことを思い出した。

「触れなきゃいいんだ!」

アクセルが取り出したのは銀色のエンジンメモリ。

それをエンジンブレードに装填する。

『エンジンー!!』

そして引き金を引く。

『スチーム!!』

アクセルは振り返り切っ先をクラッシュ・ドーナツパントに向けた。

「くらえ!!」

すると刀身から大量の蒸気が吹き出し、クラッシュ・ドーナツパントを包んだ。

「……っおおおおお!!」

蒸気でよく見えないが効果はあるらしい。

「よし!!」
「れなら!!」

さらに蒸気を浴びせる。

すると

ジリリリリリリ

「…………え？なんの警報？」

警報の原因は火災防止目的の天井についた熱感知器。

エンジンブレードの蒸気で作動した模様。

それから間もなく、同じく天井に付けられたスプリンクラーが作動した。

「ええ！？なんてこった…！」

徐々に蒸気の煙が晴れ、クラッシュ・ドーナツが歩み寄ってくる。

「ハア……ハア……一時はどうなるかと思ったが……」

これで蒸気は使い物にならないな……」

スプリンクラーで辺りは水浸し。

依然としてスプリンクラーは止まる気配がない。

「蒸気が冷めるってば……」

アクセルを嘲笑うかのように水は噴出され続ける。

「……ん？」

水………あ……」

アクセルはもう一つ大事なことを思い出した。

「そつだ！…これなら…」

もう一度引き金を引く。

『エレクトリック！…！』

電子音とともにエンジンブレードの刀身が電気を帯び始めた。

「なっ……電気！…？」

これにはクラッシュ・ドーナントも驚きを隠せない。

アクセルはエンジンブレードを逆手に持ち、思いつきり水浸しの床

に突き立てた。

バチイイツ!!

「ガアッ!!」

クラッシュ・ドーナツは感電、同時にアクセルも感電した。

「ぐう……俺としたことが凡ミスなんて……」

フラフラになりながらアクセルは再び引き金を引いた。

『エンジン!!マキシマムドライブ!!……』

エンジンブレードが発光していく。

「…うっつおおおおー!!」

発光するエンジンブレードで空中をAを描くように切り裂いた。

「……ハア……」

絶望がお前の……」

Aの形の斬撃がクラッシュ・ドーナツめがけて飛んでいく。

「ゴールだああー!!」

Aの斬撃がクラッシュ・ドーナツに命中、

そのまま断末魔をあげて爆発した。

「……ハア……ハア……ハッ……」

やった…初勝利……」

エンジンブレードを突き立て寄りかかる。

「ああ……凡ミスが悔やまれる……」

一人で反省会をするアクセル。

まさか自分の攻撃に苦しめられようとは。

深く息を吐き出して変身を解除しようとした。

ドゥンッ
ドゥンッ
ドゥンッ

「……」

突然響いた銃声にアクセルは反射的に身を屈めた。

「いや〜、なかなか面白かったぜ!？」

廊下に響き渡る声。

「おい、どっち向いてんだ!こっちこっち!」

アクセルが声のした方を振り向く。

そこにいたのは

「青い……ジョーカー?」

ジョーカーと同じ姿。

同じドライバー。

違つのはボディの色。

「まさか……ミュージアム!？」

青いジョーカーは右手に持っている銃をアクセルに向けた。

「その通り。俺は仮面ライダートリガー。

よろしくな!」

「ミュージアムが何故こんな所に!？」

トリガーは銃をくるくると回し

「決まってるんだろ!？」

お前らに会いに来たんだよ」

「……なんだと？」

すると再び銃をアクセルに向けた。

「パンツ」

銃を発砲する真似をしてみせる。

「っていつのは冗談で…」

本当はお前の戦いを観察してきた」

トリガーはアクセルに背を向けて

「そういうわけだから、ジョーカーにもよろしくな」

そのまま走って窓ガラスを突き破って外へ飛び出した。

「ギヤアアア！ 足くじいたー！！」

何か悲鳴のような声がした。

「竜！！」

そこへジョーカーがやってきた。

倒れている服部を見て

「お！？倒せたのか！？」

しかしアクセルは何も答えない。

「……………どうかしたのか？」

「今……………アホが……………」

「……………アホ？」

P M 4 : 5 2 - - -

アース・リフォーム最上階『社長室』 - - -

「…それで？一連の事件の犯人は逮捕されたと？」

「はい、副社長」

副社長は窓から街を眺めながら

「その二人の犯人はグルだったのか？」

「いえ、警察によると二人は別々にガイアメモリを購入し、
たまたまこの会社に居合わせたと…」

「そっか……」

やっぱり冴子…じゃなくて社長帰って来たら怒ると思っつか!？」

「怒るでしょう!」

会社に警察が来たなんて聞いたら……」

「やっぱり怒るかなあ……」

副社長は頭をボリボリと掻く。

「でもこの会社がガイアメモリの製造、販売を行っているっていう
ことはバレてないぞ!？」

「でも多分怒りますよ?」

「そうか……………」

残念そうに街を眺める。

「二人ともメモリを購入したということは、一般社員だったのか?」

「おそらくは……………」

そもそもガイアメモリ製造について知っているのは開発部と僅かな社員。

その社員もこちらで全員把握してあります」

「まあ…なんにしても例の四人のデータを抹消するのに利用できたしな……」

「データ抹消に困ってましたもんね」

「来人君も人使いが荒いよ」

副社長は自嘲気味に笑った。

「ところで戦闘班の増員をしたいんだが……」

「また営業部から選ぶんですか!?!」

「ダメか!?!」

「ダメですよ！」

また行方不明事件だって騒がれますよ！！」

「……………とりあえず警察の上層部に圧力かけたし、あとは冴子が怒らないのを祈るだけか……………」

呟く副社長の目に少し涙が浮かんでいた。

「社長怖い人ですしね……………」

3月25日 - - -

AM 1:51 - - -

風都インターチェンジ - - -

この時間帯、走っている車は少ない。

とても静かな高速道路。

そこに銀色のオーロラのようなものが浮かぶ。

が、すぐに消えた。

高速道路に佇む人影が一つ。

「…ったく、あいつらどこに行ったんだか…」

若い男だ。

首からあまり見ない形のカメラをぶら下げている。

「……ん？ここは……」

男は辺りを見渡す。

「風都か？なんでまた……Wの世界なんだ？」

この世界をWの世界と呼ぶ男。

その瞳は何を映すのか……

Ｔとの邂逅／アホ狙撃手（後書き）

この度は更新遅れてすいません。

色々忙しくて執筆する時間を確保できませんでした。

只今10月下旬、このあとデイケイド編と番外編・園咲家珍事件を予定していますが、

センター試験が近いこともあり更新が今以上に遅くなります。

正直まだ話がほとんど進んでないので遅れたくはないんですが、センターをサボるわけにはいかないのです…

時間があれば更新したいと思います。

通りすがりのD/Wの世界…？（前書き）

更新がさらに遅れるみたいなのを言っておきながら

あっさり更新です。

なんかすいません……

通りすがりのD/Wの世界…？

3月25日 . . .

春。

AM 7 : 39 . . .

外は桜が満開。

園咲家 . . .

暖かくなり、多くの人が新しいスタートをきる季節。

そんな中、園咲若菜は叫んだ。

「なーーーーーい？」

何度目だろうか。こうして若菜が叫ぶのは。

来人は耳を抑えながら

「いつまで同じこと言ってるのさ!？」

「だってネックレス見つからないんだもん!!」

まだネックレスは見つかっていなかった。

ちなみに犯人は愛猫ミック

「ミックの奴…まだ返してないのか……」

「何か言った？」

来人はかなり小さく呟いたはずなのだが、若菜の聴覚は大変敏感である。

「そっだ！！来人の地球の本棚で検索すれば……」

「無理だよ。キーワードが少なすぎる」

とというのは真っ赤な嘘。

「じゃあいいわよ……！」

若菜は壁に拳を叩きつけた。

「Ya o o!の知恵袋とかツイッターを駆使してやるんだから！」

早速若菜は携帯を開く。

「そんな簡単にいくとは思えないね……」

来人は紅茶を啜った。

5分後 - - -

「お!？」

若菜の視線は携帯の画面に釘付け。

「……ほづ。そういつことやってくれる人がいるのね……」

そして若菜はメイドを呼び寄せる。

「ちょっと！タウ ページ持ってきて！！」

A M 8 : 2 2 . . .

風都警察署 . . .

朝早くから竜、刃野、真倉は会議を行っていた。

「うーん……消化不良な事件が多すぎないか？」

刃野は様々な事件の書類を机に置いた。

「そうですね…」

年始の車と運転手の切断事件に、町凍結事件、ビルの大穴事件…」

「それに大型ドーパントの灰化、囚人番号923番の件も」

竜と真倉が事件の書類を掲げる。

「処刑人ドーパントもあるしなあ……」

三人は頭を抱えた。

「……どう考えても……」

「人手不足……」

この部署はたった三人しかいないのだ。

にも関わらず事件が山積みである。

「刃野さん、人員を募集した方が……」

「真倉もそう思うか？」

「でも真倉さん、どこから募集するんですか？」

竜の質問に真倉は黙り込んだ。

そして三人のため息が部屋に響いた。

A M 9 : 5 1 - - -
左探偵事務所 - - -

「あの会社の事件から数日。

亜樹子はショッキングな事件現場に居合わせたらしいが…

どういふわけか、翌日には何事もなかったかのようにふざけている。

軽くトラウマになっていいはずだが…神経がアレなんだろう…」
スパアアン！！

亜樹子は軽やかにスリッパで翔太郎の頭を叩いた。

「なんかきつきからぶつぶつキモいんだけど!!」

「どござら口に出ていたらしい。」

ところで、ドーパントを倒した後にミュージアムの仮面ライダーが現れたらしい。

これで三人目。竜の話だとドライバーには青いガイアメモリが挿してあつたらしい。

赤、銀のメモリはビギンズナイトの時に俺がなくしたメモリと酷似していた。

おそらく青いメモリも」

ガンッ

翔太郎の頭にテレビのリモコンが命中した。

「なんで話聞いてへんのや!！」

翔太郎は机に突っ伏して微動だにしない。

「あーあ……」

最近依頼来ないし、竜君も仕事だし、暇すぎ了……」

投げつけたリモコンを拾いテレビの電源を点ける。

『…て芸能ニュースのほうにまいりましょう!』

亜樹子はソファーに寝っ転がる。

『最近では風都出身のアイドル、園咲若菜に恋人がいるのではと、

かねてからの噂ですが……』

「あ、園咲若菜のヒーリングプリンセスの時間じゃん」

立ち上がってラジオの電源に手を伸ばした。

ガチャ

「ん？」

ドアの開く音。

亜樹子がドアの方を見ると

帽子を被り、丸い眼鏡をかけ、マスクを着けた非常に地味な女性が入ってきた。

「あつ、依頼ですか？」

「え……あ、ここ左探偵事務所であってます？」

「あってますあってます！」

「ちや、どうぞどうぞ……！」

亜樹子に促され女性はソファーに座る。

そしてマスクを外した。

「……………？」

その女性の口元、どこかで見た気がする。

次は帽子を外した。

ストレートの長い髪。

これもどこかで見た気がする。

最後に眼鏡を外した。

やはりどこかで見た気がする。

「あれ……？」

亜樹子は女性の顔をのぞきこむ。

「なんか……ついさっき見た気が……」

『……そこですね、来月に園咲若菜のニューシングルが発売と……』

亜樹子はテレビを見た。

画面には微笑む園咲若菜。

そして女性を見た。

もう一度画面を見た。

もう一度女性を見る。

「あ……園咲若菜だ……」

事務所にやって来た女性、園咲若菜はにっこり微笑む。

「ぎいいやあああああ……！」

ほんっ……ほ……本物……!!?」

大慌てで翔太郎のもとへ駆け寄る。

「翔太郎君！起きて……!!本物の園咲若菜が……!!」

しかし翔太郎は気絶して目覚めない。

「起きて……!!翔太郎君……!!」

亜樹子はバケツに水を入れる。

「起きてよ……!!」

突っ伏している翔太郎の顔を上げる。

その様子は若菜も見ていた。

「……あれ？あの人……」

「いい加減起きんかー！ーい！ーい！」

亜樹子はバケツの水をぶちまけた。

バツッシャアアアア

「……………ゲッホ……………」

「よかった！気がついた！翔太郎君あれ！ー！」

翔太郎は何も言わず、亜樹子の指差す方向を見た。

だが口を開かない。

それに対して若菜は口が開きっぱなしである。

「……………えっと…何で二人とも黙ってるのかな？」

びしょ濡れの翔太郎は目を細めて口を開いた。

「亜樹子……………」

「おっ！？どうした翔太郎君！」

「油性ペンと色紙持って来なさい」

「おまかせあれ！！」

猛スピードで油性ペンと色紙を探しに行く亜樹子。

部屋には翔太郎と若菜だけ。

「えー……こんなびしょびしょで申し訳ないんだが、

何か依頼でも？」

「……………」

若菜は質問に答えない。

それどころか震えている。

「……………？」

おい大丈夫か？」

翔太郎は立ち上がった。

すると若菜は後退りした。

「……………何故!？」

「あ……………あなた……………あなたは……………」

「あ、こりゃ失礼。

俺は左翔太郎。ここの探偵だ」

「……………あなたが……………!？」

徐々に若菜の顔が真っ赤に。

そして膝がわらいだす。

「えっと……俺何かしたかな？」

そこまで言っつて翔太郎は思い出した。

以前自分が目の前のアイドルを尾行していたことを。

「あ……まさかあの時のことを……」

「え、あ………つと……その、えー……すいませんでした……」

突然頭を下げた。

頭を下げられた翔太郎は目を丸くした。

「ほんとすいませんでした……」

そうして若菜は全速力で事務所を飛び出した。

「あつたよ翔太郎君！色紙とペン！！」

つて……園咲若菜は？」

亜樹子が戻った時にはすでに帰ったあとだった。

「なんか……謝りながら帰ったんだが……」

「翔太郎君何したのよ？」

「……なあ？」

わざわざ取ってきた色紙とペンをソファアに放った。

その時

ガチャッ

再び扉が開いた。

「まさか!？」

「帰ってきた!？」

二人は扉に注目する。
入ってきたのは

「ヤッホー翔ちゃん!」

「元気してる!？」

入ってきたのは情報屋、クイーンとエリザベス。

「なんだ、お前らか…」

「なんだ…つて何よー!?」

「久しぶりに来てあげたのに!!」

「頼んでねえし…」

冷徹極まりない発言。二人は髪の毛を逆立てる。

「ひどい!!女子になんてこと言っの!?!」

「翔ちゃんそんなだからモテないんじゃない?」

二人の罵倒を無視して翔太郎はコーヒーを淹れる。

「無視すんな?!」

「せっかく翔ちゃんの友達連れてきたのに!!」

「友達？翔太郎君の？」

「うん、なんか翔ちゃん探してたから連れて来ちゃった」

「私たちも初めて見る人だよなー？」

二人は左右対称に首を傾げる。

翔太郎の友人。よく考えたら情報屋と刑事、竜以外の友人は見たことがない。

「…で？誰連れて来たんだ？」

翔太郎はコーヒを一気に飲み干した。

「それじゃ中入ってもらったら？」

「そだね。」

「おい！入ってきなよ！」

「……………」

「……………」

「……………入ってこないね？」

「下のガレージかな？」

エリザベスと翔太郎は事務所を出た。

事務所の下には少し広めのガレージ。

ハードボイルダーだけが停めてあるのだが、

そこに見知らぬ青年がいた。

まじまじとハードボイルダーを見ている。

「……おい、何してんだお前？」

翔太郎の呼び掛けに青年は振り返った。

「よお、翔太郎。ここ改築したのか？」

青年の言葉を聞き、エリザベスは翔太郎に

「改築したの？」

「してない」

青年はハードボイルダーに興味を示したのか、ずっと見ている。

「なんでハードボイルダー真っ黒にしたんだ？」

「最初から真っ黒だ」

「うそつけ。半分緑色だったじゃないか」

「半分？誰がそんな趣味の悪い……」

「ところでお前誰だ！？」

「知り合いじゃないの！？」

「こんな奴知らん！！」

すると青年は呆れ顔で

「まったく…一ヶ月そこらで共に戦った世界の破壊者の顔を忘れたのか？」

「「世界の破壊者？」」

エリザベスと翔太郎は同じ方向に首を傾げる。

「なんだお前、テロリストか？」

「違う！」

「テロリストが俺に何の用だ？」

「だから…もういいや。」

ちよつとまたWの世界に迷いこんでな……」

「「Wの世界？」」

再び首を傾げた。

「まさか国際テロリスト？」

「だからなんでテロリストを推すんだ!？」

わざわざ世界を救ってやったのに……」

「テロリストが世界救ってどうする?。」

「ふざけてるのか!？」

どつやら話が噛み合っていないようだ。

「さつきから世界とか破壊者とか……なんなんだお前？」

「翔ちゃん私知ってるよ。こついつの中二病って言うんだよ！」

二人は冷たい目で青年を見つめる。

「なんだその目は!？」

……もついい!お前らと楽しくふざけてるほど暇じゃないんだ!!

フィリップと話させる!!」

翔太郎とエリザベスは顔を見合わせた。

「フィリップってなんだ？」

「友達の名前とか？」

「お前ら…何言ってるんだ？」

「そりゃこっちの台詞だ」

「フィリップだぞ！？」

青年は階段を駆け上がり翔太郎に詰め寄った。

「フィリップだぞ！？お前の相棒の！！」

「いや…相棒はいないぞ？」

「はあ!？」

青年は頭を抱え込んでしまった。

「どっつなってる……」

俺を覚えてないしフィリップも覚えてない……

そつだ! 所長は!？ 照井は!？」

「あ? 竜のことか？」

所長って誰だ?」

「所長のこと知らないのか……?？」

「翔ちゃんのことじゃない?？」

「あ、なるほど…」

翔太郎は手をポンツと叩いた。

「違う！…あの鳴海なんとかっていう女だ！！」

「……………亜樹子のことか？」

するとエリザベスは事務所の扉を開けて

「亜樹子ちゃんって所長なの……！！？」

すると事務所の中の方から

「何の話……！！？」

青年は両手両膝を床につけてしまう。

「……違うみたいだね？」

「……結局、お前は誰なんだ？」

青年は素早く顔をあげた。

「本当に覚えてないんだな？」

「いや知らないんだが……」

「門矢士だぞ！？」

「一緒にあのワケわからんドーパント倒したたる！？」

それを聞いた翔太郎の表情が変わった。

「……ドーパントだと？」

…お前一体……」

「さっき言った通りだ。

俺は門矢士。世界の破壊者だ」

AM 11:10 - -

風都警察署 - -

まだ三人は頭を抱えていた。

「やはり一般公募しか…」

「一般人はダメですって」

たいそうくだらない話をしていると

『緊急事態発生！風花町三丁目トラックを次々と横転させている怪物が出現』

繰り返す、風花町……』

「刃野さん！」

「ああ、いくぞお前ら！！！」

三人は現場へ急いだ。

AM 11:10 - -
風花町三丁目 - -

ズウーーン

「ヌウウウン！」

ズズーン

警察署の放送の通り、風花町三丁目で怪物が大型トラックを次々と横転させていた。

その数およそ20台。横転したトラックの近くには運転手の亡骸。

「グスゲゲ！グスゲゲンザジヨ！！」

怪物は何かわけのわからないことを叫びながら暴れる。

街はすでにパニックに陥っていた。

「……フー……フー……」

ボボザソボザ？

ロドボゲザギビバゲセバギ……

フンッ！！」

ドガアッ

今度は片腕で軽自動車を弾き飛ばした。

「……アア、キサキサグス！」

ボグバダダサゲゼデツチボパギデジャス！！」

怪物は咆哮した。その時

「待ちなよ」

不意に声がした。

怪物が振り返ると、横転したトラックの上に少年が立っていた。

そしてそのトラックの側から怪物を体格のいい黒人の男が見つめていた。

「バンザゴラゲ？」

少年と黒人は黙っている。

「ゴラゲパザセザゾギデデンザー!!」

どうやら怪物は怒っているようだ。

少年はゆっくりと口を開いた。

「……………何言ってるかわかんないんだけど」

どつやら黙っていたのはこれが理由らしい。

確かに怪物の言ってることは濁点だらけだ。

「……ゴラゲ、ゴセゾザセザドコロデデス？

ズ・ザイン・ダザゾー！！」

「だから何言ってるかわかんないって」

側にいた黒人は腕を組んで頷いている。

怪物はおそらく怒りで全身が震えている。

「ボソギデジャス！！」

雄叫びをあげて怪物はトラックの少年めがけて突進した。

「……なんかわかんないけど、そういつのやめてよ」

突然、怪物の行く手を阻むようにまるで盾のようなものが出現した。

そして怪物の突進を弾き返した。

「!?!」

弾き返されてよろめく怪物に何かがぶつかった。

その勢いで地面を転がっていく。

「バ…バンザ?」

怪物が顔をあげると先ほどまではいなかった白い怪物が立っていた。

「なあ、お前も迷子だろ?」

少年はトラックから降り、怪物に近寄ってくる。

「俺たちもさ……帰れないんだよね。」

だから仲良くこの世界潰さない？いいもんあげるからさ……」

そう言うと少年は怪物に何かを手渡した。

「それ、ガイアメモリって言うらしいよ」

怪物はまじまじとガイアメモリを見つめる。

「それが仲間の証だ。」

仲良くやるーよ」

少年は無邪気に笑う。

その瞬間だけ、金色の装甲に大きな角の化け物の姿がフラッシュユバツクのように映った。

P M 2 : 3 3 - - -
左探偵事務所 - - -

「えー…なんだっけ。お前は……」

「門矢士だ!!」

ていつかこのやり取りをいつまで続けるんだ!？」

士と翔太郎の同じ内容のやり取りは四時間ほど続いている。

まだ土の名前と世界の破壊者だということしか話していない。

「じゃあ土。お前は何で俺たちを知ってるんだ？」

「だから……前この世界に来た時にあったからだ！」

同じ問答に亜樹子、クイーン、エリザベスは完全に飽きている。

「で、お前はその時に俺とフィリップって言うのと協力してドーナツを倒したんだな？」

「そつだ！俺がディケイドに、お前らはWに変身した！」

翔太郎は土の言うことを細かくメモする。

「……さっきから気になってたんだが、Wってなんだ？」

「…説明しなかったか？」
「してない」

士は小さくため息を吐いて

「Wとは仮面ライダーだ」

「…「仮面ライダー」!?」

反応したのは外野の三人。

「翔太郎とフィリップの二人で変身する仮面ライダーで……」

「そつえばお前は仮面ライダーなのか？」

「俺？Wじゃなくてジョーカーだ」

翔太郎はさらっと言った。

「???? ジョーカー？Wじゃなくてか？」

「そう言ってるだろ」

「「ちょっと待って!!」」

話をする二人の間にクイーンとエリザベスが割って入る。

「何！？翔ちゃん仮面ライダーなの!?!」

「……あ、つい口が……」

後ろのほうで亜樹子が

「ありやりや……」と天を仰いでいる。

「何でそんな大事なこと黙ってたの!?!」

「私たち友達じゃん!?!」

「うるさい!!今俺が話してんだ!!」

士は喚く二人を押し退ける。

「お前がWじゃなくてジョーカー……」。

「ってことはWの世界じゃなくてジョーカーの世界なのか?」

「いや知らねーよ……」

「そうか……ジョーカーの世界なら納得がいく……」

「あれ?話聞いている?」

翔太郎の呼び掛けを無視し士は事務所の中を腕組みをして歩き回る。

「だから俺のことわからないし、フィリップが存在しないのならわかるはずがない……」

「聞いてねーな、これ」

誰が何を言っても土の耳に届きそうもない。

「……ということはこの世界にも危機が迫ってるのか？」

「亜樹子、こいつつまみ出してくれ」

亜樹子は両手を挙げて首を横に振る。

「そつだ…写真館を探せばあいつらも……」

何か思い立って土は勢いよく事務所を飛び出した。

「え、あ…おいちよっと」

翔太郎が呼び止めたが時すでに遅し。

「……………勝手に帰ったね」「何がしたかったんだあいつは……………」

ブルルルルル…

誰かの電話が鳴った。

「つと、俺のか…」

翔太郎が画面を見ると

「竜」と表示されていた。

「なんかあったかな？」

早速電話に出た。

「もしもし、何か用か？」

『翔太郎か！？すまないが協力してくれ！！』

通りすがりのD/Wの世界…？（後書き）

今回、世界の破壊者が現れましたが、思ったほど内容詰まっていなかったことに書き終えてから気づきました。

次回一回でデイケイド編をつまいこと完結し話をいい加減進めます！！

でないと、永遠に終われない気がします…

まだナスカにサイクロンも出してないなんて……

通りすがりのD / 破壊者と泥棒とじゃじゃ馬 (前書き)

今回は大変長いです。

長い上に話が詰まってません。

ですので全部読みきれないという方は頭と終わりの3ページだけ読むことをオススメします。

通りすがりのD／破壊者と泥棒とじゃじゃ馬

3月28日 . . .

「そうか……わかった。

こつちも何かわかったら連絡する」

AM9：46 . . .

「はあ……」。

手がかりゼロか……」

左探偵事務所 . . .

竜からの捜査協力の要請から三日 . . .

竜からの要請。それは風花町三丁目に現れたドーパントの搜索、撃破というものだった。

目撃者によると数は二体。あるいはそれ以上。

一体はとんでもないパワーで大型トラックを横転させ

もう一体は超高速で移動する。こっちはある会社の防犯カメラにも映っていた。

「翔太郎君、私も聞き込み行ってくる！」

現在、消えたドーパントを追ってウォッチャマンやクイーン&m
p・エリザベス、

サントちゃんに亜樹子までが街中を駆け回っている。

「……………そろそろ俺も情報探しに行くか……」

ソフト帽を被り事務所の外に出ようとした。

が、ドアノブに手をかけた時、扉が開かれた。

「お？なんだ？」

扉の向こうにいたのは

「あ……お前は世界の破壊者……」

門矢士であつた。

「お前帰つたんじゃなかつたのか？」

士は何も答えない。

そしてフラツと事務所の中に入ってきた。

「おいこら！何してんだ！？」

「……………飯……………」

「……………飯？」

グギユルルルル

「……腹減ってんの？」

よく見るとげっそりしている。

「ハア……しょうがねえ……」

10分後 - - -

ドンッ

「いやあ〜……悪いな。
飯いただいたちまって」

士は机に器を置いてつまようじをくわえている。

「お前……作りおきしといたカレー全部食いやがって……」

これで本日の晩御飯は無し

「……ところでお前ここ数日何してたんだ？」

「ん？……ああ、写真館探してたんだ」

「写真館？」

「知らないならいい」

「見つかったのか？」

「いいや……」

なんだか寂しそうな目をしている。

翔太郎がその写真館とは何なのか、聞いたただそうとした時

ブルルルルルル…

翔太郎の携帯が鳴った。

「おっと失礼……」

画面には『サンタちゃん』と表示されている。

「もしもし？どうしたサンタちゃん」

『翔ちゃん！？今なんか風花町三丁目にパトカーが沢山止まってるよ！』

「本当か？どこに？」

『三丁目の廃工場！』

「わかった。行ってみる」

翔太郎が携帯を切ると

「どうした翔太郎。なんか事件か？」

士は偉そうに足を組んで座っている。

正直イラッとした翔太郎はそっけなく

「なんでもねえよ……」

「ドーパント絡みか？」

「なんでもねえって」

翔太郎はソフト帽を深く被った。

すると、

「翔太郎……お前ちょっとハードボイルドっぽいな……」

「…あ？何言ってるんだ？」

「いや、Wの世界のお前はハードボイルド目指してたからな……」

「そいつは良かったな」

そう言って翔太郎は事務所を飛び出していった。

一人取り残された土は食器を片付ける。

「やっぱりハードボイルドじゃなくてただガラが悪いだけか……」

土もあとを追うように事務所を出た。

AM 10:22 - - -

風花町三丁目の廃工場 - - -

サンタちゃんの情報通りパトカーが何台か止まっている。

「うわあ!?!」「やめろ!落ちて着け!!!」

警官たちの悲鳴が聞こえる。そこに一台のバイクが止まった。

「……………ここか…」

ヘルメットを外してバイクから降りた。

しかし現れたのは翔太郎ではなかった。

「風都署の照井です！ 応援連絡を受けて来ました！」

バイクでやって来たのは
刑事、照井竜。

竜を見て警官たちは敬礼する。

「状況は？」

「はい、一人の大男が聞いたことのない言語で叫びながら暴れていました…」

警官は視線を暴れている大男に向けた。

竜もその方向を見た。

数人の警官が同時に取り押さえようと飛びかかるが、吹き飛ばされていく。

「ご覧の通り手がつけられなくて…」

大男はまるでレスラーのような出で立ちで肩に刺青が見える。

その上息が荒い。

「薬物中毒かな…」

すると大男は一台のパトカーの上に立った。

「フウ……フウ……」

レンゾブゲゲ……ボセザベガダセダサログギギザソグ……」

大男は肩をかきむしりながら訳のわからないことを言っている。

「やっぱり薬物中毒ですよね？」

「ですかね……」

竜と警官が悠長なことを言っていると

「又ウウウアアアアアアアア！」

大男が雄叫びをあげた。同時に大男の体の変化を始めた。

「っな……」 「なんだあれ……」

やがて大男はサイのような角の化け物へと変貌した。

「ドーパント!?」「バカな…メモリも無しでどうやって!?!」

「撃て!とにかく撃て!」

警官たちは拳銃を取り出し一斉に発砲した。

ドンドンッドンドンッドンドンッ!

嵐のように弾丸が放たれる。しかし化け物に被弾した途端、

全ての弾丸は化け物を貫くことなく地面に落ちていった。

「な!?!」「……嘘だろ……」

今までのドーパントは効果は少なくても通用していた。

が、この化け物は全く通用しない。

「まずい……撤退だ!!」

全員撤退するぞ!!」

状況からすると圧倒的に警官たちは不利だ。

故に竜は全員に撤退命令を出した。

警官たちが撤退を始めるより早く化け物は襲いかかった。

「がつ!」「ぎゃああ!」

「構うな!!走れ!」

竜は一人発砲し続けて化け物の意識を集中させる。

そして警官たちから引き離すために少しずつその場を離れる。

「ヌウ……………フンツ!!」

竜の思惑通り、化け物は竜一人を追いかけてきた。

「こつちだ化け物!!」

そのまま竜と化け物は狭い路地を駆けていく。

そして十分引き離れたところで竜は立ち止まった。

「お前がどこの国のドーパントとか……聞きたいことあるけど、その前にお前を倒す!!」

『アクセル!!』

「変……身!!」

腰に装着したアクセルドライバーにメモリを挿す。

紅い閃光に包まれて仮面ライダーアクセルに変身した。

「さあ……どこからでもかかって来い！」

「又アアアア！」

化け物は雄叫びをあげて真っ直ぐ突っ込んでくる。

アクセルはエンジンブレードを構え、横一閃に振るう。

が、この後、アクセルを予期せぬ事態が襲った。

ガンッ

「ん？」

妙な金属音がした。

エンジンブレードの切っ先を見ると壁に突き刺さっていた。

「……………！ 狭すぎた！！」
入った路地が狭すぎてエンジンブレードを扱えない、
ということに失念していた。

「又ん！！」

当然化け物はその隙を見逃すはずもなく、アクセルは吹き飛ばされた。

「ぐあっ！！またしても凡ミス……………」

転がるアクセルに化け物が追い討ちをかける。

「ぐっ！！」

腹部に蹴りをくらって苦しむアクセルに化け物は拳を振り上げている。

「……………やば……………」

消えそうな声で呟くアクセルの目には振り下ろされる拳がはっきり

と映った。

ドンッ

鈍い音が路地に響く。

それはアクセルが殴られた音ではない。

アクセルが顔を上げると化け物が顔面から転がっていく。

「ったく……何してんだか」

声のした方を見ると、黒いソフト帽を深く被った翔太郎がそこにいた。

「翔太郎……！」

『ジョーカー!!』

「変身……」

ジョーカーメモリをロストドライバーに挿して仮面ライダージョーカーに変身する。

「ところで竜、こいつはなんだ？」

「……異国のドーパントだ」

「応言っておくと、竜は決してふざけてはいない。

仮面で隠された表情はいつだって真剣なのだ。

「…ふざけてんのか？」

そんなことを知らない翔太郎が心無いような反応をするのは仕方がない。

「いやいや、あいつ何言ってるかわかんねえって!!」

「お前、そんな面白くもなんともないこ」

「バンザゴラゲ？」

聞きなれない言葉にジョーカーは耳を疑った。

「ほら見る」

アクセルの言葉にも耳を傾けることなく動きが止まっているジョーカー。

「…ゴラゲバレンサギザガバ？」

何か質問しているのだが、二人のライダーにはわからない。

「…ゴギ、バンドバギゲ」

「うるせえ!!」

ガッン!

いきなりジョーカーは化け物を殴り飛ばした。

「何言ってるか全くわかんねんだよ!!ここ日本だから日本語で話せ!」

化け物は殴られた頬を押さえて立ち上がる。

「ギビバシバビグスンダ!」

「やつかましい!!」

化け物が押さえている頬の反対側を思いつきり殴る。

「もういい!話のわからん奴はこつだ!!」

『ジョーカー！！マキシマムドライブ！！！！』

「ライダーパンチ！！」

両の頬を押さえる化け物との距離を一気に詰める。

「うおるああああ！！」

ジョーカーは発光する右腕を化け物めがけて放った。

はずだった。

ドンッ

「！？」

何かジョーカーに衝突しその衝撃でジョーカーの体が宙を舞う。

「翔太郎！？」

ガガンッ

宙を舞うジョーカーにさらに何か衝突する。

しかしアクセルにはその何かがわからない。

「ぐはっ!?!」

地面に叩きつけられるジョーカー。アクセルが駆け寄りつつとした時、

ガンッ

何かが今度はアクセルに襲いかかった。

「うお!?!」

よろめくアクセルを畳み掛けるように何か繰り返して衝突する。

衝撃に耐えかねたアクセルは地面を転がっていった。

「……くそ…何なんだ一体…」

「……おい竜」

「なんだ？」

「ありや誰だ？」

ジョーカーが指差す方を見ると、体格のいい黒人の男がこちらに向かって来ている。

「まさかあれも…」

エンジンブレードを支えに立ち上がろうとした時、

突然アクセルの目の前に白い化け物が現れた。

「なっ……」

アクセルが反応するよりも早く白い化け物は二人を突き飛ばす。

「がっ！」

再び地面を転がる二人。

「かっ……は……」

「こいつか……超高速で移動するドーパントは……」

角の化け物に白い化け物、そして異様な雰囲気黒人の男。

「これはヤバイんじゃないか？」

「かもな……」

二人は立ち上がって身構える。

すると

「あんたらがこの世界の仮面ライダー？」

化け物たちと黒人の男の奥から赤いジャケットの少年が姿を見せた。

「……誰だ？」

「この世界の仮面ライダーって……」

少年は化け物たちの前に出た。

何故か片手にポテトチップスの袋を持っている。

「九州醤油味……」

「おい、お前今この世界の仮面ライダーって言ったたよな？」

「んー…言ったけど？」

少年はポテトチップスの袋を開けてバリバリ食べ始めた。

「お前も違う世界から来たのか？」

「来たって言うか迷子なんだよね。なんて言うか…不本意ながら来たって感じ」

話している間もポテトチップスを食べるのを止めない。

「異世界からの来訪者がこの世界に何しに来た？」

「だから迷子だってば」

少年はあっという間にポテトチップスを食べあげた。

「まあ何かするとしたら君たちを倒すとかかなあ…」

「何だと？」

「だってする事ないし、君たちを倒せば元の世界に帰れるかもしれないしね…」

袋をぐしゃぐしゃにして少年は不敵に笑った。

「なるほど…そういうことが…」

不意に頭上から声がした。全員が上を向く。

建物の屋上から奇妙な形のカメラを首からぶら下げた青年が見下ろしていた。

「……土か？」

「ふじとー…」

するといきなり屋上から飛び降りた。

「ええ!？」

「飛び降り!？」

ライダー二人も化け物たちも少年も呆気にとられる中
華麗に青年、門矢士は着地した。

「うお!？着地したよおい!!」

華麗な着地に興奮するアクセルを無視し、ジョーカーは土に駆け寄る。

「お前何でここが？」

「この辺りが騒がしかったからな…大体わかったさ」

そして士は少年の方に目を遣る。

「グロンギにワーム、おっとオルフェノクもか…」

「何言ってるんだ？」

士は質問に答えず一歩前に出た。

少年は顔をしかめて

「お前何者？なんでこいつらのことを知ってる？」

「そついつお前はキングのくせに俺のこと知らないのか？」

「答えになってないね。」

質問してるのはこっちだ」

士は深呼吸して、ため息を吐いた。

「んなんじゃそら！」

後ろでアクセルがずっとこけるが誰も取り合わない。

「まったく…俺のことを知らないアンデッドがいるとは…」

士は懐から白い何かを取り出す。

そしてそれを腰にあてると白い何かからベルトが飛び出し、腰に装着される。

「なんだそれ！？ドライバーか!？」

「…今から俺が決め台詞言っから黙ってくれ……」

士は咳払いをして一枚のカードを取り出した。

「それじゃ自己紹介だ。」

俺は……

通りすがりの仮面ライダーだ！覚えておけ！！

変身！！」

『KAMEN RIDE DECADE！！』

士がカードをベルトのバックルに挿入すると

電子音と共にスーツと装甲が士を包んみ、さらに顔を仮面が覆う。

そしてバックルから飛び出したカード状のものが仮面に突き刺さった。

「うわーーーー！！刺さったーーーー！！」

大興奮のアクセル。

ジョーカーも開いた口が塞がらないみたいな顔（？）
をしている（????）。

「まさか……お前ディケイド!?」

キングと呼ばれた少年に化け物たちも驚いている。

「やっとわかったか……」

なんにしてもこの世界をぶち壊すようなことはせん」

「ん?」

今の士の発言、もといディケイドの発言に少し引っ掛かるところが。

「お前世界の破壊者じゃなかったか?」

「……………」

勝負だキング!」

「おいおまっ……………いや、もういい……………」

アクセル、ディケイド、ジョーカーが並んで身構える。

「4対3か…。誰が二人と戦う？」

そんな相談をすると、

「ああ、さすがにこれは卑怯だね。

いいよ。最初は手え出さないから」

キングは跳躍せずに浮遊し建物の屋上に降り立った。

「がんばりなよ」

「うち。呑気な奴だな…」

相手はグロンギと呼ばれる角の化け物、ワームと呼ばれる白い化け物。

そして黒人の男。

「誰が誰と戦った？」

アクセルが訊ねた途端、ワームが姿を消した。

「！ 来るぞ！！」

アクセルとジョーカーが構えるが、ディケイドは落ち着き払ってカードを取り出す。

『ATTACK RIDE CLOCK UP』

するとディケイドも姿を消した。

「あいつも高速移動できたのか……。」

ちとと……。」

ジョーカーが残った二人の方に向き直った瞬間、グロンギがアクセルに突進した。

「竜!!」

ズンッ

「…大丈夫だ…」

アクセルは突進をしっかりと受け止めていた。

「こいつは俺にまかせろ！」

「フウンッ!!」

グロンギはそのままアクセルを引きずっていく。

「…うおおお!!?」

アクセルの叫び声が聞こえてくるが助けに行くことはできない。

ジョーカーは目の前の男から目を離さない。

「あなた、確かオルフェノクと言ったな？」

変身しないのか？」

すると男は上着を脱ぎ捨てた。

「ウウウアアアアアア！」

絶叫と同時に体が変化し始める。

メキメキメキメキ……

男は全身灰色のまるでワニのような姿へ変貌した。

「…へえ。カッコいいじゃん」

オルフェノクの掌から蒼い炎が吹き出し大剣へと変化する。

「おいおい…そんな剣じゃ振り回せないぜ？」

オルフェノクはジョーカーの忠告に耳を貸さず大剣を振るった。

そこで剣が壁に刺さって使い物にならなくなる。

そう思っていた。

しかし、オルフェノクの大剣は壁を抉りジョーカーに向かってくる。

「マジかよ!？」

とっさにしゃがんで避ける。

が、オルフェノクの攻撃は続く。

大剣を振る度に壁が抉れ、コンクリートの破片が飛び散る。

「なんつー馬鹿力だよ!？」

ん？」

跳躍して後退したジョーカーはあるものを見つけた。

「あれは…竜の?」

見つけたのは壁に刺さったエンジンブレード。

「ハアアアア!！」

後ろからオルフェノクが大剣で襲いかかってきた。

ギインッ！

ジョーカーはとっさにエンジンブレードを引き抜き攻撃を受け止めた。

「悪いな竜。ちょっと借りるぜ？」

一方エンジンブレードのないアクセルは

「っおおりゃあー！」

ドズンッ

「又ウツ!？」

警官となる時に覚えた柔道の投げ技で思いっきりグロンギを投げ飛ばした。

「おりゃあ!!」

立ち上がるうとするグロンギにボディープローを放つ。

が、

「…フンッ……ビバンバ…」

何を言っているかわからないが、ダメージは少ないようだ。

「ハアッ!!」

今度はグロンギがパンチを繰り返す。

それを前転して避け、背中を蹴飛ばした。

「これなら……いけるー！」

よろめくグロンギに飛び蹴りをして、さらに何度もパンチを叩き込む。

ドスンッ ドンッ ドンッ

「グッ……グオ……」

「はっ！！」

スパアアン！

アクセルの綺麗な回し蹴りがグロンギの角に命中した。

「アゲアアア！」

悶え苦しむグロンギ。

『アクセル！！マキシマムドライブ！！！！』

マキシマムドライブを発動させるとアクセルは姿勢を低く構えた。

そしてグロンギめがけて走りだす。

「おおおおおおお！！」

迫りくるアクセル。グロンギはよろめきながらふんどしのようなところから

一本のガイアメモリを取り出した。

『プテラ！！』

ギン！ ギン！ ガキイイン！！

狭い路地で大剣を振り回すオルフェノク。

その剣撃をいなしながらなんとか受けるジョーカー。

「っち！ここじゃ少し狭いか…」

ジョーカーは壁を蹴って屋上まで一気に駆け上がった。

屋上に着地してオルフェノクが上がってくるのを待つ。

「……………」

上がってこない。

「……………あれ？」

屋上の端にいき、下を見よつとした時、

ズガガガアアアン！

下から突然蒼い炎が建物を削り取りながら吹き出した。

その炎の中からオルフェノクが飛び出す。

ギイイイン

「不意討ちか……………」

ふざけやがって……………」

お互いに離れて間合いをとり、剣を構えた。

「ちとと……」

……なんだあれ？」

剣を構えたジョーカーの目にあり得ない光景が飛び込んできた。

「うわあああああ!？」

何か大きな鳥のようなものが真っ赤な何かを掴んで飛んでいる。

真っ赤な何か。ジョーカーにはすぐわかった。

「……………竜！？なんであんなことに!？」

足を掴まれて何もできないアクセル。

掴んでいるのはプテラのガイアメモリを使用したグロンギ。

先ほどの角はなくなり、代わりに顔が長くなった。

そして筋肉で覆われた腕は大きな翼となった。

そして足を掴まれて空の旅。

グロンギは足を掴んだまま近くの建物に向かって真っ直ぐ飛んでいく。

「ちょっと…止まれ!！」

止まらなくて!！」

アクセルの悲鳴も虚しく、建物の壁に打ちつけられた。

「あゝあつ……………」

しかし Gronki は片方の足でアクセルの顔を壁に押し付けた。

そのままアクセルを引きずっていく。

ガガガガガガガガガッ

「つつあゝあゝあゝあゝああああ！！！」

アクセルのボディと壁が擦れて火花が散る。

そのまま他のビルに叩きつけられた。

ドオオン！

「っ……………！」

全身の痛みを堪えながらアクセルは立ち上がる。

そんなアクセルの目の前にグロンギが降り立った。

「ギゾドギジャツザ

ロドドダバギドボソバサダビツベデジャス」

「……………はっ……………。何言ってるかわかんねえよ……………」

毒づくアクセルをグロンギの足が掴み、再び空へ舞い上がった。

先ほどよりも高く、さらに高く上昇していく。

「……………ちょっとどこまで飛ぶんだよ！？」

下を見ると風都タワーが米粒のようである。

こんな高さから落とされたらひとたまりもない。

「この高さはまずいな……」

「ガガガドギベ！」

案の定、グロンギはアクセルを放した。

が、

ガッ

「!?!」

なんとアクセルは逆にグロンギの足を掴んでいる。

「お前一人助かると思ったら大間違いだ！」

『アクセル!!マキシマムドライブ!!!!!!』

「ふんっ!!」

腕力と腹筋で自分の体を持ち上げ、グロンギの翼に蹴りを叩き込んだ。

「又ウツ!？」

強烈な一撃を翼に叩き込まれてグロンギはバランスを崩し始める。

やがて地上にまっ逆さまに落下し始めた。

「オオオオオオオ!？」

「おおおおおおお!」

ドオオオーン!!

遙か真下のビルに二人は激突した。

正確にはアクセルはグロンギをクッションにしていたので激突したのはグロンギー人。

アクセルはそのままビルから飛び降りる。

「ハア……ハアッ……」

これは効いただろ……」

勝ち誇ったように見上げる。

しかしグロンギはまだ羽ばたこうとしていた。

「しぶとい奴だなまったく！」

そう言うとドライバーをベルトから外し、宙返りをしてバイクフォームに変形した。

エンジンを吹かして真っ直ぐビルに向かう。

「よっどー！」

なんと、そのままビルの壁を垂直に走り出した。

走りながらアクセルはドライバーのアクセルメモリを抜き、

代わりにエンジンメモリを挿す。

『エンジン！！マキシマムドライブ！！！！』

電子音が響くと同時にホイールから火花が散って発火、やがて炎がアクセルを包む。

それを見たグロンギはビルから飛び立った。

しかしアクセルはスピードを上げる。

「絶望がお前の！！」

飛び立ったグロンギめがけてアクセルはまるで弾丸のように翔んだ。

「ゴールだああ!!」

ビルを発射台に翔んだ炎の弾丸は、逃げよとしたグロンギを貫いた。

「ゴアッ……!!」

ドオオオオオオン

「おー……竜の奴勝ったみたいだな」

グロンギの爆発は離れた場所にいるジョーカーにもしっかりわかった。と、

「又アア!!」

ブオンツ!

「おっと!」

とっさにしゃがんだジョーカーの頭をオルフェノクの大剣が掠める。

「ハッ、不意討ちが好きらしいな!」

ジョーカーもエンジンブレードで応戦。

ギャリン! ガキイン!!

二人の剣がぶつかる度に火花が散る。

「フウンツ!!」

「おらっ!」

ガン!

まったくの互角。お互いに一太刀もいれなのままずっと斬り結んでいる。

「ガアアアア！」

ブオン！

ブン！！

徐々にオルフェノクの攻撃が大振りになってきた。

「どうしたあ！？焦ってんのか！？攻撃が大振りすぎるぜ！」

ジョーカーはオルフェノクが大剣を大きく振り上げたのを見計らって懐に飛び込む。

そして

ザンツ！！！！！！

肩から腹部にかけて切り裂く。

「ガッ……」

「もういつちよー!」

ズバンッ!

そのまま大剣を握っている腕を斬り落とした。

「ガアアアアアア!」

オルフェノクを蹴飛ばし、ジョーカーは距離をとって構え直した。

「バハッ……ハアッ……ハッ……!!」

「どうした? そんなもんか?

まだ何かあるなら出し惜しみするなよ」

余裕たっぷりのジョーカー。

エンジンブレードをぐるぐる回している。

「……………アア……………」

オルフェノクから小さな呻き声のようなものが洩れる。

すると掌から再び炎を吹き出した。

「もう一回剣で勝負ってか？」

しかしジョーカーの予想は外れた。

炎は先ほどの剣よりずっと小さなものを形成する。

「……………ガイアメモリ？」

オルフェノクが形成したのは灰色のガイアメモリだった。

それを自分の胸に押し込んだ。

『ブラキオ!!』

「ブラキオ？」

ほどなくして、斬り落とされた腕が再生した。

が、斬り落とした腕よりも何十倍も大きい。

「……なんだそりゃ？」

ジョーカーが疑問を口にした途端、オルフェノクの両足が何十倍にも膨張した。

ズンッ

オルフェノクの立っている足場が陥没する。

さらに残った腕も膨張。どんどん胴体が膨れ上がる。

ビシッ

「あ？なんだ今のは？」

ジョーカーが足下を見ると足場にたくさんの亀裂が入っている。

「おいおい……まさか……」

視線をオルフェノクに戻すとどんどん首が伸び、顔が大きくなっていく。

次の瞬間

ズドン！！

「なっ……ビルが……」

どンドン大きくなるオルフェノクの重みに耐えかねてビルが崩壊した。

「なんて重さだよ!」

崩れていくビルの瓦礫を蹴って隣のビルに跳び移る。

「なんのメモリ使ったらこうなるんだ」

「ギャシャアアア!」

崩れていくビルの瓦礫の中から突然、巨大化したオルフェノクの顔面がジョーカーめがけて飛び出した。

「はっ!?!」

突然のことでジョーカーは防御することも出来ず、さらに隣のビルまで吹き飛ばされる。

「ウガアアアアアア！」

咆哮するオルフェノク。

メモリの力で巨大化し、まるでブラキオサウルスのような姿と化した。

全長は長い首を含めておよそ25m。

「……………つてえ…クソッ……………」

でかすぎだろ?」

さすがにジョーカーもこんな巨大な化け物を相手にするのは初めてである。

巨大な姿に呆気にとられているとオルフェノクは大きな首をジョー

カーのビルに叩きつけた。

ズドオオオン！！

とんでもない威力にビルが一撃で崩壊する。

ジョーカーはなんとか回避し、さらに隣のビルに移った。

「なんて破壊力だ……」

ふとオルフェノクの方を見ると大きく口を開けていた。

口の中は蒼い炎でいっぱい。

「おい……マジか！？」

危険を察知し、もう一度別のビルに跳び移ろうとした。が、

ドオオン！！

跳び移るより早く、オルフェノクの顔面に炎の塊が激突した。

オルフェノクの蒼い炎と対照的な紅い炎。

それはビルの上に着地して再びオルフェノクめがけて飛んでいく。

「ゴウラアアアア！！」

飛び出した炎の塊に向けて蒼い炎を吐き出す。

ジョーカーはその隙にオルフェノクの死角に回りこむ。

オルフェノクはジョーカーに気づかず、紅い炎を撃ち落としている。

「……だ！」

エンジンプレードを逆手に持ち、オルフェノクの頭部めがけて跳躍する。

「うおらああああ!!」

ズドツ!!

見事、オルフェノクの巨大な左側頭部にエンジンプレードを突き立てた。

「!? ウガアアアア!」

「うお!」

よほどエンジンプレードが痛かったのか、オルフェノクは首を大きく振って暴れ始めた。

「アアアアアアア!!」

「うわあ！馬鹿…落ちるって…！」

全力でエンジンブレードにしがみつくとジョーカー。

しかし

ガチャン

「！？折れた！？

あ……」

突然エンジンブレードが折れ曲がった。

元々そういう構造なのだがジョーカーは驚いた。

驚きすぎてエンジンブレードから手を離してしまった。

「あああああ〜!?!?」

力なくジョーカーの体は落下を始める。

何度ももがくが何も掴めずに落ちていく。

「翔太郎!?!」

不意に竜の声があった。

ゆっくりと落ちていくジョーカーが見たのは
こちらに向かって飛んだアクセル。

「竜!?!?」

綺麗にジョーカーをバイクフォームで受け止め、近くのビルに着地した。

「よかった！間に合った！！」

ジョーカーはアクセルの背中から降り

「……………竜。お前…その体はどうなってんだ？」

「??？ どうって…元々そういう造りだし…」

「あ……………さいですか…」

そつだ竜、お前の剣折れてしまった…」

「……………多分元々そういう造りだと思っぞ？」

「マジか！？」

アクセルの一言でジョーカーは胸を撫で下ろした。

「多分折れたところにマキシマムスロットがあるから元々……」

「そうかそうか……」

それを聞くとジョーカーはオルフェノクに刺さっているエンジンブレードを見つめた。

「よし、竜。俺をあいつの顔のどこまで連れてってくれ」

「じゃあついでに乗ってくれ」

『エンジン！！マキシマムドライブ！！！！！！』

再びアクセルを紅い炎が包み込む。

「さっきのお前だったのか…」

咳きながらアクセルに跨がりオルフェノクめがけて飛び出した。

「グルルルル……」

オルフェノクは二人の方を向き、蒼い炎を吐き出した。

「行け！翔太郎！！」

「おつよー！！」

炎に当たる前にジョーカーはアクセルを蹴って高く飛び上がった。

「うっおおおおおー！！」

高く舞い上がりオルフェノクに突き刺さるエンジンブレードをじっ
かり掴む。

「よし！届いた！！」

あとは……これか？マキシマムスロットは……」

ジョーカーは自分のメモリを装填、引き金を引いた。

『ジョーカー！！マキシマムドライブ！！！！』

「起動したっ！！」

どうやらどのメモリでも起動できるらしい。

ズンッ……

「カッ……」

マキシマムドライブが起動した影響か、紫色の巨大な光の刃が貫通した。

「よし……」

いっくぞおおおおおおお！

トトトトトトトトトトトトトトトトト

オルフェノクの長い首を蹴って一気に首を切り裂きながら駆け降りていく。

「おおおおお！」

トトトトトトトトトトトトトトトトト

「……」

ザンツ！

一気に地上まで駆け降りて最後にエンジンブレードを振り抜き、巨大なオルフェノクを両断した。

「ガアツ…………アアア…………」

全身から蒼い炎を吹き出し大量の灰となって消滅した。

「ハア…………ハア…………
なかなか強いな…………」

これで残るはあと二体。

「翔太郎……！」

アクセルが両手を振りながら向かってくる。

まだ敵はいるのだが。

「おーい竜。まだ敵はいるんだぞ?」

「でも一体はさっきのディなんとかケイドが相手してんだろ? だったら」

ドオオオン!

「おわあっ!」

突然の爆音と誰かの叫び声。

瞬時に二人は身構える。
すると

「だあああ!」

先ほどの仮面ライダー、ディケイドが路地から転がってきた。

「え？ディケイド？」

ジョーカーの声にディケイドは気づき、

「そこ危ないぞー!!」

「は？何言ってる…」

ドオン!!

突然、二人の目の前に巨大な化け物が落ちてきた。

「ん？、なんじゃこりゃあ〜!？」

それは全身が白く、体長は6m以上はありそうな恐竜のような出で

立ちをしている。

「さっきの奴のほづがでかくないか？」

などと呑気なことをアクセルは言っているが6mだって十分でかい。

「そついつ問題じゃねえよ！！」

「フツ！！」

いきなり化け物は尻尾で攻撃してきた。

なんとか避けると二人はディケイドのところまで転がる。

「おいディケイド！あいつなんだ！？」

「ワームだ」

「嘘つけ！！」

「ゴジラとかいうメモリを使ったらああなった」

アクセルはそれを聞いてワームをじっくり見つめる。

「全然ゴジラぽくない…」

「何を想像してんだお前…」

「とにかく気をつける。」

あの図体で高速移動するぞ」

ディケイドが忠告した途端ワームが姿を消した。

「言ったそばからアッ!？」

「があっ!?!」

「うっ!?!」

一瞬で三人とも蹴散らされ地面を転がっていく。

「くっ……あの図体で……」

「速すぢ……」

倒れている三人のもとにワームはゆっくり地響きをたてながら近づいてくる。

「なんとかなんねえのか!?!」

「……こついつ時にあいつがいたらな……」

ゆっくり、確実に近づいてくる。

「あいつって誰だ!?!」

「……こそ泥だ」

「泥棒がなんの役にたつんだ!?!」

するとアクセルが

「……おい、止まったぞ？」

「何がだ!？」

「化け物……」

アクセルに言われ、二人がワームを見ると足を止めている。

「……………何で？」

「何か……………見つめてるのか……………?」

ワームは三人の向こうを見たまま視線を全く動かさない。

三人は同時に振り返った。

「……………」

何だあれ……………」

三人が見たもの。それは銀色のオーロラ。

「まさか……………」

そのオーロラの向こうから誰かやってくる。

「やっと見つけたよ士……………」

現れたのは帽子を被った若い男。右手には青い銃が握られている。

「…海東！」

「怪盗！？」「」

海東と呼ばれた男は銃をくるくる回し、

「おや、どうやらナイスタイミングで来てしまったみたいだね……」

巨大なワームを見ても微塵も動じない。

「……なんだあんた？今どこから……」

「……………」

海東はジョーカーの話に耳を貸さずにディケイドの方を見た。

「土らしくないな。こんな雑魚にてこずるなんて」

「おい！話聞けよ！」

お前誰だ！？」

今度はジョーカーの方を向いた。

「僕が誰かって？その土と同じさ」

「同じ？こいつと？」

海東はポケットから一枚のカードを取り出した。

「そう。僕も……」

通りすがりの仮面ライダーさ

カードを銃に装填、銃口をワームに向ける。

「さあ、いくよ？」

変身……！！

『KAMEN RIDE D・END……！！』

海東が引き金を引いた瞬間、カードのようなものが銃口から飛び出し
フォームに命中した。

「おお!？」

大興奮のアクセル。そして海東をディケイドと同じようにスーツと
装甲が包んだ。

銃口から飛び出したカードは跳ね返って顔面に突き刺さる。

「また刺さったー!？」

「うるさい竜!！」

お前も仮面ライダーだったのか!？」

「ああ。仮面ライダーディエンドだ。

以後よろしく」

丁寧に自己紹介をした仮面ライダーディエンドの頭をディケイドが叩いた。

「ったあ！何するんだ！？」

「自己紹介なんてしてる暇はない！

さっさとやるぞ…」

「ああ、大丈夫さ。僕一人でやれる」

ディエンドは二枚のカードを取り出した。

と同時にワームが再び高速移動を開始、姿を消した。

「また高速移動か！？」

ディエンドは落ち着き払ってカードを装填する。

『KAMEN RIDE ALTERNATIVE!!』

ディエンドが引き金を引くと、黒い装甲の戦士が現れた。

「また仮面ライダー!?」

するとディエンドは人差し指を振り、

「惜しいね。厳密には仮面ライダーじゃないのさ」

ディエンドは戦士の肩を優しく叩く。

「さあ、お行き…」

戦士は腰に着けたベルトのバックルから二人のライダーとは違うカードを取り出した。

そしてカードを右の手甲にスラッシュする。

『ACCICLE VENT』

次の瞬間、黒い戦士が視界から消えた。

ズダアアン！

突然ワームが先ほどの黒い戦士にねじ伏せられて姿を見せた。

「な……あんなデカブツを一人で……」

驚くジョーカーたちをよそにさらにカードを装填する。

『KAMEN RIDE RYUKI!!』

引き金を引くとさらに別の赤い騎士のような仮面ライダーが現れる。

すかさずディエンドはさらに二枚のカードを装填した。

『FINAL FORM RIDE RYUKI!!』
『FINAL ATTACK RIDE RYUKI!!』

ディエンドは先ほどのライダーの背後に回り

「痛みは一瞬だ…」

仮面ライダーの背中に銃口を押し付けて思い切り引き金を引いた。

「あゝっ……」

思わずつめき声を洩らす仮面ライダー。「撃ったああ!？」

興奮が止まらないアクセル。今日は一体どうしたといのか…

撃たれた仮面ライダーの手足が構造上あり得ない方向に曲がり、装甲が現れたりなどどどんどん変形していく。

「なんだこれは……」

やがてそれは赤い龍へと変形した。

「なんでそうなる!？」

変形し終わったところでディエンドと龍は同時に舞い上がる。

そして空中で全身をひねって回転する。

「やあああああああー!!」

赤い龍が火を吹き、その火を纏ってディエンドは飛び蹴りをワームに炸裂させた。

「アゝアゝアゝアゝアゝアアアア!!」

ワームは甲高い断末魔をあげて碎け散った。

「あの化け物を瞬殺かよ……」

「もう少し化け物に出番を……」

「竜、さっきから何言ってるんだ？」

ディエンドは銃を回しながらディケイドに

「ざっとこんなものね」

勝ち誇ったように言った。ディケイドは少しふてくされているのか、黙ったまま。

「どっした土？別にいいじゃないか、誰が倒したとか…」

早く帰らないとユウスケも夏みかんも心配しているよっ。」

それでもディケイドはふてくされている。

「あの一……」

するとジョーカーが二人の間に入ってきた。

「まだ一人残ってるけど」

「え？」

「ほら、あいつだ」

デイエンドはジョーカーが指差す方向を見た。

そこにいたのは赤いジャケットの少年。

「……あれは…確かカテゴリーキング…」

するとデイケイドはデイエンドの前に立った。

「よかったね、士。」

まだ一人一番強そうなのが残ってて」

「うるせえよ…」

そう吐き捨てながらディケイドはケースのようなものを剣に変形させ、キングに斬りかかった。

ガキーン

どこからともなく盾が現れディケイドの攻撃を阻んだ。

「……まさか全員負けるとはね…」

けど、俺を倒せるかな？」

不敵に笑うキングを黄金の甲冑が包み、カブトムシのようにも見える化け物へと変貌した。

「よつやくやる気になったか？」

「はじめからやる気だけどねっ!!」

デイケイドをはね飛ばし、掌から剣を発生させて構える。

「四人同時にかかってきてもいいけど？」

「それじゃお言葉に甘えて…」

「俺一人で十分だ!!」

デイエンドがお言葉に甘えると言っているにも関わらず一人飛び出したデイケイド。

キングは全く動じることなく剣で受け止める。

「なに？本当に一人でやんの？」

ガッ

キングはとてつもない腕力でデイケイドを再び吹き飛ばした。

「うお!?!」

「士！言わんこつちやない！！」

ディエンドはすかさず発砲、しかし全て素手で叩き落とされてしま
う。

「だから同時にかかってこいってば」

「じゃあこれならどうだ？」

キングの死角にアクセル、ジョーカーの二人に入っていた。

『エンジン！』『ジョーカー！』

『『マキシマムドライブ！……！』』

アクセルはエンジンブレードを振り抜き、ジョーカーは発光する腕
で右ストレートを放つ。

が、

ガンッ

「な…盾!？」

二人の同時攻撃はたった一つの盾で防がれてしまった。

「だから四人同時って言うてんで……しょ!!」

「「がつ!!」「」

二人もディケイドと同じように吹き飛ばされて地面を転がっていく。

「ぐっ……地面転がってばっかじゃないか…」

「おいディエンド……なんとかなんないのか？」

「……一斉攻撃で圧倒するしかない……かな」

「ならこいつがうつてつげだな！」

ディケイドはそう言って一枚のカードをバツクルに装填した。

「変身!!！」

『KAMEN RIDE OOO GATAKIRIBA!!』

ディケイドの体をたくさんのメダルのようなものが包む。

『ガッタ ガッタガタ ガタキリバ』

不思議な唄と共にディケイドは二本の角をもつ緑色のライダーへと変身した。

「.....」
「.....」

「……………何今の唄…」

最初に口を開いたのはキング。

先ほどまで大興奮だったアクセルも沈黙している。

「……………なるほど…」

士にはいい案だ」

「だろ？さて……………一斉に行くぞ！」

ディケイドとディエンドはキングに向かって駆け出した。

アクセルとジョーカーも遅れながらそれに続く。

「ようやく同時にやる気になったみたいだね…」

キングは余裕たっぷりに構えている。

「余裕でいられるのも今のうちだ!!」

するといきなり、ディケイドが二人に分裂した。

「は!?!」

「分裂した!?!」

さらにその二人から四人、八人とどんどん分裂していき、最終的には三十人ほどとなった。

「増えた!?!」

この異様な光景にキングは動揺しまくる。

「『』でやあああ!!」

三十人ほどのディケイドが同時に飛びかかる。

「ちっ……これはさすがに無理かな……」

大勢のディケイドを相手にすることなく後退するキング。そこに、

『ATTACK RIDE BLUST!!』

ディエンドが回り込んで発砲した。

「っ！そんなもの!!」

ディエンドの銃弾の軌道上に盾を召喚、全てはじいた。

『エンジン!!マキシマムドライブ!!……!!』

今度はアクセルが斬りかかる。

ガキイーン

「この程度の攻撃で傷をつけられるとでも!?!」

アクセルの渾身の攻撃も軽々と受け太刀してみせた。

「へえ…傷ねえ…」

「!?!」

キングは驚き、声のした方を見ると、ジョーカーが懐に入っていた。

『ジョーカー!!マキシマムドライブ!!!!!!』
「これなら傷つくだろ?」

ドズンッ!!

キングの脇腹に強烈なボディブローを叩きこんだ。

しかし

「つつつ…まだまだあ!!」

なんと腹筋の力だけでライダーパンチを押し返した。

「嘘だろおい!?!」

アクセルも投げ飛ばされていく。

「こんだけやって入ったのはあれだけかよ……」

ジョーカーは舌打ち混ざりにぼやいた。

「なら、もっと手数を増やせばいい。

そうだとす?」

「言われなくても……!」

また新しいカードをバックルに装填する。

『ATTACK RIDE ILLUSION!……!』

三十人ほどのディケイドが全員同じカードを使用した。

すると再びディケイドが分裂を始める。

一斉に分裂し、総勢百人以上のデイケイドが並んだ。

「「「さあ、行くぞ!」「」」

デイケイドの全員が同時にカードを取り出し、同時に装填。

『『FINAL ATTACK RIDE OOO!』』

一斉に電子音が鳴り響き、百人以上のデイケイドが飛び上がった。

「「「たあああああああ!」「」」

百人以上のデイケイドが同時に飛び蹴りを放つ。

その様は壮観すぎて文章で表現できない。

「「こんなふざけた技が!」「」

「お前らの攻撃で傷つくとしても!？」

ビシッ

「…………え？」

バカアア!!

何度も攻撃を防いだ盾は限界に達し、真っ二つに割れた。

「よし! いけ翔太郎！」

アクセルの背後からジョーカーがエンジンブレードを持って飛び出した。

これを剣で防いだキング。もう余裕ではなくなっていた。

「どっしたさっきの勢いは!？」

つばぜり合いの最中、ジョーカーが質問するが、キングには答える余裕もない。

そのままジョーカーは引き金を引き、

『ジョーカー!!マキシマムドライブ!!!!!!』

「何!？」

エンジンブレードは紫色の光を帯び、ジョーカーはキングの剣を粉々に斬り碎いた。

「くそ……剣が!」

「これで丸裸……だね」

またしても背後に回り込んでいたディエンドはキングの後頭部に銃を突きつけた。

『FINAL ATTACK RIDE D・END!』

「な、待てっ……」

「待ったはなしだよ」

ドオオオオオン！！

デイエンドの攻撃は想像以上の破壊力で辺りを爆風で包んだ。

「「「うおお!?!?!」」」

元の姿に戻ったデイケイドとアクセル、ジョーカーは頭を抱えて爆風を避ける。

「海東!このバカ!!周り考える!

ってかお前また横取りしたな!?!」

「バカを言つな土。

お宝は欲しいがこんな奴の命なんてたいして興味ない！

それに……………」

おもむろにディエンドは土煙を指差した。

「奴はまだ生きてる」

「……………!?!?」

三人が土煙の方を見ると、

中からキングが出てきた。

左足を引き摺り、上半身の殆どが吹き飛んでいる。

「あいつ…まだ生きて…」

とても生命を維持できているとは思えない。

「ハア…ハア…ハッ……」

まさかここまでとはね……

こっちも……本気でいっしょ」

そう言ってキングが召喚したのは青いガイアメモリ。

『ウエポン！！……！』

そのガイアメモリを上半身の傷口に押し込む。

その途端に傷口からたくさんの剣のようなものが飛び出し、腕やボディをかたちどっていく。

「こいつもガイアメモリを……?」

傷口が完全に塞がったキングが手がざすと、腕がガトリング銃へと変形した。

「「「「!?!?!?!」」」」

「さあ、お返しだ!!」

ズダダダダダダダダダダ

四人のライダーめがけ、銃弾が飛び交う。

「うおおおおお!!?」

「なんだあのメモリは!!?」

四人は近くのビルを盾に隠れた。

「……………隠れたか」

キングが反対の手をかざすと今度は半端なくでかい剣となった。

長さは20mを越えている。

「おいおい……………」

「あんなのを振り回すつもりか!?!」

アクセルの予想通り、キングは腕の剣を振りかぶった。

「……………はまらずい……………」

ライダー達は一斉にその場から飛び退いた。

「……ぜあああああー!!」

ブオオオン!!

思い切り剣を振り抜いた。

振り抜かれた剣は周囲のビルを真っ二つにして倒壊させる。

ズドオオン!!ドオオン!!ドドーン!

キングの周りのビルは全て倒壊。

その瓦礫の山の中に

「っぐあ………」

「ゲホッ……ゲホッ……」

「これ程とは……………」

アクセル、ジョーカー、ディエンドが倒れ込んでいる。

「さすがにやり過ぎたみたいだね」

再び余裕を取り戻したキングは三人に近寄ってくる。

「ん？ディケイドがない……………」

倒れているのは三人だけ。ディケイドの姿が見当たらない。

ディケイドを探して周囲を見回すキング。

その時

『FINAL ATTACK RIDE FAIZ!!!!!!』

突然電子音が響き渡った。

全員が驚くなか、キングを囲むようにたくさんの赤いマーカールのよ
うなものが発生する。

「これは士!?!」

「やああああああ!?!」

キングを囲むマーカールが一斉に襲いかかる。

「フンッ…:ディケイドか。こんなもの!」

気合いと共にキングの全身から剣が棘のように飛び出し身を覆う。

ズガガガガガ!!

全てのマーカーがキングに突き刺さるはずが、棘のように飛び出した剣によって阻まれた。

『 REFORMATION 』

突然どこからともなく、ディケイドが姿を見せた。

「ちっ。これでも駄目か!!」

「君たちの好きな手数で圧倒してあげよう!!」

するとキングの棘だらけの装甲が開き、中から大量のミサイルが発射された。

「はああ!?!」

「ちょ…」の数は…」

ドドドドドオオン！！

「「「「ぐわあああああ！！」「」「」

四人は圧倒的な火力に吹き飛ばされる。

「っああ……」

「ぐっ……ぐ……」

四人は立ち上がることすらままならない。

そこに装甲が変化したキングが

「ねえ？荷電粒子砲ってわかる？」

無邪気に四人に訊ねた。

「まさか…今から撃つってのか!?!」

「避けられるかそんなもん……」

慌ててディエンドはカードを装填した。

「さあ、滅べ仮面ライダー!!!」

キングが荷電粒子砲を放つ。

『KAMEN RIDE GAI!!!』

それよりも少し早くディエンドは仮面ライダーを召喚した。

そしてそれを四人の前に立たせ、盾とする。

ズドオオオン！！

放たれた荷電粒子砲は全てを消し飛ばした。

「……くくく……」

はははははははは！！

どうだライダーども！！

さすがに消し炭だろ！？」

「いや……まだピンピンしてるぜ」

返ってきた返事はキングを驚かせた。

「バカな……どうやって……」

「盾、というのは君だけのものではないってことだね」

そしてようやく四人は立ち上がる。

「で、どうすんだイケイド？どうやってアイツを倒す？」

「そうだな……今度は量じゃなくて質で勝負だ」

その返答を聞いてジョーカーは

「なるほど……」

意味わかんねえ」

イケイドはわかんねえと言っているジョーカーの背後に回り、カードを取り出した。

『FINAL FORM RIDE』

「ちょっとくすぐりたいぞ」

「ん？何が？」

『JOKER！！！！』

「ん？俺？」

響き渡った電子音は確かにジョーカーと。

「それじゃいくぞ？」

デイケイドはジョーカーの背中に両手を突っ込む。

「ぬお！？」

思わず変な声が出る。

デイケイドは突っ込んだ両手を広げてジョーカーの背中を開く。

するとジョーカーの体が本人の意思とは無関係に変形した。

「……………なんじゃこりゃー……………!?」

ジョーカーが変形したものの、それはハードボイルダー。

の半分だった。

「なんで!?なんで俺ハードボイルダー!?しかも後ろ半分ないし
!?!」

半分しかないハードボイルダーにディケイドは跨がり

「名付けて……………ハーフボイルダー……………」

「いや何言つてんだお前!?こんなんで勝てるわけねえ!」

そんな様子を見てアクセルは

「なるほど……それじゃ俺も!!」

意気揚々とアクセルはバイクフォームへと変形した。

が、しかし

カッン

「ん？」

見るとディエンドがアクセルの頭に銃を突きつけている。

「君はそうじゃない……」

『FINAL FORM RIDE ACCELERE!!』

「痛みは一瞬だ」

アクセルも強制的に変形。

背中が開き、どんどん装甲に覆われていく。

「うおお！？なんだこれ！？」

アクセルが変形させられたのは小型の装甲車。

大砲付き。

「ちょっとまって！俺はあんなのになんで俺は半分なんだ！？」

「うるさいぞ。さつさとドッキングだ」

デイクイドはハーフボイルダーを後退させて、アクセル装甲車に向かう。

「いくぞ翔太郎、照井、海東！」

そのままハーフボイルダーとアクセル装甲車を合体させた。

ガッ……シャン…

「「おふっ……」「

思わず変な声が出るハーフボイルダーとアクセル装甲車。

「……あの、さっきから装甲車って言われてるけど、俺は名前ないの？」

「安心したまえ！」

装甲車の上にディエンドが飛び乗る。

「君のその姿はアクセルガンナーと言う立派な名前がある……！」

「おお……なんか……いいな……」

「いやいや！！名前とかどうでもいいわ！！

なんだよこれ！？俺達合体しちゃったじゃねえか！！元に戻るのか！？」

「うるさい翔太郎。戻れるから黙ってる！」

文句ばかりのハーフボイルダーをなだめてディケイドはハンドルを握りしめる。

「ねえ、もう茶番はいいかな？」

四人のやり取りを見ていたキングはしびれを切らし、両腕をバズーカ砲に変形させる。

「来るぞー！ー！」

ドウンッ ドウンッ

二発の砲弾が四人めがけ飛んでくる。

「おっと！」

ハンドルを切りうまく砲弾を避ける。

キングはさらにバズーカ砲を撃った。

「当たるかよ!!！」

「今度はこっちの番だ!!！」

『『FINAL ATTACK RIDE』』

『DECADE!!』『D-END!!』

ディエンド、ディケイドが銃を構え、同時に光線を放つ。

「そんなもの！」

全身から剣を発生させて巨大な盾を形成し、二人の光線を防ぐ。

「後ろから空きだぜ？」

猛スピードでキングの背後に回り込む。

「回り込んだからって調子にのるな！」

キングの背中 of 装甲が展開し、ミサイルが顔を覗かせる。

「あれ全部ミサイル……？」

「ならこっちもミサイルだ！！」

デイケイドはハーフボイルダーのハンドル部分についているボタンを押す。すると、

ガシャガシャン！

「おっ？」

ボタンを押した途端、アクセルガンナーの装甲が展開して同じくミサイルが顔を覗かせた。

「おお！竜すげえ！！」

「撃ち落としてやる！！」

両者はほぼ同時にミサイルを発射した。

全弾綺麗に撃ち落とされ、爆煙が両者の視界を奪う。

「くっ……」

「前が……」

デイケイドはスピードを上げ、爆煙の中から飛び出した。

「キングは！？」

辺りを見るが何処にもいない。
まだ爆煙の中だろうか。

「土、上だ!!」

ディエンドに言われ上を見ると空中でキングが荷電粒子砲を撃とうとしていた。

「また撃つつもりか!?!」

「避けるディケイド!!」

大急ぎでハンドルをきり、回避行動をとる。

「逃げられると思うなあ!!」

ズドオオオオオオオン!!

放たれた荷電粒子砲がアスファルトの地面に大穴をあけた。

が、デイケイドたちは紙一重で回避していた。

「あつぶねー！ー！ギリギリじゃねえか！」

「あまり喋っていると舌噛むぞー！」

毒づきながらデイケイドはカードをバツクルに装填する。

『FINAL ATTACK RIDE ACCELERATOR
！！』

電子音と共にアクセルガンナーの装甲と大砲が展開した。

「そんなもの撃たせるか！！」

全身に剣を纏ってキングが突っ込んでくる。

「いや、撃たせてもらおうよ」

ドンドンッ！

ディエンドが発砲し、弾丸の一発がキングの顔面に命中した。

「ぐっ！……」

ほんの一瞬だけキングが怯んだ。

「今だ！！」

「いつけえええ！！」

一斉にミサイル、ビーム砲が発射され、キングに殺到した。

ドオン！ドン！ドドオオン！！

「ぐおおおおおおお！？」

ズドオン！！ドオン！ドンドンッ！！

ドオオオーーーーン！！

ミサイルとビーム砲の嵐の前にキングは碎け散った。

「……………勝った……………」

「勝てた……………」

ようやくジョーカーとアクセルは元の姿に戻る。

「ああ……………くそ。肩こった……………」

「つてつおお！？」

首をグキグキ鳴らすジョーカーが足下を見ると、キングが転がっていた。

頭だけ。

「うわー！？生首ー！？」

びびるアクセル。

「……はは……まさか……君たちごときに……敗けるとはね……」

「喋ったあぁー！？」

心臓が飛び出るんじゃないかと思うくらいびびるアクセル。

「……だけど……いずれこの世界には……自然と滅びが訪れるのさ……」

「……何だと？」

「…ディケイド、君が…関わらずとも……………今回のが比にならない
くらいの滅びが訪れるんだ」

「今回のが……？」

アクセルが後ろを振り返ると、

いくつものビルが倒れ、あちこちから煙が上がっている。

まるで戦争の跡のようだ。

「これ以上のことがこれから……………？」

「お前…それどういう意味だ？」

「言葉通りさ黒のライダー。」

滅びの日まで……………せいぜいしぶとく生きるんだね…

でないと何も守れな
ドンッ

突然キングの頭がぶっ飛んだ。

「まったく……アンデッドのくせに話が長いのは困りものだね」

デイエンドが回す銃の銃口から煙が出ている。

「海東……話の途中に撃つなよ」

「話が長すぎるのね」

「もう帰るのか?」

翔太郎はソフト帽をくるくる回して言った。

「ああ。長居すると夏みかんに怒られるからな」

「夏みかん?」

「いや、気にしないでいい」

士は首から下げたカメラを構えた。

「記念に一枚いいか?」

「ん?ああ、竜!写真とるぞ!」

竜と翔太郎は肩を組んでサムズアップをする。

カシヤツ

「とれたか？」

「多分な」

「多分て……………」

士がカメラをしまつと銀色のオーロラが現れた。

「士！そろそろ行くよ」

「ああ。」

じゃあな翔太郎！照井！

カレー美味かつたぞ！！」

「いつでも来い……」

士と海東は手を振りながらオーロラの中へ消えていった。

「翔太郎……」

「なんだ……」

「結局あいつら何なんだ？」

「……説明してなかったな……」

二人もゆっくりと歩きだした。

別の世界のどこか……

「違う左翔太郎と照井竜だったけど、なかなか面白い奴らだったね」

海東はくるくる銃を回す。

「そうだな。」

ところで……お前が何も盗まなかったなんて珍しいな」

すると海東は白い歯を見せて笑った。

「僕がお宝を盗らないわけないだろう？」

そう言って懐から小さな袋を取り出した。

「お前…いつの間だ…」

「土を見つける前にさ」

「俺を見つけるのが遅かったのはそれが理由か……」

で？何を盗ったんだ？」

そこで袋の中のものを取り出した。

「……………ロストドライバー？」

「ただのロストドライバーじゃない。」

特殊な改良を施してあるロストドライバー・改さ!!

どこの世界にもないお宝さ!!」

「あー…ハイハイ」

二人はどこまでも続く道を歩いていく。

世界の破壊者ディケイド。

彼の旅する次の世界とは…

ドンドンン

「若菜？？いるんでしょ？」

部屋の扉を叩くのは出張から戻り、霧彦にブチキレた長女・冴子。

何故霧彦が怒られたのかは前の話を読んていただきたい。

「あなた最近仕事にも行ってないらしいじゃない！」

何があつたの！？」

おもむろにドアノブに手を伸ばすと

「あれ？開いてるじゃない？」

若菜！入るよ？」

返事を待たずに扉を開けると、部屋のベッドに頭だけ突っ込んでいる若菜の姿が。

「なーにしてるのよー!」

冴子が若菜を引っ張り出すと、

若菜は涙を流しまくって泣いていた。

「ええ!?!ちよ…どうしたのよ!?!」

よく見ると若菜は口をパクパクさせている。

「何?どうしたのよ?」

若菜の口元に耳を寄せせる。

「なにになに……」

正月に一目惚れした男の人が……

なくしたネックレスを探してもらおうと探偵事務所に行ったら……

そこの探偵さんが一目惚れした男の人だった？

で、何で泣いてるのよ？」

さらに若菜は口をパクパクさせる。

「なになに……」

その男の人の前から……

恥ずかしすぎて逃げた！？

なんで逃げたのよ？」

さらに口をパクパクさせる。

「なになに……………」

自分に自信がない？

街のアイドルが何言ってるのよ!？

え?どうしていいのかわからない?

食事とかいきなさいよ!」

さらにさらに口をパクパクさせる。

「うん…うん……………」

じゃあ自分で料理作ったらいいじゃない!

この屋敷にはシェフたくさんいるから教わりなさい!」

若菜は赤い目を擦る。

「大丈夫よ若菜！！私がついてる！」

そう言って冴子は優しく若菜を抱きしめた。

素晴らしい姉妹愛。

ほほえましい姉妹愛。

このやり取りが後日、とんでもない事件を起こすことになることは
……

P M 8 : 3 2 . . . 開発実験室 . . .

「さて、今後の君たちの任務だが……」

来人は実験室内の三人の人物に視線を移した。

「まだ少し先になる」

「ええ！？まだ先！？」

文句を言うのは若い男。

「うるさいぞ神田。どうぞ来人様、続けてください」

その隣のガタイのいい男が若い男の頭を下げさせる。

「いや坂下銀次、神田蒼太がそう言うのも最もだ。説明がないとね。」

この度、金堂菜月の最終調整が終了した。

だから一週間は三人で連携などの訓練をして欲しい」

坂下と神田は後ろの女性、金堂の方を見る。

そして互いの顔を見合わせた。

「三人？どういう意味ですか？」

「俺たちって四人のライダーチームでしょ？」

まだ赤峰ちゃんがいますって」

すると来人はため息を吐き出して何も書いていない本を開いた。

「あのじゃじゃ馬なら……戻って来ない」

「「「!?!?」「」

「どづいうことですか!?!?」

「彼女は待機命令を無視して祭りに参加してしまったのさ。

裁かれないといいけどね……」

PM 8 : : 5 9
銀杏町三丁目

「くそ……ガス欠かよ……」

竜はガス欠で動かなくなったバイクを押して帰宅していた。

今宵は満月。雲もなく、辺りがよく見える。

そんな中、竜は前方に立っている人物に気がついた。

「おい……」

「ん？俺か？」

その人物は見たところスカートを着ている。

どうやら女性らしい。

「お前以外に誰がいるんだよ……」

「……あんた誰？」

「…ああ、私のこっちの顔は見せてなかったっけ…」

「いや誰だよ？」

「でもこっちはお前の顔忘れてねえぞ？」

仮面ライダーアクセル！！

「！！？ お前何者だ！？」

「わかんねえなら思い出させてやるよ………」

『…』

通りすがりのD／破壊者と泥棒とじゃじゃ馬（後書き）

いやあく長かった。

親指が痙攣しそうです。

前回の感想で

「ダグバをどうやって倒すの？」

とありましたが、すいません。

ワームのつもりでした。

ドレイクが泣く泣く倒したあれです。

誤解を生じさせるような文章で本当にすいませんでした。

あまり士の描写もなかったし、戦闘も思ったほど出来が悪かったのですが

この度、番外編を書きましたのでお口直しにお読みください。

cookingQ! / 團咲家集団昏倒事件 (前書き)

はい、番外編です！

本編の方が馬鹿みたいに長かったので短く一話で完結するように書きました。

ですが本編を読まないところの話は少し分かりにくいので、同時に投稿した話の終わり3ページを読むと分かりますよ！

前置きが長くなりましたがどうぞ！！

cookingQ! / 園咲家集団昏倒事件

4月2日 . . .

シリシリシリ

AM 9 : 38 . . .

ガチャンッ

園咲家『来人の部屋』 . . .

「む？寝過ごしたな……」

園咲家長男、来人、只今起床。

普段来人はもつと早く起きるのだが、この日は寝過ごした。

「まったく……誰か起こしてくれてもいいじゃないか……」

来人は部屋を出て洗面所に向かった。

屋敷の中は珍しく静かである。

そして洗面所でまず顔を洗う。そしてMY歯ブラシで歯磨き。

「ガラガラガラ………ペッ」

ゆっくり丁寧に口をすすぐ。

そこで来人は屋敷の異変に気がついた。

「……静かすぎないか？」

思えば洗面所に来る途中、家族やメイドとは会ってないしすれ違ってもない。

「おかしい……何かが……」

来人は寝間着のまま洗面所をでて屋敷の中を彷徨いてみた。
が、誰とも出会わない。

そこで若菜の部屋に行ってみた。

「若菜姉さん？」

呼んでも返事がない。

どうやら中にはいないらしい。
冴子、霧彦、文音も同様である。

ただ琉兵衛の部屋だけは中にいる気配がしたが、鍵がかかっている
返事もなかった。

「おかしい……本当におかしい……」

人の気配が全く感じられない。

いつも騒がしいこの屋敷では考えられないことである。

「全員外出………ってわけでもなさそうだな………」

そこで来人は目を閉じ、ゆっくりと開いた。

開かれたその目は緑色に輝いている。

「検索にも引っ掛からないとは………」

キーワードが少ないのか？」

寝癖の立った髪を掻きむしって辺りを見回す。

すると、廊下の一番奥に倒れている誰かの足だけが見えた。

急いで来人は駆け寄る。

「大丈夫!？」

倒れていたのはメイドの一人だった。

「しっかり!目を開けるんだ!!」

メイドの顔を見ると口に何か黒いものをくわえている。

凄く臭い。

「うっ!なんだこれ!？」

再び目を閉じて開き、目を緑色に輝かせた。

「これでも検索に引つ掛からないなんて…」

ふと顔を上げると、まだ何人ものメイドが倒れていた。

「なっ……なんだこれは!？」

全員口に黒いものをくわえている。

「一体何が……」

来人が立ち上がったその時

ゴンッ

「ぐあー!」

後頭部に鋭い痛みが走った。

「くっ……………一体何者……」

そこで来人の意識は途絶えた。

……人！ ……人！

……い人！！

……来人！！

……しっかりしなさい来人！！

「……………」

「よかった……気がついたみたいだね」

聞き覚えのある声。来人が隣を見ると

「霧彦義兄さん!？」

さらに反対側には

「冴子姉さん!？」

「やっと起きたわね……………」

「二人とも一体どこ」

ガタン

「……ん？」

よく見ると来人の体は椅子にくくりつけられていた。

「な……なんだこれは!？」

霧彦、冴子もくくりつけられている。

「あ、来人君寝癖立ってるよ」

「あ、ありがとう霧彦義兄さん。」

「じゃなくて!！」

来人は椅子をガタガタさせながら

「一体何事!?!なんで僕ら縛られてるんだ!?!」

なんでメイドたちが倒れているんだ!？」

「何って……原因はあれよ」

冴子が顎で指示する方を見ると、シェフたちも倒れている。

その奥から

「はい！出来ましたよ〜」

エプロン姿で大皿を持った若菜が現れた。

「若菜姉さん!？」

皿の上には謎の黒い物体。

「はい、あーん！」

それを倒れているシェフの口の中にねじ込んでいく。

「ブフオオオアアアア！」

シェフは口を黒い物体でいっぱいにしながら悲鳴をあげた。

「くっ………また犠牲者が………」

霧彦は目をそらす。

「ねえ、いまいち状況がわからないんだけど？」

冴子はため息混じりに説明を始めた。

「よくわからないけど……多分、私が若菜に料理を自分で作るように言ったのが原因かと……」

「なんでまたそんなことを？」

「あの子が好きな人にどうアタックしたらいいかって言うもんだから……」

料理を薦めたんだけど……」

それがこの事件を引き起こしたというのだ。

まったくもって馬鹿げている。

「それで……母さんは？」

「あれよ……」

見ると文音が倒れている。
口には黒い物体。

「あの黒いのは？」

「若菜の手料理よ」

「あれが料理？何がどうなったらああなるんだ！？」

文音はピクリとも動かない。

「そつだ！父さんは！？」

「ミックと部屋に閉じ籠ったわ……」

「そんな……」

来人が心の底から絶望した時、

「グアアアアアアアア！」

シェフの一人が悲鳴を上げた。

「くっ……最後の一人が……」

「次は私たち……ってことね」

若菜は腰を振りながら別の大皿をもってきた。

「はい！お待たせしました！！三人にはこちら！！」

並んだのは黒い料理、黒い料理、黒い料理。

「黒い三連せ…」

「義兄さん、それは言っちゃダメだよ………」

三人の前に一つずつ置かれていく。

「三人には大好物の料理を別々に作ってみました!!」

「!!?」

「別々!?これが!?!」

どれもこれも皆真っ黒。

すると霧彦が

「………大好物ってことは………僕のこれはチャーハンかな?」

「ブッブー！違うわよ義兄さん！これはビビンバよ！」

「くそっ……ハズレか……」

「何故ビビンバを皿に盛るかなあ……」

「さて、来人のはこれよ！！！」

「いや、これと言われても……」

まったく区別がつかない。本人はちゃんとわかっているのか？

「うーん……僕のはフォアグラかな……？」

「ハズレ〜！」

若菜は人差し指で×を作る。

「正解はフカヒレスープでした!!」

「フカヒレスープ!?どこにもスープがないじゃないか!!」

「大好物がフォアグラって…なんて生意気な十代なのかしら……」

次は毒づいた冴子の番。

「姉さんのはなんでしょっくか!?!」

「……大トロの握り……」

若菜の反応は……

「ピンポン！！大正解！」

「当たったあ！？」

「あれのどこからネタでどこからがシャリなんだ！？」

よく見ると若菜の目が大変病んでいる。

「恋は盲目……………なのかしら？」

そうこう言っている間に次は自分たちの番である。

「じゃあ……………まずは来人から！！」

「いいい！？僕から！？」

若菜がフカヒレスープ（飯）をスプーンですくう。

「来人、あーん！」

来人は死を覚悟した。

様々な思い出が走馬灯のように駆け巡る。

その時だった！！

バアーン！！

「まてい若菜！！」

突然扉が開いた。

中に入ってきたのは

「「父さん!!」」

閉じ籠っていた琉兵衛がミックを連れて現れた。

『スミロドン!!』

琉兵衛は金色のメモリをミックの首輪に挿した。

そしてミックはミュージアムの処刑人、スミロドン・ドーパントに変身した。

「待たせたな子供たちよ！」

スミロドンは三人のロープを引きちぎる。

そして三人にドライバーとメモリを渡した。

「ありがとうミック!!」

三人は一斉にドライバーを装着する。

『タブー!!』

『ナスカ!!』

『サイクロン!!』

三人にもメモリをドライバーに挿して変身。

琉兵衛は動かない文音を抱き抱えた。

「文音……すまん……」

若菜の目は……私達で覚まさせる!!」

『テラー!!』

琉兵衛もテラー・ドーパントに変身した。

「さあ子供たちよ！若菜の目を覚まさせるんだ！！」

「「「おっ！！」」」

「ギニャアアア！」

「……………ん？」

全員で一致団結した途端、スミロドンが倒れ込んだ。

口には若菜の料理が。

「……………ミツクうう！！」

サイクロンは動かないスミロドンを抱き抱えた。

『クレイドール!!!』

若菜もクレイドールへと変身する。

「大丈夫よ父さん……父さんの分もとってあるから……ウフフフ……」

完全に病んでいる。

「やめなさい若菜!!お前はそんな」

「ホブツ!!!!」

今度は霧彦の変身したナスカ・ドーパントの口に料理が放り込まれた。

「いやあああ!霧彦さん!!!!」

「そんな義兄さんまで……」

「ぐわあああー!!」

続いてテラー・ドーパントの口に放り込む。

「父さああーん!!」

残るは冴子のタブー・ドーパントにサイクロン。

このままでは二人とも殺られてしまう。

「……………逃げなさい」

「……………え?」

「逃げなさい来人!!」

「…何を言ってるんだ姉さん!？」

タブーはサイクロンの前に立った。

「全ては私の責任!…ここは私に任せて行きなさい!」

「いやだ!姉さんを置いてはいけない!」

その時

ドチャッ

「うっ!」

ついにタブーの口の中にも料理が放り込まれた。

タブーは卒倒する。

「姉さん!!」

タブーに駆け寄ろうとするが、

ベチャッ

足に若菜の料理が飛んできて、そのままへばりついた。

「くっ……動けない……」

「なんだこれは？」

一瞬、サイクロンの赤い複眼が緑色に光った。

「バカな!!これが納豆!？」

「納豆なんて……かき混ぜるだけじゃないか!!」

動けないでいるサイクロンのもとにゆっくりとクレイドルが近づいてくる。

「はい来人！！口開けて〜！」

その時、サイクロンはあることに気づいた。

「…そうだ！待て姉さん！！待つんだ！！！」

「……どうしたの？」

サイクロンは動かないタブーの口を指差す。

「よく見るんだ。姉さんや父さん、ミックに義兄さんの変身体には口がある。」

けど……僕の変身体には口がないんだ！」

言われてみれば、サイクロンの変身体は仮面を被っているため、口元は覆われている。

「あ、本当だ」

「ほら、だからもうよすんだ……こんなことをして」

「でもさ、口まで完全にすっぽりだったら息できないんじゃない？」

「……………」

長い沈黙のあと、サイクロンは天を仰いだ。

「……そうだ……完全にすっぱりだったら息できない……」

天を仰ぐサイクロンの視界にクレイドールが飛び込んできた。

「それじゃ、完全にすっぱりじゃないってわかったところで……」

クレイドールの右手にはフカヒレスープ（仮）。

「ら〜いと〜!! あーん!!」

「……うあああああ!!」

ぐちゃっ

こうして、園咲家は全員意識を失った。

三時間後、訪れた井坂により全員に救済措置が施されて意識を取り戻し

若菜は井坂のカウンセリングを受けてギリギリ正気に戻った。

らしい……

多分。

cookingQ! / 園咲家集団昏倒事件（後書き）

実はこの話は

左翔太郎探偵物語を書くよりも前から考えてました。

ゆえに本編より自信作です。。。;) / (- - ;)

一応この話で第一章(?)は終わりです。

今後はミュージアムのライダー、園咲家、囚人923番はつか出ます。

もしよろしければ未長くお付き合いください。

Ⅰからのプレゼントノ末路(前書き)

どうもお久しぶりです！

色々忙しかったんですがようやく書けました。

笑いありバトルありの待望の続きです！！

………すいません、言い過ぎました………

Ⅰからのプレゼントノ末路

3月28日 . . .

「裁かれないといいけど…」

P M 8 : 3 2 . . .

「裁かれないとって……」

来人は赤峰を処刑するつもりですか!？」

開発実験室 . . .

「処刑するのは僕じゃないからわからないさ。

けど、じゃじゃ馬は帰ってこない。はっきりしているのはそれだけだ」

「あの……」

来人と坂下がシリアスな話をする中、おそろおそろ神田が手を挙げた。

「じゃじゃ馬って言うのは赤峰ちゃんのことですよね？」

「まあ……そうだけど……」

「赤峰ちゃんはじゃじゃ馬って感じじゃないでしょ！」

すぐキレるし、理性飛んじゃうし、暴君とかの方がいいんじゃないすか!？」

「……………」

彼らは何の感情もなく、何も言わず、ただ虚ろに神田を睨みつけた。

P M 8 : : 5 9
銀杏町三丁目

「変身………」

『ヒート……』

バイクを押す竜の目の前で女性が火だるまになっていく。

「おい……マジかよ……」

そして炎の中から見覚えのある赤い仮面が顔を覗かせた。

「ちょっと思い出したかな？」

ヒートは先ほどとは違うキャピキャピした女性のよな声と口調で
ゆっくりと言った。

そして再びドスの利いた声で

「じゃ、早速死ねよ」

一気に竜との距離を詰め、炎を纏った拳を顔面めがけて放ってきた。

「うおう!?!」

ギリギリの所で避ける。

が、足がもつれて地面を転がってしまっ。

「くっそ!

ミュージアムが俺に何の用だ!?!」

「は?何の用?

お前バカなの?

そんなことわかりきってんだろっが!?!」

今度は竜の鼻先を炎が掠める。

「あーもう！」

今日についてねえな!!」

『アクセル!!』

もたつきながらヒートとの距離を広げるとアクセルメモリをドライブに挿した。

「変……身!!!!」

グリップを捻ると辺りを紅い閃光が照らした。

その閃光を切り裂くように仮面ライダーアクセルが姿を見せる。

「なんでよりによって俺に勝負挑むかな……!!」

「なんで？」

弱ってる敵を叩くのは常識でしょ？」

「翔太郎じゃなくて俺を狙う理由はなんだ!？」

「左翔太郎よりお前の方が近いところにいたから」

まあ……納得である……。

「くっ、つくづくついてねえな俺……」

アクセルの仮面の奥でキラリと涙が輝く。

「……無駄話はおしまい。

さっさとお前を殺して左翔太郎も殺す!!」

ヒートは炎を纏ってアクセルに殴りかかった。

アクセルはエンジンブレードで応戦する。

応戦する、とは言っても実際は防戦一方であった。

「はっ、少しは反撃しておいでよ!」

アクセルの防御が弛んだ一瞬の隙を突かれ、ヒートの上段回し蹴りが命中。

アクセルは踏ん張ることが出来ずに吹き飛ばされた。

「う」あつ……!」

近くの街路樹に激突して、その場に倒れ込む。

本来のアクセルならこんなことはない。

しかし今は昼間の戦闘で疲労困憊。もう踏ん張る力もなかったのだ。

「はあ……はあ……ちよつとヤバイかな……」

エンジンブレードを支えに立ち上がるアクセル。

そこに再びヒートの蹴りが炸裂した。

「ぐはっ!」

「弱りすぎでしょ!」?

ドーパントの一匹や二匹相手にしてへばってんじゃねえよ!……!」
よろめくアクセルのボディにヒートは何度も拳を叩き込んだ。

「笑わせんなよ!」

ドズンッ！

「……………かつ……………！」

強烈なボディブローで体をくの字にまげて宙を舞った。

「もつと齒応えあると思ったんだけどなあ……………」

今度は艶かしくゆっくりとした口調。

「前に戦った時はそんなに弱くなかったよね？」

「やっぱり昼間の戦いで疲れちゃった？」

アクセルはエンジンブレードを握りしめ再び立ち上がる。

「まだ……………へばってねえよ……………」

その一言を吐き出すだけでも精一杯だった。

それでもエンジンブレードをゆっくりと構える。

そしてヒートに斬りかかった。

「はあああああー!!」

「遅い!!」

あっさり避けられ、カウンターのアッパーがアクセルの顔面を捉えた。

「ぶっ……!!」

膝から倒れるアクセル。

ヒートはアクセルを見下ろすが、立ち上がる気配はない。

「もう終わりかあ……」。

呆気ないね。

お前本当に仮面ライダー?」

アクセルは何も答えない。

「情けない…。」

そういえば左翔太郎が言ってたんだけどさあ、仮面ライダーってのは『例えどんなにボロボロになっても体一つで大切なものを守り抜く』心のことを言うんだって。

今のお前は仮面ライダーじゃあないんだよ!!」

そう言うとヒートは思い切りアクセルを蹴飛ばした。

ボールのように弾み、二転三転していく。

「お前はボロボロの体で何一つ大切なものを守れない!

左翔太郎からしたらお前は仮面ライダーじゃあない!!」

それでもアクセルは何も答えなかった。

苛立ったヒートは

「そうだ。お前の目の前で左翔太郎と助手のうるさい女を消し炭にしてやるつか!?!」

と、両手を広げて叫んだ。しかしそれでもアクセルは何も答えない。

「ちっ。左翔太郎はこんな感じのこと言ったら起きたのにな……。」

まあ、左翔太郎は偽善者ぶってたから当然か」

その時

「……………何だと……………？」

一切返事をしなかったアクセルが口を開いたのだ。

ヒートは驚き、地に伏しているアクセルに目を向ける。

「もう一度言ってみる……………」

エンジンブレードにもたれ掛かりながらアクセルは立った。

「へえ……………まだ立てたんだ」

「翔太郎が偽善者？」

エンジンブレードの切っ先を真っ直ぐヒートに向けている。

「ああ、さっきの話？」

だってそうでしょ？

ちよつと意味違つかもしんないけど、世間じゃああいうバカのことを偽善者って言うんじゃない？」

「訂正しろ……」

「もしかして、友達をバカにされて怒った？」

…フフフ。

気持ちわりーんだよホモ野郎！！」

嘲笑しながらヒートは駆け出した。
両腕からは炎が吹き出す。

「ハハハハハハ！さっさと死ねえ！！」

アクセルの顔面めがけ、アッパーを放つ。
が、その攻撃がアクセルに届くことはなかった。

「なっ……！？」

ヒートの拳をアクセルの掌が、がっちり掴んでいた。

「聞こえなかったのか？」

ズバンッ！！

「っ……！？」

エンジンブレードがヒートの胸を切り裂く。

「訂正しろと言ったんだ」

さらに一振り、二振りとエンジンブレードを振るっ。

突然のことに驚きヒートは後退した。

「くっ………急になんなんだよ！？」

が、後退したヒートとの間合いをアクセルは一気に詰めた。

「なっ……」

「ふん!!」

先ほど切り裂いた箇所には掌底を打ち込み地面に叩きつけた。

加えてヒートが立ち上がる前に腹部に蹴りを叩き込んだ。

「ゴフツ………ゲホゲホツ!!」

「この街を命懸けで護っている男を偽善者？」

ふざけるな!!……!!」

「……くそっ……お前もぶちギレ体質かよ……」

見るとアクセルの全身から蒸気が出ている。

まるでアクセルの怒りを表すかのように。

「貴様らのばらまいたメモリのせいで……」

「一体どれ程の人が死んだと思っっている!?!」

「はっ……………知らねえよ……」

胸の痛みを堪えながらヒートは立ち上がった。

「……………もういい。悔いる気がないのなら……」

犠牲になった者たちの苦しみをその身に刻み込んでやる……！」

そう言うとエンジンブレードを投げ棄てた。

そしてドライバーのクラッチレバーをきる。

『アクセル……！マキシマムドライブ……！……！』

「操り人形が……吠えてんじゃねえぞ……！」

『ヒート……！マキシマムドライブ……！……！』

電子音が鳴ると同時にヒートの全身から炎が吹き出す。

二人は姿勢を低くして身構えた。

「消し炭にしてやる……」

先に動き出したのはヒート。

炎を纏った体で跳躍し、右足を突き出す。

「はあああああ……!!」

対してアクセルは姿勢を低くして身構えたまま。

眼前にヒートが迫る。

「焼け死ねえええ!!」

ガッ!

「……………は?」

驚嘆するヒート。何故なら飛び蹴りをしたヒートの足をアクセルが掴んでいたからだ。

「終わりだ……ミュージアムの仮面ライダー!!」

右のグリップを何度も捻りアクセルの全身からも炎が吹き出した。

そしてヒートの足を払い、全身のバネを使って

渾身の後ろ回し蹴りを決めた。

「ぐあああああー!!」

コマのようにキリキリと宙を舞って地面の上を転がっていった。

「あっ……ぐ……」

なんとか立ち上がろうとするが、力が入らないのか膝をつしてしま
う。

「くっ……嘗めた真似を……」

けどなあ……まだ私は戦えんだよ……」

その時、異変は起きた。

バチッ

「……………あ？」

何かがショートするような音。

その音はヒートのロストドライバーから発せられたものだった。

バチバチと音をたてて煙をあげている。

「なんだ？一体何が？」

「…………まさか…………」

いや!!そんな…………私の…………

私のドライバーが…………」

バアン!!!!!!!!!!

いきなりロストドライバーが破裂し、砕け散った。

装填していたヒートメモリが宙を舞う。

「嘘…………そんなあ…………」

ヒートは変身を強制解除され、ただの人間、赤峰ユリへと戻った。

そしてアクセルはヒートメモリを拾い、

「悪いが…………こいつは没収だ…………」

赤峰は何も答えず、頭を抱える。

「私の……私のメモリが……」

「ドライバーを壊されて取り乱すとはな……」

だが、罪はきちんと償え」

アクセルは警察官として赤峰を捕まえるため、赤峰の手を取って立ち上がらせる。

「貴様には組織のことを喋ってもらおう。」

そしてその後でゆっくりと罪をつぐな」

「ウッ！」

「え……って、え？」

何か、水のようなものがアクセルの仮面にかかった。
それを拭くと

「これは………」

………血？」

ふと、視線を赤峰の胸元に向けた。

そこには何か、腕のようなものが赤峰の胸を貫いていた。

「ゴフッ………！！」

途端に赤峰の口から大量の血液が溢れ出る。

「なっ………」

すると赤峰の背後から何かが飛び退いた。

脅威的な速度で距離をとる。

「な、おい！一体何者だ！？」

飛び退いたものに目を向ける。

そこにいたのは一体のドーパント。

ただし、初めて見るドーパントではない。

「……！！ お前は……処刑人ドーパント！？」
「ヴヴヴヴウ……」

年始に一度だけ姿が確認されたドーパント。

それが今、敗北した仲間の処刑のために現れたのだ。

「なんてことを!!」
仲間をなんだと思ってるんだ!!」

赤峰を横にして、アクセルは処刑人ドーパントめがけ駆け出す。

が、一瞬で蹴散らされた。

「なん……だと!？」

一秒足らずで完敗。

転倒して体を起こす間に、処刑人ドーパントは姿を消していた。

「くそ……何処行った!？」

辺りを見回すがやはり何処にもいない。

「……………いや、それよりも……………」

横たわる赤峰に目を遣る。

赤峰は目を見開いたまま、微動だにしない。

確認するまでもない。

彼女は息を引き取っていた。

「なんで仲間を……」

アクセルはドライバーを外し変身を解除。

と、同時にその場に倒れこんだ。

「……あら？」

無理もない。本日は昼からずっと戦闘。受けたダメージは半端なく、疲労もたまって限界に達していた。

「……………もう動けん…」

ポケットから携帯を取り出して電話をかけた。

「……………もしもし？翔太郎か？わけあって救護に来て欲しいんだけど……………」

いや、真面目に。銀杏街な」

そう言って電話をきった。

……………操り人形が……………

赤峰の言ったこの言葉が深く心に残っていた。

「俺を操り人形……………？」

誰が操ってるんだ……?」

P M 1 0 : 2 3 - - -

園咲家『来人の部屋』 - - -

部屋の真ん中に佇む来人。その瞳は緑色に輝いていた。

「ふむ……。やはり赤峰ユリはアクセルに敗れたか……。」

ミツクに尾行させて正解だったね」

まばたきをすると、その瞳はいつもの黒い瞳に戻っていた。

そしてベッドの上に置いていた本を開く。

「さて……次は…神田蒼太と金堂菜月の番にしようかな？

いや、この間確か坂下銀次を出撃させるはずだったのをドタキャンしたから…

坂下銀次に行かせないとかわいそうかな？」

どうやら次の襲撃の順番を考えているようだ。

何も書いていない本に向かって独り言を言う様はシユールそのもの。

順番を決めかねていると

コンコンッ

誰かがドアを叩いた。

「……ん？」

「はい。今開けるよー」

本をベッドに放り、ドアを開けた。

そこにいたのは次女の若菜だった。

「姉さん？どうしたの？」

「来人……検索してほしい人がいるの！」

「ダメ」

若干食い気味で来人は即答。

若菜の発言から返事までのタイムは0・000021秒。

人間の限界を越えてみせた。

「なんでよー?! いいじゃない少しくらい!」

「ダメだね。それはプライバシーの侵害だ。

立派な日本人ならそれくらい守るべきだよ!」

ガツンッ!!

「少しくらいいいじゃないのよ!」

「くっ……そうやってすぐに暴力で解決しようとするからモテないんだよ!」

ガツンガツンッ!!

「…で？やるの？」

「だから……すぐそっしょって」

ガツンガツンガツンガツンッ！

「話くらいなら聞こうかな……」

そう言って正座する来人の頭にはおびただしいほどのたんこぶが。

「えーと……誰の何を知りたいの？」

「好きな食べ物……」

「……………食べ物？」

来人はなんのこつちやと言いたげな顔をしていて、

若菜は真っ赤になった顔を手で覆っている。
どつやら真面目に言ってるつもりらしい。

「何で…好きな食べ物？」

「聞かなくていいでしょ！」

ガツンッ！

また一つたんこぶが増えたところで話を戻す。

「まあいいや。」

それで？どんな人？」

「えーと……すごくかつこよくて、強くて、優しくて……キヤー
ー！……！」

ガツンッ！

「何故殴る！？」

余計なたんこぶがまた一つ。いくつたんこぶを作れば若菜は帰って
くれるのか。

「……抽象的すぎるから、もっと具体的にお願いします……」

「あ、それもそうね！！」

えっと……初めて会った時は黒いコートに黒いソフト帽で、次に会
った時も黒いコートに黒いソフト帽で……

ラジオ局で見かけた時も黒いコートに黒いソフト帽で、
最近会った時は黒いベストに黒いソフト帽を被ってた……！」

「いや……名前とかを聞いたつもりだったんだけど……」

「早く言いなさいよ!……」

ガツーンッ!!

「……もう嫌だ! 帰りたい!!」

遂に来人は泣き言を言い始めた。

帰りたい!!とは言ったが皆さんご存知の通り、ここが彼の家である。

「そーねえ……。確か名前は……」

「左よ!!!」

若菜がそう言った途端、来人は動きを止めた。

「姉さん……今何て？」

「だからその人の名前は左よ！」

左探偵事務所の探偵、左翔太郎さんよ!!!

Y h o o ! 知恵袋に書いてたわ!!!!!!」

すると来人は立ち上がり

「やっぱりダメだ」

「え？何言ってるの？」

「帰ってくれ」

突然若菜を部屋から閉め出した。

びっくりし過ぎて若菜はなにも抵抗できなかった。

「……なんなのよもう!!」

地団駄を踏んで若菜は来人の部屋から去る。

一方、閉め出した来人はドアにもたれ掛かってその場に座り込んでいた。

「まさか……姉さんの口から左翔太郎の名前が出てくるとは……」

「一体どんなつながりが？」

来人はベッドの上の本を手に取り、

「プライバシーの侵害になるけど……仕方ない」

来人は目を閉じる。そして開く。

来人の目は緑色に輝いていた。

よくこのような描写があるが、これは来人が地球の本棚で情報を検索している様子である。

地球の本棚とは、この地球の全ての情報が詰まっている精神世界で、現実の世界と比べて時間の流れが遅い。

加えて来人の検索スピードなら一秒かからずに検索を終えることができる。

今の彼の目に映っているのは自分の部屋ではなく、とんでもない量の本棚だった。

その精神世界の真ん中に立って検索を開始する。

「キーワードは…【園咲若菜】」

一気に本が減っていく。

「そして、【左翔太郎】」

さらに本は減る。

「最後に、【つながり】」

さらに減り、一冊の本が残った。

来人はその本を開く。

「……成る程。姉さんは彼に何度か助けられていたのか……。
それで恋心を……」

来人は本を閉じ、目も閉じる。

目を開けると景色は自分の部屋。

この一連の動作は先ほども言ったとおり、現実時間では一秒もたっていない。

「まったく……どうしたものか……」

PM 10:31 . . .
園咲家『食卓の間』 . . .

「あつ、ここそんな名前の部屋だったんですね」

「急にどうしたんだね霧彦君？」

霧彦と琉兵衛の二人で優雅に遅めのティータイム。

「あ、何でもないです…」

二人が飲んでいるのはアールグレイ。

ジャズを流しながら金持ち感を出しまくっている。

するとそこに若菜がやって来た。

「おや、どうかしたのか若菜？」

「なんでもない！…！！」

メイドさんコーヒー頂戴！」

入ってくるなり乱暴に椅子に座って、コーヒーをもらって一気に飲み干した。

「いちそうさま！」

「もういいのか？」

「もういいわよー！」

コーヒー一杯飲んだだけで若菜は勢いよく部屋を飛び出していった。

「忙しないな……」。

何かあったのかな？」

琉兵衛は若菜の飲み干したコーヒーのカップに視線を落とす。

「それにしても…若菜はまだコーヒーなんか飲んどるのか…」

「あれ？お義父さんはコーヒーお嫌いですか？」

「苦いから大嫌いだね」

言われてみればコーヒーを飲んでいるところを見たことがない。

そこで霧彦にはある疑問が浮かんだ。

「もし……若菜ちゃんの好きな人がコーヒー大好きだったら…どうしますか？」

突然の質問に琉兵衛は目を丸くした。

そしてアールグレイを少し喉に通し、

「若菜の好きな人がコーヒー大好きねえ………決まっているじゃないか」

『テラー!!』

「ぶっころす!!!!!!!!」

ぬああああああああああああ!!!!!!!!」

娘を思う父は怒りのあまりテラー・ドーパントへ変身。

部屋は闇に包まれた。

「うーん……これは重症だな……」

霧彦はなんとも言えない顔をしてアールグレイを飲み干した。

「若菜を狙う男は地獄行きだああああ!!」

コーヒー好きなら輪廻の輪から追い出してやるわああああああああああ!!」

PM 10 : 35 - - -
左探偵事務所 - - -

ガシャーーン!!

「うわっ!?!」

「どうしたの翔太郎君?」

翔太郎の手には割れたコーヒークップが握られていた。

「いや、なんか突然割れたんだ……」

「突然割れた!?!」

「ああ、なんか不吉な感じがするな……」

4月3日 - - -
AM 9 : 23 - - -
左探偵事務所 - - -

不吉な予感から数日。

事務所には依頼人がきていた。

「…成る程。その犬を探せばいいんだな？」

「はい。わかりやすい毛の色なんですけど見つからなくて……」

依頼人は麻生さん（スタイルのいい女性）

迷子になった犬、次狼を探してほしいとのこと。

毛の色は青という大変珍しい犬だ。

「オツケーだ。すぐにでも捜査を開始しよう」

翔太郎と亜樹子は麻生さんを見送り、早速捜査に取りかかる。

「俺はウオッチャマンのとこ行くから、お前はクイーンとエリザベスのとこな」

「アイアイサーー!!!(^^>>」

「そんじゃ行くぜ!!!!!!」

二人は事務所を後にした。

AM 9 : 23 - - -

園咲家 - - -

悲劇から一夜あけ、若菜は慌てて玄関に向かっていた。

「……………あら、若菜。お出かけかしら？」

若菜を呼び止めたのは彼女の母親、文音。

「あ、おはようお母さん！」

ちよっと仕事ついでに行ってくるねー！」

今日も元気ハツラツといった感じで、街のアイドルは家を飛び出した。

「左さー！ーん！！待っててねー！ー！！！」

「……………左さんって誰かしら……………？」

文音が踵を返して自室に戻ろうとした時、

「奥様！奥様！」

一人のメイドが文音のもとまで駆け寄ってきた。

「あら、どうかしたの？」

「若菜様を見ませんでしたか！？」

「若菜？今出ていったところよ」

するとメイドは天を仰いで

「遅かった……」

「どづかしたの？」

「若菜様が……手料理を意中の殿方にプレゼントするんだと言って……」

料理を作ってプレゼントに行っただんです……!」

プレゼント？

若菜の手料理を？

「あの子はなんてことを……!」

そう。若菜の手料理はずば抜けて不味い。

若菜の手にかかればどんな料理も真っ黒。それを意中の男性に食べさせるというのだ。

常人では十中八九死ぬ……!

「今すぐ若菜を捕まえなさい！」

「はい……！」

その様子を琉兵衛はほくそ笑んで見ていた。

「ふっふっふっ……。」

これなら私が手にかけるまでもない……。」

様々な思惑が交錯する中、翔太郎に迫る死の脅威……

危ない翔太郎！

どうなる翔太郎!?

後半に続く!!!!!!

Ⅰからのプレゼントノ末路(後書き)

なんかだんだんバトルがお粗末に……。

誰か助けてくださいm () m

Ⅰからのプレゼント／翔太郎最強説（前書き）

前回のあらすじ！

見事アクセルがヒートに勝利。直後にヒートは処刑される。

そして数日後、若菜が料理を作って翔太郎のもとへ向かった。

このままでは危ないぞ翔太郎！逃げる翔太郎！死んじゃうぞ翔太郎
！！

暑苦しくてすいません。

それでは本編です

Iからのプレゼントノ翔太郎最強説

4月3日 . . .

「やめてよ……………」

AM 10 : 54 . . .

「お願いだから……………」

喫茶店『ウィンドガーデン』 . . .

「……………お願いだから返して翔ちゃん……………」

「お、スマン。久しぶりにこのやり取りするからはしゃいでしまった……」

翔太郎は取り上げたウォッチャマンのカメラをテーブルに置いた。

「……で？その犬の目撃情報は？」

「青い毛並みの犬だっけ？」

「ああ。ってか本当にそんな犬いるのか？」

「ドーベルマンにトイプードルにチワワのハイブリッドっていう情報……」

「ただの雑種だな……」

ウォッチャマンは鞆から一枚の写真を取り出した。

なにやら、動物園の檻の写真らしい。

「昨日風都アニマルパークにいたのを目撃されてる」

「へえ……」。

「この写真はなんだ？」

「ゴリラの檻」

「ゴリラ？」

「ウォッチャマンは写真を指さし、」

「その動物園の名物ゴリラに向かって吠えてたらしいよ」

それを聞いて翔太郎は立ち上がった。

そしてソフト帽を被り直す。

「サンキューなウォッチャマン。
早速行ってくるぜ」

そう言って立ち去ろうとする翔太郎をウォッチャマンが遮った。

「ん？まだなんかあんのか？」

「情報料は？」

「……………」

「……………」

「……………！ UFOだ！！」

「えっ！…うっそどじやん！…？」

翔太郎は店を後にした。

AM 10:54 - - -
喫茶店『ミルクディッパー』 - - -

「青い毛並みの犬？」

「そう。なんか情報ない？」

こちらは亜樹子とクイーン、エリザベス。

「なんか情報あつたっけ？」

「あれじゃない？新芽町の水族館の……」

「水族館？」

「うん。なんか超デカイシーラカンスの水槽の辺りをつろつろして
るんだって。」

ねー？

「ねー！」

水族館で……セキュリティはどうなっているのか？

「とりあえず……そこにいるんだね。」

オツケー。ありがとう!!」

亜樹子は席を立って店を出ようとした。

が、エリザベスが立ちはだかる。

「……えと……退いてくれないかな？」

「ふふーん！そんなことより……」

するとクイーンが亜樹子の腕をがっしり掴んだ。

「カラオケ行こうよ!!」

「……………へ？」

次の瞬間、亜樹子の視界は目まぐるしく回転。

気づけば二人に担がれている。

本日も無断で休暇。きっと城戸さんは泣いているだろう。

「……………ん？」

気持ちよく歌っていたが、若菜は何かに気がついた。

急に振り返り

「そこにいるの誰？」

後ろには誰もいない。

が、若菜は誰もいない道路を睨み続けている。

「一人二人じゃないでしょ？皆出ておいで」

「さすが若菜様……………」

電柱の裏、電柱の上、車の下、建物の上に4人、そして街路樹の葉

の中から

園咲家のメイドが飛び出して来た。

「若菜様。仕事をしないなら屋敷にお戻りください」

「嫌よ！私には使命があるもの！！」

若菜は暗黒物質の入った箱を掲げた。

「若菜様！！それは常人に食べさせると死んでしまいます！！」

「ど、どーゆう意味よ！？」

「若菜様のお相手を思えばこそ……………」。

取り返しのつかないことになる前に思い止まるのです！！」

「それよりさっきのどーゆう意味よ！！」

お互いに譲ろうとしない。

もはや問答ではどうにもならないと悟ったメイドたちは、懐からガ

イアメモリを取り出す。

「かくなるうえは…カづくで！」

『マスカレイド!!』『マスカレイド!!』『マスカレイド!!』

一斉にメイドたちはマスカレイド・ドーナントに変身。

若菜を取り囲んだ。

一応説明しておく、このマスカレイド・ドーナントは頭は皆さんの知っている頭だが、

頭から下はメイド服。

うーん……。想像するだけで気持ち悪い。

メイドマスカレイドは全員モップを持って構えている。

「お前たち……………」。

誰に向かって言っているのか、わかってるの？」

『クレイドール……！』

若菜はガイドライバーを纏い、クレイドールメモリを挿し込む。

街のアイドルは不死のドーパント、クレイドールに変身した。

「どうしても邪魔するなら……………薙ぎ払ってあげるわ……！」

凄まじいクレイドールの迫力に周りのメイドマスカレイドは後退りする。

する

ヴーン、ヴーン、ヴーン

「あつ、すいません。電話が……」

どうやらメイドマスカレイドに電話がかかってきたようだ。

「……はい。……はい。」

え？……わかりました……」

メイドマスカレイドは携帯をしまつと、

「みんな、撤退よ」

「「「！？」」「」」

メイドマスカレイドに加えクレイドールも驚いた。

「な……何故今さら……」

「ご主人様がそうしろと……」

メイドマスカレイドたちは何かと葛藤していたが、やがて変身を解除した。

「……若菜様、止めるならいまのうちです」

「だからどーゆう意味よ!?!」

メイドたちは何も答えずあっという間に姿を消した。

「……………まあ、いつか！」

とりあえず左さん 「

変身を解除して何事もなかったかのようにスキップをして、

真っ直ぐ左探偵事務所を目指す。

確実に迫る死の恐怖。

翔太郎はまだ死の恐怖を知る由もない。

A M 1 1 : 2 2 - - -

風都アニマルパーク - - -

「青い毛並みの犬？

そつえば今日は見てないですね…」

目撃情報のあつた動物園にて、翔太郎は聞き込みを行っていた。

「あ、もしかしたらリキ君の飼育してる嶋さんなら…」

「リキ君？」

「ご存知ないですか？」

「うちの名物ゴリラの名前ですよ。ほら、あれです」

「係の人が指差す方を見ると紫色のゴリラがトンカチを持って何かを叩いている。」

「えーと…あれは何を？」

「リキ君の特技は大工さんごっこですから」

「リキ君はウホウホ言いながらトンカチを木に打ち付けている。」

「木壊れとる……………」

「あ、嶋さん！…ちょっといいですか！」

係の人に呼ばれ、飼育員の方がこっちに向かってくる。

「はい、なんでしょう？」

「今日青い毛並みの犬は来た？」

すると飼育員は

「いえ、今日は見てないですが…」

今日はこの動物園には来ていない。

わかったのはそれだけ。

「そういえば亜樹子は何をしてんだ？」

携帯を取り出し早速亜樹子に電話をかける。

「もしもし。何してんだ？」

あ？カラオケ？

ぶっ飛ばすぞ？調査はどうした？

情報？早く言えバカ！」

AM 11:35 - - -

風花町一丁目『左探偵事務所』付近 - - -

「ママーー！変なお姉ちゃんがいるよー！！」

「ダメよ指差しちゃ！」

きつとあれはストーカーよ!!！」

ストーカー呼ばわりされたのは、この方。

「なっ…。風都のアイドルにストーカーだなんて…」

園咲若菜でした。

若菜は先ほどから電柱に隠れて事務所の様子を伺っていた。

「どっしりよっ…。どのタイミングで渡しにいけば…」

先ほどまでの調子を見る影もなく、本人も驚くほどビビっていた。

「くっ……。勇気を出すのよ若菜！」

と、奮い立たせるが足が動かない。

「もう！！私の意気地無し！！」

果たして若菜は翔太郎が帰ってくるまでに暗黒物質、もとい料理を届けられるのか？

AM 11:53 - - -

新芽町四丁目『風都aquarium』 - - -

亜樹子からの情報（本当はクイーンとエリザベス）によると、この水族館でも例の犬は目撃されているらしい。

そこにやって来た翔太郎は飼育員に捕まっていた。

「ハイ、あれがこの風都 aquarium の人気者、ラモン君ですよ！」

飼育員は水槽で優雅に泳ぐ緑色の綺麗な魚を指差す。

「いや、あの…」

「ハイ、私はラモン君のお世話をしています、名護ですどうぞよろしく！」

まだ翔太郎は何も質問していないのだが。

「そしてこれが一番の人気商品！ラモン君水鉄砲！」

飼育員が取り出したのは、目の前の魚をモチーフにした水鉄砲。

「見た目がグロいって」

翔太郎の一言も気にせず飼育員は続け、

「本日も一万個売れました！！」

「うそつけ！！」

「本当ですよ！？先ほどの仮面シンガーのイベントで使われましたし！」

初めて会話が成立した。

翔太郎は驚いたが、それよりも気になることが。

「あの、仮面シンガーって？」

「ご存知ないですか？最近デビューした覆面のシンガーソングライターだそうですね？」

既にデビュー曲はオリコン一位ですよ！？」

「へえ…。最近はそんな奴もいるんだな…」

そう言っつてふと、通路の奥に目を遣ると、

バイオリンを持った男に青い毛並みの犬が噛みついていていた。

「……………」

あの犬は？」

「あの犬ですか？最近ラモン君の水槽の前でよく吠えてるんですよ」

その犬は男に猛烈に噛みついていてる。

「あ、水鉄砲借りていいですか？」

それだけ言っつて翔太郎は飼育員から水鉄砲を奪いとり噛みついていてる犬のもとまで走り出した。

「うおおお！？何じゃこの犬！？」
「グルルル……」

逃げようとする男を犬は猛追。

噛んで噛んで噛みまくる。

「そこまでだバカ犬！」

ビシュッ！！

事件現場に翔太郎が駆けつけ犬の眼球めがけて水鉄砲を発砲。

犬は怯んで男から離れた。

その隙を見逃さず翔太郎は背後に回り、犬を羽交い締めにする。

「キャウーン！！」

「うるせえバカ犬！！」

やがて犬は諦めたのか暴れるのを止め、大人しく確保された。

「はあ…はあっ…スマン。助けてくれてありがとう…」

バイオリンの男は苦しそうに頭を下げた。

「いや…。大したことじゃあねえから」

犬を脇に抱え水鉄砲をくるくる回していると、さっきの飼育員が走ってきた。

「こらー！！その水鉄砲！

私に還しなさい！！」

P M O : 5 2 - - -

『カフェ・マル・ダムール』 - - -

「あーーーーー！お帰り次狼！！」

青い犬は一目散に飼い主の麻生さんの胸に飛び込んだ。

とても人に噛みつくような犬には見えない。

あのバイオリンの男の何が嫌だったのか。

「どうもありがとうございます探偵さん！それから…これ！」

麻生さんはポケットから封筒を取り出した。

「報酬です。少ないですけど…」

「ああ、ペット探しだから少なくとも構わないです」

翔太郎は封筒を受け取り、麻生さんと犬に別れを告げた。

犬は可愛く吠えて見送ってくれた。

本当、あのバイオリンの男の何が嫌だったのだろうか。

P M 1 : 2 9 - - -
左探偵事務所 - - -

翔太郎は帰宅。比較的早めに帰ってきたのだが、亜樹子はそれよりも早く帰っていた。

しかし、入り口の前で突っ立っている。

「あ？亜樹子、何してんだお前？」

「いや……こんなものが……」

振り返った亜樹子の手には箱が。

「……………なにそれ？」

真っ白い箱なのだが、何やら黒いオーラが出ている。

「これが扉の前に置いてあったんだけど……」

「あれか？うちの事務所にお礼とかか？」

「うちの事務所ってどうか……翔太郎君あて？」

「俺？何でだよ？」

「だって手紙が箱の上にあっただもん」

「へえ……誰からだろうな……」

そんなことを言いつつ翔太郎は箱を開けた。

中に入っていたのは……

「……う　こ？」

「亜樹子、女の子がそんなこと言っもんじゃありません」

確かに見た目はそう思えなくもない。

少し変な匂いもする。

「で、これは何だ？」

そこで亜樹子は先ほどの手紙を開いて読み始めた。

「えーと……」

『拝啓、左翔太郎様。』

先日は本当にすいませんでした。

お忙しいところを伺ったのにすぐ帰ったので、冷やかしかと思ったことでしょう。

お詫びと言ってはなんですが、料理を作ってきました『ってあれが料理！？』

「あゝ。これ料理か……」

さらに手紙を読み上げる。

「『あまり慣れていないのですが、よかったら食べてください。』

園咲若菜』

………うそつけえい!!」

全力で手紙を叩きつけた亜樹子。因みに嘘ではない。

結局若菜は勇気を振り絞ったものの、生憎翔太郎は不在。

仕方なくこのように扉の前に置いていくことになったのだ。

そうとは知らない亜樹子は手紙につっこむ。

「あれが料理のわけがあるかああ！」

ほんで拝啓って書いたんなら最後きちんとしめくくれや!!

っていつか園咲若菜って嘘バレバレやないかああ!!」

久々に関西弁でつっこむので力がいつも以上に入っている。

「っていつかあれ何の料理やねん!!」

「カルボナーラだな」

「カルボナーラかい!!」

へ？」

亜樹子は翔太郎の方を見た。

翔太郎は暗黒物質・カルボナーラを食べている。

何の顔色も変えず……！！

「ちょっと唐辛子入れすぎだが」

「アカーーン！！」

久々のスリッパで翔太郎の頭を思いっきり叩く。

「アカンよ！アカンて！！」

何を普通に食うとんねん！？死んでまうって！吐き出せ！！吐き出せ翔太郎君！！」

翔太郎の首を掴んで、あらんかぎりの力で翔太郎の脳を揺すり、暗黒物質・カルボナーラの逆流を試みる。

ゴスンッ

「何をすんだオメーは」

突拍子もない行動をする亜樹子に鉄拳制裁。

そしてあるうことが全て平らげてしまった。

「あわわわわわわわ……」

翔太郎君があんな汚物を……」

「さつきから表現が汚いぞ？」

「大丈夫？お腹痛くない？」

「痛くない！」「

「気持ち悪くない？」

「悪くない！もういいから中入ろっぜ？」

何事もなかったように事務所に戻る翔太郎。

若菜のカルボナーラは今回奇跡的に、なんかこう……
愛の力で上手く仕上がった

というわけではない！

先日の園咲家でふるまったのと同じスペックの料理である。

が、翔太郎は平気な顔で食べていた。

ミュージアムの幹部クラスのドーパントが卒倒するほどの料理なのに、翔太郎は平気だった。

もしかしたら翔太郎は地球上で最強なのかもしれない。

だって生身の状態で若菜の料理を食べて生きているのだから……

P M 3 : 1 9 . . .

園咲家『琉兵衛の部屋』 . . .

琉兵衛の部屋で、妻の文音は椅子に座ってニコニコしている。

そんな文音の目の前で琉兵衛は正座させられていた。

「あなた。私が今何を言おうとしているか、わかっているわよね?」

琉兵衛は文音に目を合わせない。

「メイドたちに若菜の追跡を中止させたそうですね。どうしてそんなことを?」

琉兵衛は目を合わせない。

「大方、相手の方に若菜の料理を食べさせて亡き者にしようとした

のでしょうか？

まったく……あなたという人は……」

文音は立ち上がりポケットからガイドドライバー、そしてガイアメ
モリを取り出した。

『クイーン！！！！！！』

それを見た途端、琉兵衛が部屋から逃げ出そうとする。

しかし、首根っこを掴まれ部屋に引き戻される。

そしてドーパントと化した文音が拳を振り上げた。

「う……やめてくれえええ！！」

「天ツツツツ誅！！！！！！」

ゴンッ

一時間後、診察に来た井坂にいつもの薬をもらい、文音に殴られた箇所の治療をもらった。

治療の際、琉兵衛が

「どうして親子揃って私を殴るのか。私は一家の長じゃないのか」とぼやいていたそうだ。

治療と診察を終えた井坂は荷物をまとめ、玄関に向かった。

ゆっくりと階段を降りる。

すると最後の段のところに来人が立っている。

「これはこれは井坂先生。お帰りですか？」

「やあ、来人君。お姉さんや文音さんに琉兵衛さんを大事にするよ
う言っておいてくれないかな？」

「言っておきましょう」

と、来人は微笑する。

「そうだ。井坂先生、彼は頑張っているみたいですね」

その一言に井坂は足を止めた。

「いつになったらもう一人を活動させるのですか？」

「毎度毎度…君は何の話をしているんだね？」

「それとも…ドライバーを盗まれたのが痛手になってるとか？」

その一言で井坂の表情が変わった。

「君は……そんなことまで……」

「否定しない、ということは痛手なんですね」

反対に来人は階段を登り始める。

「まったく…技術を盗んでおきながら、得体の知れない怪盗なんぞに完成品を盗まれるとは……」。

笑い話にもならない」

そうして来人は井坂の隣に並んだ。

「でも、前に言ったように今活躍してる彼じゃ僕の相手にならないし、

もう一人も相手にならない。

ついでに井坂先生。あなたもね……」

「好き勝手言ってくれますね……。今から試してあげましょうか？」

「天変地異を起こせる力があるからといってあまり過信しないほうがいいですよ？」

井坂は懐に手を伸ばす。

その時

『メタル！！』『ルナ！！』『トリガー！！』

ズダダダアン！！

階段に、井坂を取り囲むように銀、金、青の仮面が降り立った。

メタルはシャフトを井坂の首筋に当て、

「懐から手を退ける」

井坂は言われるがままに手を退け、両手をあげる。

井坂の背後にいたトリガーは銃を井坂の後頭部に突きつける。

「オイおっさん。俺らの上司に手え出してみろ。」

「この頭吹っ飛ばすぞ？」

「止めるんだ三人とも」

来人は三人を制した。

「君たち三人では井坂先生には勝てない」

「まあ、三人でも四人でも同じですけどねえ……」

挑発され、金色のライダーが前に出ようとしたが隣のメタルがそれを制した。

「とりあえず、早く帰ってもう一度ドライバーを作ってみてはどうですか？」

「では、そうさせてもらおうかな……」

井坂は階段を降り、そのまま屋敷から出ていった。

「来人様、あのおっさんそんな強いンスか？」

「一応天変地異を起こせるほどの力を持っている。

けど、僕には遠く及ばない」

来人は再び階段を登り始める。
三人は変身を解除した。

「そつだ、来人様。」

若菜様が左翔太郎に手料理をプレゼントしたと聞いたのですが……」

「ああ、彼なら大丈夫さ。特別だからね」

意味深な言葉を残して来人は自室に戻った。

残された二人は顔を見合わせて

「どついついことだ？」

「やあ………」

Ⅰからのプレゼントノ翔太郎最強説（後書き）

俺は一体何がしたかったんだ？

そんなモヤモヤした感じで次回に続きます。

寡黙なL / 風都の殺し屋 (前書き)

遅くなつてすいませんでしたm () m

寡黙なL / 風都の殺し屋

4月11日 - - -

この季節になると入学式や入社式などが多くなるはず。

AM 10 : 29 - - -

この会社でも同じように入社式が行われていた。

アース・リフォーメーション3階 - - -

「以上で入社式を閉会致します。皆さん頑張ってください!!」

新入社員を激励しているのは美人社長、園咲冴子。

美人社長からの激励に新入社員のボルテージはMAX。

どうでもいい話だが、この会社のモットーは

『弱肉強食』

『それでは新入社員の皆さん。会場を出る際には忘れずに

この会社のマナーについてのパンフレットを取ってください』

副社長のアナウンスで新入社員は退出し始める。

ちゃんとパンフレットを受け取りながら。

「ねえ霧彦さん。今年は有望そうなのはいたかしら？」

「うーん……やっぱり営業部にちらほら」

この会社では入社式から戦線に立たせる者を選定し始めている。

選ばれれば即戦闘班。そうして屈強な兵士を作り上げるのだ。

「結構仮面ライダーに倒されたからね。今年は例年より多く投入したいな」

「そんなことしたら会社が機能しなくなるでしょう?。」

今年度も忙しい日々が始まりそうだ。

AM 10:33 - -

風都警察署 - -

「えーと、身元は?。」

「赤峰ユリ。25歳のOLですね。」

刃野と真倉の二人は先日死亡した赤峰の捜査をしていた。

「それにしても照井のやつが、バイクで転んだ時に死体見つけるとは……。」

事が事なので竜は一応、

バイクで転んだ時にたまたま死体を見つけた

という言い訳をしたらしい。

「赤峰はOJだっけ？どこの会社かわかるか？」

「それなんです……」

真倉の表情が曇る。

「……？どうした？」

まだわかってないのか？」

「いや……わかっているんですが……」

「じゃあさっさと見えよ」

「………赤峰はアース・リフォーメーションに勤務していました」

「アース・リフォーメーション？それって……」

「先日の惨殺事件と社員の行方不明事件が起きた会社です。そして……」

真倉は刃野に資料を手渡す。

「赤峰は行方不明とされていました」

刃野が資料に目を通すと確かに赤峰の名前がある。

顔写真も間違いなく赤峰だった。

「どういうことだ？」

行方不明事件の犯人はあれだろ？

あの……お前が言ってた何でも粉々にするドーパントだろ？

行方不明の社員はそのドーパントの被害者なのに、何故死体が見つかるんだ？」

「そこなんです。あのドーパントの被害者なら粉々のはずなんです
が……」

赤峰は心臓を貫かれたような跡がありました。

それに推定死亡時刻は照井が発見する直前です。

つまり赤峰はつい最近まで生きていた」

「……………ってことになりそうだが…

なんか…行方不明ってのも怪しいな…」

刃野の眉間にどんどんしわが寄っていく。

「はあ……………。また面倒な事件増えちまったな…」

警察も忙しくなりそうである。

AM 10 : 38 - - -

左探偵事務所 - - -

敵も味方も多忙な中、この男だけは違った。

「暇だな〜」……………」

我らが主人公、左翔太郎。

「全然依頼来ないね…」

「来ないな……………」

翔太郎は机に突っ伏し、亜樹子はソファアームに寝そべっている。
こんな感じすでに4日が経過している。

「あゝあゝー」。

暇すぎるー！ー！ー！

翔太郎はおもむろにラジオの電源を入れた。

【以上！『風都ミステリーツアー！！』のコーナーでした！！】

ラジオから流れるのは当然『園咲若菜のヒーリングプリンセス』である。

長いこと仕事をサボっていた若菜でさえ仕事をしている。

みんな仕事で忙しい。

そんな中で翔太郎だけが暇なので少し胸が痛くなる。

【続きまして『癒してお願いお姫様！！』のコーナーです！！】

「いいなあ……。俺も癒してもらおうかな……」

「癒してもらっても依頼人は来ないって……」

「それもそっか……」

コンコンッ

「「!？」」

今、扉をノックするような音がした。

二人は素早く起き上がる。

「まさか……久々の……？」

「久々の…………？」

二人は扉の方を凝視した。

ガチャ…

「すみません……」

扉が開き、入ってきたのは若い女性だった。

その瞬間

「「キターーーーーー！」」

＼（。□＼）（／□。）／

「亜樹子確保オオ!!!!!!」

「合点!!!!!!」

亜樹子が依頼人と思われる女性に飛びかかる。

が、

「きゃっ!?!?」

入ってきた女性は突然のことにしゃがみこんでしまった。

飛びかかった亜樹子は空しく女性の頭上を通り過ぎ、
扉が開いたままの入り口を通過して下のガレージまで飛んでいった。

ガッシャアアアン！！

「ぎにゃあああああ！？」

亜樹子の断末魔が止んだ頃にようやく女性は立ち上がった。

「あの、ここは探偵事務所ですか？」

「……………あ、ああ。」

左探偵事務所だ。そして俺がここの探偵、左翔太郎だ」

亜樹子が心配だがここは依頼人を優先。

依頼人にソファアに座るように促すとコーヒーを用意する。

「あ……丁寧にどうも……」

「えー……あなたのお名前は？」

「私は山崎美雪と言います……」

翔太郎は自分のコーヒーを一口飲む。

「美雪さんね……」。

それで？今日はどのような依頼を？」

美雪もコーヒーを一口飲むとカップをテーブルに置いた。

「……本来なら…警察でするような話なんです…」

「警察？なんでまた？」

「…私の友人に、勝俣茜っていう人がいるんですが…
彼女、まだ二十歳なんですけど結婚しているんです」

「へえ………」

「その茜の旦那が、とても酷い男で……」

茜をいつも殴ったりして……」

「DVか………」

それで？」

「その上浮気まで………」

私……許せなかったんです！」

美雪は感情が昂りすぎてテーブルをおもいつきり叩いた。

「あっ……ごめんなさい……」

「いやいや、お気になさらず」

一口コーヒーを飲むと話を続ける。

「だから……私……殺し屋に依頼したんです」

「殺し屋ね……」

翔太郎はカップをテーブルに置いた。

「殺し屋!?!」

「はい……」

「マジで！？」

「マジです……」

「いるの殺し屋！？この風都に！？」

「はい……。ご存知ないですか？

エレメンタルって呼ばれる殺し屋なんです……」

「いや、聞いたことない！」

翔太郎は何故かそわそわし始める。

「それで依頼して、どうなったんだ！？」

「……茜の旦那は……」

私と茜の目の前で死にました……」

「……………死んだ？」

「はい……………」。

まさか……………本当に言う通りになるなんて……………」

途端に美雪の目から涙が溢れ始めた。

翔太郎はそつとハンカチを渡す。

「あー……………悪いんだが一ついいかな？」

「グス……………」

「なんでしよう？」

「言う通り……………ってのはどういうことなんだ？」

「……………エレメンタルって言う殺し屋は焼死、凍死、感電死、窒息死の何れかを指定できるんです……………」

「…今回はどれを指定したんだ？」

「焼死を指定しました…」

とりあえず聞けたのは殺し屋、エレメンタルの詳細。
ウォッチャマンなら何か知っているだろう。

「とりあえず、美雪さんは警察にこのことを正直に話すんだ。」

「おい亜樹子!」

翔太郎が叫ぶと下の階から亜樹子が事務所に飛び込んできた。

「呼んだ翔太郎君!？」

「美雪さんと警察に行ってくれ」

「???? 翔太郎君はどーすんの？」

「ウォッチャマンのとこ行ってくる」

壁に掛けたソフト帽を被り翔太郎は事務所を飛び出した。

「……………」

「……………」

取り残された女性二人。

「……………えー……………はじめてまして……………」

「はじめまして……………」

「……………今日はどのような依頼ですか？」

A M 1 1 : 0 5 - - -
屋台『風麵』 - - -

「んー！！大将！もう一杯！！
メンマ多めにねー！！」

口からチャーシューがはみ出たまま、ウオッチャマンはラーメンを
もう一杯注文する。

「……………で？どうなんだ？」

そのエレメンタルについての情報は？」

その隣で翔太郎は大量のナルトを頬張る。

「エレメンタルでしょ？」

最近結構張り切ってるらしいよ。

焼死、凍死、感電死、窒息死……

2ヶ月くらい前から頻繁に起きてるね」

「2ヶ月くらい前……」

翔太郎は大量のナルトを飲み込み、箸を置いてウォッチャマンの方
に向き直った。

「波樹町の凍結事件との繋がりは？」

「……それって……竜君の？」

「それ以外他に何があんだよ」

「今のところ何も言えないね……………」。

あ、合言葉が必要なんだよ」

「合言葉？」

翔太郎がコップの水を飲み干すのと同時にウォッチャマンの注文したラーメンが完成。

メンマでスープも麺も見えない。

「うっひょー！！いただきます！！！」

ウォッチャマンは箸を取りメンマを口に運ぼうとした時、
翔太郎
の箸がそれを遮った。

「……………」先に合言葉について話せて

「もー！。翔ちゃんのせつかち！！」

「叩くぞ」

「おーコワ……」

エレメンタルって、毎日決まった時間に、決まった場所でしか依頼を受け付けないらしい。

そしてその依頼の時に合言葉が必要なんだ」

「その合言葉は？」

「合言葉は………」

AM 11:33 - -

銀杏町二丁目 - -

「うーん……。確かに窒息死やら焼死やら…原因不明の事件は最近増えてるな」

銀杏町二丁目。ここに件の勝俣茜の自宅が位置する。

そしてその自宅では大勢の警官と鑑識が作業をしていた。

「亜樹子ちゃんが連れて来た……
えー……」

「美雪さん？」

「そう。その美雪さんの話が本当なら……ドーパントの可能性が高いな……」

そう推理するのは刃野刑事。

他の課からこの事件を任せられ、頭を抱えている。

「二人の供述からすると……」

うーん……………。

人手足らねえなあ……うちの課……………」

「なんじゃそら！……！」

軽快にずっこける亜樹子。

「いやいや、亜樹子ちゃんよ。うちの課は三人だけだよ？

今現場にいるのだってほとんど他の課だ」

周りを見ると五人ほどの警官が亜樹子に一瞥する。

「なんで三人しかないの？」

「……………風都の事件はほとんどドーパントの仕業だからな……………」

みんなうちの課に仕事押し付けりゃあ、楽に給料貰えるんだよ」

「給料泥棒じゃん……！」

亜樹子がそう叫ぶと周りの警官達がビクツとしていた。

刃野は慌てて亜樹子の口を塞ぐ。

「そういうのは声に出しちゃダメだって!!」

いや、皆さんどうもすみません!!」

全力で刃野が頭を下げていると、数少ない刃野の部下二人がやってきた。

「刃野さん、勝俣茜が到着しました……って刃野さん……あなた一体何を？」

真倉は例の勝俣茜を連れてきたが、

刃野が他の警官に頭を下げているのを見て動きを止めた。

「刃野さん、俺達だけまだちゃんと現場の確認を……
って刃野さん……あなた一体何を？」

同じようにやってきた竜も動きを止めた。

「ん？いや、気にしなくていい。」

で、なんだっけ？」

「なんだっけ？じゃないですよ！

早く実況見聞しましょ！！！」

「あ、私も参加していい！？」

「ダメ！！！」

間髪入れずに竜は即答した。

「一般人にそんなことさせるわけにはいかないんだよ」

「翔太郎君は許すくせに！！！」

二人が子供のようなやり取りをしていると、大人な刃野が二人の間に割って入った。

「まあまあ。少しくらいならいいだろう？」

「一応こんなお嬢さんでも翔太郎の助手だからな」

「さすが刃野刑事！！男前！」

「刃野さん！？」

まさかのOKに驚愕の竜。

それでは早速開始。

始めに勝俣茜の夫が焼死したリビング。

「えー…この事件で亡くなった勝俣浩哉はテーブルに置いていたシーチキンサラダに頭から突っ込むようにして顔をうずめ、

そのままテーブルごと火に包まれていたそうです」

真倉は勝俣茜の供述を元に説明をする。

「じゃあ、茜さん。

このテーブルに……こんな感じですか？」

事件の再現をする竜。

その様子を見ながら、真倉の隣の茜は

「いや……もつと前に頭を出していました」

茜の言う通りに頭を前にだす竜。

「はい。そんな感じですよ」

「んー……。顔をうずめてたっことは、誰かに襲われたのか？」

「解剖の結果では、燃えすぎてほとんどボロボロでしたが特に大きな傷はなかったそうです」

「そうか……」

三人の刑事は黙り込み、現場を見つめていた。

すると、

「……………ん？亜樹子ちゃんは？」

続いてキッチン。

「亜樹子ちゃん何してんの？」

亜樹子はキッチンで調味料や、冷蔵庫の中身をチェックしていた。

「え？いや…………主婦のキッチンってどんな感じかと…………」

「……………なんじゃそら……………」

三人の刑事はガツクリ肩を落とす。

そんなことを気にすることなく亜樹子は引き出しに目を移した。

「あ、茜さん！！ここ何が入ってるの！？」

「え？」

あ、そこはお醤油とかみりんとかが入ってますよ」

茜の言う通り、そこにはたくさんの調味料が入っていた。

「あ—————!!」

「このサラダ油！」

亜樹子は引き出しからほとんど空のサラダ油を取り出した。

「……………亜樹子ちゃん、それは？」

真倉が恐る恐る尋ねると、

「うちの事務所にも同じのがあるの!!」

その一言に刑事たちはずっこけた。

「このサラダ油すっごくいいんだよ!？」

ね!茜さん!？」

「ええ…はい……」

茜も苦笑いしかしていない。

「へえ……亜樹子ちゃん料理するんだ?」

竜がそう尋ねると

「うん。この間このサラダ油使って料理したら……」

ちよつとしたボヤ騒ぎになつたんだよねえ……」

しみじみと懐かしむ亜樹子を他所に、三人の刑事たちは他の部屋に移る。

お次は寢室。

「特に……これといったものはないですね」

「そうだな……」

「ん？これは……」

真倉は照明のスタンドの近くに置いていた小さなケースを見つけた。

「茜さん。このケースは？」

「それは……私の睡眠薬や頭痛薬が入ってます」

「睡眠薬？」

「はい……。夫からの暴力で眠れなくなった時に……」

夫からのDVによるストレスのせいで眠れないのだろう。

三人が黙って寝室を出ようとした時、

「ひっっ……ろおおお!？」

何この寝室!？広っ!！」

亜樹子が大声を出しながら寝室に入ってきた。

三人は耳を押さえながら

「おい照井、翔太郎の助手はこんなうるさかったか?」

「今日は気合い入ってますね……」

「肝心の探偵は何してんだよ?

助手なんとかしてくれよ……」

P M O : 3 8 - - -

波樹町三丁目『波樹公園』 - - -

迷惑な助手がハッスルする一方、翔太郎は殺し屋エレメンタルに会いにこの公園に来ていた。

- - - いかい？まず、公園に入ってすぐに、一番右隅のベンチに座るんだ。

ウォッチャマンの指示通り、翔太郎は一番右隅のベンチに腰かける。

- - - そして、午後12時40分になったら隣に誰かが必ず座ってくる。

翔太郎が携帯の時計を見ると、PM0:39。

公園には翔太郎以外誰もいなかった。

風が木の葉を揺らす音だけが聞こえる。

すると、どこからともなく一人の男が翔太郎の隣に座った。

……誰かが座ったら、

『明日の天気は？』

って聞かれるから、こつ答えて…

「はあ……………」

明日の天気は……………？」

ウォッチャマンの言った通り、隣の男は明日の天気を聞いてきた。

声から判断すると、まだかなり若い。

翔太郎は深呼吸して

「雨のち晴れ……」

夕方には虹が見れるぜ？」

ウォッチャマンが指示した合言葉。

翔太郎にはよく意味がわからなかったが、とりあえずこれが合言葉らしい。

「ふん……
依頼かい？」

翔太郎は男の方を見た。

そこにいたのは、まだあどけなさが残る少年だった。

「お前が…エレメンタル？」

「ガキだからびっくりした？」

まさかこんな少年が殺し屋？
翔太郎には信じられなかった。

「依頼があつて来たんだろ？
誰を殺して欲しい？
どんな殺し方がいい？」

「まあ……依頼の前に聞きたいことがある」

「聞きたいこと？」

「そつだ……」

翔太郎はソフト帽をかぶり直す。

「お前…人を殺してどれくらいだ？」

「うーん……三ヶ月くらい?」

「焼死に凍死、感電死、窒息死ができるらしいな……」

「?うん、できるけど?」

「2月5日の波樹町二丁目…町凍結事件……」

あれやったのお前か?」

すると少年は笑いだした。

「ははっ…!」

いくら俺でもあんなことはできないよ!…!」

どうやらこの少年には不可能らしい。

それでも翔太郎は一つだけ理解した。

「…ってことは…お前…
やっぱりドーパントか…」

「へえ……ってことはあんたガイアメモリ知ってるんだ？」

少年は悪びれもせず、おどけたように言った。

「今すぐ手放せ…。」

これ以上罪を重ねるな…。」

「ん？」

何あんた？依頼に来たんじゃないの？」

「お前を止めに来たんだよ」

「無理だね」

「自信たっぷりだな…。」

「自信じゃあないさ。」

この街には殺し屋エレメンタルが必要なんだ！」

少年は立ち上がり両手を広げてくるくる回っている。

「この街にお前が必要だと？」

「そつだ!!」

この街には腐った人間が多すぎる！

そんな腐った人間を消してもらおうと毎日依頼が舞い込んでくる！
俺はこの街のために殺しをするんだ!!」

その一言が翔太郎の逆鱗に触れた。

「この街のため？」

勘違いヤローが……」

「…ん？なんか言った？」

少年は回るのを止め、翔太郎を見つめる。

「おいクソガキ……」

殺された奴の残された家族の気持ちを考えたことあんのか？」

翔太郎も立ち上がり、少年に近づく。

「家族だけじゃねえ…」。

そいつの残された友人の気持ちを知ってんのか？」

「何言ってるの？」

そんなの知ったこっちゃない。

殺されるようなことした奴が悪いんだよ！」「

「それじゃお前に殺しを依頼して、実際に死んで、

その罪の意識から涙を流す人の気持ちを考えたことあんのか？」

「はあ？そんな奴いるわけないじゃん！！」

「はあ……………」

深く息を吐き出し、拳を握りしめる。

「人の気持ちも理解できない奴が……………」

この街のためなんて口にする資格はねえんだよ……………」

「なんなのあんた？」

警察？

説得なんてできるとでも思ってたんの？」

少年はポケットからガイアメモリを取り出し、左肘に挿した。

『エレメンタル!!』

電子音と共に、少年は炎や稲妻、冷気に包まれて

赤、青、黄、白の四色のドーパント、エレメンタル・ドーパントに変身した。

「まあ、メモリを取り上げようなんて無理だと思うよ?」

翔太郎もロストドライバーを装着する。

「説得も…メモリの没収もする気はないさ…」。

それに俺は警察じゃない。

ただの探偵だ……んでもって…」

『ジョーカー!!』

「この街の仮面ライダーだ

変身……」

ジョーカーメモリをロストドライバーに挿して、青白い光の中から仮面ライダージョーカーが姿を見せた。

「なっ！？あんたが仮面ライダー！？」

さすがにエレメンタル・ドーパントもこれには驚いた。

エレメンタル・ドーパントは二、三步後退りする。

「くっ……」

こうなったら実力行使だ！」

そう言って右手をかざすとバチバチと音をたてて、電気を帯始める。

「くらえっ……」

右手を振るい電撃をジョーカーに向けて放った。

ジョーカーはそれを上体を反らしただけで避ける。

「なっ!？」

なんで避けれる!？電撃だぞ!？」

どンドン近寄ってくるジョーカーに向けてもう一度電撃を放つ。

が、またしても少しの動作で避けられてしまっ。

「なんなんだお前!？」

「言ったる?」

この街の仮面ライダーだ!！」

今度はジョーカーが拳を振るい、
それがエレメンタル・ドーパントの顔面に命中する。

「ぐっ!！」

くそがああああああ！！」

両腕から炎を吹き出して反撃に転じる。

しかし、それより速くジョーカーのボディーブローが炸裂した。

「どうした？喧嘩は初めてか？」

さらにハイキックがエレメンタル・ドーパントを捉えた。

「うがああっ！！」

強烈な一撃に吹き飛ばされ近くのベンチに激突した。

「ハア……ハア……ハッ……」

調子にのるなあ……！！」

エレメンタル・ドーパントが右手をかざす。

すると、全身が締め付けられるような感覚をジョーカーは感じとった。

「……………なんだこれ？」

「ハハハ……………」

俺は空気を操れる！！

お前の周囲の空気で圧死させてやる！！」

ジョーカーの体はどんどん締め付けられていく。

が、それはたいした問題にはならなかった。

一気にエレメンタル・ドーパントとの間合いを詰めて思いっきり殴り飛ばす。

「おぶっ！？」

「こんな子供騙しみたいな攻撃で圧死するわけねーだろ？」

「ぐ……くそっ！」

フラフラ立ち上がり、今度は両手を挙げた。

「こつなったら……凍死させてやる……」

挙げた両手で地面に触れると、地面が凍結し始めた。

そしてジョーカーの足下めがけてどんどん凍結していく。

「はっ……」

「やっぱりガキだな……」

ジョーカーは飛び上がって凍結を回避。

そしてその勢いでエレメンタル・ドーパントを蹴り飛ばす。

「メモリの使い方が甘くて助かったな……」

エレメンタル・ドーパントはまだふらついている。

「それじゃ止めだ……」

『ジョーカー！！マキシマムドライブ！！！！』

青白く発光する右の拳を握りしめ、姿勢を低くして構えた。

「さあ…お前の罪を数えろ！！」

エレメンタル・ドーパントに向かって駆け出す。

まだふらついているエレメンタル・ドーパント。

ジョーカーは拳を振り上げた。

「ライダーパン」

スパアアアン！！

「うおおおー!?」

突然何かがぶつかり、ジョーカーが吹き飛んだ。

「つてえ……………」

なんだ今のは…………?」

体を起こし、エレメンタル・ドーパントを見るが驚きのあまり微動だにしていない。

どうやら彼の攻撃ではないらしい。

では一体何が?

「…………嘘だろ…………」

もう一人いたのかよ…………」

口を開いたのはエレメンタル・ドーパント。

ジョーカーは立ち上がり、エレメンタル・ドーパントが向いている方向を見た。

その方向にいたのは

「金色の……………」

……………ライダー……………?」

ジョーカーと同じドライバー！

同じボディ。

同じ仮面。

そして全身が金色に輝くライダーがそこにいた。

寡黙なし／風都の殺し屋（後書き）

暇がなくて更新が遅れ、しかもクオリティも低め……

いや、クオリティはいつも低いからいいや。

本当にごめんなさい。

おそらくこれが今年最後です。

次回も1月下旬くらいに更新でしょう。

本当にごめんなさい。

そして読んでくれた方、よい年末をお過ごしください。

寡黙なL / 事件の真相 (前書き)

今回の依頼

山崎美雪

依頼内容

……なんだっけ？

メモ

依頼内容を完全に忘れてしまったが、とりあえずミュージアムと戦ってたはずだ。

多分。

翔太郎

寡黙なL / 事件の真相

4月11日 . . .

「は…初めて知ったよ……」

仮面ライダーは二人いるだなんて……」

P M 0 : 5 3 . . .

「なんでミュージアムがここに来るんだよ……」

波樹町二丁目『波樹公園』 . . .

殺し屋エレメンタル・ドーパント、仮面ライダージョーカー。

二人の前に金色の仮面ライダーが現れた。

金色の仮面ライダーは黙ったまま、二人の方へ歩み寄ってくる。

「おい！お前ミュージアムのライダーか！？」

「……………」

金色のライダーは黙ったまま。

「話聞いてんのか！？」

「……………」

何も言わない。

「何なんだあのライダー……」

今までのライダーは何も言ってないのに勝手に名乗ってくれた。

大変律儀な奴らだった。

ジョーカーからすればこの金色のライダーは無愛想以外の何者でもない。

「……………」

突然、金色のライダーの腕が伸び、エレメンタル・ドーパントに巻き付いた。

「!?!」

「なんだこれ!?!」

まるで大蛇のように巻き付き、エレメンタル・ドーパントを持ち上げる。

「くそっ!放せよ!」

そのままじたばたするエレメンタル・ドーパントを金色のライダーは投げ飛ばした。

「ええ!？」

「うおおわあああああ!？」

絶叫しながら遙か彼方に投げ飛ばされ、やがて見えなくなった。

「……………なんちゅう無茶苦茶な……………」

そう呟くジョーカーの方を向き、近づいてくる金色のライダー。

何も言葉を発することなくゆっくりと歩くその姿は

何か畏怖のようなもの感じさせられる。

「何だ!？」

「一体何が目的だ!？」

「……………」

何も喋らないライダーは親指を立てた。

「……………お？話す気になったか？」

そのまま立てた親指を、力強く逆さまにして下に向けた。

つまりジョーカーに対する挑発。

「……………ハッ……」

「上等だよ……………」

そう吐き捨てる。ジョーカーは金色のライダーに向かっていった。

金色のライダーもジョーカーに向かって走り出す。

「おらあつー!!」

まずはジョーカーの先制攻撃。

右のストレートを放つが、紙一重で避けられる。

今度は金色のライダーが同じように右ストレートで反撃。

ジョーカーも首を傾けて避ける。

「ちっ! やっぱり一筋縄じゃあいかねえか!!」

飛び退きざまに同時に上段蹴りを放つがまたしても避けられてしま
う。

やはり相手も仮面ライダー。

スペックはもとより戦闘力は半端ではない。

しかし、ジョーカーにとっての問題はこれだけではなかった。

「……………」

「何か喋れよ!!」

相手の沈黙であった。

普段から相手と会話しながらどつき合っていたため、
それに慣れてしまい、まったく喋らない目の前の相手に苛立ちを覚
えてしまう。

黙って仕事に集中してて非常に真面目な相手だと思っただがなあ…
……

とか考えている間にジョーカーの足を長く伸びた金色の腕が巻き付
いた。

「しまった！」

「……………」

巻き付いた腕は軽々とジョーカーを持ち上げる。

そしてジョーカーを思いっきり地面に叩きつけた。

「はっ……………」

さらにもう一度、さらにもう一度叩きつけた。

「くそ……………今度はこっちの番だ！」

足に巻き付く腕を必死に手繰り寄せる。

が、手繰り寄せてもどんどん金色のライダーの腕は伸びていく。

「そんなのありか!？」

再び叩きつけられ、終いには投げ飛ばされてジャングルジムに衝突した。

「……………」

「……………くっ……………まだだんまりかよ……………」

「だったら……………」

『ジョーカー！！マキシマムドライブ！！……………！！』

「これで決まりだ……………」

ジョーカーの右足が紫色の光を帯びていく。

「ライダーキック……………」

低い声で呟くと高く飛び上がった。

右足を前に突きだし金色のライダーに迫る。

「ハアアアッ!!」

すると突然、相手まであと少しというところでジョーカーの勢いが止められた。

「……………え？何で？」

ジョーカーの体は宙に浮いたまま。
落ちもせずに浮いたまま。

よく見ると金色のライダーの腕が伸び、後ろからジョーカーを掴んでいる。

「あ、コラ!! 離せ!!」

宙に浮いたままじたばたするが当然離してもらえないはずがない。

しかしそれでもじたばたする。

「離せコラ!! 気持ち悪いんだよ!!」

「……………!!」

じたばたするジョーカーを再び思いっきり投げ飛ばす。

そして再びジャングルジムに衝突した。

「ぐあっ!!」

ぐっ……そ……

……なかなか強いな……」

体を起こしながらそう言うと、金色のライダーが震えていた。

両の拳を力強く握りしめて。

「……………あ？」

どうしたんだあいつは？」

「……………?????」

「うおおおお！？」

ズドンッ！！

全ての攻撃を喰らってジョーカーは力なく倒れこむ。

「っあ……ぐ……」

その拍子にドライバーが外れ、変身を強制解除。

翔太郎は起き上がることさえままならない。

「……………」

動けない翔太郎のもとに金色のライダーが近づいてくる。

「……くっ……………やべえ……」

殺られる……

そう思った時だった。

黒い大きな、クワガタムシのような物体が金色のライダーの前に飛んできた。

『もう十分だよ。ご苦労様』

その物体から人の声が発せられる。

おそらくは男。しかもまだずいぶん若いだろう。

『今日はこれくらいでかまわない。』

帰投してくれたまえ』

すると、金色のライダーは指示通りに踵を返した。

「なっ……おい待て！」

翔太郎が叫ぶも振り返らずに、高く跳躍してどこかへ去っていった。

気づけば、先ほどの黒い物体もない。

「くそ……」

それにしても……さっきのあの声……

どこかで……」

立ち上がることもできず、横たわったまま翔太郎は意識を失った。

「どつするんですか刃野さん……」

事件現場の真倉は項垂れながらぼやく。

「何がだ真倉……」

「探偵の助手ですよ……」

二人はの視線は現場ではしゃぐ亜樹子に向けられていた。

「つつひゃあー……！！」

「すー……い……！埃一つない……！」

「え………と……私A型なんで……きちんとってないと落ち着かないんです……」

亜樹子の隣で勝俣茜が苦笑いしながら頭を掻く。

「ちょっと亜樹子ちゃん！
捜査中だって！！」

竜に注意されてもお構い無し。
もう誰も止められない。

誰もが諦めかけた時、

亜樹子の携帯電話が鳴った。

「あ、翔太郎君だ」

液晶に表示された名前を見るとすぐに電話に出る。

「もしもし！？翔太郎君どうしたの！？

私今捜査してんのよ！
それがもう……

へ？病院？」

突然、亜樹子の顔が変わった。
その反応を見た竜は携帯に耳を近づける。

「うん……うん……」

わかった。今からそっち行くから」

そう言って電話を切り、亜樹子は手を合わせて竜に頭を下げる。

「ごめん竜君！私病院行ってくるー！！」

「あ……ああ。早く行っておいで」

竜にそう言われ、亜樹子は瞬く間に勝俣邸を飛び出し病院まで走っていった。

「なんか知らんが……帰ったな」

「帰ってくれましたね……」

刃野と真倉は小さくガッツポーズ。

「……てかなんで帰ったんすかね？」

「なんでも、翔太郎の奴が怪我をしたから病院に行くんだそうです」

「「病院!?!」」

真倉と刃野は目を丸くした。

「探偵怪我したのか!?!」

「あいつ今日来れないのか!?!」

「多分来ないと思いますよ?」

「来ないのか!?!……」

「あ！刃野さんまた探偵に頼ろうとしてんでしょ！！」
「え？ダメ？」

「ダメですって！そんなだから俺等給料泥棒って言われるんです
！！」

亜樹子がいなくなっても騒がしい事件現場。

進展のないまま、捜査は日付が変わっても続けられることになる。

P M 7 : 1 6 . . .
新芽町三丁目 . . .

「ハア……ハツ……なんなんだよあいつら……」

少年が右肩を押さえ、足を引きずりながら暗い夜道を歩いていく。

「……ライダーが二人もいるなんて……」

「っあー!!」

小さな石に躓き前のめりに倒れこむ。

その拍子にポケットから

『E』と書かれたガイアメモリが地面を転がった。

……人の気持ちも理解できない奴が………

「くっ………つるさい………」

……この街のためなんて口にする資格はねえんだよ………

「いんちいんちいんちい………」

俺は間違っていない………

この街のために……俺は……」

「滑稽……ですね」

横たわる少年のすぐ近くで誰かがそう言った。

「誰だ!?!」

辺りを見回すが、人影は一つもない。

いるのは三日月に照らされる自分一人。

「人の命を奪うことが善い行いだとは思えませんかね……」

「誰だ!!!出てこい!」

立ち上がってメモリを握りしめる。
全神経を集中して声の主を探すが、やはり見当たらない。

「今回ばかりは仮面ライダーの意見に賛成ですね。

ところで、あなたですね？エレメンタルのメモリを持っているのは…」

「俺のメモリを知っているだと!？」

何か恐怖のようなものを感じ取り、少年はガイアメモリを挿した。

『エレメンタル!』

ドーパントに変身して再び警戒する。

「どこだ……どこにいる!」

「あなたの目の前ですよ」

突然目の前に異形の姿をしたものが、何も無いところから姿を現した。

「な……なんだお前………」

「ずっとあなたの目の前にいたのに……気づきませんでした？」

現れたそれは一歩前に出て右手をかざす。

いつの間にか、三日月は見えなくなっていた。

「まあいい……」。

これから死ぬあなたにはもはやどうでもいいことです」

4月12日 - - -
AM9:03 - - -
銀杏町二丁目 - - -

「いやあ〜。

良かった良かった！
意外と大したことなかったもんなー！！」

「何言ってるんの翔太郎君！？
アバラにひび入ってるでしょ！？」

一日で復活した翔太郎は早速事件現場にやってきた。
当然警察のお手伝いのためである。

「ここか件の家は？」

「そっかー！おちあつてぶじぶじぶじぶじー！」

「……………何様だお前は」

二人が家に入るとすでに刃野達が捜査を行っていた。

「お、大丈夫か翔太郎？」

「ああ、大丈夫だ。
なんともない。」

「で？刃さん、なんで俺が呼ばれたんだ？」

「なんでって、捜査協力のために決まってるだろ？」

「いやいや、死因とか犯人とかわかったんだろ！？」

「だいたいな！」

「だったら頑張って捕まえるよ!!」

「ところがどっこい!!」

まだ変なところがあるんだよ」

「変なところ?」

刃野が真倉に指示すると、真倉は手帳を開き始める。

「えー：今回の事件の被害者は勝俣浩哉（28）、無職。
妻の勝俣茜にDVを繰り返していた模様。」

死因は焼死。テーブルの上の料理に頭を突っ込んだまま火に包まれていて、消火した時には既に死亡。

第一発見者は隣の部屋にいた勝俣茜、山崎美雪。

そしてその山崎美雪の供述により殺し屋、エレメンタルによる犯行

と断定。

おそらくエレメンタルはドーパント……」

「いやいや、それは亜樹子から聞いたから知ってるって」

「だが、一つだけ変なところがあるんだよ」

「じゃ早くそれを教えてくれよ」

「じゃこっち来い」

刃野に案内され、翔太郎は現場の部屋に入る。

部屋の中では竜が待っていた。

「……この部屋がどうかしたのか？」

見たところ天井とテーブルが燃えた跡が残っているが

他に特筆するようなところはない。

「この部屋は当然事件当時のままなんだが、窓の鍵が閉められてたんだよ」

「窓？」

翔太郎が見ると確かに鍵がかかっている。

窓が割られたような形跡もない。

「……………この部屋の出入口って……………」

出入口の方を見ると先ほど通った一つだけ。

「という事は……………」

「密室殺人ってわけだ……………」

で、お前の意見を聞きたいんだが……」

翔太郎は腕を組んで考え始める。

「うーん……普通に玄関から入ったんじゃないあ……」

二人に気づかれるし……」

殺し屋一人の能力でこんなことできるのか？……」

わからん！……！！……！！……！！」

ソフト帽を投げ、頭を抱える翔太郎。

さすがの翔太郎にも無理らしい。

「なんとかならんか翔太郎？」

「……………」
「ういづのは、第一発見者に話を聞いた方がいいな……」

とらららら……

五分後……

「連れてきました」

真倉に連れられ茜が部屋に入ってくる。

「どうもはじめまして。」

探偵の左翔太郎です。

早速で申し訳ないのだが、旦那さんを発見した時のことを教えてもらえるかな？」

「はい……。」

あの時はいつもみたいに美雪に夫のことを相談してたんです……。」

翔太郎は腕を組んで話を真剣な顔つきで聞いている。

「旦那さんが隣の部屋にいたのに相談を？」

「たまたま……その日は夫が早く起きたので……朝食を用意して……」

その後に美雪が来たので隣の部屋で相談を……。」

「あなた方が火に気づいたのは？」

「美雪が来てから20分後くらいでしょうか……。」

それから翔太郎は深く何かを考える。

そして顔を上げて

「最後に……美雪さんが殺し屋に依頼したことには気づかなかったのか？」

「恥ずかしながら……」

「バカですよね……」。

私がいつもこんな話をしたら、私の力になろうと何かしてくれていたのに。

気づけなかったなんて……

いつも二人で一人の親友だったのに……」

そう話す茜の眼から大粒の涙が溢れだした。

真倉に連れられ部屋を出ていく。

「いつも二人で一人の親友だったなんて……」

「ええ話やないの!」

いつの間にか亜樹子がもらい泣きをし、大粒の涙をこぼしている。

「……………なんでお前が泣くんだよ……………」

「だって……………睡眠薬ないと眠れないくらい悩んでる親友のために……………」

「うええええん!……………」

「うるさい!…!事件現場で泣くな!…!」

とりあえず泣きじゃくる亜樹子を放って、翔太郎は念のため他の部

屋を見ることに。

「いやあ〜。それにしてもきれいな家だな……」。

見ろよ竜、細かいところまで掃除が行き届いてるぜ?」

「主婦か!」

「だってよお……ほら。」

リモコンだってきれいに並んでるぜ?」

「まあ、勝俣茜は神経質なA型らしいからな」

その言葉に翔太郎は目を丸くした。

「なんでお前が知ってんの？」

「本人が言ってたから」

「あ…そう。」

なんか他にさあ…こつ……気になったこととかないか？」

訳のわからない身ぶり手振りで自分のもやもやを表す翔太郎。

そんな翔太郎を見て竜はあることを思い出した。

「そつだ！亜樹子ちゃんが言ってたんだが、

お前と同じサラダ油使ってるらしいぞ！！」

「どつでもいいわ…！」

「本当だって！こっち来い！」

竜は無理矢理翔太郎をキッチンへと連れていく。

「ほら翔太郎！亜樹子ちゃんの言ってたやつ！！」

何故か竜は嬉しそうにサラダ油を掲げる。

しかし、翔太郎は興味がないのか他の調味料やフライパンを見ている。

「おお……キッチンも抜かりはないな……」

「これを見ろって！！」

竜が翔太郎にサラダ油を押し付けてくる。

「やっ、やめる！ギトギトになるだろが！……！！」

「お前が見ないからだろ！」

「うるせえ！そんな押し付けなくても見える！！！！」

……………ん？」

突然翔太郎が動きを止めた。

「……………？」

どうした翔太郎？」

翔太郎はサラダ油を見つめたまま動かない。

「……………もしかして…」

「……………もしかしてって……………何が？」

すると翔太郎はサラダ油を押し退け竜に迫った。

「竜…山崎美雪さん……………」に呼べるか？」

「……………」に呼べるか？」

呼べる呼べる……………」

「今すぐ呼んで」に呼べるか……………」

「何で？」

「俺に質問すんな！！」

竜は翔太郎に尻を蹴飛ばされ、あわてて家を飛び出していった。

30分後 - - -

勝俣邸のリビングに

勝俣茜、山崎美雪、翔太郎、亜樹子、刃野に真倉、そして肩で息をする竜が集まった。

「どうした探偵？」

なんか探偵漫画みたいな雰囲気だが……」

真倉は漫画のような光景にそわそわしている。

そして翔太郎が咳払いをすると口を開いた。

「えー……今回の事件だが……」

まず、死んだ旦那さんは茜さんに度重なる暴力を振るっていた。

だよな？」

茜の方を向いて言うと、茜は黙って頷く。

「で、そのことを何度か相談されていた美雪さんは親友のため、旦那さんを殺すことを決めた。

そして殺し屋のエレメンタルに殺害を依頼した。

ここまであつてる？」

刃野が黙って頷く。

「よし。

そして美雪さんが依頼した通り、茜さんの旦那さんは焼死。

まだ不可解なことがあるが……

まあ、別にこの街じゃあよくあるような事件だ」

「確かに……そういう言い方するとアレだけど……

結構頻繁に起こってるよね」

すると美雪が一步前に出た。

「あの！」

私はそんな話を聞くために連れて来させられたんですか!？」

「それもそうだ！」

探偵！お前何が言いたいんだよ!!！」

翔太郎はソフト帽を被り直しながら

「……………今回の事件はそんな考えがややこしくしたんだ……………」

「「「はい？」「」」

その場にいた一同が同時に叫んだ。

「何言ってるんの翔太郎君！？」

「人をパシリにして何を言い出すんだ！！」

「分かりにくいなあ……」

もう少し分かりやすく言ってくれよ」

皆が文句を垂れるなか翔太郎は落ち着き払って

「よーするにこの事件の犯人は……」

……ただの人間だ」

全員耳を疑った。

そして一気に全員が凍りつく。

「そんでもって……犯人は
茜さん。」

「アンタだ……………」

全員が茜の方を見る。

「……………へ？わ、私！？」

当然茜は驚いている。

そして茜の隣にいた美雪が翔太郎を睨みつけながら叫んだ。

「ちょっと待ってください！！」

探偵さん何を言ってるんですか！？

私は殺人を殺し屋に依頼したんです！！

茜は関係ありません！

！！

「確かに……………アンタは殺人を依頼したのかもしれない。

けど、茜さんは殺し屋が殺しにくるよりも早く旦那さんを殺した。

それだけのことだ」

大きな声を出していた美雪は閉口してしまっている。

代わりに刃野が口を開く。

「……………なんでそんな風に推理したんだ？」

「……………まず、この事件にはおかしいところがあった。

それは刃さんが気になっていた密室殺人」

翔太郎は部屋の中をぐるぐる歩きながら話を続ける。

「出入口は一つ。

そこを通れば確実に隣の部屋にいた美雪さんたちにはれるはずだ。

出入口から入ったのではない、とすると窓が考えられるが……………事件
当時は鍵がかかっていた。

窓が割られたような形跡もないし、仮に割って入ったなら隣の部屋の二人に確実にばれる」

気づけば全員が翔太郎の話に聞き入っていた。

「それに第一……何度も殺人を依頼されるような奴が……人がいるような家の中で殺人を行うとは考えられない。」

つまり、犯人は殺し屋ではない」

「ちょっと待って翔太郎君！」

それでどうして茜さんが犯人なわけ!？」

「……手がかりのヒントは亜樹子、お前が教えてくれたんだ」

「……あたし?」

亜樹子は自分を指差している。

驚きのあまり目が点に。

「そつだ。」

旦那さんはテーブルの上の朝食に頭突っ込んで燃えてたんだろ？

そつで出てくるのが……こいつだ」

ドンツと翔太郎はあるものをテーブルに置いた。

全員がそれに注目する。

「……………これは……………」

「……………サラダ油？」

「そう。サラダ油だ。」

で、こっちも見てくれ」

続いてテーブルに置かれたのはボトルいっぱいに入った醤油と味醂。

「……………これがどうかしたのか？」

「見ればわかると思うが……………」

いっぱいに入った醤油と味醂、ほほ空のサラダ油だ。

神経質なA型がサラダ油だけを空のままにしておくのは考えづらい」

「いや……………いくらなんでも……………」

「既に亜樹子から聞いただろう？」

これはウチの事務所でも大変重宝している素晴らしいサラダ油だ」

「……………」

「そして……………このサラダ油で危うく火事になりそうになった。

それくらいこのサラダ油は引火しやすい」

「あー！そういえば……………」

亜樹子は顔を赤くして頭を掻いている。

「まてまて！探偵！

それじゃアレか！？勝俣茜は朝食食べてる旦那にサラダ油かけてたのか！？」

「真倉の言う通りならだいたいぶおかしいぞ翔太郎？」

「刃さんたちがそう言うのももつともだ。

飯食ってる人にサラダ油かけてたら怪しいどころじゃあない。

そこでこいつの登場だ」

翔太郎のポケットから出てきたのは寝室にあったケース。

「これには確か……」

「そう。睡眠薬が入ってる」

「……これをサラダに仕込んで……!!」

「だいたいそんな感じだろうな。

料理に頭突っ込んでたのも薬が効いてたんだろう」

そして全員が茜の方を見る。

「こんな幼稚なトリックだったら誰でも気づく。

が、この街では不可思議な事件が溢れている。

そこを利用したんだらう？茜さん……」

「だから待ってください！！」

再び隣にいた美雪が大声を出した。

「もしそうだとしても……私が殺し屋に依頼しなかったら成り立たないでしょ!？」

「確かに美雪さんの言う通り、殺し屋に依頼しなかったら成り立たない。

ここからは俺の勘だが……」

茜さんにはおそらく美雪さんが絶対に依頼し、

そして焼死を選ぶという確信に近いものがあった」

「……………確信に近い？」

「……………茜さん、俺にこう言ったよな？」

『いつも二人で一人の親友だったのに気づけなかった』ってな。

けど実際は違う。

『二人で一人だったのに気づけなかった』んじゃない。

『二人で一人だったから相手のことが手に取るようにわかった』んだ」

「そんな無茶苦茶な！」

「で……………聞きたいんだが…」

美雪さん、殺し屋の噂は誰から聞いたんだ？」

「…殺し屋の噂ですか？

……！

それは……………」

そこまで言って竜がはっとしたような顔をした。

「まさか……………殺し屋の噂は……………茜さんから……………」

茜も美雪も黙ったまま俯いている。

「やっぱり……………美雪さんに殺し屋の話をしたのは茜さんか……………」

目元が見えなくなるまでソフト帽を深く被り直し、刃野の肩をポンツと叩く。

「これで決まりだ……………」

刃さん、後は任せるぜ」

「…………おつ」

「行くぞ亜樹子。

後は警察の仕事だ」

「……………うん……………」

翔太郎は亜樹子を連れ、現場を出ていった。

そして刃野が茜と美雪の前に立つ。

「それじゃ、署で話を聞かせてもらっていいですか？」

竜が茜の手を掴もうとした時、美雪がそれを阻んだ。

「待ってください!!」

違います！私が殺し屋に頼んで、殺し屋が茜の旦那を殺したんです
!!

茜は関係ない！」

「美雪さん……………」

「茜は関係ないんです！」

連れていくなら私一人で十分でしょ!？」

だからわたしを」

「やめて美雪……」

美雪を遮った茜の目には涙が浮かんでいる。

「すべて……お話しします……」

「嘘よ……」

茜……嘘だって言ってる……

……茜……

うわああああ!」

美雪は茜の手を掴んだままその場に泣き崩れた。

その後、勝俣茜は罪を認め逮捕された。

山崎美雪も殺人を依頼したとして逮捕。

残すは殺し屋、エレメンタルの逮捕だけとなり、警察は捜査を立て直しその行方を追った。

しかし、事件は思いもよらない形で幕を引くこととなる。

4月17日 . . .
AM 7:05 . . .
風花町三丁目 . . .

閑静な住宅街の早朝にパトカーのサイレンが鳴り響く。

パトカーは橋の下の小さなトンネルに集まり、実況見聞が行われている。

早朝にも関わらず多くの野次馬がその様子を見ていた。

「ちよつとごめんよ。」

通してくれー」

黒いソフト帽を被った男が野次馬の間を通って刑事のもとへ向かう。

「おお、来たか翔太郎！」

「何の騒ぎだ竜？」

「殺人事件だ」

竜は翔太郎を連れ、トンネルの中へ入っていく。

中には刃野に真倉がいた。

彼らの足下には乾いた血の跡が広がっている。

「こりゃあ一体……」

「これだけじゃない。

ほら、上」

竜が指差す方を見ると天井にも血の跡が広がっていた。

「おいおいおい……」

何があったらこうなるんだ？」

「とりあえず見つかったのは……細切れになった人の肉塊に細切れの衣服。」

そして頭」

「頭？」

「そう。頭だ」

竜は自分の頭を指してみせる。

「仏さんの顔でも拝むか？」

「……そうしようかな……」

二人は鑑識のところに行き
死体の頭部を見ることに。

頭部は白い布に覆われている。

「……吐くなよ？」

「吐くかよ」

竜は白い布をとった。

「……竜」

「吐きたくなっただか？」

「近くにガイアメモリは落ちてなかったか？」

「ガイアメモリ？」

「それかその破片は？」

「急にどうした？」

「エレメンタルだ」

「何が？」

「この頭がだよ！」

翔太郎はピクリとも動かない頭を指差す。

その頭部はエレメンタルのメモリを所持していた殺し屋の少年の頭部だった。

「こんな少年が……？」

なんでこんなことに……」

「それよりメモリは！？」

竜は走って刃野のもとへ行き、すぐに戻ってくる。

「破片もメモリも……見つかってないらしい」

「見つかってないだと……？」

まさか…奪われたのか？」

「奪われたって誰に？」

「決まってるんだろ……」

ドーパントを殺した奴だ。

多分そいつもドーパント……」

多くの謎を残したまま事件は幕を閉じた。

そしてこの事件は後々明かされることになる。

?月??日 - - -
???:?? - - -
とある異世界 - - -

とある異世界。

以前やって来た世界の破壊者の言う「ジョーカーの世界」とは異なる世界。

そんな世界のとある公園に数人の男女がたむろしていた。

「……………どういうこと?」

「説明した通りだ」

二人の男女がなんとも言えない顔で話している。

女性は見たところ学生くらいだろうか。

男性はびっくりするくらいのイケメン。

「いやいや、説明になってないですって！」

なんでこんなタイミングで違う世界に行かないといけないんですか！？」

「音也が言ってたろう？」

お前には経験が必要だ。

そのためにも他の世界に飛ばそうと、音也が提案した」

少女が振り返ると、ホワイトボードの前に立つ男が二人の青年に何か熱く語っている。

「つまり…！愛に勝るものは何一つない！」

「はい先生！」

不思議な服装の青年が高く手を上げた。

「愛とは主にどんなものに芽生えるのでしょうか？」

「いい質問だフィリップ！」

愛とは常に！どんなものにも芽生える！！

ある時は自分の相棒！ある時はバイオリン！ある時は女性！」

「ある時は……相棒……」

手を挙げたフィリップという青年は隣の青年の方を見る。

「おい。……何でこつちを見るんだ！？」

「相棒………ね……」

「コエーよー！コエーよフィリップ！」

そんなことより先生！」

今度はじっと見つめられた青年が手を挙げた。

「どうやったらモテますか!？」

「なんだ翔太郎?モテたいのか？」

簡単なことだ!

愛だ!すべての女に自分の愛を余すことなく注ぎこめ!」

両手を広げた愛の伝道師、音也の後頭部にとんでもない速度でコインのようなものが激突した。

あまりの破壊力に伝道師、音也がぶっ飛ぶ。

「ぐあああああ!？」

「先生!」

突然、音也是大笑いしながら起き上がる。

「それはすべて愛故にだ！」

「それはもういい!!」

「……そうだ！」

言っのを忘れていたんだが向こうの飯は絶対に食べるな！」

「……話聞いてないわね」

「水飲むのも厳禁だ！」

だが安心しろ！お前の食料はすべて天道が用意した！」

振り返ると先ほどのイケメン、天道と愛の講義を受けていた二人が大きなリュックに荷物を詰めていた。

「え？本当に行くの？」

「行くんだなこれが！！」

「いやいやどっせって！？」

『Hyper cast off!』

奇妙な電子音が響いたかと思うと、銀色の装甲に身を包んだ赤い角の「戦士」が立っている。

「あれで行くの！？」

「さあ行くぞ美琴」

銀色の戦士は少女とリュックを抱える。

「ええー!!
いやちよつと降ろして!!」

「駄々をこねても無駄だ。
ベルトは持つてるな？」

少女はじたばたするが銀色の戦士は微塵も動じない。

「それじゃ、飛ぶぞ」

「さあ美琴！行ってこい！
ジョーカーの世界へ!!」

音也の隣で先ほどの二人が手を振っている。

「いやいやちよつと!？」

何ジョーカーの世界って!？」

『Hyper clock up!!』

「いやだからちよつ」

バシユン！！

一瞬のうちに二人は光に包まれて消えていた。

「それにしても、美琴ちゃんの飛ばされたジョーカーの世界って…」

「ああ。あの世界はちょっと変わってるからな。

飯を食ったらえらいことになる」

「いや、俺たちが聞きたいのはそこじゃなくて

その世界のライダーについて聞きたいんだが……」

「無論、仮面ライダージョーカーの世界だ！」

「つてえことは……」

「もしかして……」

「まさかなあ〜」

何がおかしいのか三人は大笑いをはじめる。

こんな愉快的彼らの物語はまた違つところで語られるだろう。

にやみにやみだ。

寡黙なL / 事件の真相（後書き）

皆さんお久しぶりです。

ようやくセンターも終わりほっとしたのですが、今後が心配ですね。

そんなことよりも今回の最後に色んな人たちが出ましたが、何故こんなことになったのか？

それは次回の

『とある異世界のR / 仮面ライダーを名乗る少女』

で明かされます！！

それではまた次回！！

とある異世界のR／仮面ライダーを名乗る少女（前書き）

お久しぶりです！！

そして今回はコラボ企画ですよ！

コラボしてくださったのは

とある仮面の特別企画スペシャルプラン NOVEL大戦INDEXよりZERO
さんです！！

「誰？知らないよ」とか思った方！

今回の話を読む前に上記の作品を読んでください！！

ちなみに、僕は《とある》シリーズは読んだことないのでキャラ
がおかしいかもしれません。

そこは素直に許してください。

ではございぞー！

とある異世界のR／仮面ライダーを名乗る少女

4月22日 . . .

「……………というわけで」

AM 7 : 56 . . .

「今回はスペシャル企画だ」

園咲家「開発実験室」 . . .

「誰に向かって言ってるんですか?」

「来人様、俺たちこっちにいるんですけど」

来人は後ろにいる三人の方を向いて、小走りで三人の前に立つ。

「いや失礼。読者の皆様に言っておかないといけないからね」

「読者？」

「何の話をしてるんですか？」

坂下、神田が呆けた顔をしているが、金堂は相変わらず黙っている。

来人は咳払いをすると、

「さっきも言ったが今回はスペシャル企画だ」

「なんすかスペシャルって？」

「今回はスペシャルゲストがいらっしやる。」

そのためこちらとしても思いきったことが必要だ。

何かいい案は？」

「そこは我々に聞くんですか！？」

上司からの無茶ぶり。

三人は必死で考える。

すると、金堂が素早く手を挙げた。

フリップを取り出しマジックで何か書いている。

「金堂菜月はどんな企画を考えたのかな？」

金堂はフリップを表にした。

『ライダー vs ライダー』

「採用!！」

まさかの一発OK。

これには神田、坂下が反発した。

「待ってください!！」

「これじゃいつも通りじゃないか!！」

「フツ……わかってないね。
つまり彼女が言いたいのは……」

二人を寄せて小さな声で耳打ちする。

「「ああ……。なるほど」」

「いいんじゃないですかそれで」

「はじめからそうした方がよかつたんじゃないあ……」

「それに、君たちの他にとある人物も参戦することにしよつと思つ」

「「とある人物？」」

三人が子供のように目を丸くしている。

「まあ、それは次回あたりにやるとして……」

「なんすか次回つて？」

「君たち、吸血鬼と言つのを知つてゐるかい？」

AM 10 : 14 - - -

左探偵事務所 - - -

「吸血鬼？」

「そう吸血鬼ですよー!!」

「今巷で事件を起こしているらしいんです!!」

只今、翔太郎と話しているのは今回の依頼人。

一人はスーツを着ているがもう一人は僧侶のような格好している。

「巷ねえ……。どんな事件を起こしているんだ？」

「なんでも、女性に噛みついてるらしいんです!!」

「噛みついてる……」

だけ？」

「はい！」

噛みつくだけ……

いまちピンとこないが事件には変わりはない。

ただ一つ、翔太郎にとってわからないことがあった。

「……で、あんたらは男だから襲われれないと思うんだが……」

すると僧侶のような男が

「実は！その事件は私の行き着けの喫茶店の近くで起きてるんです
！……」

「まさか三浦くん！君アイリさんを狙って……」

隣のスーツが急に目の色を変えて食いついてくる。

「うるさい尾崎！貴様もアイリさんを狙っての行動だろう！？」

どうやらこの二人は「アイリさん」とやらを狙っているらしい。

安全を確保するためにここにきた…と解釈するのがいいのだろう。

「仲良いなあんたら……」

翔太郎がそう言うと二人は同時に振り返って

「「どこが！？」」

二人揃って同じような顔をしている。

絶対仲良しだ。

「とりあえずなんとかするから、騒ぐんなら外でやってくれ」

二人は互いの額をぶつけ合いながら事務所を出ていった。

やっぱり仲が良い。

そんな二人を見送ると、亜樹子が今日の朝刊を取り出した。

「見て翔太郎君！これじゃない？」

さっきの吸血鬼って！！」

亜樹子の広げたページに顔を近づける。

『またしても吸血鬼！？今月で8件目』

「……………多いな……………」

「気味悪いね……………。どうしよう！？あたし襲われたら！？」

「無い無い……………」

「……………どういう意味？？」

「言葉通りだ……………」

「そんなことないですう！世間にはあたしを狙ってる人がいるんです！」

「いたら会ってみたいな！！
ハッハッハッハッハッ！！」

AM 10:17 - -
風都警察署 - -

「へっくしょい！！」

「なんだ照井、風邪か？」

「いえ、大丈夫です…」

AM10:17 - -
左探偵事務所 - -

「にしてもさあ、この街って事件多くない？」

特にドーパントがらみの」

「あー……そういえばそうだな」

翔太郎は朝刊の四コマ漫画を読み終わるとソファーに投げつける。

「昔はそんなに多くなかったけどな……」

噂程度だったし。

五年くらい前から増え出した気がするな。
最近ほどじゃなかったが……」

「……………」

返事がない。

翔太郎は亜樹子の方を向く。

「お前話聞いてんのか!？」

亜樹子は明後日の方向を見たまま動かない。

「翔太郎君……」

「これは何?」

「これ?」

翔太郎は立ち上がり亜樹子の隣に並ぶ。

亜樹子が指差す方向は

ただのコートかけ。

「コートがどうかしたのかよ……」

「いやいや……これだって」

もう一度見てみる。

よく見るとなんだかコートが歪んで見える。

「……………ん？」

目を何度も擦るがやはり歪んでいる。

それにコートが歪んでいるのではない。

その空間が歪んでいるのだ。

「あれ？俺酒飲んでないのにな……」
「あたしだって飲んでないもん！」

目の錯覚ではない。

ならばこれは一体何なのか。

次の瞬間、その歪んだ空間から目映い光が放たれた。

「うお！？」

「なになに！？」

突然のことに思わず目を覆う二人。

そして光の中から

青い目に赤い角、銀色の装甲を纏った何かが現れた。

「なん……………だ…？こいつは……………」

「あたし聞いてない……………」

よく見ると背中に大きなリュックを背負い、女の子を抱えている。

『Hyper clock over!』

電子音が響くと同時に抱えていた女の子を放す。

「ぐえっ!！」

床に叩きつけられた女の子は頭を擦りながら起き上がる。

そのすぐ後ろにリュックをドンツと置く。

「ほら、着いたぞ」

「着いたぞって……………」

………「ここが…？」

女の子のは事務所を見回す。

翔太郎と亜樹子は呆然。

突然現れた二人は翔太郎たちを無視して話を続ける。

「さつきも言ったが食事はリュックの弁当で済ませる。
人様に用意してもらうなんてみつともないからな…。」

「………わかりました」

「それでいい。」

「だいたい24時間後ほどに迎えに来るからな」

「待て待て待て!!」

謎の二人の間に翔太郎が割って入った。

「まず誰だよ!？」

でどっから入ってきた!？」

お食事の話とかどーでもいいわ!！」

言いたかったことを全て出し切った翔太郎。

心なしかスッキリしているように見える。

「お前だな？仮面ライダージョーカーは……」

「!？」

「なんで翔太郎君のことを!？」

驚きながらも翔太郎はロストドライバーを装着する。

「何者だ!？なんで正体を知っている!？」

「何故？」

「愚問だな……。それは俺とお前が同じ存在だからだ」

「……………同じ？俺とお前が？」

「相手は静かに頷く。」

そして軽く腰の装飾のようなものを叩いた。

「一日だけこいつの面倒を頼む……………」

『Hyper clock up!』

再び電子音が響き事務所に光が満ちる。

光が消えた時には、先ほどの人物(?)はいなくなっていた。

「なんだっただらうね…」

「……俺はアイツと同じなの？」

嵐のように現れ嵐のように去っていった人物（？）困惑したものの、落ち着きを取り戻す二人。

とりあえずは依頼があるので先ほどのことはあとで考えることにした。

「ちょっと待ってー！ー！！」

やや広めの事務所に女の子の叫び声がこだまする。

「あ、ゴメンゴメン！
完璧忘れてた！ー！！」

ひとまず女の子をソファーに座らせ、その隣にリュックを置く。

「……………えー……」

まず君の名前を覚えてくれないか？」

「あつ、はい。申し遅れました。

私は美琴。御坂美琴です」

「美琴ちゃんね……」。

ここに何しに来たの？てかどうやって来たの？さっきのアレは何だ？
「なんで俺の」

スパアアン！

気持ち悪いくらい捲し立てる翔太郎の頭に緑のスリッパが決まる。

「聞きすぎや翔太郎君！！」

見てみい！彼女引いてもうてるやん！！」

確かに美琴の顔がひきつっている。

翔太郎は咳払いをしてラジオの電源に手を伸ばした。

「あー……。すまなかった。」

ちよつと気が動転しててだな……」

「いえ、お構い無く……」

「で、君は……」

えー……」

とりあえず経緯を話してくれ」

「経緯ですか……」。

そうですね、まず私はこの世界に……研修みたいな目的で来ました」

「「研修？」」

亜樹子と翔太郎は同じ方向に首を傾げる。

「訳あって私強くないといけないんです！

そのために世界を越えてここに来ました」

二人は話を聞きながら、途中何度か頷いたりした。

そして翔太郎が口を開く。

「……………うん、何言ってるかわかんねーや」

「わかってへんのかーい！」

「じゃあお前はわかったのかよ！？」

「わかってないです！ー！」

「じゃあ黙ってる！」

翔太郎に怒鳴られた亜樹子はソファアの上で正座。

黙って話を聞くことにする。

「……………そうですね。」

突拍子もないですし……」

「……………その……………世界を越えてきた？
ってどっいっこと？」

「そのままの意味です。」

私、異世界から来ました」

美琴はすました顔で言う。

翔太郎はポカンとしている。

亜樹子もまた然り。

「あ！もしかしてアレか？
ジョーカーの世界とか言うやつか！？」

「それです！」

美琴は翔太郎を指差して立ち上がる。

「そうかそうか……。
似たようなこと言ってる奴来たもん。」

で、どうやって来たの？」

「それは先ほどのカブトの力です」

「カブト？」

再び翔太郎と亜樹子は首を傾げた。

「……………カブトって何？」

「カブトって言うのはさっき私を連れてきた仮面ライダーのことです」

「仮面ライダー！？」

「さっきのアレが！？」

「さっきのアレがです」

「じゃあ研修って何の！？」

「仮面ライダーとしての研修ですよ」

「仮面ライダーとしての研修!?!」

美琴は頷き人差し指を立てて

「そうです!

私が一人前の仮面ライダーに成長するための研修です!?!」

「君が……か、仮面ライダー?」

完全に呆気にとられた翔太郎。

彼の開いた口はしばらく閉じなかったそうだ。

『はい!それではここで、オリコン3週連続TOPの仮面シンガーです!!!』

どろどろ……!』

AM 10:39 - - -

風都警察署 - - -

「刃野さーん!刃野さーん!」

若い婦人警官が刃野を探してうろつろしている。
そこへ真倉がやってきた。

「何してんの那奈ちゃん?」

那奈ちゃん - - -それがこの婦人警官の名前だ。

署内で一番の美貌を持ち、現在交通課、刑事課の課長から言い寄られている署のアイドルである。

「あ、真倉さん。刃野さん知りませんか？」

「あの人は今日から東京に行ったぞ？」

「ええ！？今刃野さんにお客さん来てるんですよ！？」

「あー…。」

「じゃあ俺代わりに行くわ」

とといった感じで真倉は来客のもとへ行くこととなった。

風都警察署地下駐車場・・・

「……………何これ？」

客人が来ていると言うから連れられて来てみれば、

知らないトレーラーが2、3台並んでいる。

真倉には何故トレーラーがあるのか全くわからない。

「那奈ちゃん、これは一体……」

「私もわかりませんよ。でも全部長野ナンバーってことはわかります！」

確かにすべてのナンバープレートは長野県と書かれている。

すると

「あ！申し訳ない！！」

勝手に駐車させてもらいました！」

止められていたパトカーから一人の男性が降りて、二人に頭を下げた。

「真倉さん！この人です！！刃野さんに会いに来たの！」

どうやらこの男が件の客人らしい。

真倉は咳払いをして

「それは構いませんが……」

生憎刃野は東京の方に出向いてまして……」

男は目を見開き

「本当ですか？

参ったな……」

失礼ですが、あなたは？」

「申し遅れました！

私、交通課の坂本那奈です！！」

那奈は敬礼をしながら声高らかに挨拶をした。

が、男はポカンとしている。

そんな那奈の頭を真倉が軽く叩いた。

「俺に聞いてたの！」

那奈ちゃんが言っただろうすんの？」

「あうっ……」

何も叩かなくなっただって……」

頭を押さえる那奈を押し退け真倉は手帳を見せる。

「超常現象捜査課の真倉です」

「超常現象捜査課の方でしたか。よかったです……」

長野県警の一条です」

男も手帳を見せる。

「長野県警？」

……が何故うちみたいなの小さな課にわざわざ……」

「実は以前頼まれていたものがようやく用意できました……」

一条はトレーラーの一つの扉を開けた。

その中にはたくさんの箱が入っている。

「遅くなってしまって申し訳ない」

「申し訳ないって……」

何ですかこれ？」

一条は箱の一つを開けた。中に入っていたのはたくさんの拳銃、弾丸。

他の箱を開けると、今度はライフルが出てくる。

「……………」

二人は呆然。口が開いている。

そんな二人を前に一条はライフルを一丁取り出した。

「これらの装備は風都に出没するドーパントとか言う未確認生命体に対抗するために用意するよう注文されたのですが……」

「ご存知ないですか？」

「対ドーパント装備ってことですか？」

「はい。」

こちらで使用されていた神経麻痺弾をさらに効果を強めた強化神経麻痺弾、

着弾時に炸裂して神経を断つ神経断裂弾、

そしてこれらの弾丸のために製造した改造ライフル。

この装備ならドーパントの撃退、あるいは撃破が可能でしょう」

ペラペラと説明する一条だが、二人はやはりポカンとしている。

「……………えっと、これ経費で落とせます？」

「……………那奈ちゃん何言ってるの？」

AM 11:15 - -

新芽町一丁目 - -

翔太郎、亜樹子、美琴の三人は事件現場の近くを調査していた。

「……やっぱり……ちょっと違いますね……」

美琴が小さな声で呟く。

「ん？何が？」「いや、私がさっきまでいた世界に翔太郎さんがいたんですよ」

「……どういふこと？」

「他の世界の翔太郎さんに会ったことがあるってことです！」

自慢気に笑う美琴の隣で、悪そうな顔で亜樹子が笑う。

「どう考えたってそういう意味でしょ！？翔太郎君バカだねーww
ww」

「……………亜樹子。」

「一週間飯抜きだ！」

「ええ！？いやそれは勘弁…！」

両手を合わせて亜樹子は頭を下げる。

しかし翔太郎はそっぽを向く。

「……………そういえば美琴ちゃんは仮面ライダーなんだよな？」

「はい！仮面ライダーレールガンです…！」

「……………女の子にしては厳しい名前だね…！」

「て言うか本当に仮面ライダーなの？」

「仮面ライダーですよ！まだ卵なだけです！！」

その時だった。

「キヤアアアアアアアアア！」

女性の悲鳴が辺りに響いた。

「今のは！？」

「路地裏の方からです！！」

三人は急いで悲鳴の聞こえた方に走る。

路地裏にまわると、黒い帽子にサングラスをかけた男が女性に襲いかかっていた。

「吸血鬼が昼間っから襲ってていいのかよ！」

叫びながら翔太郎は男に飛び蹴りをして、女性から離れさせた。

「大丈夫か!？」

「は…はい!」

亜樹子と美琴は女性を保護。翔太郎は男と睨みあっていた。

1541

「まさか…いきなり出くわすとはな……」

こんな急展開でいいのか？」

男は少しずつ翔太郎と距離をとろうと後退りする。

翔太郎は少しずつ間合いを詰める。

「悪いが…逃がすつもりはねえよ!」

翔太郎は走り出した。

男は

「ひい！」

と悲鳴をあげて、背中を向けて走り出す。

「逃がすかよ!!！」

二人の追いかっかが始まった。

しかし、男は意外にも足は遅く、翔太郎との距離が縮まっていく。

「捕まえた!!！」

翔太郎が手を伸ばす。

が、

『ドラキュラ!!！』

「ああ!？」

電子音が鳴ると同時に目の前の男の形が変わっていく。あつという間に男は翼の生えた、まるで西洋の悪魔のドラキュラのような姿に変貌した。

「なっ……ドーナント!？」

驚く翔太郎の前でドラキュラ・ドーナントは羽ばたく。

翔太郎はなすすべなく、ドーナントを逃がしてしまった。

「……………んなのありがよ……」

自分の不甲斐なさにガツクリ肩を落とす。

「翔太郎君!!」

「さっきの犯人は!？」

亜樹子と美琴が尋ねるとなんととも言えない顔をする翔太郎。

「……もしかして逃げられたの!？」

「……スマン。飛んで逃げるとは思わなかった」

「ってことはドーパント!？」

「お前にしては察しいいな」

翔太郎はソフト帽をかぶり直す。

「さっきの女性は?」

「安全なところで隠れてるよ!」

「じゃあその人連れて警察行こうか……」

三人は助けた女性のもとまで歩き始めた。

しかし、美琴だけはすぐに立ち止まった。

「……………めるー！」

…は……………マジン……………」

誰かが遠くで叫んでいる。

美琴はそれを察知したのだ。

「…今確かにイマジンって……………？」

イマジンなんたらという言葉に縁のある美琴にはしっかりと聞こえていた。

気になって翔太郎たちとは正反対の方に向かう。

「まさか…アイツもこの世界に？」

路地裏を飛び出した美琴。

彼女が見たのは

「やめろー！噛むなって！！痛えだろっが？」

「バウバウ！！」

「ヤー！ごめんなさいごめんなさい！！」

なんかこう…顔の真つ赤なホームレスのような人（？）が、犬に襲われていた。

「くそ！腰も痛えし、犬に噛まれるし！！」

俺はイマジンだったの！！」

「バウバウ！！」

「うわー！来るなあああ！！」

自分が思ってたのと違う光景に啞然とする美琴。

こっぴつ時はどっしたらいいのか。

ホームレスらしき人(?)は泣き叫んでいるわりに元氣そうだ。
すると

「美琴ちゃん！
置いてくよー！？」

路地裏で亜樹子が呼んでいる。

後ろめたさを感じながら

「今いきまー！す！！」
と叫んだ。

ホームレス放置決定。

美琴は亜樹子の方へと駆け出した。

「くっそー！何で俺が！！」

良太郎！！早く来てくれえええー！！！！」

10分後――

警察に行こうとしたところ女性がすでに通報していた。

とっくにっど

「探偵、何故お前の行く先々はドーパントが多いんだ？おい！何でだよ！！」

本日も真倉が絡んでくる。絶好調だ。

「うるせえなあ……。さっさと捜索しろよ給料泥棒が」

「なっ！お前いつからそんな生意気なく」

「真倉さん！搜索の指揮とってくださいよ！刃野さんいないんですからー！！」

刃野がいないということとで竜が仲裁に入る。

翔太郎に殴りかかろうとする真倉を引き剥がし、竜は手帳を取り出した。

「えーと、今まで婦女暴行って取り扱われていたからまだわかんないことがあるんだが……」

どうやらドーパントの姿で女性を襲ってなかったらしい」

「人間の姿で襲ってたってことか？」

「珍しいタイプだな……」

「……どの被害者も黒の帽子にサングラスの男に噛まれたって言うてますね」

「なんで人間体で襲うんだ？」

「そういう性癖なんだろう」

野郎三人で話をするため、女性陣は蚊帳の外。他の警官の皆さまもずっと待っている。

「竜、マッキー、こいつはまた直ぐに犯行を再開するんじゃないか？」

「そりゃなんでだ？」

「探偵の勘」

竜がやれやれ…といった感じの顔をする。

「いくらなんでもそれは…ねえ、真倉さん？」

苦笑いをして真倉の方を見た。が、真倉は予想外の返答をした。

「俺は賛成だ」

「ほら翔太郎。真倉さんだって賛成だって言ってるぞ？」

つて賛成!？」

「どうしたマツキー? 気持ち悪いぞ!？」

予想外の返答に仰天する翔太郎、竜。

言った本人が仰天するのもアレだが。

「いや、このタイプの犯人は直ぐにまたやらかす。

今月で9回もやってるからな。習慣になってる。それにドーパントだから直ぐに逃げられると過信しているはずだ」

「なんか……カッコいいぞマツキー……」

と、拍手する翔太郎。

さらに真倉は

「だから捕まえるには罠を使えば簡単だと思うな」

「罠？」

「そうだ。ちょうどウチには美人の婦警がいる。

きっと犯人は引っ掛かる！！」

「「おおー！！」

今度は二人で拍手する。
が、

「待ってください！！」

いきなり美琴が手を挙げた。

隣の亜樹子はめちゃくちゃびっくりしている。

「その囿……私にやらせてください!」

「」「」

翔太郎たちだけでなく、周りの警官、亜樹子までもが啞然としていた。

「何言ってるの?」

「てか誰の子?」

当然のリアクション。しかし美琴は引き下がらない。

「だって私、こっちに来てから見せ場ないんですよ!?
翔太郎さんや亜樹子さんとの絡みの描写も少ないし……
まじや何しに来たかわかりません!」

このま

「何を言ってるか全くわからん……。
主に後半……」

流石の翔太郎もどうにもできないようだ。

とりあえず竜が反論。

「君のようなか弱い女の子にさせるわけないだろ!？」

「大丈夫です!! 私強いですもん!」

そう言うとポケットから一枚のコインを取り出した。

そして指で軽く弾いた。

本当に軽く。

軽く弾いただけだった。

ズドオオン!!

美琴が弾いたコインは翔太郎たちの間を通り、建物の壁を吹き飛ばした。

「.....!!」

一同絶句。開いた口が塞がらない。

「ね？強いんですよ？」

可愛らしく微笑む美琴だが、誰も反応できない。

どうする？どうしたらいいこの場合！！

と、全員が考える中、現場の指揮をとる真倉が静寂を破る。

「……………えー…ちょっと署に行こうか…」

ガチャン！

気づけば美琴の両手には手錠が。

「え？なんで？」

「なんで？じゃあるかあ！器物損壊の現行犯だ！連行連行！！」

「え？え？嘘でしょ！？？」

「つれてけえ！！」

皆、我にかえつて美琴をパトカーに押し込めていく。

「嘘でしょ！？ちょっと翔太郎さん！助けてよ！！翔太郎
バタン！」

ドアを閉められ中の音声は聞き取れなくなったが、美琴は翔太郎と
亜樹子に向かって何か叫んでいる。

無慈悲にもパトカーは発進。美琴は小動物のような目で何かを訴え
ていた。

「よし！犯人の搜索だ！！」
「「「はい！！」」」

何事もなかったかのように捜索が始まる現場。

翔太郎と亜樹子はパトカーを見つめたまま動かない。

「翔太郎君。どうするのこの状況……」

翔太郎は苦笑いしながら

「……うん。しょうがない!!」

思いきって、次回に続きちまおう!!」

とある異世界のR／仮面ライダーを名乗る少女（後書き）

やっちゃまったぜコラボ企画！！

ZERO さんから許可を得たものの、この美琴の扱い…
ファンの方、本当にごめんなさい。

ああ！石投げないで！！

今回はかなりぶちこむので更新はいつになるかわかりません！！

そして最後にZERO さん！すいませんでした！！

また次回！

とある異世界のR/雷纏うライダーと高速剣技(前書き)

今回の依頼

依頼人

おぎき君とみうら君(仲良し)

カブト(仮面ライダー)

依頼内容

吸血鬼を退治して欲しい。

美琴を一日だけ世話して欲しい。

メモ

今回はスペシャルコラボ企画。

失礼のないようにやりたいが、前回（2ヶ月前）でやらかしたのでもうダメかもしない。

作者

とある異世界のR / 雷纏うライダーと高速剣技

4月22日 . . .

「……………引き続き」

P M 2 : 3 3 . . .

「今回もスペシャル企画だ」

園咲家のお庭 . . .

「来人、何をぶつぶつ言っているのかな？」

「いや、やっぱり言っておいた方がいいかと……………」

「????? まあ花見の続きといこうじゃないか!」

本日は園咲家では毎年恒例の花見を行っていた。

やや遅めの時期だが、琉兵衛が「この時期の桜が一番好き」と言うのだから仕方ない。

ちなみに若菜、冴子、霧彦はお仕事。これも毎年恒例である。

「今年も子供たちは仕事か…。なぜ休みを取らんのだ……」

「あなたがこの時期に花見をするからよ？」

「この時期の桜が一番いいんだぞ？」

この文音とのやり取りも恒例だ。

そこにメイドが墨と筆、紙を持ってきた。

「ご主人様、こちらでよろしかったでしょうか？」

「ん？ああ、これでいい」
メイドは一礼して下がる。

とは言っても、庭の中にはメイドたちがうよつよいる。

「父さん、それをどうするんだい？」

琉兵衛は不敵な笑みを浮かべ

「俳句を詠むんだよ！」

「ああ…そう……」

冷めきつた妻と息子のリアクションを流し、早速一句。

「この時期の

桜がやっぱり

いいじゃない

琉兵衛

「風流心の欠片もないじゃない」

「何!？」

「僕部屋に戻っていいかな？」

「来人まで!？」

素っ気ない息子と妻。二人は立ち上がり自室に帰ろうとする。

「待ちなさい!もう少し付き合ってくれても!！」

すると文音が振り返り

「もういいわ

そんなたいして

楽しくない　　文音」

その瞬間、琉兵衛の何かが壊れた。

気がした。

「さーて、今日の夕食は何かしら？」

「フカヒレスープがいいなあ……」

琉兵衛は肩を落とす。

その様子を心配そうにメイドたちは見守っていたが、琉兵衛はおもむろに筆と紙を拾う。

「近頃は

家族の皆が

冷たいよ

琉兵衛」

メイドたちは涙を流して惜しみ無い拍手を送った。

たいした歌でもないのに。

PM 4 : 27 . . .

風都警察署 . . .

「……というわけだからさあ、なんとかなんねえかなマツキー？」

「駄目だ！絶対駄目！！」

真倉は両手を×の字にしている。

「マツキーのケチ！」

「うるせえ！！あれは立派な犯罪だ！！」

「いやいやマツキー。冷静になれよ？女の子が弾いたコインで壁が吹っ飛ぶなんて……」

あり得るわけないだろ？」

「吹っ飛んだじゃないか！俺たちの前で！」

二人が揉めているのは美琴の処遇だ。彼女は今、器物損壊の容疑がかけられている。

「ただの女の子にそんな手品ができるとおもってんの？」

あれはたまたまコインぶつけたら脆かった壁に当たっただけだ」

「ドーパントかもしれんだろ!？」

「マッキー……あんなかわいい女の子がドーパントに見えたか？」

「ぐっ……………」

真倉は訝しげな顔で睨み付ける。すると

「真倉さん!大変です!！」

竜がこちらに走ってくる。

「どうした照井？」

「交通課の那奈ちゃん…貸してもらえません！」

「何!？」

「交通課の課長が

『うちの坂本に危ない目に合わせるような真似させるな』
って言っつて許可してくれないんです!!」

真倉はそれを聞くと地団駄を踏んだ。

「あのスケベ親父があああ!!!!」

これでは困作戦ができない。どうしようもない怒りで歯ぎしりの止まらない真倉。

そんな真倉を他所に

「おい竜。美琴ちゃん釈放してくれないか？」

「……ああ、全然いいよ」

10分後 - - -

「つつはあー！！！」

シャバの空気って最高！！！」

美琴は両手を広げ深呼吸をした。

そして素早く翔太郎が

「そんな長いこと捕まっていなかったろ！」

と突っ込む。

PM 4 : 41

御坂美琴、釈放。

「まてまてまてまて！！！」

先ほどまで地団駄を踏んでいた真倉が走ってくる。

「釈放許可したの誰だ!？」

「あ、俺です」

竜が控えめに手を挙げると真倉が鬼のような形相で睨み付ける。

「お前!何を勝手なこと × #*……」

イライラしすぎて呂律が全くまわっていない。

言葉は伝わらずともなんとなく竜は察する。

「大丈夫ですよ。色々調べても何も問題なかったですし」

「 × !#: & a m p ; ……! !」

「大丈夫ですって!そんな心配しなくても」

「そっだぜマツキー。」

んなことより、通り魔捕まえる算段思いついたぜ?」

竜と真倉の間に割って入った翔太郎は不敵に笑った。

P M 7 : 3 1 - - -
左探偵事務所 - - -

「で、どーすんの翔太郎君？」

ナポリタンを頬張り、口の周りをケチャップまみれにしながら亜樹子が訊ねた。

「ん？何が？」

飛び散らないようにカルボナーラを上品に食べる翔太郎は、目を少しだけ見開いて返事をした。

「何が？って昼間のドーパントのことに決まってるじゃない！」

「……それなら今マッキーたちが事件の多い箇所で犯人の出現を待っているわ」

「私たちはどーすんの!？」

食事中にも関わらず大声を出したため、ナポリタンの麺が口から飛び散った。

「こら亜樹子!! 行儀の悪いことしやがって!!」

慌てて亜樹子は雑巾で麺を回収していく。

そんな様子を見ながら、一人豪華な弁当を食べる美琴が一言。

「翔太郎さんってお行儀いいんですね……」

「あ? どうしたの急に?」

「いや、私が会った別の世界の翔太郎さんは……」

そこで美琴は目を逸らして食事続ける。

「て言うか翔太郎君…異世界って言葉に順応しすぎでしょ？」

「んん！それもそうだな。」

まあ二回目だしな。ちよつと馴れたし」

カルボナーラをたいたらげ、水をぐいっと飲み干した翔太郎は直ぐに
コーヒーを用意しはじめる。

その様子に引き気味的美琴も弁当を完食。

亜樹子は急いでナポリタンを口に詰めていく。

「それより翔太郎君、私たちどーすんのってば！..」

「頬張りながら喋るんじゃないっ！..」

とりあえず、俺たちは明日の朝にいくぞ」

「明日？なんで今すぐ行かないの？」

「俺の勘によると奴は今夜は来ないな。犯人なんか変だし」

「変って……」

翔太郎のむちゃくちな発言に啞然とする二人。

翔太郎は誇らしげにコーヒーを飲み干した。

「さて……」

明日だが、朝5時に現場に行く」

「「5時!?!」」

「そうだ。だからお前たち、夜更かしするなよ?」

それだけ言うと翔太郎は自分の寝室に飛び込んでいった。

「もう寝るんかい!?!」

亜樹子のツッコミが響きわたるが、寝室の扉は閉められた。

「寝ちゃいましたね……」

「寝ちゃったね……」

静まり返る事務所。

二人は顔を見合わせる。

「
」

「あ、私の部屋来る？」

「……行きます……」

食器と弁当箱を片付け、二人は階段を降りていった。

4月23日 . . .
AM 4 : 1 1 . . .
新芽町一丁目 . . .

「だああああ！！探偵の嘘つきい！！」

日も出ていない時間帯から奇声をあげるのは、今回の捜査を指揮する真倉さん。

昨日、翔太郎に言われた通りに警官隊を率いて犯人を待っているが、

一向に現れる気配はない。

「真倉さん、大声出したら犯人来ませんよ！」

真倉を補佐する竜が人差し指を口の前で立てている。

彼ら警察は昨日の午後6時からずっと犯人を待っている。

イライラの原因はそこだ。

「だああああ！！翔太郎君の嘘つき！！」

次に叫んだのは真倉ではなく亜樹子。なぜ彼女は怒っているのか？

「5時つて言ったじゃん！なんで4時に現場来るの！？」
予定より一時間早く叩き起こされたために彼女は怒っているのだ。

「うるせえぞ亜樹子。俺たちは張り込みをやってんだ。

てか美琴ちゃんは？」

「さっき私たちの分の飲み物買って来るって出掛けちゃった」

のんびり話をする二人は、警官隊から少し離れたところで張り込んでいる。

そこに美琴がやって来た。

「亜樹子さん、翔太郎さん、コーヒー買って来ました」

両手には暖かい「コーヒー」が握られている。

「ありがとう美琴ちゃん！」

よく買うお金あったね？」

「ないですよ？」

「なんだなかったのか。」

ん？ちよつと待っておかしくない！？

美琴ちゃんお金ないの！？」

すると美琴は微笑んで

「ないですよ？」

「ないの！？じゃ、これは！？」

「ああ、それはですね……」

時は遡り4分前――

大通りに自販機一台。

美琴との距離8m。

周囲の人数0。

美琴は誰もいないことを確認して走り出す。
そして飛び上がり、右足を自販機に向けて突き出す。

「ちえいさー！ー！！」

ガッン！

ガランガラン………

「……ってわけですよ！」

「アカーーーーーン！！！」

お金を払うことなくコーヒーを手に入れた美琴に、亜樹子のスリッパが火を吹いた。

「あだ！何するんですか！？」

「何するんですか！？やあらへんって！」

「窃盗やん！！立派な窃盗やん！！！」

窃盗か否かをめぐる、二人の戦いが始まった。

しかしギャーギャー喚く二人に、張り込む探偵がついにキレた。

「うるせえってんだ馬鹿野郎！！」

「今俺たちは張り込みをやってんだってさっき言っただろっが！！！！！」

二人は取っ組み合ったまま硬直。そしてすぐに離れ、気をつけをしている。

二人の顔には反省の色がきつと浮かんでいる。

それから五分後、翔太郎はコーヒーの缶を足下に置いた。
そして携帯の時計を見る。

「よし……。そろそろだな」

亜樹子！美琴ちゃん！」

「はい！」

「どうしたの翔太郎君？」

「これから二人に頼みがあるんだが……その前に」

咳払いをして美琴に視線を向ける。

「昨日、囿の役をやるって言ってたけど……あれ、本気？」
「……………え？」

「……………今から亜樹子に囿をやってもらうんだが…美琴ちゃんはどつ

する？」

翔太郎の突拍子もない発言に、美琴は呆気にとられてしまった。

翔太郎の視線は美琴から動かない。

しかし美琴の視線も翔太郎から動くことなく、こつ返事を返した。

「…そんなの……やるに決まってるじゃないですか！

私だって仮面ライダーですよ？　まだ卵ですけど…」

「へえ……肝が据わってんなあ…。
そーゆうのは大歓迎だ」

いつもの様にソフト帽を被り直し、

「そんじゃ決まりだ！」

「はい！」

元気よく返事をしたところで作戦が決定。

二人の後ろで亜樹子が文句を言っているが、二人の耳には届かない。

「さて、囮作戦だが……」

二人は今警察がいる通りの反対側、こっちの通りを歩いてくれ」

「???? どうして反対側なんです？」

「今回のドーパントはギリギリまでガイアメモリを使わなかった。

奴はスリルを楽しんでる。恐らく警察が近くにいることでさらに興奮して犯行を重ねるはずだ。」

念のため俺もフォローにまわるから二人は通りを歩いてくれるだけでいい」

「わかりました！行きましょう亜樹子さん！！」

「ええ！？行くの！？」

文句を垂れる亜樹子を引きずり美琴は指示された通りを歩いていく。

それを見届け、翔太郎は携帯を取り出した。

「もしもし、竜？今から俺の話聞いて欲しいんだが…」

「もう！何であたしが困なのよ！！」

美琴とは違って強制的に囮にされた亜樹子は大股で通りを歩く。

「亜樹子さん！はしたないですって！」

「だってやってらんないじゃん！あたし仮面ライダーじゃないし！！」

「ていつか美琴ちゃん本当に仮面ライダー！？」

大声を出しながら歩く二人。まだ日も登ってないのに元気がいい。

「ところで……翔太郎さんってなんであんなに自信满满なんです？」

「知らないわよ。いつつも探偵の勘って言うてるし！
でも当たるし！！」

ずんずん音をたてながら歩く二人。

突然、美琴の足が止まった。

「どーしたの？」

「亜樹子さん……後ろ……」

尾けられています

恐る恐る後ろを見ると、黒いコートに身を包んだ男がこちらを見ている。

「翔太郎さんの勘……当たっちゃいましたね……」

「ね？よく当たるのよ……」

「……」
「……」

もう一度見ると、男は少しずつ歩み寄ってくる。

「………走るよー！」

亜樹子の大声を合図に二人は走り出す。

同時に男も走り出す。

「なんでこんな時も勘が当たるのよー!!」

「翔太郎さんフォローしてくれるんじゃないかなかったですか!?!」

男はそれほど足が速いわけではない。

しかし女性二人を追いかけるには十分の速さだ。

どンドン距離が詰められていく。

「翔太郎君のバカアア!!
帰ったらしばいたるからなああ!」

通りを駆け抜け、路地裏を進む。

距離はもう10mもない。

「やば……………」

「このままじゃ……………」

諦めかけた時だった。

二人の向かう方に車のライトが見えた。

それは一台や二台どころではなく、十数台もの車がライトでこちらを照らしている。

さらにサイレンを鳴らして車がどんどんやって来る。
つまり……

「パトカー……警察!？」

なんとさっきまで反対側の通りを張っていた警察が回り込んでいた。

1588

『そこまでだ通り魔!! 投降しろ!』

拡声器を使って叫ぶ真倉を確認した途端、二人は警察の皆さんのもとへ駆け込む。

「助かったあ！」

「怖かったよお〜！マツキーー！！」

『照井！二人を保護だ！』

「くそっ……！！」

警察に回り込まれ、男は逃げようと方向転換をする。

しかし、向いた方にはソフト帽を被った男が立っていた。

「よお。昨日は逃げられたが……今日は逃がさないぜ？」

「畜生……！！」

目の前には探偵。背後には警官隊。

男がここから逃れる方法は一つしかなかった。

『ドラキュラ!!』

男は赤いガイアメモリを自分の顎に挿し、ドラキュラ・ドーパントに変貌した。

「! ドーパント化したぞ!!」

「弾は用意できたか!？」

ドーパントの登場にどよめきながらも警官隊は拳銃やライフルを構える。

それよりも素早く、ドラキュラ・ドーパントは羽ばたいた。

「あ!」「逃げられるぞ!」

が、

ドンッ！ ドンッ！

銃声が二回、辺りに響き渡る。

そして羽ばたいていたドラキュラ・ドーパントが地面に叩きつけられた。

「うがつ！？」

突然のことに驚き、アスファルトの上でじたばたもがいている。

「あ……………すいません真倉さん。先に撃っちゃいました……………」

真倉と警官隊、保護された二人に翔太郎が声の主の方を向くと、竜が気まずそうな顔をしていた。

『まあ、いいか。』

A、B班は神経麻痺弾を装填！

C、D班は神経断裂弾を装填して構えろ！！」

号令で一斉に拳銃を構える警官隊。

ドラキュラ・ドーパントはよろめきながら立ち上がる。

『よし、神経麻痺弾！

撃て！』

A、B班の警官たちは指先に力を込め、引き金を引き絞る。

ドオオオオオオオン！！

「「『！?』「「

発砲の直前、突然パトカーの一台が爆発。

警官隊全員の手が止まり、爆発したパトカーに視線が集中する。

「何だ!？」 「負傷者は!？」
ズドオオオン!

「「うおおお!？」」

さらにもう一台のパトカーが爆発。

警官隊は混乱し、包囲網は完全に崩れた。

混乱の中、亜樹子は美琴の手を握り、

「美琴ちゃん!ここから逃げよう!」

「え?いや……………」

「いいから早く!」

そのまま手を引いて亜樹子は走り出した。

「……………グウグウ……………」

警官隊が爆発に気をとられている隙に、ドラキュラ・ドーパントが羽ばたこうと翼を動かし始める。

それを阻止しようと翔太郎が駆け出した。

ドーパントが飛び立つ前に……………！

そう思って踏み込んだ瞬間

ズドドドオン！

「うおわっ！何だ！？」

翔太郎の足下で何かが炸裂し、思わず足を止めた。

気づけばドラキュラ・ドーパントは既に飛び立っていた。

その飛び立った方向は……

「あ、ヤベ……。そっちは亜樹子たちが！」

どういいうわけかドラキュラ・ドーパントは亜樹子たちの逃げた方へ飛んでいく。

ズドンッ！

「おわ！またかよっ！！」

再び足下で何かが炸裂し、周囲を見渡す。

「おい！何か降ってくるぞー！！」

警官の一人が叫んだ。

その場の警官、翔太郎は声の方を向く。

ダンッ！

何かがパトカーの上に落ちた。

落ちてきたそれは立ち上がり、周囲をゆっくり見回す。

「あいつは……………」

落ちてきたそれは金色のボディに赤い複眼。

腰にはロストドライバー。

「この間のミュージアムのライダー!？」

金色のライダーは腕を伸ばしてパトカーに巻きつける。

そしてパトカーを警官隊の方に投げつけた。

「「おわああああ!」「」

さらにパトカーを持ち上げどンドン投げつけていく。

「なんだあれは!？」

仮面ライダーか!？」

「何で俺たちをつ!」

何台ものパトカーが炎上。警官隊も応戦するが、金色のライダーは銃弾を全て避けて蹂躪していく。

「くそっ……」

翔太郎は悪態をつきながらロストドライバーを装着し、ジョーカー

メモリを取り出した。

「「うなりや俺が!!」」

「……おいおい。それは気がはえーって」

「!?!」

背後からの声に翔太郎は素早く振り向く。

そこにはタンクトップを着た男が立っていた。

「……………誰だお前？」

「え？覚えてないのか？」

男はがっくりと肩を落とす。

「勘弁してくれよ。」

俺はヤル気満々だったのに……。

それじゃもう一回自己紹介だ」

そう言うとポケットから銀色のガイアメモリを取り出した。

「俺は坂下銀次。

そして……」

『メタル……!』

「ミュージアムのライダー、メタルだ……。
変身……!」

坂下銀次は腰に着けていたドライバーにメタルメモリを挿し込む。
挿したとたんに坂下の全身を銀色の液体が包んだ。

「お前…この間の！」

「お？やっと思いだしたか？」

液体が装甲を形成し、仮面ライダーメタルへと変身した。

「何でミュージアムが…」

「俺だって知らん。」

わかるのはスペシャル企画っただけだ。

んなことより……」

背中からメタルシャフトを抜き、思い切り地面に降り下ろす。

「早く変身しろ。久々の実戦だからワクワクしてるんだよ…」

「また二対一か？」

「ん？」

ああ、後ろの仮面ライダールナは警官隊の足止めだから今回はサシだ」

後ろでは金色のライダー、仮面ライダールナが猛威を振るっている。

1601

「なるほど……警官隊に加勢したきゃ、お前を倒していけ

ってことだな？」

『ジョーカー!!』

「いや、特にそういうわけでもないが……この際どうだっていいさ」

「そうかよ……」

変身……………」

翔太郎を光が包んで、その姿を仮面ライダージョーカーへと変えた。

「ドーパントも追わなきゃいけないんだ……」。

構ってやれる時間は…ねえ!!」

ジョーカーは高く跳び、メタルめがけて踵落としを放った。

ガン!!!!

その攻撃はメタルシャフトに阻まれる。

「ハハッ……………行くぞ仮面ライダー!!」

ドンドンンッ！

ドオオオオン！！

「なんだこの強さ……」

ドーパントに対抗するための武器はルナの前では役に立たず、暴走を止められない。

「チツ……おい照井！」

銃に弾を込めながら真倉が叫ぶ。

「俺はドーパントを追っ！！なんとか持ちこたえろ！」

「はいっ！」

！！

真倉さん、後ろ！」

「あ？」

ズドンッ！

「うお！？」

振り返った真倉の頬を何かが掠めた。

そして真倉の前に、別のライダーが降り立った。

「よお、遊ぼうぜ？操り人形さんよ」

それは青いボディのライダー、仮面ライダートリガー。

「……え？操り人形って……俺のこと？」

「ハア…ハツ……」

「……この辺なら大丈夫でしょ……」

一方、美琴と亜樹子は近くの廃工場に逃げ込んでいた。

「……て言うか、何で逃げる必要が……」

「何言ってるんだよ……」。

あたしたちじゃ、邪魔なだけじゃん……」

二人は壁にもたれかかって座る。

「美琴ちゃんってさ、どうして仮面ライダーになったの？」

「……それは……ちょっとわけあって………何て言うか……大切な人のためって言うか………」

それを聞くと亜樹子はにんまりと笑ってこう言った。

「もしかして、大切な人って好きな男の子のこと!？」

その瞬間美琴の顔がボンツ!と音をたてて真っ赤になった。

「ちよっ……なんてこと言うんですか!？」

「顔真っ赤じゃん!!」

「やっぱりそうなんだ!」

「別にアイツのためじゃないです！」

「ほう！アイツってどんな子？」

「え？アイツはですね……」

にやけながら話そうとしたが、ハツとなって止めた。

「亜樹子さんおちよくらないで！」

「そんなこと言って〜！」

で、どんな子なの？」

「アイツはですね……」

結局にやけながら話し始める美琴。

ガールズトークが盛り上がってまいりました。

その時

ガシャアアアン！

廃工場の窓を突き破り、ドラキュラ・ドーパントが中に入ってきた。

着地して、二人の方を見る。

「ハアア……オンナダ……」

「ちょっと……何で追いかけてきたのよ……あたし聞いてないって！」
あわてて立ち上がり逃げようとする亜樹子だが、美琴は逃げよう
しない。

「美琴ちゃん何してんの!？」

「亜樹子さんは隠れて！」

私は戦います!」

「うええ!？」

美琴はどこにしまっていたのか、装飾のついたベルトを取り出して

装着する。

「アイツの…当麻の足手纏いにならないように……」

当麻の隣で一緒に戦うために！

私は逃げ続けるわけにはいかない！！」

懐からコインの描かれたカードを取り出す。

その様子を亜樹子は震えながら見ている。

「どんだけマジなのよ……」

て言つか美琴ちゃんの好きな子は当麻って言っのか……」

美琴は人差し指をビシッとドーパントに向ける。

「そのドーパント！

なんか見た目が蝙蝠みたいだし、色合いもなんか黒とか赤が多いし、
牙の感じとか……なんか腹立つのよー!!」

彼女の言いたいことがわからない方はZERO さんの作品を読んで
いただきたい。

「そーゆーわけだから！

私はあんたを倒す!!」

「……………??」

ドラキュラ・ドーパントは小首を傾げる。

周りの人をおいてけぼりにしつつも美琴はカードを構える。

「変身！」

持っていたカードをベルトでスキャンする。

『レールツガンー!!』

軽快な電子音が鳴ると、美琴の全身に電流が流れる。

やがて黄色とオレンジ色の装甲を形成し、体の所々に電撃を模した装飾が施される。

これが御坂美琴の変身した姿、仮面ライダーレールガンだ。

「うっそ………」

本当に変身しちゃったよ………」

「ヴヴヴウウ………」

ドラキュラ・ドーパントはレールガンを警戒して姿勢を低くして構える。

二人はにらみ合ったまま動かない。

「……仕掛けてこないの？
それじゃ、こっちから行くわよ！！」

一気に間合いを詰め、ドラキュラ・ドーパントの顔面に跳び膝蹴りを叩き込む。

「オウア……」

「まだまだあ！」

仰け反つてから空きのボディに二発ブローを撃ち、回し蹴りで吹き飛ばす。

1612

「ブホアッ……！！」

強烈な蹴りで壁に叩きつけられ、よろよろしている。

「よろよろしてるって悪いけど……！！」

レールガンは「レールガンクリップ」と呼ばれるものと、

砂鉄の舞い上がるような絵柄のカードを取り出した。

そしてカードをスキャンする。

『ジジジジッ！』

カードをスキャンした途端、地面に転がる砂鉄がレールガンクリップを指して集まっていく。

「ヴッ……グヴヴ………？」

集まった砂鉄はレールガンクリップに吸い付き、砂鉄の剣となった。砂鉄の剣をくるくる回し、ドラキュラ・ドーパントに切っ先を向ける。

「……どんどん行くわよ……！」

アスファルトを蹴り、ドラキュラ・ドーパントの眼前まで迫る。

ザンッ！

ドラキュラ・ドーパントが避けるよりも速く剣を振り、肩から胸にかけて切り裂いた。

「ゲエ……」

さらに容赦なく両手足を切り刻む。

「……ッギヤアアアアアア！」

「……っさい……！」

今度は腹部から肩までを切り上げた。

素早い攻撃で圧倒する様はまさに電光石火。

思い切り胸を蹴り飛ばす。

「グギヤアアアア！」

耳を塞ぎたくなる絶叫をあげて悶絶するドラキュラ・ドーパント。

レールガンから逃げるため、黒い翼を広げ飛び立つ。

「悪いけど逃がしま……せん……！」

思い切り踏み込んで高く跳び、宙を舞うドラキュラ・ドーパントの目の前で砂鉄の剣を振り上げる。

「ちえいさあああ!!」

砂鉄の剣で顔面を力の限り叩き斬った。

レールガンは着地、ドラキュラ・ドーパントは墜落して爆炎に包まれる。

共にガイアメモリも砕け散った。

「すごい……すごいじゃん美琴ちゃん!!」

隠れていた亜樹子が飛び出し、レールガンに駆け寄る。

「すごいじゃん美琴ちゃん!!ドーパント倒しちゃったよ!」

「いやあ……実は初めてだったんですよね……」

「……………何が？」

「実戦です」

レールガンは照れているのか、頭を掻くような仕草をしている。

「ええ！？初めて戦ったの！？」

「だって……………まだライダーの卵なんですもん！」

二人は先ほどまで戦場だったこの場所で無邪気にはしゃぐ。

「じゃあ、もう立派な仮面ライダーじゃないの！？」

「そ……………そうかな……………」

「自信持っていていいって！」

あんだけ強かったらすごいよ!」

「ほう。その君は仮面ライダーなのかい?」

「そうなのよ!美琴ちゃんってもうそりゃ強いんだから!」

「もぉ、亜樹子さんってば褒めたって何も……………」

そして二人は互いの顔を見て硬直する。

「今……………おかしかったですよね?」

「……………誰か違う人の声が……………」

辺りを懸命に見渡す二人。

どこにも、誰もいない。

が、

「見たことのない仮面ライダーだね。」

見たことのないドライバーもしている……」

空耳ではない。確実に誰かが話しかけてくる。

「来人君に言われた通り来てみて正解だ。」

新しい仮面ライダーと剣を交えることができるのだからね！」

「何よ……誰がいるのよ……」

「一体何処に……!?!?」

「おや、君たちの後ろにいるんだが」

二人は同時に振り返る。

そこにいたのは、銀色のガイドライバーを巻き、剣を握りしめる蒼い騎士だった。

「ドーパント!?!」

「いつの間に!?!」

騎士は剣をレールガンに向ける。

「疲労しているところ申し訳ないが……手合わせ願おうか」

ド
ン
ド
ン

ド
ン

「うおおおおお！？」

その頃真倉は、仮面ライダートリガーから逃げ回っていた。

なぜかトリガーは執拗に真倉を付け狙う。

「おいコラ！やる気あんのか！？」

ド
ン

「ひい！

なんで俺が狙われてんだ!？」

全力で路地を駆け抜ける。

銃はあるが、振り返って撃つてたら逆に真倉が撃たれてしまっただろう。

彼には逃げるという選択肢しかなかった。

「ふっざけんなよ! やつとどつきあいが出るってのに……逃げんなあ!！」

「無茶言つなよ!？」

トリガーは攻撃の手を緩めず、トリガーマグナムを撃ちまくる。

真倉は背中を向けているにも関わらず器用に避け続ける。

しかし、足が纏れて顔面から転倒。そのままアスファルトを転がっ

てしまった。

「ぶぶづづう！」

最……最悪だ………！！」

横たわる真倉の視界に、こちらに照準を合わせるトリガーの姿が映った。

「ハハ……鬼ごっこは終わりだ！」

そーゆーわけだから早く変身しろや！」

強打した顔を押しさえながら
「変身？」

って何？」

「…………ふざけてんのか？」

トリガーの引き金を引く人差し指に力が入る。

「俺はな！今日やっと戦えるんだぞ！？」

昨日から楽しみにしてたんだぞ！？

それをお前が焦らすから苛立ってんだ！！早く変身しろよ仮面ライダー！！」

「仮面ライダーって……………誰が？」

その一言でトリガーのイライラはMAX。照準を真倉の頭部に合わせる。

「オーケー。わかった。

しらばっくれるならそのまま死んでくれ」

「!？」

トリガーは思い切り引き金を引いた。

ドンッ！

乾いた銃声が一度だけ、路地に響いた。

が、その銃声はトリガーマグナムからではなかった。

ガシヤア！

持ち主の意思を無視して、トリガーマグナムはアスファルトに叩き

つけられた。

「動くな！動いたらもう一度撃つ！！」

発砲したのは竜。

綺麗にトリガーマグナムの銃身に当て、真倉の窮地を救う。

竜を見て、トリガーは両手を挙げる。

「おーおー、怖いねえ…」

悪いけど、お前みたいな一般ピーポーに用は……」

話ながら足下のトリガーマグナムを蹴り上げ、空中でキャッチ。

照準を今度は竜に向けた。

「ないんだけどな！」

「関係ないな。その人は俺の上司だ！」

その際に真倉は立ち上がり、銃をトリガーに向ける。

「助かったぞ照井！このまま二人で……」

「真倉さんは下がってください！」

「仕留め……って、ええ！？」

「おいおい……、おにーさん何者？今忙しいんだけど」

あきれているのか、マグナムを回して弄っている。

真倉は開いた口が塞がっていない。

「お前……仮面ライダーに用があるんだろう？」

だったら……」

竜は銃をしまい、アクセルドライバーを巻き付ける。

「狙う相手が違うんじゃないか？」

『アクセル!!』

「変……身!!」

ドライバーのグリップを捻り、紅い閃光に包まれる。

閃光をエンジンブレードで切り裂き、仮面ライダーアクセルへと変身した。

「「な………!？」

お前が仮面ライダー!？」

トリガーも真倉も驚いている。

トリガーは真倉を指差し

「え？お前…仮面ライダーじゃなかったの!？」

「いや、全然……」

「だって…アクセルの特徴って……スーパー熱血刑事って……」

「だいたいの刑事さんは熱血だろ！」

「知らねーよ！」

「っていつか……違う人追いかけてたの俺？」

「うーわ、超恥ずかしい!!」

両手で顔を覆い座り込むトリガー。

それを見ておろおろする真倉。

「があっ!!!!」

不意討ちをくらいアクセルは後退りする。

トリガーは照準をアクセルに向けた。

「とりあえず、遊んでくれるんだろ？」

仮面ライダーさんよっ!!!!」

ドドドドオン!

「くっ!!」

エンジンプレードを盾に弾丸を弾く。

その間にトリガーはアクセルの頭上を飛び越え、背後から発砲する。

「っ!!」

速い!!!!」

「ぼさつとすんなよ!!」

さらに乱れ撃ち、アクセルに反撃を許さない。

「オラオラア!!」

その程度か仮面ライダー!？」

「このままじゃ……!!」

と、その時

グキッ!!

「ぬぐあああああ!？」

足がああああ!？」

「……………え？」

銃撃が止み、トリガーの絶叫が響いた。

エンジンブレードを構え直して見るとトリガーが足を押さえて倒れている。

「くそ！足挫いたあ！！
俺としたことが！」

なんと勝手に足を挫いてしまったのだ。

敵ながら情けない。

そんな絶好の機会をアクセルは逃さない。

「なんかよくわからんがチャンスだ！」

アクセルメモリを抜き、ドライバーにエンジンメモリを挿す。

『エンジン！マキシマムドライブ！！』

アクセルはバイク形態に変形。

炎を纏いながらトリガーに突っ込む。

「何！？卑怯だぞ！！」

喚きながらなんとか立ち上がり、

ホイールが当たるギリギリのところでアクセルを止める。

が、トリガーの力ではアクセルの勢いを止められない。

「ぬっう おおおおお！！」

殺られてたまるかあああ！！」

轆かれまいと踏ん張るトリガーを押し切ろうと、アクセルは引きずりながら路地を走る。

そしてその頃……

「ぬんっ!!」

「らあっ!!」

メタルとジョーカー、互いに一步も退かない闘いを繰り広げていた。

その激闘でコンクリートの壁が崩れ、アスファルトの地面が抉られていく。

「はっはっは!!」

警官たちが気になるか!？」

メタルシャフトを振り回し、ジョーカーに迫る。

「毎度毎度複数で攻めてくるなんてこすい真似……してんじゃねえ！」

身を屈めて避け、少し距離をとる。

メタルの攻撃はシャフトを大きく振り回し、力で押し潰す。

当たればひとたまりもないが、モーションが大きいいため避けることは出来た。

しかし、メタルの装甲は硬く、ダメージを与えられない。

「どうしたもんかねえ……」

後ろを見ると、警官たちが蹴散らされている。

「向こうも加勢しねえと……」

メタルの方に向き直ると、シャフトを振り上げて目の前に迫ってい

た。

「うお!?!」

紙一重で避ける。シャフトはアスファルトにめり込んでいる。

「ぬりゃああ!」

めり込んだシャフトを思い切り振り上げ、
アスファルトの破片をジョーカーに浴びせかけた。

思わずジョーカーは両手で顔を覆う。

「もらったああ!」

重い一撃がジョーカーの脇腹に打ち込まれる。

吹き飛ばされて壁にぶつかり、その場に崩れ落ちた。

「戦いの最中によそ見なんて……素人のすることだ」

動けないでいるジョーカーに狙いを定め、シャフトを振りかぶる。

「もう少し、骨があると思ったんだが……なあ！」

ジョーカーの頭にシャフトを叩きつける。

が、当たるギリギリのところまでジョーカーは地面を転がりながら避けた。

「お返しだ！」

無防備なメタルの脇腹を強く蹴り飛ばす。

「戦いの中に油断なんて……素人のすることだぜ？」
人差し指を小さく振って悪戯っぽく言う。

メタルはシャフトを構え

「……なるほど。この間よりは楽しめそうだな……」

一定の間合いを保ちながらジョーカーを睨みつける。

ジョーカーも腰を落とし、姿勢を低くして構える。

そして二人同時に動きだした。

「おるうああ!!」

強く踏み込み、メタルがジョーカーの喉元を狙ってシャフトを突き出した。

ジョーカーは跳躍して避け、メタルの背後をとる。

「もらい!!」

背を向けているメタルめがけ、ラピッドパンチを放とうとした。

が、背を向けたまま、的確にジョーカーを狙ってシャフトを振り回した。

「おっと！」

これもしゃがんでなんとか避ける。

「はっ、いい反応だなー！」

振り返り、さらにシャフトを振るっ。

掌、腕を軸にシャフトを回転させ、舞のような動きでジョーカーを攻め立てる。

「ちっ……。狭い路地で長いエモノ振り回しやがって……」

すり抜けようにも高速で回転するシャフトが邪魔で抜けられない。

この速度からの一撃はガード出来ない。

「くそったれ！」

前方に逃げ場がないとわかり、シャフトが叩き込まれる前に飛び退いた。

ガシッ

「うお!?!」

飛び退いたジョーカーの体が突然浮いた。

「うえゝ!?!何で!?!」

腰の辺りを見ると金色の触手のようなものが巻きついている。

それを目でたどっていくと、ルナが腕を伸ばしていた。

「あ!バカ金堂!?!」

お前は警官隊の足止め役だろうが!?!」

メタルが全身を使って「降ろせ!」とアピール。

ルナは後ろの警官たちを指差す。

メタルが見ると警官たちは気絶しているのか、全員動かない。

「なんだよ……。要するに手持ちぶさたってわけか……。

仕方ねえ、二人でやるか……」

しびしび了解をした途端にジョーカーを思い切り地面に叩きつける。

「ぐっ……!!」

前後から金と銀のライダーが近づいてくる。

ジョーカーはなんとか体を起こし、二人のライダーを交互に見る。

「こんな狭いとこじゃ……戦えねえな……」

するといきなりルナの方を向き、全力で走り出した。

「……………!!」

ルナは走ってくるジョーカーを迎え撃とつと身構える。

「うおおおおおおー!!」

雄叫びをあげて走るジョーカー。

ルナはジョーカーを捕まえようと両腕を伸ばす。

「おおおおりゃああ!!」

迫る腕を避けて地面を蹴り、壁を蹴ってルナを大きく飛び越える。

そして着地すると全速力で走り去る。

「……………ん？逃げたのか？」

ポカーンとしていたメタルだったが、我にかえってシャフトを担ぎ

「よっしゃ追いかけるぞ金堂!!」

ルナを連れ、猛スピードで走るジョーカーを追う。

「……………美琴ちゃん!」

場所は再び廃工場。

美琴こと仮面ライダーレールガンは地に伏していた。

「惜しい。実に惜しいね」

蒼い騎士は剣の刀身を指でなぞりながら、倒れているレールガンの周りを歩き回る。

「打ち込み、体裁きは上等。反応はずば抜けていい。

ドライバーの力抜きでも君は優秀だ。

なのに何故、私に歯が立たないのか？」

騎士は切っ先をレールガンの首に当てる。

「それは経験値の差だ」

「……………」ほっ！

く……………経験値……………ですって……………？」

「そう。経験値だ。

剣を交えてわかったよ。

君は決定的に経験値がない。

それが勝敗を分けたということだ」

騎士が背を向けて話を続ける。

その隙にレールガンは一枚のカードをスキャンした。

『ビリッビリ!』

体を起こし、背を向けている騎士の方に手を伸ばした。

「っうっうああああ!」

絶叫すると同時に、レールガンの掌から電撃が放たれた。

電撃は真っ直ぐ騎士に向かう。

が、突然騎士の姿が消え、電撃は工場の壁を突き破った。

「本来、雷というのは音よりも速い」

気がつけば騎士は背後にいた。

「なのに何故、避けられるのか？」

それは君の行動が非常に分かりやすいからだ」

「くっ！」

「君が切羽詰まればきつと不意討ちをしてくる。

そうなるかとはタイミングを合わせるだけで、音よりも速いものを避けられる。

たったそれだけのことだ」

騎士は簡単に言っているが、実際はそんな簡単ではない。

それを簡単にやってのける騎士の技量が伺える。

「……………さて、君のような未熟者が相手だと……これ以上楽しめそうにないな……………」

騎士は再びレールガンに剣を向けた。

「一応私も仕事でやっているんでね、君を斬らなければならない」

「私を……斬る？」

「正確には君ではなく、仮面ライダーを斬るように言われているんだ」

そう言うと騎士は剣を振り上げた。

「それでは楽しいお喋りはここまでだ。

私も忙しいのでね。

さよなら」

レールガンに剣が真っ直ぐ降り下ろされる。

「ちょっと待ったー！ー！」

突然、亜樹子が騎士にしがみつき、攻撃を阻止した。

「亜樹子さん！？」

「何だ君！？」

亜樹子の手を叩いて剥がそうとするが、亜樹子は離れない。

「美琴ちゃん！今のうちに逃げてー！！」

「へ！？」

「早くー！！」

すると亜樹子と騎士の姿が消えた。

「え？あれえ！？」

間の抜けた声に振り返ると、工場の入り口に二人がいた。

「何で！？さっきまで美琴ちゃんところに……」

「いい加減にするんだお嬢さん！」

無理矢理剥がされた拍子に亜樹子はしりもちをつく。

「あ痛！」

「まったく……困ったお嬢さんだ。」

あんまりやんちゃ過ぎると……」

剣を亜樹子の頬に当てる。

「斬り捨てざるを得なくなる」

その瞬間

『スピード!!』

亜樹子の視界から騎士が消えた。

ガシヤアアア!

レールガンは超高速で騎士に斬りかかり、そのまま押しきる。

「亜樹子さんに………亜樹子さんに手を出すんじゃないわよ!」

「まさか………そんなにスピードがでるとはね…

油断したよ」

再び騎士は消え、それを追ってレールガンの姿も消えた。

ガギギギギン！！

辺りには砂埃が舞い、刃のぶつかる音だけが響く。

そして……

「きゃああああ！！」

レールガンだけが転がりながら姿を現した。

そのすぐ後に騎士も姿を現す。

「まさか私のスピードについてこれるとは……恐れいったよ。だが
ここまでだ」

ドオーーン!!

「「「!?」「」」

何故か工場の壁が吹っ飛んだ。

壁の破片や煙が舞うなか、バイクと人が転がり出てくる。

「いってえな畜生!足を捻った人を轢くか普通!?!」

「命懸けの戦いで何をこちゃこちゃと!」

「……………あれ?竜君?」

「……ん？あ、亜樹子……ちゃん……」

やって来たのは仮面ライダーアクセル、トリガー。

数百メートル引きずって結果、廃工場までやって来てしまった。

「あれ？副社長！何してんすか！？」

トリガーは起き上がり大声で叫ぶ。

叫んだところで倒れているレールガンを見る。

アクセルも騎士とレールガンを見る。

「……なんか……状況がすごいことになってるな……」

「副社長！説明お願いします！！」

すると今度は

「よっしゃここならおもいつきり戦えるー!!」

入り口から黒い仮面ライダー、ジョーカーが飛び込んできた。

「あ、翔太郎君……」

「ん？亜樹子？何やって……」

ジョーカーの視線も騎士とレールガンに向けられる。

「何だあれ？それに……」

ミュージアムの幹部まで？

「やっと追いついたぜ…」

ジョーカーが後ろを向くと仮面ライダールナ、メタルが睨んでいる。

「鬼ごっこは終わりか？」

「って副社長!？」

メタルも騎士を見て叫んだ。

ルナは黙っているが硬直している。

「やれやれ……騒がしくなったな」

騎士は見回し

「君たちが件の仮面ライダーだね？」

確か……ジョーカーとアクセル、で良かったかな？」

「俺たちのこと、よく知ってるじゃねえか。」

で、ミュージアムの幹部が部下を連れて何しに来た？」

ジョーカーは亜樹子を立たせ、騎士を睨む。

「何しに来た？」

決まっているだろう。

君たち仮面ライダーをこの剣で斬り捨てに来たのさ」

「まあ、どうせそんなところだろうな。」

ところで倒れているそいつは何だ？」

ピシッとレールガンを指差す。

そこで亜樹子がジョーカーに

「あれは美琴ちゃんが変身した仮面ライダーだよ！」

「……………」

何イイーーーーー!?

マジでか!?

話題のレールガンは周りのライダーを見て、

「何でWがこんなに……?ていうか単色?」

無理もないリアクションである。

「おい、美琴……………ちゃん？」

と、ジョーカーがレールガンの顔をのぞきこみながら声をかける。

「ひっ！だ、誰よあんた！？Wなの！？」

「W？いや、俺だよ、翔太郎だ！」

「……………翔太郎さん？」

「おい翔太郎！」

そこにアクセルが駆け寄ってきた。

「何してんだ！敵の前だぞ！！！」

「いや見るよ竜！これ美琴ちゃんだぜ！？」

はしゃぐ二人を待つミュージアム勢のライダーたちは退屈そうに待っている。

「緊張感ねえなあ……………」

なあ金堂？」

……………」

「だんまりかよ……………」

「君たち！」

「うお!?!」

突然、騎士がルナとメタルの間にやってきた。

いきなりすぎて驚く二人。

「急になんですか!?!」

「君たちから見て、あの黒いのと紅いの、どっちが強い?」

そう言われ、二人はアクセルとジョーカーを見る。

「……紅いのはスペックは高いですが、やはり黒いのが経験豊富ですから……」

「そうか。金堂君は?」

ルナはジョーカーを指差した。

「わかった。」

未確認のライダーがいるが、おそらく女性だ。
金堂君、君が相手してあげなさい」

それだけ言って騎士は姿を消した。

「どうして翔太郎さん一人で変身が!？」

「いや、俺はいつだって一人だよなあ？」

「まあ、一人だな…」

「だからそのフィリップってのは…」

会話の途中で、ジョーカーの姿が突然消えた。

「翔太郎!？」

「しまった!さっきの奴があっ!？」

レールガンの首にルナの腕が巻きつく。

「……………があっ……………ぐ……………」

「その娘を離せ!」

ルナの腕にアクセルが斬りかかる。

ギイン!!

「……………あんたも久しぶりだなあ」

エンジンブレードをメタルがシャフトで受けとめる。
アクセルを押し返すとシャフトを構え直す。

「お前の相手は俺ってことらしい……」

「今度は銀色か……」

『エンジン……!』

アクセルもエンジンブレードを構える。

「うおーい……!……ちょっと待てええーい……!」

緊張感溢れる雰囲気をぶち壊すようにトリガーが割って入った。

「……………何だ神田…空気壊してまで言いたいこともあるのか？」

メタルは呆れながら構えを解き、シャフトを担いだ。

「大ありだ銀さん！！元々こいつは俺の相手だ！

銀さんは手えだすな！！」

「あ？知るかそんなこと。

任務は仮面ライダーの抹殺だろうが」

「任務がどうあれ、こいつは俺が殺るんだよ！！」

アクセルを放置でいがみ合う二人。

終いには二人とも武器を構えている。

さすがにアクセルも我慢の限界。

「もついい。」

二人同時に来い！」

その言葉に

「「あ？」」

頓狂な声をあげる二人。

「こっちは一網打尽する気にいるんだ。
一人でも二人でも構わん！！」

そう言われてしまった二人は顔を見合せ、

「どっつする銀さん？こっつ言ってるぜ？」

「それじゃ、お言葉に甘えるか……」

トリガーとメタル、二人のライダーがアクセルに飛びかかる。

先ずはメタルの舞のような攻撃。

それを受けとめるのではなく、エンジンブレードでいなしていく。

「一撃がっ……重い！」

メタル自体は鈍重だが、攻撃は素早く、力強い。

ダメージは無くとも疲労が蓄積されていく。

『スチーム!!』

「はああっ!!」

エンジンブレードを振り、蒸気でメタルの視界を奪つ。
『ジェット!!』

「でやああああ!!」

蒸気の中から飛び出しメタルに飛びかかろうとした。

が、

ズドン！ ドンッ！！

「うっ！？」

二発の銃弾がアクセルの胸で炸裂。

たまらず吹き飛ばされる。

「…………自分で二対一でいって言ったのに俺を忘れんなよ」

「仮面ライダー……トリガー……ぐっ！」

地に伏しながら、レールガンの方に視線を向ける。

「か…………はぁっ…………」

長く伸びた腕に首を締めつけられ、レールガンは何もできない。

さらに締めつける力が強くなる。

「あ……………」

徐々に抵抗することが出来なくなり、意識が遠のいていく。

もがいていた手にも力が入らず垂れ下がる。

「美琴ちゃん！しっかり！！」

物陰に隠れていた亜樹子が叫ぶ。

その時、レールガンの指が微かに動いた。

「う……………」

残った力を振り絞り、レールガンは一枚のカードを取り出した。
そしてカードをスキャン。

『ビリッビリ!』

バアアン!

電子音が鳴ると同時にレールガンは電流を流しスパークさせた。

衝撃でルナの手が離れる。

「ゲホツゲホツ!」

激しく咳き込むレールガン。

その様子を見ていたアクセルはエンジンブレードを握りしめて立ち上がる。

そこにトリガーが銃を構え立ちはだかった。

「逃がすかよ！」

『スチーム!!』

「邪魔をするな！」

蒸気を振り撒き、トリガーを飛び越えるとさらに引き金を引く。

『ジェット!!』

レールガンに迫るルナめがけ、斬撃を撃ち込む。

「っ……………！」

一瞬怯んだルナにレールガンも電撃を浴びせる。

「よし！このまま……」

アクセルはクラッチレバーを握る。が、

「ふんっ！」

ゴスンッ……！

「ぐはあっ……！」

アクセルの後ろからメタルがシャフトを叩き込んだ。

そのまま地面を転がる。

「浮気はいけねえなあ……。」

おい金堂！そいつを殺れ……！」

メタルが叫ぶと、よろめいていたルナはドライバーから金色のメモリを抜いた。

そしてメモリをマキシマムスロットに挿し込む。

『ルナ！マキシマムドライブ！！』

「……なるほど。やる気満々ってわけね…」

咳き込んでいたレールガンも立ち上がり、カードを取り出した。

「ねえ、金ぴかのアンタ…」

レールガンって知ってる？」

『ラスト レールツガン！！』

カードをスキャンした途端、レールガンの右足に凄まじい電流が流

れる。

「あたしのこと言うんだけどね……」

右足に電撃が溜まっていくにつれ、バチバチと轟音が響き渡る。

確実に今までの電撃とは規模が違う。

その様子はルナも感じ取っていた。

危険と判断し、レールガンよりも早く仕掛けた。

レールガンめがけて放たれる無数の拳の雨。

しかし、レールガンは落ち着き払っていた。

「そんな鈍い攻撃、当たるわけないじゃない!!」

拳の雨を音速を軽く超える速度で避けていく。

文字通りあつという間にルナの攻撃から抜け出し、さらに加速して飛び上がった。

「つつちえいさあああ!!」

凄まじい電撃を纏った右足を突きだし、ルナの胸を蹴り飛ばした。

ドオオオオオン!!

落雷のような轟音とともにルナが吹き飛ぶ。

「金堂!!」

吹き飛んだルナのもとにメタルが駆け寄る。

そこにアクセルが斬りかかった。

「くっ！邪魔を……」

「浮気はダメ……なんだろ？」

再び激しい攻防を繰り広げる二人。

「俺を忘れんなって！」

その上トリガーも混ざりいつそう激しくなる。

メタルのシャフト、トリガーの銃撃。

二人の猛攻を防ぐアクセルは限界に近い。

「くっ……」

「どうしたあ！？

威勢がいいのは口だけか！？」

次第に押され始めるアクセル。

そんなアクセルを助けようとレールガンがぶらつきながら向かう。

「駄目だよ美琴ちゃん！」

が、亜樹子がそれを阻んだ。

「亜樹子さんどうして!?!」

「美琴ちゃんフラフラじゃない!!」

これ以上無理したら!」

「でも……」

「大丈夫! 竜君は強いんだから!!」

「おわっ！」

亜樹子の想いとは反対に、アクセルは二人に圧倒されていた。

「どじする銀さん？」

もうこれ以上は楽しめそうにないぜ？」

「あー……」

「じゃあ、止めさすか」

二人は同時にメモリを抜き、

メタルはシャフトの、トリガーはマグナムのマキシマムスロットに挿し込む。

『メタル!』

『トリガー!』

『『マキシマムドライブ!』!』

「くそっ!」

「くそっ!とか言ってもお前は G o t o h e l l だぜ?」

照準をアクセルの頭部に合わせる。

引き金を引こうとした時、突然トリガーの銃を構える右腕で何かが炸裂した。

「……………ん?」

衝撃でマグナムが地面を転がる。

トリガー、メタルに加えてアクセルも何が起きたかわからない。

「動くな！動いたらもう一発撃つ！！」

その場にいた全員の視線が声の方に向く。

「……………真倉さん！？」

そこには銃を構えた真倉がいた。

構える腕が震えている。

「真倉さん何で!?!」

「何でとかどうでもいいけど……邪魔するんなら撃つぞ!?!」

トリガーはマグナムを拾い、左腕で真倉に照準を合わせた。

「おい神田!」

「止めんな!」

撃ってきたのはあっちだ!?!」

そのまま、マキシマムドライブを真倉に向けて放った。

「!?!?! バカ!」

メタルの制止を聞かずに放たれた光弾は、真っ直ぐ真倉に向かっていく。

「やらせるか!?!」

真倉と光弾の一直線上にアクセルが割って入る。

『アクセル！マキシマムドライブ！！』

「返すぞ！」

全身を捻っての回し蹴りを光弾にぶつける。

光弾は真っ直ぐ弾き返り、トリガーに命中した。

「づいおー！？」

「神田！」

くそつたれが！！」

光を纏ったシャフトを振り回し、アクセルに襲いかかるメタル。

シャフトをアクセルに降り降ろすも、エンジンブレードで防がれる。

「次は……お前だ！」

『エレクトリック!!』

バチィ!

「ぐっ!?!」

電流を流されてメタルは一瞬だけ怯んだ。

その隙を逃さずもう一度引き金を引く。

『エンジン! マキシマムドライブ!!』

「はああああっ！！」

怯んで防御のできないメタルを一刀両断。

メタルは後ずさる。

「……………ちっ。」

不味いな……………」

メタル本人が手負いの上、トリガー、ルナも倒れている。

対するアクセルも片膝をついている。

この状況の中、メタルの下した判断は

「……………悪いが、今回も退かせてもらおう」

「!？」

「こつちもそつちも、戦える状態じゃあないだろう?。」

レールガンも亜樹子に支えてもらって立っているのがやっと。

アクセルは黙ったまま。

その様子を見て、メタルはトリガーとルナを担ぐ。

「……………今度は邪魔者抜きで、

サシでやれるといいな」

それだけ言うとメタルはその場を去った。

「照井！」

真倉がアクセルに駆け寄る。

「真倉さん……。」

ありがとうございます……」

「これで貸し借りナシだ。

それより、追わなくていいのか？」

「追っても、今のままでは捕まえることはできません……」

それより……まだ翔太郎が戦ってるはず……」

真倉さん、翔太郎のところに……」

「……わかった。俺に任せる！」

真倉は工場を出て、ジョーカーを探しに行く。

真倉が去ったあと、アクセルはその場に倒れこんだ。

「竜君!!」

亜樹子と変身を解いた美琴が駆け寄る。

「……本当に君がさっきの仮面ライダーだったか……」

「そんなことより竜君の怪我が……」

「大丈夫だ。それよりまだ翔太郎が……」

「ぐああっ!!」

騎士のドーパントに連れ去られ、戦っていたジョーカーだが

騎士のスピードについていけず、防戦一方となっていた。

「君は素晴らしいな！」

騎士は両手を広げ、意気揚々と話す。

「…なん……だと？」

「君を讃えているんだ。」

君は先ほどの仮面ライダーに比べて大変動きが遅い。

が、反応速度は異常に速い！

君は経験と判断で私の攻撃をある程度予測してダメージを最小限に避けている。

君は素晴らしい戦士だ！」

「舐めてんのかてめえは！！」

立ち上がり騎士に殴りかかる。

ジョーカーのパンチは虚しく空を切った。

「ちっ！」

素早く前転して背後からの騎士の攻撃を避ける。

「……かすっただけ、か。

今のもかすり傷で済ませるなんて……」

ダメージを最小限で済ませることが出来ても、ジョーカーの攻撃はかすりもしない。

「どつする！？どつすりゃあいつを捕まえられる！？」

止まらぬどころか目にも映らないくらいの速度で動きまわる騎士。

攻撃を避けながら必死で思考する。

「さっきの仮面ライダーよりも、

紅い仮面ライダーよりも君が一番おもしろいな！！」

「竜と戦ってねえだろうか！」

その瞬間、あることを思いついた。

「……………そうだ。俺にはあれがある!!」

地面を転がり、ドライバーからジョーカーメモリを抜く。

「おや、次はどうするのかな？」

騎士の呼び掛けを無視し、ジョーカーは壁を背にして身構えた。

「どっからでもかかって来い!!」

「どっからでも?」

突然目の前に騎士が現れた。

ジョーカーが防御するより速く、剣が降り降ろされる。

ズガッ!

騎士の剣はジョーカーの左肩に深く食い込んだ。

鋭い痛みがジョーカーの神経を刺激するが、ジョーカーは騎士の腕を左腕で掴む。

「……捕まえたぜ、ドーパント！」

「……まさに肉を斬らせて骨を断つ、といったところか。

なかなかの覚悟だが、これからどうするのかな？」

「こつするんだよ」

ジョーカーはあるものを取り出す。

それは黒いジョーカーメモリとは違い

炎のような赤いガイアメモリ。

『ヒートー！』

以前、アクセルが死闘の未獲得したメモリ。
それをドライバーに挿し込む。

「竜からもらっという正解だったな……」

ジョーカーの黒い装甲から炎が吹き出る。

「まさか君がこのメモリを……！」

「この距離だ。避けさせはしない……」

『ヒートー！マキシマムドライブー！』

マキシマムスロットに挿すと右足に炎が集まる。

その右足を騎士の腹部に押し付ける。

「吹っ飛べ!!」

炎を撒き散らしながら思い切り蹴飛ばす。

予想以上の破壊力に騎士は吹き飛んだ。

が、倒れることなく気合いで踏ん張った。

「……………意外に効くね…」

だが、その程度では私は倒れない……」

騎士は剣の刃先を指でなぞる。

「さあ、ここからが本番だ！」

剣を構え、ジョーカーのもとへ駆け出す。

その時、騎士の顔の前に小さな物体が飛んできた。

「「!?!?」」

物体はよく見ると青いカブトムシのようにも見える。

『義兄さん、もう十分だ。
帰投してくれ』

物体を通して誰かが騎士に話しかけている。

「帰投？早すぎないかい？」

『戦闘データは取れたし、三人は負傷してすでに撤退したんだ。』

残っているのは義兄さんだけだよ？」

「……………なんだ。撤退したのか……」

残念そうに騎士は構えを解き、背を向けて歩き始めた。

さっきの物体はいつの間にか消えている。

「はっ……………逃がすかよ！」

背を向けている騎士にジョーカーが飛びかかる。

が、騎士の姿は消え、ジョーカーは勢い余って顔面からアスファルトに叩きつけられた。

「あいつは……？」

すぐに起き上がり周囲を見る。

すでに騎士はその場を去っていた。

「ちっ……せっかくの手がかりが……」

悪態をつきながら変身を解除。

すると、

「た………探偵？」

声の方を向くと、真倉が目を見開いてこちらを見ていた。

「よお、マツキー。何してんだ？」

「いや、何してんだ？じゃなくて……お前……」

仮面ライダーだったのか!？」

「言っただけだったの？」

「付き合い長いけど今初めて知ったわ!

何で今まで黙って……

そつえば照井も……」

「まあ、その話はまたあとでいいや」

「よくねえよ!」

喚く真倉を無視し、肩を押さえながら工場の方へと歩いていく。

真倉の興奮は冷めることはなかった。

AM 11:50 - - -

喫茶店『ミルクデイツパー』 - - -

「はい、どつぞ〜」

翔太郎、亜樹子の前にコーヒーが置かれる。

「美琴ちゃん、本当にコーヒーいらない？」

「師匠にダメって言われてるんで……」

「そういえば24時間後に迎えに来るって言ってなかったか？」

翔太郎は時計をチラッと確認。

すでに24時間が経過していた。

「まあ、そのうち来るんじゃないか？」

今度は喫茶店の店員を見る。

文字では表現できないくらいの美人さん。

「依頼人がはしゃぐのもわかるな……」

「何をにやけてんのよ!!」

軽快な音を響かせて翔太郎の頭をスリッパで叩く。

三人は会計を済ませて喫茶店を出た。

「さてと、今回の依頼の吸血鬼は捕まったし、
ミュージアムには逃げられたし、

やることないな！」

「それは喜ぶところなんですか？」

楽しく談笑をする翔太郎と美琴。

亜樹子はただ一人、別の方向を向いていた。

「あれ？亜樹子さん、何してるんですか？」

「ちゅちゅと帰るぞ」

すると亜樹子は何かを指差した。

「あれ……もしかしたら美琴ちゃんの……」

二人も亜樹子の隣に並び、指差している方を見た。

空間が歪んでいる。

「これは……」

「もしかして……」

突然なにも無い空間から光が放たれた。

三人は眩しさのあまり顔を覆う。

『Hyper Clock Over!』

聞き覚えのある電子音。

三人の予感は当たった。

「……………迎えに来たぞ」

三人が見ると、銀色の装甲に赤い角の仮面ライダー

カブトが立っていた。

「事務所にいなかったのはどういふことかと思えば……………」

こんなところで油を売っていたのか」

「いやいや、別に油を売っていたわけじゃ……………」

弁明をする美琴を押し退け、カブトは翔太郎の前に立った。

「弟子が世話になつたな」

「いや、別に俺は何も…」

「またすぐに会うことになるだろう」

「は？」

再び美琴の方を向き

「さあ、お別れの挨拶をしろ」

「え？もうですか！？」

「時間が惜しい。なるべく手早くな」

カブトに急かされ、緊急のお別れの挨拶をすることに。

「えっと……翔太郎さん、亜樹子さん、短い間でしたがありがとうございます！」
「さいました！」

「本当に短い間だったな」

「当麻君と上手くやるのよ！！」

「ど、どうしてそれを！？」

最期まで騒がしく挨拶をする三人。

そんな空気をぶち壊すかのように

『Hyper Clock Up!』

「……え？もうですか？」

美琴の腕を無理矢理掴む。

「さあ、上条のところに行くぞ」

「え、いやちょっともう少し待」

バシユンー！

「……………なんか、言いかけてたが…」

「そつだね……………」

でも美琴ちゃんらしいからいいんじゃない？」

この世界に訪れた仮面ライダーの戦いはこれから始まる。

そしてこの世界の左翔太郎も、その戦いに巻き込まれていくのだ。

おい、ちょっとー!？」

気まずい顔で翔太郎は携帯を閉じた。

「どうしたの？」

「なんか……今回の件で俺は怒られるらしい……」

竜が刃さんにチクリやがった……」

「囀作戦がまずかったの？」

「なぬ……」

彼の意思に関わらず、戦いに巻き込まれていく。

強大な敵から世界を守るために。

???:???

とある異世界の公園

』Hyper Clock Over!』

「……着いたぞ」

カブトは乱暴に美琴を放した。

公園では、愛の伝道師が生徒二人にレッスンをしていた。

「その通りだ翔太郎！」

これでまた一步ハーレムに近づいたな！」

「はい先生！」

耳を塞ぎたくなるくらい恥ずかしいことを平気で叫ぶ三人を見て、

美琴は一枚のコインを取り出した。

「よし、それでは最後に」

「ぶつち抜けえー!!」

授業中の音也の後頭部を弾いたコインで撃ち抜いた。

「ぶぐう!?!」

決戦が、始まる。

とある異世界のR / 雷纏うライダーと高速剣技（後書き）

文章書くの下手になったな…

皆さん、お久しぶりです！！

前回の投稿からいつの間にか2ヶ月も経過。

お待たせしてすみません。

え？別に待ってないって？

………そういえば、私事ですがこの度大学生になりました。

間違えた、大学生になれました！

一人暮らしは寂しいっす。

もし、誰か大学生になったよ！って方いたらアドバイスとかのメッセージくださいm(_____)m

茶番劇はこれくらいにして

本当に皆さん、すいませんでした。

そしてZEROさん、せっかくコラボして頂いたのにこんな仕上がりでごめんなさい。

次回からはもっとマシな文章書けるようにがんばります。

Vに潜むもの／美人がやってきた

5月1日 - - -

「……………なんか事件増えたな……………」

AM 9 : 17 - - -

「……………不可思議な事件が増えましたね……………」

風都警察署 - - -

現在、風都署には竜、真倉の二人だけ。

まだ刃野は東京から戻ってこない。

が、わずか数日でドーパントの仕業と思われる事件が多発していた。

「顔のない死体に両肩と頭のない死体。

川で見つかった焼死体、骨も臓器も粉々の圧死体……

こんなもんか？」

「そんな感じでしょう。」

あ、あと精神錯乱したあとに死亡したケースもあります」

「……なにそれ？初めて聞いたぞ？」

「真倉さんが顔のない変死体で呼ばれた時に俺一人で行った事件です。」

外傷や薬物反応もなかったんです」

竜は資料に写真を真倉に手渡す。

パラパラとめくり、自分のデスクに置いた。

「刃野さんはなにしてたよ……」

あの人こういう時はいねえんだから……」

「困りましたね……」

こんなに事件が多いと……」

ガチャ……

「……お前たち、俺のいないところで愚痴か？」

突然開かれた扉。

入ってきたのはこの長、刃野だった。

「刃野さん!!!」

二人は立って敬礼をする。

「お前たち……俺は悲しいぞ？」

上司が東京で頑張ってるのに愚痴か？」

「いやいや！俺たちも忙しかったんですって!!」

「それより刃野さん！」

お土産は!？」

生き生きした顔で言う竜とは対照的に、刃野の顔は残念そうだ。

ため息混じりに

「……………んなものはない！」

「「ええー！」」

「子供かつ！」

「じゃあ何しに東京に行ったんですか!？」

「囚人923号と面会したり、年始の事件の初公判に行ったり、色々忙しかったんだよ！」

「「え……………!!」」

いい歳にもかかわらず、二人は情けない声を出した。

うち一人は仮面ライダーというのだから泣けてくる。

「あ……」

あるぞ、土産」

「まじすか!?!」
子供のように食いつく二人。

「マジだ」

すると刃野は二人に背を向けて扉の方を向いた。

「おーい、いいぞー」

ガチャ……

再び扉が開いた。

扉の向こうからやってきたのは……

「失礼します」

「「え？」」

入ってきたのはスーツ姿の女性。

「本日づけで警察庁から風都警察署超常現象捜査課に異動になりま

した、

九条綾です」

九条綾と名乗る女性はピシッと敬礼をした。

「「え？」」

竜と真倉は刃野の方を見る。

「この娘が土産だ。」

敏腕の立派な刑事だぞ！」

二人はもう一度九条の方を見る。

九条はにっこり微笑み

「よろしくお願いします」

「ええええええええええええ!!」

A M 9 : 5 2 - -
左探偵事務所 - -

風都署に新たな刑事がやってきたころ、

翔太郎はヒートメモリを弄りながら机に向かっていった。

「坂下銀次……………金堂……………副社長……………」

坂下……………金堂

副社長？つてなんだ？

わからん！」

「やかましいわ！」

パコーン

頭を叩かれたところでラジオの電源に手を伸ばす。

【本日の風都は晴れ後曇り、洗濯物は朝のうちに干すと良さそうです
すね】

「亜樹子、洗濯物干しとけ」

「ほーい」

亜樹子に指示を出した直後、翔太郎の携帯が鳴った。

「もしもし？」

ん？

ああ、ハイハイ…

行けばいいんだろ？
「たく……」

電話を切るとヒートメモリをポケットに入れる。

そしてソフト帽を被り

「ちょっと出かけてくる」

「どこ行くの？」

「刃さんのとこ」

そのまま事務所を出ていった。

一人残った亜樹子は洗濯物を干して、ソファアーにダイブ。

ゴロゴロしはじめたところで

【園咲若菜の……】

ヒーリングプリンセス!!】

園咲若菜のヒーリングプリンセスが流れ始めた。

久しぶりのように感じるが、若菜はちゃんと仕事していたのだ。

【…%でお送りします！】

それでは今週もオリコン1位のこの曲からスタート！

お聞きください、

仮面シンガーで『Finger on the Trigger』
です。

【ぞぞー！ー！】

「近頃よく流れるわねーこの曲。」

そんなに人気あるのかな？」

新聞を広げ、4コマ漫画に目を通す。

裏のテレビ欄にも目を通して、机の上に置いた。

すると

コンコンッ

誰かが事務所の扉を叩く。

「この控えめなノック……」

まさか……」

亜樹子は身構えて扉の方を向く。

「お邪魔します……」

扉を開けたのは小さな女の子。

まだ小学生くらいの女の子。

「だっしゅあああ！」

「って女の子!?!」

反射的に飛びかかりそうになる亜樹子だが、気合いで身体を抑えた。

「あの……………」

「……………！ ハイハイ、どうしたの!?!」

「呪いのビデオの謎を解いて欲しいんだけど……………」

「……………呪い？」

亜樹子の額から冷や汗が流れた。

AM 10 : 27 - - -

風都警察署 - - -

「んなあに—————!？」

新人!？」

「九条綾です。

えと………確か探偵をやってらっしやるんですよねっ、」

刃野に呼び出された翔太郎の目に映るのは、

新人で美人の九条綾。

「どついつことだ刃さん!？」

刃野の方を向くと、刃野は偉そうにふんぞりかえっていた。

「ふっふっふ……」

彼女は優秀な刑事でな、自らここに志願してきた肝の据わった美人さんだ!」

刃野はサムズアップしながら左目でウィンクをする。

「刃さん……あんな……あんなって人は!!」

血相を変え、刃野の胸ぐらを掴み、

「グッジョブ!!」

涙を流して喜んだ。

「……と、顔合わせはここまでにして……」

これから九条に署の案内するからまた後でな」

「」「もう終わり!?!」「」

いい歳した男たちが充血するくらい驚いている。

「だからまた後でなって言っただろうが!

ほんの一時間だけだ」

「早く終わらせてください!」

むさ苦しい男たちの叫びが響くなか、刃野と九条は出ていった。

ちょうど二人が出ていった時に、翔太郎の携帯が鳴った。

「おっ、亜樹子だ。」

もしもし？

おう。

依頼！？すぐ帰る！」

携帯をポケットに突っ込んでソフト帽を被り直し

「じゃ、お仕事なんで！」

「翔太郎帰るの！？」

「綾ちゃんとのトークは!？」

そう言われた時、翔太郎の表情が歪んだ。

歯をくいしばり翔太郎は

「……………また今度!!」

翔太郎

まさかのリタイア。

男らしく颯爽と飛び出し、助手と依頼人の待つ事務所を目指す。

そして残った二人は

「……どうします？」

「……」

「仕事するか……」

「何事もなかったかのように机にむかった。」

AM 10 : 42 - -

資料室 - -

「……これが……」

刃野と九条は資料室で過去のドーパント事件に目を通していった。

そして九条が見ているのはドーパントの写真。

「それがドーパントだ。

ガイアメモリを人体に挿入することで全く別の神経を繋ぎ、

情報を注ぎ込むことで、特殊な能力を持った化け物に変えちゃう」

「聞いたことはありませんが……」

これが人間の姿ですか？」

「そうだ。

ガイアメモリを破壊された場合、ほとんどが記憶が曖昧になるって
いう保険もかかってやがる。

だからメモリを作っている奴らの足取りが掴めないでいるんだ……」

「だからガイアメモリの犯罪者が起訴されづらいんですね……」

パラパラと資料をめくっていくと、ある写真のところまで手を止めた。

「あの……この真っ黒なのは……」

ドーパントですか？」

刃野も写真を覗き込む。

写真を見て、少し笑うと

「それはな、ドーパントかもしれないが……まあ、だいぶかけ離れた存在だ」

「かけ離れた……存在……？」

「それは仮面ライダー。」

正体不明のこの街のヒーローだ」

数枚の写真には、その仮面ライダーが化け物と格闘している様子が写っている。

「俺たち警察が歯が立たないなか、この仮面ライダーは立ち向かっていった。」

その呼び名はこの街の人たちが付けた名前だ」

「街の………ヒーロー………」

九条の眼には黒い仮面ライダーが輝いて見えた。

AM 10 : 47 - -
左探偵事務所 - -

「へくしよい!!」

「やだ、翔太郎君風邪？」

「……かもな……」

事務所に戻り、盛大にくしゃみをした翔太郎はソファーに腰かける。

ふと、違和感を感じて隣を見た。

隣には知らない女の子が。

「うおおお!？」

「誰だ!？」

「ちょっと!その子依頼人なんだから!！」

「何!？」

女の子は小さく礼をした。
その様子を見て咳払いをする。

「あー……依頼人なんだって？」

お名前は?。」

「ゴンっていいいます」

「ゴン?」

なんでゴン?。」

「大介が付けてくれたの」

「大介?」

誰だ?。」

「探偵さんに探してもらいたい人」

「どづいつ意味?。」

意味不明な発言に首を傾げる翔太郎。

翔太郎の真似をしてゴンも首を傾げる。

「なんでも、その大介って人が行方不明らしいのよ！」

「…亜樹子、説明するのはいいが、顔が近い！」

「おっと、ごめんなさい！」

「で、行方不明だって？」

「それなんだけど、」

「ゴンちゃん、さっきのアレ見せたげて」

「亜樹子に促されてゴンは一枚のカードを取り出し、テーブルに置いた。」

「……これは……」

レンタルビデオ…の会員カード……?」

カードを手に取り裏表をチェックする。

「これが行方不明と何の関係があんだ?」

「そのお店には

呪いのビデオがあるらしいのよ!」

「..?」

翔太郎はすつとんきょうな発言にすつとんきょうな声をあげた。

まあ、当然である。

「呪いのビデオ？」

どこのレンタルビデオ店にもそんなタイトルのビデオあるだろ？」

「それが全然違うんだって!!」

ね、ゴンちゃん!!」

「うん。全然違うの」

「違っつて何が？」

「本物の呪いがかかっているの」

その一言に、名探偵の表情が変わった。

「本物の……呪いだと？」

「うん。ビデオを見た人たちが行方不明になっちゃった」

「興味湧いた!？」

「ああ。」

「詳しく聞きたいな……」

「それじゃ、そのレンタルビデオ店に行かない!？」

「という流れで……」

AM11:41 - - -
レンタルビデオ店「ディスクビル」 - - -

「ここが件のビデオ店か……」
三人はレンタルビデオ店の前にいる。

小さめのレンタルビデオ店だ。

「このホラーのコーナーにあるのか？」

「うん。大介のお客さんがここって言うってたし、

大介もここで借りていったの」

「お客さん？」

「大介はメイクでお金稼いでるんだけど、
その中のお客さんが噂を覚えてくれたの」

「へえ………」

それで、ビデオのタイトルは？」

「わかんない」

「はあ？」

ゴンのまさかのわかんない発言に大声をあげた。
すかさず亜樹子がスリッパで翔太郎を叩く。

「ちょっと！相手は子供だつて！！」

それに事情があるんだから！！」

「事情だと？」

「うん。お客さんもビデオのタイトルがわからなくて、大介は適当に借りたの。」

それが当たりだったみたいで、ビデオを見てる途中にトイレに行つて戻ったら大介がいなくて……」

「それから行方不明か……」

とりあえず翔太郎は店に入る。

「いらっしやいませー」

店内は特筆するところはない。

少し店員の態度が気になるくらいだ。

とにかく、ホラーのコーナーに行かないことには何も始まらない。

まっすぐホラーのコーナーを目指す。

かと思いきや

「コラッ！！翔太郎君どこ行くねん！

ゴンちゃんが見てんねんぞ！」

亜樹子がゴンの目を覆いながら翔太郎の首根っこを掴んだ。

翔太郎が何処に行こうとしていたかはご想像にお任せしたい。

気をとりなおしてホラーのコーナーへ。

「とりあえず……その大介ってのはどのビデオを借りたんだ？」

「わかんない」

またしてもわからない発言。

これにはさすがにまいった様子の翔太郎。

「またわかんないかよ……」

覚えてないのか？」

「だって大介が適当に三本くらい選んだ中であつたから……」

「……………店員に聞くか……」

「すいませーん！」

「は……い」

やる気のない返事と共に若い男性店員がやってきた。

「どっかしましたか？」

「この店で噂になってる呪いのビデオってどれだ？」

「翔太郎君、直球すぎ……」

翔太郎の直球すぎる質問に店員はこう答えた。

「どれでもないですよ」

「」「」「はい？」「」

三人は店員の発言に目を丸くした。

「ああ、言い方不味かったかな……」

「どれでもないっていつか、どれでもないんですよ」

「「「は?」「」」

やっぱり目が丸くなる。

「あれでしょ?人が居なくなるっていうビデオ。」

居なくなった人たちってバラバラのビデオ借りてたんですよ」

「ば…バラバラ!？」

「はい。確か……8人くらいかな…」

全然被ってないんですよ」

淡々と答える店員の前で三人はずっと目を丸くしている。

「一体どういづことなのか。」

この謎を解こうと思いを巡らす翔太郎だったが、

「コラッ！！神代君、サボっちゃダメよ！」

男性店員の後ろから今度は女性店員が現れた。

「あっ！岬さんすいません！！！」

女性店員に怒られた男性店員は慌ててレジへ戻っていく。

この女性の方が先輩らしい。

「あの！警察の方ですか？」

行方不明の事件なら何も知らないって言ったじゃないですか！」

「いや…警察じゃないんだが……」

「警察じゃないなら、ビデオ借りるか帰るか決めてください!！」

ものすごい剣幕に翔太郎は圧倒された。

睨まれつつも翔太郎はビデオを適当に手に取り

「これ………お願いします……」

「借りるなら会員手続きが必要ですけど?」

会員手続きを済ませ、三人は店を出た。

長い時間いたわけではないが、疲労感が尋常ではない。

「怖かったね……」

「うん……」

「トラウマになってもいいくらいだ……」

とほとぼ歩き、借りたビデオを確認する。

『恐怖！廃校に潜む悪霊』

「翔太郎君……まさかそれ見るの？」

「見ないと謎が解けないかもしれないだろ……」

「本当に謎解けるかな……」

ぼやきながら三人は事務所に向かう。

が、翔太郎は足を止めた。

「とてろで、ゴンちゃんは帰らないのか？」

「えっどうして？」

「これからビデオ見て、ゴンちゃんも行方不明になったら大変だろ？」

「でも……………」

「大介ってのは俺たちが見つけてやる。」

だから待っていてくれないか？」

ゴンはしばらく黙って考え、小さく頷いた。

「そうと決まれば亜樹子！」

ゴンちゃん送ってやれ」

「了解！」

PM 1:22 - - -

園咲家『開発実験室』 - - -

豪邸の地下、開発実験室で来人と霧彦は実験をしている。

実際は来人一人で実験をしている。

「最近の冴子姉さんの調子はどう？」

「向こうの方が支援についてもう一度交渉したいって言い出してね

……

冴子の胃がどんちゃん騒ぎさ」

「なかなかユニークな表現だね…

もう一度交渉ってことはあの人に会わないといけないんじゃない？」

「だからどんちゃん騒ぎなのさ」

冴子の話題から次は若菜の話題に。

「若菜ちゃんは…最近我真面目に仕事してるみたいだね。

気になる人に料理渡してからかな？」

「それ…くらいの頃からだね。

いや〜、予想外のことが多い」

「本棚の予測でも若菜ちゃんは予想外なことが多いのか…」
すると来人は手を振り

「いやいや、若菜姉さんじゃないんだよ」

「ギョギョギョと…」

「ま、それは追々……」

そう言うと来人は工具を手に取り、ロストドライバーのようなものを弄り始める。

「新しいドライバーかい？」

噂の仮面ライダーに対抗するために開発を？」

「いやいや、対抗なんてしないさ。」

もっと面倒な奴に対抗するんだよ」

P M 4 : 0 2 - -
左探偵事務所 - -

「おせえな亜樹子のやつ……」

翔太郎は一人、ソファで寝っ転がる。

ゴンを送っていった亜樹子だが、帰ってこない。

「……………先に見るか……………」

一向に帰ってこない亜樹子を待つのも限界である。

翔太郎は借りたビデオをケースから取り出す。

言い忘れたが、ビデオといってもDVDだ。

そして手早くプレーヤーに入れる。

「さてさて……………このビデオは当たりかハズレか……………」

リモコンの再生ボタンを押す。

すぐに画面は切り替わった。

念のため、ビデオのケースを確認する。

「廃校か……」

そついや中学、高校は刃さんにしょっぱいかれてばっかだったな……」

そんな昔のことを思い出したが、意識を画面に向ける。

「……あれ？」

画面に映るのは薄暗い森の中。

映像を撮るカメラは森の中を疾走していた。

「これ………廃校のビデオじゃなかったっけ？」

ケースを確認するとやっぱり廃校が舞台のビデオ。

しかし画面は森の中。

「どうなってんだ？」

パッケージに騙されたか？」

その時

「ただいまー」

下の階から亜樹子の声がした。

ようやく帰ってきたようだ。

「まったく……遅いんだよ……」

「一体何をして」

「遅くなってゴメン！」

勢いよく事務所の扉を開ける亜樹子。

が、

「あれ？翔太郎君？」

扉を開けた亜樹子が入ると翔太郎の姿は無かった。

「……………なんでだ？」

亜樹子が扉を開ける

そう思つて翔太郎が扉の方を見ると

何故か翔太郎は森の中にいた。

「……………なんでだ？」

何で森の中に……………」

周囲を見回すと辺りは薄暗い。

まるで先ほどのビデオの舞台のようだ。

「……………って、まさか……………」

もう一度周りを確認する。

「ビデオの中!?!?」

そう。

翔太郎は何故か先ほどのビデオの世界にいた。

「どうなってんだ！？なんでビデオの中に！？」

意味のわからない状態に慌てふためく翔太郎。

そんな翔太郎の目に、一つの井戸が映った。

「……………なんだあれ？」

古びた井戸で、水を汲み上げるバケツ、滑車が設置してある。

何も無い森の中に不自然だが、何も無いので調べることに。

「うーん……変なところはないな……」

でも見たことある気が……」

井戸を調べていると

「……………ん？」

何かを感じとり、翔太郎は井戸を覗きこむ。

井戸は深く、底が真っ暗で見えない。

「

……て

……てくれ……」

「……人の声……？」

深い井戸の底から微かに人の声が聞こえる。

「おい！誰がいるのかー！？」

「

………けてーー！！」

今度ははっきりと人の声が聞こえた。

翔太郎は汲み上げるためのバケツを掴み、ロープがちゃんとくくりつけられているか確認する。

確認するとバケツとロープを持ったまま、深い井戸の中へダイブした。

「……おおおおおおお！！」

バシャアアアア！！

飛び込んであっという間に底に着いた。

深さは多分10mほど。

底には水が足首が浸かる程しかない。

そして井戸の中は意外と広い。

「はあ……意外と深いな……」

真っ暗な中では何も見えない。

が、誰かの話し声が聞こえる。

「誰かいるのか!？」

「あんた……助けに来てくれたのか？」

「やっと出れる……」

とりあえず持っていた携帯電話を開く。

液晶の明かりは翔太郎と数人の男女を照らした。

「……あんたら何をしてんだ？」

「良かった!!
ついに出来るぞ!!」

「閉じ込められてたのよ私達!!」

中の人たちは歓喜の声をあげた。

「まてまて！」

閉じ込められてたって…誰に？」

「化け物だよ！」

ビデオを見てたら森の中で化け物に捕まって…」

ビデオ？

とらとらとら……

「あんたら……行方不明の人たちか？」

「どっせらそいつらじい……」

「ビデオの中にいたのか……」

探しても見つからないわけだ……

そうだ。大介って人いるか!？」

「あ、……俺のことか？」

声の方に携帯電話の明かりを向けると、若い男が手を挙げていた。

「お、いたいた。

俺はゴンちゃんの依頼であんたを探しに来たんだ」

「ゴンが？」

あいつ……」

すると突然、一人の男が叫んだ。

「おい！あれ！」

男は井戸の上を指差していた。

全員がその方向を見ると何かがちちらを見下ろしている。

「なんだあれ？」

「あいつだ………」

あの化け物だ！」

男が叫ぶと同時にそいつは底に飛び降りた。

バシヤアア！

「「「うわあああああ！？」」「」

全員がそいつの登場に喚く。

ただ一人、翔太郎だけは落ち着いていた。

「なんだお前は……？」

とにかく顔くらい見せろよ」

携帯の画面を向ける。

照らされたのは全身に苔がついていて、機械のような手足の化け物。

「トロー……パント？」

なのか？

なんでビデオの中まで…」

いきなり化け物は翔太郎に攻撃を仕掛けてきた。

「うおっとー！」

暗闇の中でも綺麗に攻撃を避ける。

さらに化け物は攻撃を繰り返すが翔太郎はあっさりと避けた。

「全員バケツのロープ伝って逃げろ！！」

こいつは俺が引き付ける！！

………つて…あれ？」

翔太郎が振り返ると誰もいない。

見上げると全員すでにロープを掴んで全力で逃げている。

「行動力があるねえ……」

まあ集中できるからいいか」

『ジョーカー!!』

「いくぜ？」

変身………」

ジョーカーメモリを装着したロストドライバーに挿す。

井戸の暗闇を青白い光が包んだ。

Vに潜むもの／美人がやってきた（後書き）

皆さまお久しぶりです。

受験が終わり時間ができたはずなのに執筆が進みません。

なんなんでしょうねこの感じ。

誰か執筆が進む方法を教えてくださいm（――）m

Vに潜むもの／メモリの叫び（前書き）

今回の依頼

依頼人

ゴン（女性）

依頼内容

呪いのビデオの謎を解いて欲しい

メモ

呪いのビデオは不特定という訳のわからん状況だったが、いつの間にかビデオの中。

そして目の前には井戸。

あれ？これってあの映画！？

翔太郎

Vに潜むもの／メモリの叫び

5月1日 . . .

『ジョーカー!!』

???:???. . .

「くせえ?」

変身……」

???. . .

青白い光を突き破り、仮面ライダージョーカーが姿を現す。

「……さて、色々話を聞かせてもらおうか……」

腕をぐるぐる回して身構える。と、化け物はジョーカーに飛びかかった。

「なっ……」

いきなりかよ!？」

この不意打ちも避けるジョーカーに、さらに攻撃を繰り返す化け物。

暗闇ではほとんど見えないが高い戦闘技術と持ち前の勘で避けた。

「ちっ……… 問答無用ってか？

なら………」

化け物が突き出す拳を叩き落とすと、カウンターにアッパーを打ち

込む。

「まだまだいくぜ……」

暗闇でも的確に、化け物の顔面にパンチを放つ。

攻撃の手緩めず、反撃の隙を与えない。

「ふんっ！」

ドシヤアア！

猛攻に耐えきれなくなった化け物は水面に叩きつけられた。

「どつだ？」

ちったあ効いたろ？

そろそろなんか話してくれねえかな……」

ジョーカーが化け物に近寄る。

その時、化け物が体を起こして井戸の水をジョーカーの顔に浴びせた。

「うわっ!?!」

ジョーカーが怯んだ隙に化け物は思い切り体当たりで吹き飛ばした。

「ぐおっ!?!」

井戸の壁に激突し、よろめいたところに化け物の回し蹴りがぶつけられる。

今度はジョーカーが水面に叩きつけられた。

「……………あー……………」

くっそ……………」

なんとか立ち上がるが、またもや水をかけてくる。

「なめてんのか!?!」

頭に血が昇り、思わず攻撃が大振りになる。

先ほどとは違って攻撃が当たらなくなっていた。

「くそ!おちよくりやがって……………!!」

この状況を打開するためにジョーカーはもう一つのメモリを取り出す。

「水遊びはもう終わりだ……………」

『ヒートー！』

赤いメモリをドライバーに挿し込むと、

ジョーカーの全身を赤い炎が包む。

そして足下から煙が昇り始めた。

「うううおおおおあー！」

雄叫びをあげると同時に井戸の水がボコボコと音をたてて蒸発していく。

ジョーカーの体はまるで熱された鉄のように赤くなる。

「もう小細工はできねえな……」

そう言うと化け物の顔面を思い切り殴った。

暗闇の井戸はジョーカーの炎で明るく照らされている。

視認できるようになり、冷静さを取り戻す。

手数で化け物を上回り、ヒートメモリの力で底上げされた攻撃力で
圧倒した。

「……………どうだ？なんか吐く気になったか？」

「……………イデ……………」

沈黙していた化け物の口から小さな声が漏れる。

「……………あ？」

「……………イカナイデ！」

大きな声でそう言うと再びジョーカーに飛びかかった。

それを落ち着いて避ける。

「意味がよくわからねえが……」

まずは暴走をとめなきゃな……」

ドライバーのヒートメモリをマキシマムスロットに挿し込む。

『ヒート……マキシマムドライブ……！』

「こいつはとっておきだ……」

ジョーカーの右足に全身の炎が集中する。

そして井戸の壁を蹴り、化け物の頭上に飛び上がった。

「ライダーグレネード……！」

赤く燃え上がる右足を化け物の胸に押しつける。

そのまま枯れた井戸の底にひびがはいるくらいに叩きつけた。

ドオオオオン！！

井戸を凄まじい業火が包む。

先ほどの行方不明者たちが逃げていなければ大惨事だったろう。

化け物は井戸の底にめり込み、ピクリとも動かなくなった。

「……やり過ぎたかな……」

倒れた化け物を見つめていると、その胸からガイアメモリが飛び出
した。

宙を舞い、音をたてて弾ける。

「……やっぱり、ドーパントだったか……」

砕けたメモリの破片を拾い、握りしめる。

が、異変を感じてもう一度破片を確認した。

「……なんだ？」

メモリの破片が徐々に歪んでいく。

メモリだけではない。

井戸の中が歪み始めている。

「これは……メモリブレイクの影響か……？」

メモリの力で構成されてたなら……」

突然、ジョーカーは暗闇に飛ばされる。

体を思うように動かせず、ただただ暗闇の中をさま迷う。

「くっ……次から次へと……」

何も見えない、何も聞こえない暗闇。

さ迷ううちに、やがて一筋の光が見えた。

次の瞬間

ブツン！

ガシヤアアン！！

「うおおお！？」

光が見えたかと思うと、勢いよく何かにぶつかった。

「うええ！？なにこの状況！？
あたし、聞いてない！！」

聞き覚えのある声。

見覚えのある景色。

「……………ここは……………」

左探偵事務所……………

「……………帰ってこれたか……………」

ゆっくり起き上がると、テーブルがジョーカーの突っ込んだ衝撃で真っ二つに。

「…………ちつ。」

「買い替えるか…………」

無事に帰ってこれたところで変身を解除する。

そこへ緑色のスリッパが飛んできた。

パコーーン

「あいたっ」

「なにしてんねん！」

翔太郎君が行方不明になったと思ったらジョーカーになってテープ
ル割るし！！

「こっちは心配してんねんぞ!?!」

「心配してる奴はスリッパで叩いたりしねえっての!」

「翔太郎、落ち着いて……」

「落ち着いてられるか!

俺がどんな目にあつてたか……

で、なんで竜がいるんだよ!？」

翔太郎がビデオの中から帰ってきた時からいたのだが……

気づいてもらえてなかったようだ。

「いや、お前がいなくなつたつて亜樹子ちゃんから電話があつただよ」
「だよ」

「亜樹子が？」

亜樹子の方を見ると、黒いソフト帽を持って半べそかいている。

「いつも被ってる帽子置いていなくなってたから心配してたのに…」

そこで初めて自分が帽子を被っていないことに気がついた。

「あれ？帽子忘れてたのか？」

あー……いきなりビデオの中だったしな……」

「ビデオの？」

「中？」

「……………なんだ、そのイタイ人を見る目は？」

5月2日

AM 10 : 00

風都警察署

「えー……」

それじゃ皆さんはビデオの中にいた、とらひじやんごころのドク？」

「「「「はー…」」」」

刑事照井竜は頭を抱えていた。

何故なら、昨日親友が

「俺はビデオの中にいた。

マジだぞ？」

というイタイ発言をして、現在は複数の人物が

「ビデオの中に閉じ込められてました。

マジですよ？」

と押し掛けてきたのだ。

そして親友は今、隣で勝ち誇ったような顔をしている。

「な？俺の言った通りだろ？」

認めたくはないが、認めざるを得ない。

「つまり、この一連の事件にはそのドーパントが絡んでいたんだな？」

話をする刃野とホワイトボードを持ってくる真倉と九条。

事件の内容を分かりやすくボードにまとめていく。

「えーと、事の発端は3週間程前に島樹さん(52)がビデオを借りて、

ドーパントに引きずり込まれたことから。

その直後に青木さん(30)がドーパントに引きずり込まれた」

「はい、その通りです」

「だいたいこんな感じで1週間程前に風間さん(23)が引きずり込まれた。

で、昨日は翔太郎が引きずり込まれた」

「はい、その通りです」「

必死にメモをとる九条だが、隣の真倉と竜はうんざりした様子。

そんな二人を見て翔太郎が

「おいおい、こんなに行方不明事件が起きてたのにお前ら知らなかったのか？」

「他の課のヤマだったんですう！」

「静かにしろ照井！」

で、そのドーパントはなんの目的で皆さんを引きずり込んだので

？」

刃野の問いかけに全員が顔を見合わせる。

そして全員が首を傾げる。

「「「なんででしょう?」「」「」

「いや、我々にきかれても……」

考えてみると不思議すぎることである。

ドーパントが人を引きずり込んで何もしない。

意味もなくこんな事件を起こすなど、正直あり得ない。

「あ、そつだ!」

被害者の一人が手を挙げた。

「俺たちのいた井戸なんだけどよお、なんか来たことがある気がするんだよな」

「以前来たことがあるんですか？」

そういえば、翔太郎も井戸に既視感を感じていた。

「来たことあるって言われてもな……」

それは他の6人もですか？」

しかし、他の被害者は首を縦に振らなかった。

九条は必死にメモをとり、竜と真倉はボードにまとめていく。

「7人中1人が来たことがある……と」

そこで初めて翔太郎は気がついた。

「……待て、被害者が7人だと？」

「何を言い出すんだ翔太郎？」

数えてみるよ」

竜に促されて被害者を数えてみると確かに7人。

「7人だけど……行方不明者は8人じゃなかったか？」

そう。

ビデオ店の店員は8人と言っていた。

この場にいるのは7人。

数が一致しない。

翔太郎の発言を受けて、九条は手帳を捲る。

「……確かに……探偵さんの言う通り、行方不明者は8人となっています」

「それじゃあと1人は？」

被害者たちもお互いの顔を見て確認する。

「いや、これで全員です」

「間違いないですよ？」

刃野はボードの前に立っってもう一度考えはじめた。

「翔太郎、お前も引きずり込まれたんだよな？」

「まあ…そうだけど……」

「なんかわかんねえか？」

「うーん……」

俺も井戸は見たことある気がするんだよな……」

「ドーパントとどいつきあったんだろ？」

なんか覚えてねえか？」

必死に戦闘の事を思い出す。

確かドーパントに水かけられて

怒って

ヒートメモリで逆転して

『……………イカナイデ！』

「あ……………」

「どうだ、思い出したか？」

「ドーパントは俺に『行かないで』って言ったのか……」

「『行かないで？』『』」

その場にいた全員が首を傾げる。

「あのドーパントは俺たちに出て行って欲しくなかったんだ！」

「なんでだよ？」

「それは……」

翔太郎もボードの前に立つ。

書かれていることを一つ一つ確認する。

が、

「……………わかんねえ……………」

全員がガツクリと肩を落とした。

その中で九条が

「普通に考えて……………寂しかったのでは？」

「ドーパントが？」

「なんで寂しがるんだよ……」

新人の発言にうんざりした様子で反論する先輩刑事二人。

考えもしないで新人に厳しく当たってどうするというのが。

「寂しかった……」

翔太郎はそう呟くと

「九条さん、残った一人の行方不明者はどんな人だ？」

「え？」

えっと……

野原泰子さん（17）です…ね」

「女性で十代……だとしたら……」

次第に翔太郎の頭の中で何かが繋がっていく。

「……おい、翔太郎？」

どうかしたか…？」

急に被害者たちの方を向き

「さっき井戸の辺りに見覚えがあるって言った人は！？」

「お、俺だけど……」

「あんたどの辺に住んでる!？」

「うえ？

新芽町五丁目の隅っこだけどよぉ……」

その発言を聞いて刃野が

「真倉!地図持ってこい!！」

「え?あ、はい、ただいま!！」

猛スピードで地図を取りに行き、猛スピードで帰ってきた。

そしてあわただしく地図を広げる。

「どの辺りだ!？」

「えー……この辺りだ」

男性が指差したのは山のふもとの住宅街。

翔太郎と刃野は確信した。

「ってことは……」

「この近くの山の中か…」

その辺は俺が子供の時によく行ってた山だ」

刃野はそれを確認して地図をたたみ、

「皆さん、ご協力ありがとうございました!!」

このあとは失踪課の方に任せますので!」

「どうかしたんですか刃野さん?」

「お出かけた!!」

「「「ああ、いってらっしゃい」「」」

部下三人が手を振る。

「バカ!お前らも行くんだよ!!」

P M 0 : 3 6 - - -
新芽町五丁目 - - -

翔太郎たちは山の中を散策していた。

しかし、刃野の部下たちは何かなんだかわかっていないらしい。

「翔太郎、そろそろ何をしているか教えてくれよ……」

「ええ！？さっきの話の流れでわかんねえのか！？」

「いいから話せ探偵！」

九条なんてヒールで山登ってんだぞ!!」

「なんでヒールなんだよ!?!」

「いじめんなさい……急いでたので……」

「うわあ……」

今の超色っばい……」

「マツキーうるせえ!!」

話を戻して……

「早い話、俺たちの見た井戸はおそらくこの山にある」

「なんで自信持つて言える？」

「俺とあの男性は井戸を見るのは初めてじゃなかった。

辺りは木に囲まれていた。

つまり風都の山のどこかだ。

で、あの男性の家の近くには山。

当然この山が怪しい」

「……でも、近所だったらはっきり覚えてるんじゃない？」

「はっきり覚えてないということは車じゃ簡単に来れない山奥ってことだ。」

山奥なんてよっぽどのがないと来ないし……」

五人はどんどん突き進む。

途中、九条のヒールが折れて転ぶというおいしいイベントが起きたが

下らない内容なので割愛させていただこう。

一時間後 . . .

「だいぶ登ったな……」

木が生い茂り、太陽の光を遮るため辺りは薄暗い。

「本当にあるのか？井戸なんて……」

「井戸なんて？

あるさ、井戸なら。

ほら」

先頭に行く刃野は指差した。

その先には……

「あ…………井戸だ」

「本当にあつたよ…………」

五人は走って井戸の下へ向かう。

「間違いねえ…………」

この井戸だ。水汲みのバケツと滑車もあるし…………」

五人は揃って井戸を覗き込む。

「…………何も見えないな……」

「入れば何かがあるかわかるさ……」

そう言うと刃野と翔太郎はロープを降ろして、井戸の底へ降りていく。

真倉と竜、九条は懐中電灯で二人を照らす。

「刃野さん大丈夫ですか……？」

「……………案の定だ」

「ああ。やっぱりこんなことになってたな……………」

二人が底で見たもの。

それは女性の遺体。

時間が経っていたためか、白骨化が進んでいた。

「おい、あつたぞ翔太郎」

刃野は女性の手を指差す。

そこには砕けたガイアメモリの破片があった。

「……この街には不思議が溢れてるが……」

死人がガイアメモリを使うのは初めてだな……」

「死んでるのに誰にも見つけてもらえないままで、

一人でいるのが辛くなっちまったのかもな……」

このあとすぐに鑑識などの応援が到着。

遺体は引き上げられ、行方不明の最後の一人と断定。

後の捜査で恋人であった二十歳の男性を逮捕。

些細なことで喧嘩し、そのまま誤って殺害。

遺体を隠すために井戸の中へ投げ入れたという。

すでに亡くなっているのに関わらず、ガイアメモリが起動し、

その寂しさがビデオに宿り続けたと翔太郎は推測する。

5月9日 . . .

P M 2 : 1 1 . . .

園咲家『開発実験室』 . . .

「……………で？」

「この新聞の記事がどうかしたのかい？」

再び園咲家。

やはり霧彦と来人の二人。

しかし、霧彦は鼻をつまんでいて、来人はマスクをしている。

「その記事は先日起きた連続行方不明事件の記事さ」

「この記事が来人君の実験と何の関係が？」

来人は今、二人の男性の頭や腹部などを切り開いている。

二人の男性は所々腐食している。

「その行方不明事件とは、

すでに死んだ人間が死の間際にガイアメモリを使用し、直後に死亡したもののメモリの力で事件を起こした……ということだよ」

「少し分かりにくいね……」

「死亡した人間がガイアメモリの力で魂を他の物へ憑依させた、だと分かりやすいかい？」

来人はメスをトレイに置き

「メモリの名はヴィジョン。

ヴィジョンメモリは使用した死者の最後の光景を見せ、その光景の中へ人を引きずりこんでいた……」

無論、本来はそんな効果じゃなかったはずさ」

「魂を憑依……か……」

大変おかしなことが起きたものだね」

「そして僕が行っているのは魂の憑依の実験だよ。」

これは僕が長年求め続けた現象なのさ」

「だから必死に実験を……」

来人はマスクを外し、にっこりと微笑む。

「で、義兄さんには被検体を二人寄越して欲しいんだけど……」

「まだ必要なのかい？」

まあ、構わないが……

「ついでかい？」

霧彦は机の上の、来人のロストドライバーとサイクロンメモリを手に取る。

「君にはこの最強の力があるのに、何故まだ力を求める？」

そして実験の男性の腰を指差し

「何故あのドライバーを作り続ける？」

霧彦の質問に来人は答えない。

答えられない。

俯いていると

「今答えられないなら、いつもみたいに追々でいいさ」

霧彦は爽やかに笑う。

「答えられる時になったら答えてくれたまえ」

爽やかに笑いながら霧彦は実験室を出ていった。

一人になった来人は、二人の男性に巻かれたドライバーを見つめる。

「追々……………か。」

急がなければ……………

奴らはもう動き始めている……………

僕らが終わる前に……………完成を……………」

視線をサイクロンメモリに移す。

「魂の憑依……………精神の転移……………」

何が足りない!?!?」

机に思い切り拳を叩きつけた。

ロストドライバーが机から落ち、床を転がる。

「答えはすぐそこなのに……何が足りないんだ……」

左翔太郎……彼の方も急がねば……」

来人は黒い大きな携帯電話を取り出し、番号を打つ。

そして携帯に

「E-34番、八列目を開け」

すると地響きを立てて、緑色の井戸の周りの床が開き沢山の棚が現れた。

そのうちの一つの棚の戸が開く。

「そろそろ……君の出番だ」

戸の中からSと書かれた黒いガイアメモリを取り出した。

若菜の部屋 . . .

「若菜ー？入るわよー？」

部屋の扉を開けたのは長女冴子。

中にはぐったりした次女若菜。

「どっしたの？」

この間まで元気だったじゃない」

冴子は若菜の隣に座る。

「何があつたの？」

「何もない……」

「じゃあ何で元気がないの？」

「何もなかったからよー！」

若菜に代わって説明しよう。

実は若菜はここ数日、左探偵事務所近くを訪れていた。

事務所に行こうと勇気が出ず、

いざ勇気が出ると誰もいない。

そんな自分に腹が立っていたのだ。

「……………まあ、タイミングが悪かっただけよ。ね？

だからめげずに何度でも行けばいいでしょ？」

涙を浮かべて頷く若菜。

そんな若菜の携帯が鳴る。

「出なさい。お仕事の電話でしょ？」

「……………」

画面を見るとマネージャーの城戸からだ。

「……………もしもし？」

はい。

はい。

フーティックアイドルの審査員？

わかりました。それじゃ……」

「ねえ、フーティックアイドルってあのフーティックアイドル？」

「うん。審査員だって」

「よかったじゃない！
頑張ってやりなさいよー!!」

いつ見ても微笑ましい姉妹愛。

この仕事が、若菜を再びあの男に巡り合わせる。

そんなことを予期出来ていない父、琉兵衛は微笑んで二人を見守っていた。

後に琉兵衛が娘の部屋を覗いていたとメイドが文音に報告し、

文音にじっぴどく怒られることも予期出来ていない。

Vに潜むもの／メモリの叫び（後書き）

なんか内容が雑な感じに……

やはりピッチ上げるとこんな感じになるのか……

いや、いつもこんな感じか？

内容の雑さは置いといて、ここで宣伝……！

この度、もう一つ小説を書きました。

やはり仮面ライダーの小説で、原作ほぼ無視のオリジナル設定です。

1日で書いたので今回の話より雑です。

そして見切り発車なので物語の最後はまだ曖昧です。

それでもいいよっていう優しい方のみご覧ください。

ちゃんとこっちも更新していきます!!

この街のKノアイドルを生む番組（前書き）

久しぶりの更新です。

が、

僕は一体なにがしたかったんでしょつか……

この街のKノアイドルを生む番組

5月16日 - - -

『……………ザー……………』

……………う面へ逃走中。

繰り返す。強盗犯は風花町から波樹町方面へ逃走中。

至急応援をお願いします』

AM 2 : 1 0 - - -

『こちらB班、強盗犯を発見。近くの立体駐車場に逃げ込みました。

追跡を続行します』

波樹町一丁目 - - -

街が眠りにつき、誰も目を醒まさない真夜中。

警察に安息の時はない。

今も強盗犯を追跡していた。

「よし、追い詰めるが……」

あくまでも慎重にな

「わかりました。」

「気をつけてくださいね」

二人の警官は二手に別れ、立体駐車場を登っていく。

「……………この階はない……………」

「なら、犯人は上か……………」

音をたてずにゆっくりと、上の階を目指す。

「ぎゃああああ!?!」

突然、上の階から男の絶叫が響いた。

「!?!? なんだ!?!」

警官はあわてて階段を昇る。

「やめろお!!」

やめてくれええ!」

なおも男の絶叫がする。

警官が銃を構えて飛び出す。

「!？」

どういう………ことだ？」

警官の前に、強盗犯が額から血を流して倒れている。

「何があつた!？」

警官が強盗犯に駆け寄ると、強盗犯は警官の腕を掴んだ。

とりあえずは生きている。

「助けてくれ………」

「なんだ！？何があつたんだ！？」

強盗犯は震えながら

「やられた……いきなり足を……」

見ると足からも大量に出血している。

「やられたって誰にやられた！？」

「……………死神だ……」

「死神？」

「マント着けた死神だ！」

助けてくれお巡りさん……

死にたくねえよお……」

「何があつたんですか!？」

もう一人の警官が到着。

「救急車を呼んでくれ!

大至急だ!！」

「……………!

わかりました!！」

救急車を呼んでいるうちに警官は辺りを調べる。

まだ「死神」とやらが潜んでいるかもしれない。

そう思うと自然に銃を握る手に力が入る。

しかし「死神」の姿は見当たらない。

「逃げたのか？」

いや、そもそも死神など……」

踵を返し、仲間と強盗犯のもとへ戻ろうとする。

その時、警官の目にあるものが映った。

立体駐車場の隣のビル。

ビルの屋上に

マントをたなびかせ、大きな鎌を持つ何かがいた。

「なっ………!?!」

あれが………死神か!?!」

鎌は月光を反射し、怪しく輝く。

ビルと立体駐車場の距離は5mは越えている。

普通の人間では飛び移ることなどできない。

「何者なんだあいつは……!?!」

やがて死神はビルから飛び降り、姿を消した。

5月16日 - - -

AM 10:22 - - -

左探偵事務所 - - -

「聞いて翔ちゃん!!」

「……なんだ朝から……」

「何そのリアクション!?!」

朝からはしゃぐのは女子高生でありながら情報屋のクイーンとエリザベス。

何故二人は久しぶりの出番ではしゃいでいるのか？

「私たち、フーティックアイドルの生放送に出るんだよ!!」

「……………で？」

翔太郎は冷めた顔をしている。

二人のはしゃぐ理由はテレビ番組の出演が決定したからである。

「フーティックアイドルだよ!？」

「私たち次勝ったらデビューだよ!？」

フーティックアイドル。

それは観客と審査員の前で自分の歌を披露し、採点してもらう。

そしてその回で見事トップなら勝ち抜きということで次回も出演。

数回勝ち抜けば晴れてCDデビューできるといふ番組だ。

デビューを夢見て老若男女が出演の応募をしている。

その番組に二人は生放送の回で出演が決まったというのだ。

しかも次勝てばデビュー！。

興奮するのも無理もない。

「いや……わかったけど、俺にどうしろと？」

「翔ちゃんには是非とも応援に来て欲しいの！」

「ヤだよ」

驚くほど淡白な顔で

驚くほど無機質な声で即答。

「なんで来てくんないの!?!」

「なんで行かないといけないんだよ!?!」

「小学生の頃から面倒みてあげてたじゃない!」

「面倒みてやってたのは俺の方だろうが!?!」

「もういいよ!」

竜くんに来てもらうもん!?!」

そう言うと二人は勢いよく事務所を飛び出していった。

「……………で、なんでお前は隠れてんだ?」

翔太郎はソファアの裏に潜んでいた亜樹子を引っ張りだした。

「いやあ……あの二人に捕まったらなかなか解放されないもんで……」

「何の話だ？」

「カラオケの話……」

しょうもない件は置いといて、

「翔太郎君、なんで行かないの？」

生放送って確か今日でしょ？

何も予定ないじゃん」

「予定はある……」

「嘘だあ〜！」

依頼人も来ないし暇じゃん!！」

「予定あるって言ったらあるんだよ!！」

掛けてあるソフト帽を被り、勢いよく事務所を飛び出していった。

「もう、なんなのよ！」

竜くん誘って応援に行こうと……」

そう言って亜樹子も勢いよく事務所を飛び出した。

AM10:43 - -

園咲家 - - -

「ほう。フーティックアイドルの審査員をやるのか」

愛猫ミックを抱き抱えて琉兵衛は微笑む。

すでにそのことは知っているはずだが、初めて聞いたような顔をしている。

「若菜つたら……リアクションが薄いのよ……」

姉、冴子は心配そうに本日のテレビ欄を眺める。

ふと、琉兵衛の方を見ると額に痣、頬に絆創膏をつけている。

なぜ彼は怪我をしているのかは、前回のお話を読むとわかるが、

奥さんにしばかれたのだ。

しかし、長いこと一緒にいる冴子にはだいたい察しがつくので敢えて触れない。

「あの子の思い入れのある番組だって言うのに……」

「若菜にも思うところがあるんだろう。」

なあミック？」

「ミ……」

琉兵衛の腕の中でミックは愛くるしい表情を見せる。

よく見るとミックの首に女性用のネックレスが。

「……………おや？」

これは……………若菜のか？

何故お前が身に付けとるんだ？」

「……………」

「……………」

「……………ミャー！」

琉兵衛の腕から飛び降り、一目散に逃げるミック。

琉兵衛は一瞬何が起きたかわからなかったが、ミックを追いかけないことには始まらない。

「じらーミックー！何処へいくんだー！」

ミックは主人の呼び止めを無視して逃げる逃げる。

琉兵衛は高齢。

おっさんというよりおじいさん。

猫には追いつけるはずもない。

しかし琉兵衛はミックを追って部屋を飛び出していった。

「本当に元気がいいんだから……………」

まだまだ元気な父の姿を見て、彼女は呆れつつも安堵していた。

A M 1 1 : 3 0 - - -

テレビ局『風都かぜテレビ』 . . .

テレビ局の前に一台のタクシーが停まる。

「それじゃどうも！」

降りたのは長い髪を束ねた園咲若菜。

本日も地味な格好をしている。

「若菜ちゃん!」

そこへマネージャーの城戸が出迎え、二人は局に入る。

「昼食の後すぐに打ち合わせだから、衣装合わせは急がないとダメだよ!」

「急がないとって……放送は7時からでしょ?

あわてないあわてない!」

「いやいや、挨拶しないといけない人がたくさんいるでしょ!」?

「……あ、そうでしたね……」

というところで二人は急いで楽屋に入る。が、

「レディの楽屋に入らないでよ!!」

ガツン!!

「おふっ!!」

若菜×城戸

×

T K O 勝 ち

本日も園咲若菜は絶好調である。

P M 2 : : 5 3 - - -

銀杏町三丁目某所 - - -

銀杏町三丁目の海岸付近にはただっ広い、

それでもって何も建造物のない土地がある。

その土地の中心に、一つの大きな石碑が据えられている。

その石碑の前に、ソフト帽の探偵は立っていた。

大きな花束を持って。

「……………一年か。早いもんだ」

翔太郎は花束を石碑の前に置いた。

「……………おやつさん。」

俺あまだおやつさんみたいにはなれてないんだ……………

せっかく帽子託されたのにな……………」

帽子を取り、石碑に視線を落とす。

石碑にはおびただしい数の人の名が刻まれていた。

「……………ごめんな……………」

俺がすっかりしてたら……………
こんなことには……………」

P M 2 : : 3 0
風都かぜテレビ

「あ~~~~つまんない……」

探偵の助手、亜樹子は頂垂れていた。

理由は一つ。

竜に誘いを断られたからだ。

まあ……刑事だしね

「もう……結局私一人で応援じゃん！

二人ともつれないし……」

そんな亜樹子は今、局の正面入口にいた。

亜樹子だけではない。

多くの人が局に押しかけている。

「早く中に入れろー!!」 「うちの息子の晴れ舞台なんだよー!!」

「いや、皆さん!

時間はまだ早いですし……」

「っるせえ!中に入れやがれ!!」

野次から判断すると、おそらくはフーティックアイドルの出場者の関係者だろう。

全員が中に入ろうと血走った目で警備員と争っている。

「みんなとんだけマジなのよ……」

聞いてないって……」

依然として警備員と皆さんのおしくらまんじゅうを続けている。

その中から二人の男が弾きだされた。

「」のあああっ!?!?」「」

二転三転し、後頭部を強打。

見かねた亜樹子は当然駆け寄る。

「ちょっと！大丈夫ですか！？」

「……あれ？」

二人の男を凝視すると、どちらも見覚えが。

片方は髭面の大男。

もう一人はサンタクロースの格好をした男。

「……………サンタちゃんにウォッチャマンじゃん。

何してんのこんなとこで?」

「あ!」

「亜樹子ちゃん!」

亜樹子に気付いたウォッチャマンは素早くカメラを取り出す。

が、

「撮らないでよ!」

ガシャン!!

「ああ!!」

僕の一眼レフが!!」

粉々になったカメラを大事に拾うウォッチャマン。

呪いの呪文を放つが、亜樹子は敢えて無視する。

「……………で、二人は何してんの？」

「そりゃ決まってるじゃない!!」

「クイーンとエリザベスの応援だよ!!」

「……………ええー……」

「何その顔!？」

「なんで嫌そうなの!？」

「いや……おっさん二人と目的が一緒だったら……ねえ？」

「別にいいでしょ!？」

「……まあ、誰もいないよりかましよね……」

「何その諦めよう!？」

「とりあえず、一緒に二人の応援しない？」

「とりあえず……」

「だからなんで嫌そうなの!？」

こうして三人で応援することになったのだが、

先ほどよりも警備員と皆さんの争いは激化。

しばらくは局に入れそうもない。

「ねえ、なんでみんな必死なの？」

「そっか、亜樹子ちゃんは最近風都にきたばかりだから知らないよね」

「この番組はね、街の人の希望なんだよ」

「……………なんで？」

P M 2 : : 3 0 - - -

風都かぜテレビAスタジオ - - -

着々とセットの準備が進められていくスタジオに、

若菜とぼろぼろの城戸はいた。

「こんにちはー！」

子供のような明るい挨拶にスタッフたちが一斉に振り向く。

「あっ！」

「若菜ちゃん！！！」

さすがはアイドル。

スタッフ全員を仕事そっちのけで集めてしまった。

が、今回は理由がある。

「久しぶりじゃないか若菜ちゃん!!」

「戸田山さんお久しぶりです!!」

「一年ぶりでしたよね?」

「そうだよ!一年のあいだに俺ADからディレクターになったんだよ!...」

「ええ!？」

「それじゃ財津原ディレクターは!？」

「今、財津原さんは違う番組のプロデューサーなんだよ」

「それじゃ和泉プロデューサーは!?!」

「和泉さんはまだここでプロデューサーやってるよ」

「本当に!?!」

よかつた~~~~」

和気あいあいとするスタッフたちと若菜。

ただ一人、城戸のみが輪に入れず

かわいそうなことになっていた。

本日も城戸君は残念である。

P M 2 : 3 1 . . .

風都かぜテレビ入り口 . . .

「へー、この番組で園咲若菜もデビューしたんだ！」

「そーなんだよ、若菜姫もちゃんと勝ち抜いたんだから!!」

「去年の今頃に若菜姫は傷ついた風都の人たちの心をわしづかみしたってわけよ！」

サントちゃん、ウォッチャマンは全身を使って熱弁。

しかし亜樹子には一つ、

引っかかる点が。

「ちよっと待って。

傷ついた？ってどういう意味？」

すると騒いでいた二人の顔から急に笑顔が消えた。

「……こつちの話先にするべきだったね……」

普段のふざけた態度とは違い、ウォッチャマンはどこか悲しげな表情を浮かべる。

「え？なにになに？」

なんかまずいこと聞いちゃっ……た？」

「……………亜樹子ちゃん、この街の人たちの約半分がここ一年のうちに移り住んできた

ってことは知ってる？」

「……………どついつ意味？」

「一年以上この街に住んでる人は半分ほどしかいないんだよ」

「！？ ……意味がわかんないんだけど！」

亜樹子がわからないというのも無理はない。

書いてる作者もわからないのだ。

「……………実は若菜姫がデビューする少し前に、

風都史上最悪の事件が起きたんだよ」

「最悪の……………事件……………」

「そう。最悪の事件……………」

「何があったのよ!?!」

「今でもよくわかっていないんだ。

ただ多くの犠牲者が出た」

「それってどれくらいのこと?」

「数百万人」

「数百万!？」

「人が弾けたり、消し飛んだり、溶かされたり……」

とにかくめちゃくちゃなことが起きて、

たった1日で大勢の人が亡くなった」

「1日……て……」

驚いて開いた口が塞がらない。

この街にそのような過去があったとは。

「もしかしたらドーパントの仕業だったのかも知れない。」

けど、当時はみんな怯えてそんなこと考える余裕なんかなかった」

「そんな時に若菜姫が現れたんだよね」

「若菜姫の歌でみんな元気が出て、復興していったというわけよ」

「そして若菜姫のように風都を活気づけようと、みんなこの番組でのデビューを夢見てる。」

だからこの街の希望ってわけ」

街のためにデビューを夢見ると二人は言ったが

「早く中に入れろやあ!!」

「娘が歌うんだよ!!..記念に写真を!」

「いや...まだ早すぎますから.....」

とてもではないがそのようには思えない。

そして亜樹子には疑問がもつーつ。

「でも、変じゃない?」

「変？」

「つてなにが？」

「だって、そんな事件があったのに私全然知らなかったんだよ？」

大勢の人が亡くなったのに報道されないなんて……」

その一言で二人は顔を見合わせた。

「報道されてないの？」

「そつだよ？」

だからなんのことかわかんないでいるんじゃない！」

「……それもそつか？」

どうやら二人にとっても意外な事実だったらしい。

そのまま二人は黙り込んでしまう。

「……とにかく！」

今はクイーンとエリザベスの応援よ……！」

「そうだった……！」

危うく忘れるところだった……！」

「よし……！」

まず二人に会いにいこう……！」

その勢いで三人も入り口の争いの中へ飛び込んでいった。

P M 2 : 5 9 . . .

銀杏町三丁目海岸付近 . . .

翔太郎はソフト帽を被るともう一度石碑に視線を落とす。

そのまま振り返らずに

「

.....で？

俺に何か用か？」

突然独り言のように喋りはじめる翔太郎の後方に、

二人の男女が近づいていた。

「……なんだ、意外と気づくの早いな……」

男の方は気だるそうな顔で頭を掻いている。

女の方は無表情だ。

「お前ら何者だ？」

翔太郎の問いかけに、女の方は表情一つ変えない。

そんな女とは対照的に男は不気味な笑みを浮かべる。

「へっへっへっへっ……」

俺たちが誰かって？」

男は何かを取り出そうとポケットに手を突っ込む。

が、

「……………あれ？」

ねえ、なっちゃん。

俺さっきポケットに入れたよね!？」

何か慌てているようだ。

必死でポケットを裏返している。

「確かにここに……………」

「オイ! コントはいいから何者が答える!！」

「え? 俺?」

神田蒼太だ。ヨロシク」

「いや、そうじゃなくて…」

「こっちの美人は金堂菜月ちゃん。

なっちゃんと呼んでやってくれ」

「そうじゃねえって!!」

話をはぐらかされてばかりで翔太郎は心底激怒。

なっちゃん……金堂菜月の方もなんとも言えない顔だ。

「あ………あつた!!」

よほど嬉しかったのか、神田は子供のようにはしゃぎはじめ。

「よかった〜。」

危うく怒られるところだよ…。

そんじゃなっちゃん！！

ちやっちやとやりますか！」

そう言うと二人はロストドライバーを取り出した。

「!?!? ロストドライバー!?!?」

「これ見たら何者か一発だよな?」

『ルナ!』

『トリガー!!』

「変身!!」

二人はそれぞれ青と金のガイアメモリをドライバーに挿し、光に包まれる。

「最初に言っとくと、俺は銀さんみたく優しくないぜ?」

光の中から仮面ライダートリガー、仮面ライダールナが姿を現す。

と、いきなりトリガーはマグナムを取り出して翔太郎めがけ発砲した。

「.??」

ギリギリかわしたが後ろの石碑に命中し、

小さな破片が飛び散る。

「!

お前……………」

ソフト帽を押さえ、翔太郎もドライバーを装着する。

「お前……………自分が何したかわかってんのか……………?」

「……なっちゃん、俺なんかやったかな……」

トリガーは翔太郎の怒りの理由がわからずルナに聞くが、
当然答えるはずもない。

「悪いが……今日は手加減出来ないぜ……」

『ジョーカー!!』

「変身……」

バックルを展開させ、仮面ライダージョーカーへ変身。

そのままトリガーに殴りかかった。

「うおっ！？」

いきなりかよ！」

華麗なバックステップで避けるが、ジョーカーはさらに回し蹴りを放つ。

「くっ……このヤロ……」

トリガーマグナムの照準を合わせるが

すぐにジョーカーはマグナムを叩き落とす。

「なっ……」

「らあっ……」

マグナムを落として動揺した際に、渾身のアッパーを撃ち込む。

「くそっ！」

「なっちゃん……」

傍観していたルナが腕を伸ばして間に割って入る。

すぐにルナがトリガーマグナムを拾い、ジョーカーに向けた。

「ちっ……またお前か！」

「でかしたなっちゃん!!」

ほら、さっさと貸してくれ」

顎を押さえながら手を出してよこせと示唆するトリガー。

しかしルナは無視する。

無視した拳げ句、ルナメモリを装填した。

『ルナ！マキシマムドライブ!!』

電子音と同時に銃口が光輝きはじめる。

「いいぜ、勝負だ……」

『ジョーカー！マキシマムドライブ！』

ジョーカーも青白く発光する右拳を握りしめ、

姿勢を低く構える。

が、ジョーカーよりも先にルナが発砲した。

放たれた光弾は複数に分裂し、ジョーカーを取り囲む。

「なんだ、この攻撃は……？」

ジョーカーを取り囲む光弾が一斉に襲いかかった。

この街のKノアイドルを生む番組（後書き）

なんでしょうね……

書いてる期間が長すぎたんでしょうか。

話の方向がむちゃくちゃに……

誰か助けて!!

この街のK / 死神乱入 (前書き)

今回の依頼

依頼人

クイーン & amp; エリザベス

依頼内容

生放送スペシャルの応援にきてほしい

メモ

色々忙しいにも関わらず、ルナ、トリガー襲来。

ぜってーぶっ飛ばす

翔太郎

この街のK / 死神乱入

5月16日 . . .

『ルナ！マキシマムドライブ！！』

P M 3 : 0 5 . . .

『ジョーカー！！マキシマムドライブ！！』

銀杏町三丁目海岸付近 . . .

銃口から放たれた光弾が分裂し、ジョーカーを取り囲む。

「なんだ、この攻撃は………？」

すると突然、取り囲んでいた光弾が一齐に襲いかかった。

四方八方、上下左右からジョーカーめがけ飛んでくる。

「はっ………この程度で！」

素早く前方からの光弾を右手で叩き落とす。

そのわずかに生じた突破口からジョーカーは飛び出した。

「っおおおあああああ……！」

輝く右手を振り上げ、ルナへと飛びかかった。

しかし先ほどの光弾に阻まれる。

「つつ!？」

誘導弾かよ!」

背後からも次々に光弾が飛んてくる。

「厄介な攻撃……だな!」

振り向きざまに後方の光弾を右手で弾く。

その奥からさらに光弾が飛んてくる。

右手だけでは限界だ。

ジョーカーは光弾を避けながらヒートメモリに切り替える。

『ヒート……』

電子音と同時に漆黒のボディから炎が上がる。

炎を纏った両手を突きだし、一気に業火で残りの光弾を焼き払った。

「……………」

ルナはその様子をただ眺めているだけだった。

トリガーもまた然り。

「……………よし、なっちゃん、そろそろ行きますか!」

そう言って颯爽と駆け出すトリガー。

それを見守るルナ。

「うえっ!?!」

ちよっとなっちゃん!?!」

ついてこないルナの方を驚きながら振り返る。

その隙を見逃さず、ジョーカーは思い切り殴りとばした。

「ぐほお!?!」

「くだらねえ茶番に付き合うつもりはないんだよ……」

悪いが……圧倒させてもらっ!?!」

トリガーが起きあがる前に顔面を蹴り飛ばす。

そして転がるトリガーの頭を掴んで起こして腹部に膝蹴り、顎にアッパーを撃ち込んだ。

「ぐっ……」

おいなっちゃん！！手伝わなくていいからマグナム返せ！」

『やれやれ……』といった様子で、ルナはトリガーにマグナムを放った。

くるくるとマグナムは宙を舞って、トリガーの手におさまる。

「はあ……」

好き勝手殴りやがって……

今度はこっちのば

ガンッ！！

「ぶぶっ！！」

今度はトリガーが宙を舞った。

「てめえ！話の途中にくあー！！」

容赦なくジョーカーは追撃する。

一切反撃をせず、宣言どおり圧倒していく。

「……………こいつで決まりだ」

再びジョーカーメモリを取り出した瞬間、ルナの腕がジョーカーの右手に絡み付いた。

「ちっ……………！」

「……………なんだ、なっちゃん助けが遅いつて……」

ルナはトリガーに目もくれずにジョーカーを投げ飛ばす。

しかしジョーカーは華麗に着地した。

「おいジョーカー、さっきは油断したが……」

「ここからはマジでいくぜ？」

そう言うとトリガーはルナと共にジョーカーに飛びかかった。

ジョーカーはルナの攻撃をバックステップで避け、

トリガーの銃撃を転がりながら避ける。

「おらあつ!!」

足技と銃撃で攻め立てるトリガー。

先ほどとは別人のような動き。

それでもジョーカーは落ち着いて捌ききる。

「油断なんかしてなきゃあ、お前程度!!」

三人の戦いはさらに激しさを増す。

二人を相手にジョーカーは一步も退かない。

が、後ろの石碑が気になっていた。

「くそっ……」

長いことここで戦ってたら……」

「隙ありい!!」

一瞬石碑の方に目を向けた隙を見逃さず、

ルナとトリガーのハイキックが顔面に放たれる。

「ふっ!!」

隙を突かれた攻撃だったが、紙一重で避けきつた。

そのまま二人の脇腹にブローを撃ち込んですり抜ける。

「かつ……!!?」

「……………!!」

片膝をつく二人を他所に、ジョーカーはハードボイルダーに跨がる。

「なっ……お前逃げんのか!？」

「さあ?どつだろつな」

首を小さく傾げて、ジョーカーはハードボイルダーを発進させた。

「おい、なっちゃん。
聞いたか？」

どつだろつな、だつてよ。

ははっ、追いかけるぞー!!」

P M 6 : 5 7 - - -

風都かぜテレビAスタジオ - - -

「キヤーーーー!!」 「キリヤーーーー!!」

生放送スタートまで数分。

スタジオ内はたくさんのお客様が狂言乱舞。

誰もスタートを待ちきれない。

「エリザベス……!!」

クイン……!!」

そして、我らが所長も狂喜乱舞している。

「まったく、なんで翔太郎君来ないのかしら!!」

「いや、もしかしたらもつと後になったら来るかもよ?」

「そうそう。クインとエリザベスの出番は最後だし……」

どうやらクイン、エリザベスはデビューがかかっているため、順番は最後のようだ。

「だよね? やっぱりなんやかんやで来るよね?」

「来るでしょ!」

「「だよー!!!」」

大盛り上がりする観客の前にADらしき男が立つ。

「それでは皆さん！」

本番開始1分前になりました！

MCが登場しましたら拍手をお願いします!!!」

その一言で観客がさらに沸き立つ。

「いよいよね!!!」

「いよいよだよ亜樹子ちゃん!!」

三人もテンションが異常に上がっていく。

そしてディレクターがカウントを始める。

「5!4!3!2……………」

ディレクターの合図でBGMが流れ、MCが登場する。

「どいつも皆さんくんばんは！」

MCのキリヤです!」

「モッチーこと持田です!」

「それでは始めましょう！」

フーティックアイドル!!

生放送スペシャル!!」

タイトルコールで観客が一斉に拍手。

スタジオを観客の熱気が包む。

「今週は生放送！」

ということであんなにやってる時間はかゝなり……ない!!」

「早速登場していただきましょう！」

今週のチャレンジャーの皆さんです!!」

今度は今週のチャレンジャーが登場。

だいたい10組くらいだろうか。

その最後に、クイーンとエリザベスが。

「キヤーー!!」

「クイーン!!エリザベス!!」

観客の歓声に負けじと、三人も絶叫する。

するとこちらに気づいたのか、クイーンが小さく手を振りエリザベスがウインクした。

「はあああ！」

今エリザベスちゃんが俺の方にウィンクを……」

「ちょっ……サンタちゃんずるいって!!」

亜樹子の隣でサンタちゃんが胸ぐらを掴まれているのが可笑しかったのか、

クインとエリザベスは少しだけ笑っていた。

「やはり生放送で皆さん盛り上がってますね!？」

「そうだねモッチー！」

だがさらに盛り上がってもらいましょう!」

「ハイ！」

今回の生放送の審査員に登場していただきましょう!

「このかたです！！」

一気に観客、チャレンジャーの視線が登場口に集まる。

「あ……どうも……」

入ってきて小さな挨拶をした審査員に観客、チャレンジャーの全員が仰天した。

「……若菜姫！？」

さらにさらに歓声が大きくなる。

「今回の審査員は

このフーティックアイドルで衝撃的なデビューをしたアイドル1号
!!

若菜姫こと園咲若菜さん!!!!

「「「若菜姫——!!!!」」」

開始数分でこの盛り上がり。

最初からクライマックスだ。

「今回の審査員を務めていただくということですが若菜姫、意気込
みを!」

「ええ……はい、えと……

デビューした番組で審査員ってというのは……

はい、緊張します!!」

「そんなに堅くならなくてもいいでしょ？」

今回はチャレンジャーではなく審査員ですからね！！」

オープニングトークで盛り上がる中、亜樹子は一人時計を確認する。

「……まだ始まったばかりだし……たぶん来るよね……」

P M 7 : 0 3 . . .

風花町四丁目廃ビル . . .

日が傾き、暗くなった廃ビルでジョーカーはハードボイルダーを停める。

「ここなら……邪魔は入らねえし、思い切り戦える……！」

ハードボイルダーから降り、入り口の方に視線を向ける。

「……………意外に足速いな……」

すると、金と青のライダーが姿を見せた。

「はははっ、速いだろ？」

ガキのころは短距離走はいつも一番だったんだからな」

「くだらね話をしに来たんじゃねえんだこっちは！」

来いよ、お前だけは俺が倒す……」

「……お前……」

調子に乗るなよ……」

トリガーはまだ構えていないジョーカーに向けてマグナムを乱射した。

「ぐっ！」

それらはすべてジョーカーに命中した。

しかしダメージを無視して真っ直ぐトリガーに向かう。

「はっ！！」

裏拳がトリガーの顔面を捉える。

よろめくトリガーと入れ替わるようにルナが立ちはだかった。

無言でジョーカーめがけ腕を伸ばす。

それを避けられると、首を絞めようと腕の向きを曲げる。

「させるかよ！！」

ジョーカーの飛び膝蹴りが先に命中した。

「……………っつ！」

「何度も戦ってたんだ！」

「次の手くらい読めんだよ！！」

ラリアットでルナを押し倒し、トリガーの構えるマグナムを蹴り飛ばす。

「今回は逃がすつもりはねえ……」

とっちめて警察につきだす!!!」

「やれるもんならやってみろ!!!」

トリガーとジョーカー、互いに右ストレートを胸に叩き込む。

だが、押し勝ったのはジョーカー。

怯んだトリガーに何度も殴りつける。

見かねたルナがジョーカーを羽交い締めにした。

「うおっ!?!」

「なっちゃん手え放すな!」

マグナムを拾い、トリガーメモリを装填する。

『トリガー! マキシマムドライブ!』

「くっ………放せ!」

放すどころか、さらに腕を巻きつけて身動きをとらせない。

「終わりだ!!」

無防備なジョーカーに光弾が放たれた。

ドオン！！！！！

爆発音が響く。

しかし

「……………は？」

声を出したのはジョーカー。

まだルナに捕まっただままで。

トリガーもマグナムを構えたまま、呆然としている。

三人の前に、黒いローブを纏った謎の人物が立っていた。

「…………お前…今何した…………？」

そいつは何も答えない。

「いや、お前何者だ？」

それでもそいつは何も答えない。

ただ少しだけ、ジョーカーの方を見る。

その顔もローブで見えない。

「無視してんじゃねえ！」

突然、トリガーが襲いかかった。

が、ローブの中から棒が伸び、トリガーを突き飛ばす。

「ふっ！？」

ローブの中から現れた棒は本当の姿を見せる。

長さ2 mはある大鎌だった。

怪しく輝き、ジョーカーとルナに向けられる。

そしてルナの腕だけを的確に切り裂いた。

「うおー!?!」

いきなり拘束を解かれたジョーカーは思わず転倒してしまふ。

だが、ローブの人物はジョーカーを無視してルナに斬りかかった。

「っ……………!」

ローブの人物は攻撃の手を緩めず、大鎌を振り続ける。

その背後からトリガーが発砲するも身を翻して避けられる。

その一瞬、ジョーカーにはあるものが見えた。

ザンツ!!

「ぐあっ!!」

「つそがあああ!!」

ライダー二人を相手に互角の戦いをするローブの人物。

徐々にライダー二人が押され始めている。

「つおらああ!!」

トリガーが上段の回し蹴りを放つが、あっさりかわされてしまう。

「何なんだよ……」

「何なんだお前!!」

飛びかかろうとするトリガーをルナが諫めた。

「なっちゃん……何の真似だ!？」

トリガーの問いかけにルナは小さく首を振るだけ。

トリガーもルナの意図を察し、一歩退く。

「お前……次会ったら覚えてるよ……」

そう捨て台詞を吐いて二人のライダーは退こうとする。

その背後にジョーカーが立つ。

「逃げられると思うのか？」

「次はお前かよ……」

すると今度はロープの人物がジョーカーを諷めた。

「は!？」

驚くジョーカー。

その隙に二人のライダーは姿を消した。

「あっ！」

……………くそっ……………

お前、何で!」

振り返るとロープの人物も姿を消していた。

「くそ……………」

くそっ!!」

地面に何度も拳を打ちつけ、変身を解く。

呆然としていたが、先ほどのことを思い出す。

「あれは……さっきのあれは……」

その時、ポケットの携帯が鳴った。

「もしもし？」

なんだ亜樹子か。

あ？応援？だから俺は…

ちよっ、声でかつ。

わーったよ、行くよ行けばいいんだろ？」

まだ向こうは何か言っていたが電源を切った。

翔太郎はヘルメットを被り、ハードボイルダーに跨がる。

「……………仕方ねえ、行ってやるか……………」

そう呟き、颯爽と廢ビルを飛び出していった。

PM8:36 . . .
風都かせテレビ . . .

「ジミーさんの得点は……」

27点!!

ええっ!?!」

MCが若菜の採点に驚き、思わず二度見する。

チャレンジャーはがっかりした様子でスタジオからはけていく。

「現在のトップはTETRA・FANGです！」

そして次が最後のチャレンジャー!!」

「今週勝ち抜けばCDデビューが決定!!」

最後のチャレンジャーはこの二人だ!!

クイーン & エリザベス!!」

拍手と歓声の中、クイーンとエリザベスが堂々登場。

観客のボルテージは最高潮。

ただ亜樹子だけはイラついていた。

「始まつちゃうじゃん!

翔太郎君は何してんの!？」

先ほどから時計をしきりに確認しては貧乏揺すりを繰り返す。

ちなみに翔太郎は……

PM 8 : 37 - - -

風都かぜテレビ搬入口 - - -

「あれ？」

入り口はここであってんのか？

とりあえず……こっから入るか……」

入ろうとすると向こうから警備員が。

「え？あ、ちょっと！

いや、俺は別に怪しいもんじゃ……ちょっと放してくれよ……！

別に変態とかじゃ……

やーめーろー！！ちよ、

亜樹子！！へー！ーるぷ！！」

P M 8 : 4 3 . . .

風都かぜテレビスタジオ . . .

「「「ワアッ！ー！ー！」」」

ついに……クイーンとエリザベスの曲が終了した。

当然翔太郎は間に合わなかった。

歓声と拍手の嵐。

観客全員が立ち上がってしまっている。

「ありがとうございます！」

それでは若菜姫、採点の「

「100点!!」

「食いぎみ!？」

しかし文句無し!!

モツチー、順位は!？」

「はい、TETRA・FANGを抜き、堂々の1位!

勝ち抜き達成ということでデビューー決定です!!」

「やった!」

「クイーン!!」

エリザベスがクイーンに抱きつく。

同様にサンタちゃんがウォッチャマンに抱きつく。

「やったよ!!あの二人デビューだよ!」

「アイドル誕生だよ!」

「おっと、時間がありません!若菜姫、コメントを!」

「はい、皆さん素晴らしかったです!!」

デビュー決定したお二人、これからがんばってください!!」

「はい、ありがとうございました!」

時間が押していますので、クイーン& amp・エリザベスのデビュー
ーについては番組HPにてご確認ください!!」

「以上、フーティックアイドル生放送スペシャルでした!

また来週!!」

拍手の嵐で生放送は終了した。

当然誰も、ジミーさんについてはつつこまなかった。

そして……

「あいつは……」

「「は？」」

「あいつは何してんねん！！」

亜樹子がぶちギレモード。

原因はあえて言うまい。

「ちょっと、亜樹子ちゃん声が……」

「やかましい！」

「「ひっ！」」

鬼のような眼光。

二人は震え上がる。

PM8:52 . . .
若菜控え室 . . .

「それじゃ若菜ちゃん、今日の仕事は終わりだから帰っていいよ」

「わかりました。」

また明日ですね、城戸さん」

「ハイハイ、また明日ね」

城戸の去ったあと、若菜も着替えと片付けを済ませて楽屋を出る。

そしてテレビ局の裏口へ向かう。

PM8:55
警備員室

「だから、俺は変態とかじゃない！」

「うるさい不審者……！」

「ふし………!!？」

不審者、いや翔太郎はずっと警備員と問答を続けていた。

「いい加減にしてくれよ！
俺はフーティックアイドル生放送スペシャルに行かないといけないんだよ……！」

「もう終わってる時間だぞ？」

「何!？」

驚愕の事実を知らされた翔太郎はさらにギャーギャー叫ぶ。

すると観念したのか、

「あーもう、こっちは忙しいんだからお前帰れ。な？」

「え? いいのか？」

「用はないんだろ? もういいぞ」

警備員の言葉にあまえ、翔太郎は扉を開ける。

ゴチンッ

鈍い音がした。

翔太郎が警備員室を出ると女性が仰向けに倒れている。

「いったあ……………」

ちよつとあんた!!

どこに目をつけてんのよ!?!?

女性は起き上がり翔太郎に怒鳴り散らす。

「……………あ!?!?!」

そこで二人はようやく互いの顔を確認した。

そして互いの顔を指差した。

「「ああー……！？」」

「若菜姫！？何でここに！？」

「左さん！？何でここに！？」

とにかく二人はあわてふためく。

「申し訳ない！！俺の不注意でドアぶつけてしまって……」

「いえいえ！大丈夫です！！何回ぶつけられても平気です！！」

「……………？」

何を言ってるんだ？」

「え？」

「ああ！いや、その、私がその、Mとかっていう意味ではなくて……」

徐々に冷静さを取り戻す翔太郎とは対照的に、しどろもどろな若菜。

「いや、ぶつけたのは俺だ。」

「申し訳ない！！治療費ならいくらでも払う！！」

「いえいえ！大丈夫ですよ、怪我してないし！」

「いや、鼻血が……」

「違います鼻水です！」

「鼻水！？」

「とど、とにかく、平気ですから！」

「そう……なのか？」

とりあえず……」

翔太郎はポケットからハンカチを出して若菜に差し出す。

「ええ!？」

いやいや、そんな高そうなハンカチ無理です!」

「1000円ですけど!？」

異常なまでにテンパる若菜を翔太郎は不思議に思った。

ストーカーがバレているならば、テンパるより怖がるのが普通だ。

「あ、あの………」

すると、若菜は腹をくくったような顔で

「……………れ、連絡先教えてくださいー！」

「……………は？」

ますますわからない。

怖がるどころか連絡先を聞いてきた。

これは城戸さんから何も聞いていないのかも知れない。

「連絡先？とりあえずホームページに書いてあるが…」

「いえ、左さんのを……………」

「俺の！？」

若菜はバッグから携帯電話を取り出す。

「……………これ城戸さんに怒られるんじゃない……………」

「大丈夫です！城戸さんは黙らせます！！」

どう黙らせるのか気になったが、ここは若菜の要求を受け入れて連絡先を交換。

翔太郎が気まずそうに若菜の顔を見ると、若菜の顔は真っ赤。

「あの……顔赤いけど、風邪？」

「ち、ち、違います！」

若菜は急いで携帯電話をしまい、深くお辞儀をする。

「ありがとうございます！！それじゃもう遅いので！」

「え？ちよつと！？」

そのまま若菜は翔太郎を置いて走り出した。

裏口から局を飛び出し、全速力で走り去る。

本当は迎えの車が来ていたのだが、それすらも置いて走り去った。

一人取り残された翔太郎の携帯が鳴る。

「もしもし？」

あ？何してんのかだと？

嵐が通り過ぎてったんだよ」

電話をかけてきたのは亜樹子。

意味不明な発言をする翔太郎はこのあと、スリッパでしばかれたそ
うだ。

P M 1 0 : 5 2 . . .
風花町二丁目 . . .

街が眠りにつこうとする頃、パトカーのサイレンが鳴り響く。

「刃野刑事！」

「ただいま到着しました！」

鑑識を押し退け、竜と九条が刃野のもとに駆け寄る。

「おう、やっと来たか」

「それで、被害者は？」

刃野は遅れてきた二人に被害者の遺体を見せる。

「被害者は青田行雄。37歳、土木作業員だ」

「青田行雄って……」

九条は手帳を取り出してページをめくる。

「青田行雄って三年前の……」

「そう。8年前の大学教授殺人事件の被疑者だった男だ」

「でも証拠不十分で昨年無罪判決が出たんじゃ…」

「お前らの言う通り。」

だが、見ての通り死亡した。

しかも死因は不明。外傷もなければ病気持ちってわけでもない」

「と…いうことは…」

「ドーパント、ですか？」

「こいつがな」

「は？」

刃野は近くにいた真倉を呼び寄せ、

「これが青田のそばに転がっていた」

真倉が見せたのは真つ二つになったガイアメモリ。

「ということは青田がドーパント!?!」

「だが、どういわけか死んでいる」

「それなんですけど刃野さん」

真倉は手帳を開き、

「目撃情報があります」

「目撃情報？」

「はい。」

ドーパントと思われる化け物と、

黒の装束で全身を覆って大鎌を持った死神のようなものが交戦していたそうです」

「死神……………」

「なんのために青田を殺す必要が……………」

「さあな。」

「処刑人でも気取ってんじゃねえのか？」

「全員、真っ二つのガイアメモリを見つめていた。」

この街のK / 死神乱入 (後書き)

「園咲若菜の……………」

リーディングプリンセス〜!〜!」

(1111でBGM)

「皆さんこんにちは!

園咲若菜です!

今回のこの企画、リーディングプリンセスとは

ユーザーの皆さんが番組(小説)について疑問に思っていること質問していただき、

私がプロデューサー(作者)に代わって質問にお答えします!〜!

それでは早速……

ユーザーネーム、IDFさんからの質問です！

『クイーン・ドーパントが登場しなくなりましたよね……』

ああ、言われてしまいましたね。

確かに少ないです。多分出たの一回だけのよう……
ですが安心してください！！

まだ先になりますが、きっと登場します！！ってプロデューサー（
作者）が言っていました！

はい！

それでは最後の質問。

ユーザーネーム、FOREVER HEROESさんからの質問です！

『気になるのはエレメンタルを殺した犯人と東京の拘置所で捕まっている囚人です』

エレメンタル？ってなんですかね？

今ちよつとカンペが……

あ、はいはい！

えー、エレメンタルを殺した犯人ですね。

これははっきり言つとネタバレになるので……

とりあえずヒントはこの番組（小説）で出てきた透明人間というキーワードです！

そういえば本編にも出てましたよね？

あの時に絡んでたのはなんのドーパントでしたっけ？

まあ、いいや。

次、東京の拘置所の囚人……

すみません、まだカンペ……

はい、……はい。

これもヒントだけですな？

えー…ヒントは囚人の番号だそうです！

普通に読んじゃダメですよ!？

今回の質問はここまで、ですね……

色々ヒントが出ましたが

意味がわかってても他の人に言っちゃダメですよ!?

それでは園咲若菜のリーディングプリンセス!

お楽しみいただけただけでしょうか?

質問が増えればまた企画が続くかもしれませんし、

クレームがくれば即終了します!!

それではまた次回があることを願って!!

さようなら~~~~~ノシ
「

m () m
こんなんですいません

Ｔとの決着／ラストチャンス（前書き）

今回も何を書きたかったのかわからない……

何を書くんだっけな……

Ｔとの決着／ラストチャンス

5月18日 . . .

「.....これで何件目でしょっつ？」

AM 7 : 52 . . .

「.....10件は超えたか.....」

銀杏町一丁目 . . .

竜、真倉は横たわる遺体の状態を調べる。

被害者の内ポケットから真っ二つになったガイアメモリが見つかった。

「またドーパントか……」

「これまでの被害者と同じですね。」

ドーパント、あるいは前科者……

何故こつも犯罪者ばかりを？」

「俺が聞きたいよ……つたく……」

「すみません！！遅くなりました！！！」

鑑識を押し退け、九条がやって来る。

「おう、遅かったな」

「てか遅刻多いよね……」

そんなことは気にせず、九条は遺体を確認する。

「今回もドーパント……」

手帳を開き、詳しい状況をメモしていく。

「でもどうしてドーパントばかりを……」

「だから俺が聞きたいの！」

AM 10 : 26 - -
左探偵事務所 - -

「なんだっけな……」

事務所の所長、翔太郎は新聞を読みながら呟く。

記事のタイトルは

「風都を震撼させる死神」

「なんだっけな……」

どっかで聞いたんだよな……」

「ちょっと翔太郎君、ラジオ聞こえないじゃん！」

ラジオのボリュームが大きくなる。

翔太郎は黙って新聞で顔を隠す。

【……はい、次のお便りいってみましょう!!】

ラジオネーム、ムッコロさんからのお便りです【

亜樹子は注意深くラジオに耳を傾ける。

「うーん……なんか若菜姫ご機嫌のような……」

【「若菜姫は今、好きな男性はいますか？」

えーと………いけません…ね!】

「むむっ!？」

これはいるな!？」

一人ではしゃぐ亜樹子。

翔太郎はまったくといっていいほど関心が無さそうだ。

「どっかで聞いたんだよな………神田……蒼太………」

坂下銀次………」

ぶつぶつ呟いていると、

コンコンッ

二人は顔を見合わせる。

「まさか……依頼に」

「翔太郎いるか!？」

二人の期待を裏切り、竜が事務所に入ってきた。

「なんだお前かよ……」

期待を裏切られ、二人は頂垂れる。

「いやいや、仕事を頼みたいんだって」

「どうせ警察じゃ片付かない事件の話だろ？」

「もうちょっと頑張れよ」

「でも引き受けてくれるんだろ？」

「何でそうなる……」

「だってほら、」

竜は新聞を指さした。

翔太郎は記事を確認する。

「この……死神の事件か？」

「そうだ。」

死神は前科者、あるいはドーパントばかりを襲っている

それを聞くと新聞を注意深く見る。

確かにそのような旨のことが書いてある。

竜は手帳を開き

「やっぱり、これはドーパントの仕業だと思っただが……」

「ただのドーパントじゃあないぜ」

「??？」

「どういう意味だ？」

鮮明に、先日の記憶がよみがえる。

二人のライダーと戦い、死神が乱入してきたことを。

そしてその時に垣間見たものを。

「死神はただのドーパントじゃない。」

奴は……

「仮面ライダーだ」

AM 10:30 - - -
園咲家 - - -

馬鹿みたいな広さの庭。

そんな庭の中心で神田は座りこんでいた。

「おい、何してんだ？」

「お、銀さん。俺は物思いにふけているのだ」

「自分で言うか普通……」

坂下は神田の隣で胡座をかく。

「で、何してんだ？」

「あれ見てたんだよ」

神田が指差すのは蜘蛛の巣。

そこに蝶々が絡めとられている。

「……あのさ、俺らそろそろヤバくない？」

「……どついう意味だ？」

「俺ら任務しくじりすぎじゃないか？」

もう処刑されてもおかしくねえし……」

絡めとられた蝶々に、蜘蛛が近づくと。

「それにさ、

同じドライバーと同レベルのメモリでこんなに差が出ると俺らの腕が悪いみたいだよな。」

「いつつも負けるし……」

「柄にもなくへこんでるな。」

「そりゃお前、邪魔が入ったりしたからだろ」

「でも負けすぎだろ？」

「次しくじったらアウトかなあ……」

ついに、蜘蛛は蝶々にたどり着いた。

そして蜘蛛は蝶々を喰らおうと口を大きく開く。

「俺もあんな感じに死ぬのかねえ……」

神田は蝶々の最期を見る前に立ち上がる。

「俺、来人様に呼ばれてるから行ってくるわ」

庭に坂下一人を残して屋敷の方へ歩き出す。

グキッ

「ギャー！足……足があああ！！」

五分後 - - -
来人の部屋 - - -

「……………何がどうなったらそうなるんだい？」

来人の目の前には足を包帯でぐるぐるにした神田が。

「……………まあいいや」

しかし来人はそんなことは気にしない。

「今日も仕事の話だ」

「あ、やっぱりすか……………」

「そう。ラストチャンスだと思った方がいい。

そして今回は一人でやってもらおう」

「ラスト……チャンス……」

来人は何も書いていない本をめくる。

そして本を勢いよく閉じる。

「詳しい指示は食後にでもするよ。」

それまで精神統一でもするといいい」

「俺集中力ないんですけど……」

「ならポーツとしていたまえ」

神田は足を引きずりながら部屋を出ていく。

そのすぐ後に、来人も部屋を出る。

来人が向かったのは開発実験室。

大きな扉を開け、中心の井戸に歩み寄る。

「こっちは完成か……………」

井戸の中から、緑色の輝きを放つ黒いガイアメモリが。

「S」と書かれていたが、「X」に変貌した。

「あとはどうやって彼に渡すかな……………」

「X」のガイアメモリをポケットにしまうと、早足で部屋を出ていった。

A M 1 0 : 3 0 - - -
左探偵事務所 - - -

「か……」

「仮面……ライダー？」

「だと？」

「そつだ」

翔太郎は読んでいた新聞を机に放った。

「先日、俺はこの死神と遭遇したんだが……」

「遭遇したの!?!」

「亜樹子うるさい。」

あとラジオのボリューム下げろバカタレ」

怒られた亜樹子はボリュームを下げる。

「死神は俺に目もくれず、ミュージアムのライダーと交戦していた。」

その時に一瞬だけ、ロストドライバーが見えた」

「ロストドライバー?」

「ロストドライバー……って、ミュージアムが作ったんだろ?」

てことは、死神はミュージアムなのか?」

「でも、なんで仲間割れしてんのよ？」

「ああ、ロストドライバーはミュージアムが作った可能性が高い。

が、死神のロストドライバーは銀色の装飾が施されていた」

「装飾？」

翔太郎は自分のロストドライバーを机に置いた。

「これが俺やミュージアムの連中が使ってるロストドライバーだ。

死神のロストドライバーは所々装飾があった」

「いや、装飾があつたら仲間割れするもんなのか？」

頓狂な発言に翔太郎はがっかり。

「子供じゃねえんだよ！」

装飾があるから仲間割れしてんじゃないかって……

単純に死神はミュージアムとは違うんじゃないかって言いたいんだ
よ……」

「「なんで先に言わない？」」

「おまえら……」

ことごとくふざける刑事と助手にぶちギレ寸前。

自然と拳に力が入る。

「……………もういいや……」

とりあえず俺が言えるのはそれだけだ」

「え？手伝ってくれないのか？」

「俺は俺で忙しい……」

するとふざけた助手が身をのりだし、

「うそ！依頼なんてきてないじゃん！！」

「顔近い！離れる！」

そつだ竜、神田蒼太つて誰かわかるか？」

竜は一度上の方を見て考える。

が、すぐに首を横に振った。

「翔太郎君、誰の話？」

「ミュージアムの話だ」

「ミュージアム？」

「奴等は丁寧に名乗ってくれた。

しかも、その名前は全部聞いたことがある」

「……確かに俺も気になってたんだが……

どこで聞いたっけな……」

考えこんでいると、竜の携帯が鳴った。

「もしもし、お疲れさまです真倉さ………

強盗!？」

亜樹子と翔太郎も反応した。

どっちが悪者かわからなくなりそうだが、強盗犯が警官から逃げ回っている。

強盗犯はバッグを大事に抱えて人混みをかき分ける。

しかしパトカーが回り込んでいた。

「あああ……ああ……」

「観念しろ！もう逃げられんぞ！」

警官の呼び掛けを無視し、強盗犯は路地裏へ走る。

パトカーで追うには道が細すぎる。

警官達も走って追いかけた。

「いつまでも逃げられんぞ！」

「ハッ…ハッ…ハッ…ハッ！」

徐々に警官と強盗犯の距離は縮んできた。

そこで何を思ったか、バッグを警官に投げつけたのだ。

「何!?!」

バッグにぶつかり警官は転倒。

強盗犯が路地裏を出ようとした。

その時、前方から一台の白バイが向かってきた。

「……………え？」

強盗犯が呆けている隙に白バイの警官、竜が道を塞いだ。

「そこまでだ！」

「け……………けいか……………」

「うわああああー！！」

驚き、喚きながらその場から逃げ出した。

脇道に入って竜から離れていく。

「ちよ、待て！！」

エンジンを噴かせ、すぐに追った。

強盗犯はさらに狭い路地を走る。

そのあとを竜が追う。

が、強盗犯は近くに立て掛けられていた鉄材を倒していった。

「つつ!?!」

反射的にブレーキを握る。

その間に強盗犯は逃げる逃げる。

「くっ、待」

「待てこら!?!?!?!」

突然、竜の頭上を一台の黒いバイクが飛び越えた。

竜の頭を掠めて。

「あいつ……翔太郎じゃねえか!！」

飛び越えてったのは翔太郎。
と、その後ろに亜樹子も。

「まちなさーい!！」

「逃げられると思ってんのか!？」

「えええ!？誰!？」

全然知らない人物に追われるも、引き離そうと全力で逃げる。

つまずきながら角を曲がって懸命に逃げる。

「曲がって翔太郎君!!」

「おうよー!!」

華麗なドリフトで狭い路地の角を曲がった。

「あれ？翔太郎君……」

前方で、強盗犯が佇んでいた。

「……………観念した……のか？」

するといきなり強盗犯が両膝をついて倒れこんだ。

強盗犯の向こう側に

黒いローブを纏った人物が。

「……………死神!？」

「え?あれが……………?」

死神は二人を見ると、建物の壁を蹴って去っていった。

あわてて翔太郎は倒れている強盗犯に駆け寄る。

「おい!しっかりしろ!!」

「おい!?!」

「ちよっと……………ヤバイよ……」

あたし竜君呼んでくる！！」

亜樹子は来た道を引き返す。

その間、翔太郎は強盗犯に呼び掛け続けたが

目を覚ますことはなかった。

40分後 - - -

「強盗犯、富田康夫の死亡を確認。

外傷はないそうです」

電話をしているのは九条。

相手は刃野刑事だ。

「探偵………なんでお前がここに………」

「マツキー、今はそれどころじゃないだろ？」

「最近お前調子」

「真倉さん!!」

「にのって……って、ええー？なんで照井が怒る!？」

「今はそれどころじゃないでしょう?」

真倉を一喝し、二人は実況検分を続ける。

「で？こいつはドーパントだったのか？」

「いや、普通の人間だ。」

「そうだよな、綾ちゃん？」

「あ、はい。その通りです」

「お前綾ちゃんって呼んでんのかよ……」

「えと……もう被害者は15人目です……ね」

「何故犯罪者やドーパントを……」

「あ、照井さん、一応被害者のリストを作成しました」

そこに真倉が

「遅刻はするのにこういふのを作る時間はあるのな」

と茶々を入れると翔太郎が耳を思い切り引つ張った。

「おい！引つ張んなよ！！！」

「今はそれどころじゃないだろ！？？」

「おい、翔太郎……」

「お前が引つ張ったんだろっが！」

「茶々を入れたマッキーが」

「翔太郎！！！！！！！」

突然竜が大声を出した。

驚いて二人は気をつけをする。

「ふざけてる場合か!？」

「はい、すみません」

「それより、これ!」

竜は九条からもらったリストを差し出す。

「……………これがどうかしたか？」

「思い出したんだよ!！」

「何を？」

「お前の言ったた、神田蒼太っていうミュージアムの……………」

翔太郎は首を傾げる。

「その神田蒼太はアース・リフォーメーションの事件で死亡扱いされていた。

あのヒートの女もそうだった。

死亡扱いされてたのにメモリとドライバーを携えて生きてた」

そこでようやく、翔太郎は気づく。

「……………そうだ、それだ！」

メタルもルナも……………確か名前が……………」

そしてもう一つ、あることに気づく。

「……………副社長……………」

つてことは……あの会社!!」

翔太郎はそう言うと走りだし、その場を去る。

真倉が

「おい!どこ行くんのだ!?!」
と叫んでも無視。

翔太郎を追って竜も走りだす。

「ええ!?!お前はダメだろ!?!」

結果、取り残された真倉と九条は顔を見合わせる。

「ちょっと!?!あたしおいてかれたんだけど!?!」

亜樹子もいた。

とりあえず真倉は亜樹子に冷たく

「帰れ!!」

P M O : 0 9 . . .

風都かぜテレビ楽屋 . . .

楽屋の畳の上で、若菜のマネージャー城戸は正座していた。

城戸の目の前には若菜がふんぞり返っている。

「さて、今日のあたしの仕事は終わったわけだけど……

どうして怒ってるかわかる？」

城戸は沈黙し続ける。

「城戸さん、左翔太郎さんってご存知？」

城戸は沈黙。

「あなた前に左さんなんか知らないみたいなこと言ってたけど……」

沈黙し続ける城戸のこめかみに汗が流れる。

「先日左さんに会ったら城戸さんのことを知ってたのよね……………」

背中から異常なまでの汗が吹き出る。

「いね、どづいづことかしらっ。」

小刻みに体が震え始める。

「説明、してくれない？」

「……………」

ゴスンッ

城戸の目の前が真っ白になった。

泡を吹いてピクリとも動かない。

「まったく、なんで話さないのかしら!?!」

怒る若菜の携帯が鳴った。

「もしもし姉さん？」

え、迎えに来てくれてるの？

うん、すぐに行くね」

別人のような笑顔で楽屋を出る若菜。

城戸はテレビ局の社員に発見され一命はとりとめた。

そして若菜は冴子のリムジンに乗り込む。

「あら若菜、ご機嫌じゃない」

「でしょ!?!」

「否定しないのね……」

羨ましいわ。楽しそうで……」

冴子が哀しそうな顔を見るとリムジンが発車する。

「……なんか、姉さん元気ないじゃない……」

「ちょっと……いやなイベントが起きるのよ……」

二人を乗せたリムジンがアース・リフォーメーションの前を通りすぎていく。

ちょうどその頃

P M 0 : 4 0 . . .
アース・リフォーメーション前 . . .

一台の白バイと一台の黒いバイクが、会社の前に停まる。

「……なんか胡散臭い会社だとは思ってたが……」

「どでかいのが釣れそつだよな……」

二人はバイクから降り、入り口へゆっくりと歩いていく。

すると二人の前に警備員が立ちはだかった。

「どついつたご用件でしょう？」

「ここは関係者以外立ち入り禁止ですが？」

こちらを睨み付けてくる。

なかなか強面だから余計に迫力が。

「おい、どつするよ?」

「竜、お前は入れるんじゃないか?」

翔太郎に促され、警察手帳を見せる。が、

「だからなんです?」

「え? いや俺は警官で...」
「令状は?」

国家権力も無意味だった。

泣く泣く二人は退散。

は、せずに近くで話し合っことだ。

「以前よりガードが硬いな……」

「なんとか会社の中に入れないかな……」

二人を嘲笑うかのようにそびえ立つビル。

確実に何かがある。

そう思うといてもたってもいられない。

「裏口とかあると思っっ？」

「……………」

「……………翔太郎？」

「……ああ、悪い。あるんじゃないか？」

「なら、裏の方に回ってみよう」

「よし、任せた」

「は？」

「任せたって言ったんだよ。ほら行ってこい」

「ええええ!？」

無理矢理竜一人を裏口探索に向かわせる。

竜は何度か翔太郎の方を振り向いて首を傾げた。

一人残った翔太郎は街路樹を見つめる。

「……いるんだろ？出てこい」

街路樹の陰から、

神田蒼太が姿を現した。

「お前か……」。

やっぱりこの会社、何かあるみたいだな」

「いや、案外探偵つてのも鈍いな……」

「あ？ケンカ売ってんのか？」

「売ってるとも！」

俺にはもう……

後がないんだよ……！！！！」

『トリガー！！』

ロストドライバーを装着し、トリガーメモリを起動させる。

翔太郎もロストドライバーを装着する。

「ごちゃごちゃと何を言ってるんだか……」。

こっちは聞きたいことがごまんとあるんだ。

洗いざらい吐いてもらっぞぞ

『ジョーカー！！』

「「変身!!」」

その頃、竜は一人ビルの裏側に回っていた。

辺りに人気はない。

「好都合って言えば好都合だけど……不気味だな……」

非常階段を見つけ、どんどん登っていく。

足下から吹く風にビビりながらも、登ることはやめない。

「ああ……気が遠くなる……」

ふと、上を見上げた。

『マッスル!』

「は？」

見上げた途端、頭上から大きな何か階段を突き破って落ちてきた。

「うおおおおお!？」

ドズンッ!

階段の踊り場に落下。

倒れこむ竜の傍らに大きなドーパントが舞い降りた。

「くっ!!」

「ドーパント!?!」

「……………何者だ貴様ア……………」

ドーパントをにらみながら竜は起き上がる。

「……………やっぱり……………」

「でかいのが釣れたな……………」

『アクセル!』

「変……身……!」

Ｔとの決着／ラストチャンス（後書き）

左翔太郎探偵物語を書き始めてもうすぐ一年です。

オーズが終わる前に物語を完結させるつもりで始めました。

それが今ではもう全然……

まだ半分も終わってないっていうね……

2024

8月になれば二年目ということ、執筆スピードを上げて参ります
（^^^^）

ではまた次回にでもノシ

Tとの決着 / 死刑、強制執行（前書き）

今回は g d g d !

なにこれ………

Ｔとの決着／死刑、強制執行

5月18日 . . .

『アクセル!』

P M O : 4 7 . . .

「変…………身!」

アース・リフォーメーション裏口 非常階段 . . .

「ハッハア!!」

竜の変身を待たずにドーパントが襲いかかる。

それでも後転しながらドーパントの胸を蹴り上げ、踊り場の外に放り出す。

ドーパントは地面に勢いよく叩きつけられた。

「はっ！」

紅い閃光を纏い、アクセルに変身しながら飛び降りる。

「貴様ア……仮面ライダーだったか……」

「なぜドーパントがこの会社にいる？」

「ふんっ……答えると思うのか？」

「なら、無理矢理吐かせる……」

『エンジン！』

「はああー！！」

エンジンブレードを振り上げ、ドーパントに斬りかかる。

ドーパントが攻撃を避けると、ドーパントの右腕が急に膨れ上がる。

「ぬっっっあああああー！！」

ズンッ

巨大な右腕がアクセルを建物の壁ごと押し潰す。

「フハハハ！！」

呆気ない！！これが仮面ライダーか！？

ゆっくり、右腕を壁から離す。

見ると膨れ上がった右腕の拳に、
アクセルのエンジンブレードが柄まで深く刺さっていた。

「!? 何だと!？」

「なんだ……神経が麻痺してるんじゃないか？」

「バカな……俺の攻撃を耐えただと!？」

アクセルはエンジンブレードの引き金を引く。

「仮面ライダーはこの程度の攻撃でくたばりはしない!！」

『エレキトリック!！』

「ぐお!?!」

流れる電流に怯み、ドーパントが後退する。

しかしアクセルはエンジンブレードを刺したまま、もう一度引き金が引いた。

『エンジン!?!マキシマムドライブ!?!』

「はあああああ!?!」

紅い光の刃がドーパントの右腕を肩まで貫き、一刀両断した。

爆炎がドーパントを包み、ガイアメモリが弾ける。

ドーパントが人間体に戻ったのを確認し、アクセルも変身を解除。急いで駆け寄った。

ドーパントに変身していたのはスーツ姿の男。

気絶している内にスーツを探っていると、一枚のカードが見つかった。

「IDカード……この男のか……」

アース・リフォーメーションの社員ID。

この男が社員であることは間違いない。

「この件とミュージアムのライダーの件ならこの会」「何やってんだ!!」「?!?」

怒声に振り向くと、スーツ姿の男が立っていた。

おそらくこの男も社員だろう。

「け、警察を呼ぶぞー!!」

「いや待ってくれー!!」

竜はあわてて警察手帳を見せる。

「俺は警察ですー!!」

「……警察だと?」

内ポケットに手をつ突っ込みながら男は近寄ってくる。

「付近で怪物の目撃情報が……」

嘘の弁明をするが、男は歩みを止めない。

何かおかしい。

男の放つ妙な雰囲気警戒し、竜もしまったばかりのアクセセルドラ
イバーに手を伸ばす。

「こら、何をしている?」

「?」

また別のスーツの男が現れた。

何故かネクタイはしていないが、代わりにスカーフを巻いている。

スカーフの男に気づくとスーツの男は頭を深く下げた。

「君は下がっている」

「はい……」

先ほどの男と違い、スカーフの男は何かしら威厳が感じられる。

「部下が失礼しました。」

警察の方ですね？事件ですか？」

「あ、はい。」

えっと……あなたは？」

「申し遅れました。」

アース・リフォメーション副社長、園咲霧彦です。

「どうぞよろしく」

「おらあッ」

ズガンッ

「うおー!?」

青と黒の拳がぶつかり、二人のライダーは互いに吹き飛ばす。

「……あああー!!」

「……ッ」

今度は互いの顔面を捉える。

「ぐっ！」

「ブハツ……ハツ…ハツ…ハアアアアア！」

何度も転がってもトリガーは直ぐに起き上がり、

ジョーカーに立ち向かっていく。

「ちっ……」

えらく必死じゃねえか！！」

「うおおおおお！！」

雄叫びをあげながら拳を振るうトリガー。

その拳はジョーカーの頬を掠める。

その腕を掴み、防御のできない脇腹に膝蹴りを叩き込む。

「ぐっ！？」

さらに膝裏を蹴って姿勢を崩し、投げ飛ばす。

「あゝ ああっ！！」

アスファルトを転がるトリガーの首を掴み、街路樹に叩きつける。

「言え！お前らミュージアムの狙いは！？」

何故街の人を傷つける！？」

「はっ……………」

質問が多いな！！」

ドンッ！

「ぐっ！？」

ゼロ距離でトリガーの銃撃を受け、ジョーカーは後ずさる。

そこにトリガーは何発も銃弾を撃ち込んだ。

「今日こそは仮面ライダー！」

お前を殺す！！」

ドライバーのトリガーメモリを抜き、マグナムに装填しようとする。

「させるか！！」

前転で距離を詰め、マグナムのグリップを蹴り上げた。

二人の頭上をトリガーマグナムが舞う。

「てめえ！！」

吠えるトリガーの顎に掌底を打ち、ボディブローを撃つ。

が、ボディブローを防がれ、逆に顔面にパンチを喰らう。

「ぶぶっ…!!」

今度は踏ん張り、トリガーの顔面を殴り返す。

お互い引き下がらず、何度も何度も殴り合う。

殴り合ううちに、宙を舞っていたトリゲーマグナムが二人のもとに落ちてきた。

二人は素早く反応して手を伸ばす。

ジョーカーの指が銃身に当たったが、トリガーがしっかり受け止めた。

「くそっ!!」

「おりゃああー!!」

ジョーカーの胸を蹴りつけ、その反動で後方に跳躍。

着地するまでに何発も銃弾がジョーカーに撃ち込まれる。

「ぐっ……うおおあー!!」

銃撃に耐え、トリガーに飛びかかる。

二人は転がり、道路へ飛び出した。

立ち上がり、再び殴り合う。

その時、

キキイイイ!!

「ん？」

ドンッ

「おわっ！！」

道路を走ってきたパトカーに激突。

二人まとめて吹き飛んだ。

「っっあゝ……………」

邪魔をすんじゃないよ！！」

トリガーはパトカーから降りた警官に銃口を向ける。

「止める撃つな!!」

トリガーマグナムを抑え、トリガーの右肩に肘撃ちをする。

「……………はっ。」

どうした？今日は逃げないのか？」

「……………逃げれるわけねえだろ……………」

俺にはもう……………後はないんだよ!!」

再びぶつかり合い、近くの用水路に転落する。

その様子を見ていた警官たちは急いで無線機を取った。

「し……至急応援を…至急応援お願いします!!」

二人の仮面ライダーが……交戦しています!」

用水路で水飛沫を上げながらジョーカーはトリガーに飛びかかる。

「後がないだと?」

「どういう意味だ!?!」

「文字通りだ!!」

「こちらら命かかってんだ!」

そう叫びながらジョーカーを殴り飛ばす。

「わかるか？任務しくじったら消されるこの気持ちが！！」

ジョーカーが起き上がる前に蹴り飛ばす。

ボールのように弾み、橋に激突して水面に叩きつけられる。

「……………ぞけんな……」

「あ？」

痛みをこらえ、ジョーカーは立ち上がる。

「殺されそうな気持ちかわかるかだと？」

お前らが言っている台詞じゃないだろ……?」

「つつるせえ!!」

トリガーは拳を振り上げる。

それをジョーカーはがっちりと掴んだ。

「…………お前らミュージアムのせいで……」

どれだけの人が死んだ!？」

拳を払い、トリガーの顔面にハイキックを浴びせる。

「どれだけの人が傷ついた!？」

よろめくトリガーに膝蹴りで追い討ちをかける。

「どれだけの人が涙を流した!？」

最後にアッパーを撃ち、トリガーは倒れこむ。

「お前に倒されるつもりも、許すつもりもねえ!

刑務所にぶちこんでやる!！」

「……負けて……たまるかああ!！」

『トリガー! マキシマムドライブ!！」』

後転してジョーカーと距離をとり、トリガーマグナムを構える。

ジョーカーも駆け出しながらメモリをマキシマムスロットに装填する。

「死ねええ!!」

トリガーが引き金を引く瞬間

ジョーカーは発光する右手でトリガーマグナムの銃口を塞いだ。

「なっ……………」

ズドオオオン!!

「ぐああああ!？」

銃口を塞がれたトリガーマグナム内でエネルギーは行き場を失い、

エネルギーを抑えきれず暴発した。

トリガーマグナムは砕け、トリガーマモリが弾き出される。

「うあっ……あっ……あああー!!」

右手を抑えながらトリガーはのたうち回る。

「てめえ!!よくも!!」

トリガーマモリを拾い、ドライバーのマキシマムスロットに挿した。

「まだまだ………終わりじゃあねえぞ!!」

『トリガー!マキシマムドライブ!!』

絶叫と電子音とともにトリガーを青い光が包む。

ジョーカーも落ち着いてマキシマムドライブを発動させる。

「ミュージアム、神田蒼太！」

『ジョーカー！マキシマムドライブ！！』

「さあ、お前の罪を数えろ！！」

トリガーは猛スピードでジョーカーに迫り、飛び蹴りをする。

「……………遅い！！」

トリガーのマキシマムドライブが当たるより一瞬早く、

ジョーカーは飛び回し蹴りをトリガーにぶつけた。

何も雄叫びなどをあげることなく、静かに水面に伏した。

そしてロストドライバーだけが弾け、変身が解除される。

ジョーカーはトリガーメモリを拾い、神田のもとへ行く。

「あとは……刑務所で罪を数える……」

P M 1 : 3 2 - - -
関東拘置所面会室 - - -

刃野は今日もここに来ていた。

面会するのは勿論……

「なんだ、またあなたか……」

囚人923番。

彼は席に着くとガラスの向こうの刃野に視線を向ける。

「そろそろさあ……五年前に何があったのか

教えてくれないかな？」

「五年前に供述した通りだ」

「それだとおかしいんだって」

刃野は手帳を取り出し出しページを捲る。

「五年前の供述ではお前は無抵抗の社員を暴行、殺害したことになってる。」

会社側の主張もそう述べてるが……」

「なら、そうなんじゃないのか？」

「じゃあ聞くが、あの時お前は重傷を負ってたらしいな？」

無抵抗の人間を殺すのに何故重傷を？」

「足を滑らした。」

それだけだ」

「こっちはお前の経歴も調べたんだ。

お前はそんなことでアバラを折るような奴じゃない」

「なんだ、アバラ折ったことまで知ってるのか」

「ああ。

お前の恋人がディガル・コーポレーションに勤めていたこともな」

突然、923番は立ち上がりガラスの向こうの刃野に迫った。

「何故お前がマリアのことを……………!?!?」

「俺は刑事だ。」

調べればこれくらいのごときは簡単に突き止められる」

刃野は手帳を閉じ、ガラスの向こうの923番に視線を向ける。

「俺の推測だが……」

マリア・S・クランベリーはディガル・コーポレーションに勤めていた。

2054

が、その会社でなんらかの事件が起き、

彼女は灰となって死んだ。

それをお前は知ったから事件を起こした。違うか？」

923番の返事がかえってくる前に刃野の携帯が鳴った。

「つと失礼。
もしもし？」

ああ、真倉か。

何？ミュージアムの一員を捕まえた!？」

驚く刃野の様子に923番も驚いたような表情を浮かべる。

「ああ、

よし、俺もこっちの用を済ませたらすぐに戻る」

携帯をしまつと923番に向き直る。

「さて、どこまで話したっけ？」

「行かなくていいのか？」

「……………は？」

「急ぎなんだろう？」

俺は別にここから逃げたりはしない」

「お前何言って……………」

「次あんたが来たとき、全部話してやる」

「本当か……………？」

「わかったら早く行けよ」

一瞬、どうしようか迷ったが、923番を信じて刃野は面会室を出る。

ほんの少しだけ923番は微笑んだ。

彼らがここで出会うことは二度となかった。

P M 7 : 5 3 . . .
風都警察署取調室 . . .

「どつだ照井？」

「駄目ですね……」

何も話しませんし、言われた通り自白剤使ってもまったく……」

ミュージアム、神田蒼太が逮捕されて数時間。

取り調べが行われているがまったく進展はない。

「自白剤使っても何も吐かないとなると、

やはり特別な訓練を受けてたんでしょうか？」

「……かもな。」

だが時間をかければいずれ吐き出す。

それよりも問題は別にある」

「問題？」

真倉は小さな声で竜に耳打ちする。

「お前、探偵呼べるか？」

「翔太郎ですか？」

呼べますが………

「一体どうして？」

「処刑人ドーパントが現れるかもしれないからだ。

一応九条に署内や外に警官たちを配置するように言ったが……

万が一ってこともある」

「わかりました。そういうことなら呼んでおきます」

竜は携帯を取り出しながら取調室を出る。

竜と入れ替わるように九条が入ってきた。

「真倉さん、警官隊の配置完了しました」

「そうか……」

「それから……照井さんが検挙したアース・リフォーマーシヨンの社員ですが、

まだ意識が回復していません」

「そうか、ならそつちにも護衛をつける」

「はい！」

九条はあわただしく取調室を出ていった。

それから一時間、音沙汰なく取り調べが行われた。

しかし進展はなかった。

そして警備に飽きた警官も出てくる。

「つたく……本当に化け物なんか来るのか？」

「だいたい化け物相手に俺たちが敵うわけないのに……」

そつばやく警官たちの後ろを一匹の猫が通りすぎていく。

誰も猫に気づかず、警備を続ける。

瞬く間に猫は風都署に入り込み、中を自由に歩き回る。

まるで散歩のように署内を歩く。

猫が行き着いたのは風都警察署の留置所。

周りに人がいないのを確かめ、猫は背負っていたものを器用に前足で掴む。

そしてそれを前足で思い切り叩く。

『スミロドン!!』

今度は前足で自分の首輪まで持ち上げる。

そして小さな猫は光に包まれ、大きな牙を持つスミロドン・ドーパントへと変貌した。

「フシャアアア……」

目の前の扉を蹴破り、中に入る。

ゆっくりと、薄暗い留置所を進む。

「よお。」

やっぱり来たか」

「!？」

スミロドンのすぐ隣に、警官が一人気配を消して立っていた。

警官は何かを転がす。

ボッシュッ!!

「!？」

転がったものから閃光と耳を塞ぎたくなる音が響く。

その閃光を紅い閃光が覆った。

『アクセル!!』

「ぬづらああ!!」

ドオオオン!

留置所の壁を突き破りスミロドン・ドーパントとアクセルが転がる。

途端に、署内に警報が響き渡る。

『署内に侵入者を発見。』

場所は留置所前廊下。

急行せよ』

警報が鳴る間、さらに壁を突き破って外へ転がり出た。

アクセルは素早く起き上がり、エンジンプレードで斬りかかる。

「高速移動の前に潰してやる!!」

逃げられないようにスミロドンとの距離を詰めながら攻める。

対するスミロドンは距離を取ろうと後退し続ける。

やがて後退を続けていたスミロドンの背中は壁にぶつかった。

これ以上はさがれない。

『エンジン！マキシマムドライブ！！』

「ぜああああー！！」

動きを止めたスミロドンにアクセルはマキシマムドライブを放つ。

「ヴウウー！！」

スミロドンは後ろの壁に爪を立て、

逆上がりの要領で体を持ち上げ、マキシマムドライブを避けた。

「何!？」

スミロドンは壁を蹴ってアクセルに体当たり。

押し倒すと留置所の方へ走って行く。

「!!! しまった!」

スミロドンが目指すのは留置所。

その入口の前には警報を聞いて駆けつけた警官たちが銃を構えている。

「撃てえ!!!」

合図で一斉に発砲。

だがスミロドンに掠りもせず、超高速で避けられる。

「は……………」

「早すぎる…！」

すべての銃撃を避けたスミロドンは最前線で発砲していた警官の前に立つ。

「まずいぞおい…！」

「そこのお前！逃げろ…！」

警官たちが必死で叫ぶ。

しかし当の本人はドーパントを目の前にして怯え、全身が震えて身動きが取れない。

「くそっ!!」

アクセルが止めに入ろうと駆け出す。

が、距離が離れている。

確実に間に合わない。

多くの警官とアクセルの目の前で、スミロドンは腕を振り上げる。

「ゲルウアアアア!!」

「やめろおおおおお!!」

ブオオオオオン！！

けたたましい爆音に警官たち、スミロドン、アクセルの視線が音の方に釘付けになる。

見ると、黒いバイクとそのライダーが高い塀を飛び越えてきた。

全員が呆気にとられる中、スミロドンにバイクが激突する。

「ヴウツ！？」

スミロドンを吹き飛ばすと、バイクは動けずにいた警官の前で停車する。

「か…仮面ライダー…？」

「よお、ギリギリ間に合ったっばいな」

駆けつけたジョーカーの複眼が闇夜で赤く輝く。

ハードボイルダーから降りるとスミロドンの方を向く。

「久しぶりだな。」

「お前も刑務所にぶちこんでやるのか？」

二人はにらみ合い、姿勢を低くして身構える。

「ガアアッ！」

先に仕掛けるのはスミロドン。

目にも止まらぬ速度でジョーカーの首を狙う。

「ふっ！」

ジョーカーは上体を反らして避ける。

そのまま後ろに倒れ込みながらスミロドンの腹を両足で蹴り上げる。

『ジエツト!!』

「はっ!!」

スミロドンの体が浮いたところにアクセルが斬撃を撃ち込む。

あまりの衝撃にスミロドンは吹き飛んだ。

「今だ！撃て！！」

タイミングを計って警官たちがもう一度発砲。

今度は避けられることなく全弾命中する。

「撃て！！撃ちまくれ！！」

銃声と葉莢が落ちる音だけが響く。

やがて弾を撃ち尽くし、銃撃が止む。

隙を与えないために

ジョーカーとアクセルはメモ리를 マキシмум スロットに挿しながら

走る。

『ジョーカー!』

『エンジン!』

『『マキシマムドライブ!』!』

「行くぞ!」

「ああ!タイミング合わせろ!」

二人は同時に飛び上がる。

「.....あ?」

「……なんだこれ？」

二人はスミロドンに飛びかかったはずだった。

だが二人の体は地に着かず、

何故か浮いたまま。

「グルルル……………」

宙に浮いたまま動けない二人を尻目にスミロドンは塀を飛び越えて姿を消した。

「あっ！待てよ！」

「っつて、うお!?!?」

突然二人は落下した。

何が起きたかわからず辺りを見回す。

辺りには警官がいるだけで何も無い。

ただ風が吹き抜けるだけ。

「逃げられた……」

「……けど、奴の目的は阻止できた……」

「ぼさつとするな!!」

現状を確認しろ!」

大きな声で真倉が叫ぶ。

二人の仮面ライダーを気にする者もいたが、無理矢理真倉が引き上げさせた。

「おい、いいのか?」

「何が?」

「マツキーの奴、無理矢理引き上げさせてたけど……」

「俺たちに配慮してのことだ」

二人は変身を解除する。

「……………なんか、騒がしくないか？」

「……………そういえば……………」

耳を澄ませると警官たちの叫び声が聞こえる。

二人は顔を見合せ、騒ぎの方へ走り出した。

そんな二人を遙か上空で、
マフラーをはためかせながら見下ろす赤い目が瞬いた。

15分前 - - -

「…………騒がしいなあおい…………」

神田は一人、留置所で横になっていた。

死んだ魚のような目で。

「俺どうなんのかな……………」

冷たい床で横になる。

ちょうどこの時、スミロドンが攻めてきて人が出払っていた。

故に神田一人だった。

「ああ……なんか面倒くさ………」

一人ぼやいていると、どこからともなく牢の向こうに人影が。

「……誰あんた？」

特に驚く様子もなく訪ねるが、牢の向こうの人物は黙ったまま。

カンッ

妙な金属音が牢に響く。

と、牢の柵が紙のように斬れた。

「は!?!」

さすがにこれには驚いた。

その人物は牢の中に入ってくる。

そこでやっと何が入ってきたのか、神田は理解した。

「お前……あの時の……」

神田は後ずさるが逃げ場はない。

その人物は大きな鎌を取り出す。

それを見た途端、どこか諦めたように

「……………はは、殺れよ。」

「ちよんじいからな……………」

『……………！』

『マキシмумドライブ……！』

「……あああああああああああ！あああ！あああ！」

Tとの決着 / 死刑、強制執行（後書き）

今回ようやくトリガーが退場しました。

長い………

これからは色々な奴が退場したりしなかったり………

強襲のM/今回の狙いは…(前書き)

どーも皆さん、お久しぶりです。

今回は………まあ、いつも通りダメな感じでお送りします

強襲のM／今回の狙いは…

5月19日 - - -

「まったく、何をやっとなんだ!!」

AM7:02 - - -

「申し訳ありません……」

風都警察署署長室 - - -

そして署長室前廊下 - - -

「刃野さん、絞られていますね……」

「あの人が悪いわけじゃないんだけどな……」

刃野が署長に絞られている間、真倉と九条は廊下で待っている。

「……でも、変だよな……」

「何がです?」

「留置所の監視カメラには警官以外だれも出入りしていない。

でも死神は留置所にいた。
どうなってんだ?」

「一体どうやって中に……」

「それにミュージアムの一員が捕まった情報をどこで……」

「私も気になることがあるんですが……」

「ん？」

「仮面ライダーのことです」

「仮面ライダー？」

「あの黒い仮面ライダーと最近目撃情報の増えた紅い仮面ライダー、

どちらも死神と同じように現場にいたんですよ？

情報は漏れていないはずなのに」

「いや、まあ……」

まさか身内が仮面ライダーと言っわけにもいかず、
真倉は頭を掻く。

「そして真倉さん、あの時無理矢理警官を引き上げさせてましたよね？」

それって仮面ライダーに配慮してたんじゃないんですか？」

「うえ！？」

予想外の質問に変な声がでる。

「推測なんですけど、仮面ライダーの正体を真倉さんは知ってるんじゃないですか？」

そして身内だから配慮している

違いますか？」

まったくもってそのとおりである。

しかし答えられないので黙るしかない。

「教えてください！」

仮面ライダーって誰なんですか!？」

「声大きいぞ」

署長室の扉が開き、刃野が出てきた。

「刃野さん！」

「俺たちどうなるんですか？」

「お前たちはどうもならん」

「お前たち………は？」

「俺が減俸処分だそうだ」

「「なんでですか!？」」

「監督責任だ」

「監督………って……」

あの時は俺が………」

「もういいから、減俸で済んでよかったよかった。」

……で、照井はどうした？

「照井さんなら用事があるって、」

早くに出かけましたよ」

AM 7 : 35 - - -
園咲家 - - -

『どうかしたんですか？』

『何が？』

『左さん、元気ないみたいですけど……』

『メールじゃわからんて……』

『わかりますよ！』

『なんとなくですけど』

『まあ……間違っではないかな……』

『よかったら相談のりますよ？』

『人に話せるようなことじゃないから……』

『これからまた仕事なんでこの辺で。』

『そうですか…』

『それじゃまた！ノシ』

「むじ……………」

若菜は少し残念そうに携帯を閉じる。

だがすぐに笑顔になり、朝食にがつつく。

その様子を来人は険しい顔で見っていた。

「若菜姉さんと左翔太郎との関係が縮まっている……」

だから数値に変化がでたのか？

もしかしたら若菜姉さんだけなら……」

ポケットの中のXのメモリを取り出す。

「……あとはどう利用するか……」

「何をぶつくと言っとなるんだ？」

突然琉兵衛が来人の顔を覗きこんできた。

「うおお……父さん脅かさないでよ……」

「早く朝食を食べてしまいなさい」

「はい……」

ナイフとフォークを握って皿を見る。

「……………ん？」

皿には何故かナマコが。

特に調理された形跡もない。

包み隠さずナマコだ。

「なんだこれは……」

ふと、何者かの視線を感じて振り返る。

そこには文音がいた。

凄くこちらを見ている。

「……………」

苦手なナマコを克服して欲しいのかも知れないが、こんなんで克服できるはずがない。

空腹と母の視線を我慢して来人は部屋を飛び出した。

「……………なんなんだアレは……………」

「ギニャッ!?」

「ん？」

あ、ごめんよミック！」

足下で転がっていたミックの尻尾を踏んでしまっていたようだ。

あわてて抱き抱えて尻尾を優しく撫でる。

「フシャアアア……！」

「機嫌直してよ……」

でないともう助けてやらないぞ？」

「シャアアアア！」

…………！」

ふとミックは階段の方を向く。

来人も向くと、坂下と金堂が登ってきた。

「……………おや、案外早い到着だね」

「タイムリミットだって言われたら誰だって……………ねえ？」

AM 8 : 0 1 - - -
左探偵事務所 - - -

「もう、いつまでへこんでんの!?!」

掃除機をかけながら亜樹子は大声で翔太郎に呼び掛ける。

が、まったく話を聞いていない。

「翔太郎君のせいじゃないって!」

翔太郎は窓の外をボーッと眺めている。

「もう綺麗さっぱり忘れなよ!」

「へこんでねーよ」

「………うつそ? テンション低いじゃん!」

「お前が朝からうるさいからな」

亜樹子を黙らせると朝刊に手を伸ばす。

昨日の風都署の事件については何も書かれていない。

まあ当然と言えば当然だ。

「……………なんか重要なことを見落としてる気が…」

「何のこと？」

「亜樹子っさい」

「教えてくれたっていいじゃん！」

「……………お前さっき忘れろって言ってなかったか？」

コンコンッ

「！！
翔太郎君！」

「まあ、本業をサボるわけにはいかねえよな……」

扉を叩く音に二人は身構える。

そしてゆっくりと扉は開かれた。

入ってきたのは青年が一人。

「ダッシャアアアア！」

亜樹子は青年の顔とか確認せずに飛びかかる。

が、青年は半身になって避けた。

「うっそおおおおお！？」

勢い余って亜樹子は断末魔をあげて転がっていった。

「……………えっと……………」

「ここは探偵事務所であつてるかな？」

「……………あ、ああ。」

確かに探偵事務所だ。

ってことは依頼人……だよな？」

「ああ、よかったよかった……」

青年は安心したのか胸を撫で下ろす。

「俺は禍木っていうモンだけど、ちょっと探して欲しい人がいるんだ」

「人探しか……」

あ、どうぞ座って

「お、どうぞも」

禍木と名乗る青年は翔太郎に促されるまま、ソファに腰をおろす。

温かいコーヒーを出すと翔太郎も向かいに座る。

「それで……………依頼についてだが……………」

「ああ、それなら……………」

「この人だ」

禍木はポケットから写真を取り出した。

「名前は三輪夏美。」

「俺の同僚だ」

「同僚？」

「そう。」

先日上司と揉めて、飛び蹴り浴びせてから行方知らずだ」

「なかなかアグレッシブな女性だな……」

「……で、上司ももう許してやるから探してこいって言われたんだが……」

どこに行ったのやら……」

翔太郎はコーヒを一気飲みすると入り口の扉を開ける。

「おい亜樹子、起きろ。」

お仕事だぞ」

「…………あ…………あい……」

…………あ…………あー」

ゾンビのように床を這いながら亜樹子は右手を挙げる。

「あ、禍木…………さんだっけ？

もう少しその同僚のこと教えてくれるとありがたいんだが……」

そう言って亜樹子の首根っこを掴んで再びソファーに腰をおろした。

「じつらです」

社員に促され、竜は社長室に入る。

中には霧彦が窓際に立って待っていた。

「お待ちしておりましたよ、刑事さん。」

「さあ、どうぞお座りください」

「あ、はい！失礼します」

竜が座ると霧彦はすぐに紅茶を用意し、テーブルに二人分置いた。

そして竜の向かい側に座る。

「……さて、刑事さんの「質問にお答えする」ということでしたが…

なんでも構いません、どうぞ」

「……それじゃあ、あなたは……副社長なんですよね？」

「ええ、その通りです」

「あの、社長は……」

「ああ！」

まだ言っていないでしたね。

社長は支援してくださっている企業との交渉の準備で時間が作れなかったのです」

「交渉？」

「ええ。」

なんせ交渉の相手が社長にとって苦手なんだそうで……」

「そうですか……」

差し出された紅茶を一口だけ飲む。

かなり甘い。

その様子を察知したのか

「刑事さん、アールグレイは苦手ですか？」

「いや、そういうわけでは……」

「もしかして……コーヒーの方が良かったとか!？」

「いえ!あまりにも美味しい紅茶だなと……」

「そうですね。なら良かった」

そう言って霧彦も一口だけ飲む。

少しばかり空気が和んだところで竜が切り出す。

「……それで、お聞きしたいのはですね……」

ポケットから一枚の用紙を取り出す。

「……………これは？」

「以前この会社で起きた二つの事件で死亡、あるいは行方不明となっていた社員のリストです」

霧彦は手にとってゆっくりと確認する。

「そのリストの赤峰百合、金堂菜月、神田蒼太、坂下銀次ですが、

つい最近、姿が確認されました」

「……………え？」

「うち二名は死亡していますが……全員ガイアメモリ関連の事件に
関与しています」

「ガイアメモリ？」

霧彦は理解できないといった表情だ。

「ガイアメモリというのは人を化け物に変えてしまう恐ろしい代物
です」

「そんな代物にうちの元社員が……」

「それに加え、以前この会社で起きた二つの事件もガイアメモリが
関連しています。」

そして昨日逮捕した社員もガイアメモリに手を出していました」

「まさか……………」

霧彦の表情は先ほどと違い、驚いている様子だ。

「それで、副社長であるあなた。何か知っているのでは？」

「……………は？」

「あ、いや、別に疑っているというわけではなく……………」

竜はしどろもどろになりながら必死で取り繕う。

真剣な様子で霧彦も見ていたが、
だんだん可笑しくなったのか突然吹き出した。

「そんなに慌てなくても大丈夫ですよ。」

ただ、私は何もわかりませんね」

「そう……ですか…」

大変失礼しました」

「力になれなかった私が悪いのですから謝らないでください」

二人は紅茶を飲み干し、互いに頭を下げる。

それからほどなく、竜は社長室から出ていった。

「副社長、失礼します」

一人の社員が社長室の扉を開ける。

「久遠くんか……………」

「あの男、警官ですよね？」

「そうだ」

「始末しなくてよろしいのですか？」

「それには及ばない。」

思ったより無能そうだからね」

社員の久遠は腕時計を見る。

「……………っと、そろそろ時間です。」

支度は早めにお問い合わせしますよ」

「ハイハイ……………」

霧彦が上着を取ると、丁度会社を出る竜の姿が見えた。

思わず手を止めてしまつ。

「佇まいは……………ただの警官ではなさそうだな……………」

「副社長、何か言いました？」

「いや、なんでもない」

上着を羽織り、二人は社長室をあとにした。

AM 10:31 - - -

喫茶店『ウィンドガーデン』 - - -

「あれから依頼の人物を探しているがどうにも見つからねえ。

そこで情報屋のクイーン & amp・エリザベスに」

パコーーン

「久々につっこむけど独り言とか痛すぎるからね!？」

久々の翔太郎の語りに亜樹子のつっこみが久々に炸裂する。

叩かれた箇所を擦りながら女子高生の情報屋二人に視線を向ける。

「なあ、そろそろ情報教えてくれよ?」

「「.....」」

「この間の生放送の応援行かなかったのは申し訳ないって反省してるから!」

どうやら二人は怒っているらしい。

まったく目を合わせようとしない。

「参ったな.....」

頂垂れてテーブルに視線を落とす翔太郎。

隣の亜樹子は前傾姿勢になって

「お願い！ちょっとのことでもいいから！..」

「「いいよ..！」」

「ええ.....!？」

避けられ方が半端なさすぎて文字通り翔太郎はひっくり返る。

「そんなに!?!そんなに俺に話すのいや!？」

「なんでもね、その三輪って人、」

「オフィス街で目撃情報が多いよ！」

「無視かよ!?!」

そんなリアクションも無視。

そして亜樹子からも無視。

嫌気がした翔太郎はふらふらと店を出ていく。

「なんでこんなに嫌われなきゃならんのだ……」

ふらふらふらふら歩いていると、

「あれ、探偵さんじゃん」

声に反応して振り返ると依頼人の禍木が。

「あ、どうも。」

こんなところで何を？」

「夏美探してんだけど、パトカーが気になって……」

「パトカー？」

ショックで気づかなかったがパトカーが走っている。

そしてすぐ近くに停まっている。

「なんか事件かな……？」

パトカーが停まっているところから少し視線をずらすと、

銀行が。

「……………おっと?」

嫌な予感がする。

銀行の前に機動隊が乗っているであろう大型車両も停車した。

「いやいや……………まさか……………」

翔太郎は銀行の方へと走る。

「あっ、ちよっ、待って!」

禍木もあとを追って走り出す。

AM 10:44 - -
風花町一丁目 - -

『……………というわけだ。』

照井、お前も風都銀行に応援に行け』

「わかりました。」

刃野さんは？」

『俺も真倉も九条も応援に行く。』

『多分お前より早く着くだろうから指示は着いてからだ』

「了解。急行します」

風都署に戻る途中だった竜は方向を変え、アクセル全開で向かう。

渋滞の中、器用に車を避けて走る。

が、一台のバイクが信号を無視して走り去っていった。

「おいおい、マジか!?!」

もう一度方向を変える。

「急いでるからって見逃すわけにはな……」

信号無視のバイクを追跡する。

と、そのライダーは竜の方を向いた。

そして中指を立ててスピードを上げる。

「ははっ……ブタ箱送りだ!!」

竜も負けじと加速させる。

「そのバイク!! 停まりやがれ!!」

バイクは停まらず、狭い路地へ入っていく。

当然竜もあとを追う。

それからすぐにバイクは停まった。

竜も白バイを停める。

「そのの！信号無視したろ！」

竜が白バイから降りると相手もバイクから降りる。

そしてヘルメットを外す。

「！　女…？」

信号無視したライダーが女

そんな事実を気にとられた瞬間、背後のビルの壁が突然崩壊した。

「！？」

先ほど通ってきた路地を崩壊した壁が塞ぐ。

「……………お前だな？アクセルは……………」

素早く反応し、身構えると壁の崩れたビルから一人の男が表れる。

「なんだお前！？何をした！？」

「あ？」

ああ、最初っからお前を誘い込むために用意しといたただけだ。

まさか本当にこんな誘いで釣れるとはな」

「なん……………」

待て、お前坂下銀次か!？」

竜の目の前の男は間違いなくミュージアムの一人。

後ろの女ライダーにも視線を向ける。

「金堂菜月……………」

なるほど。今回は俺が狙いか!？」

「今気づいたのかよ」

目の前の坂下、背後の金堂は同時にロストドライバーを装着する。

竜も素早くアクセルドライバーを装着する。

「こんな間抜けがアクセルかあ……」

「その間抜けにお前らは捕まるんだよ」

『ルナ!!』

『メタル!!』

『アクセル!!』

AM 10 : 44 - -
風都銀行前 - -

銀行の前には警官だけでなく野次馬も集まっている。

その中に翔太郎たちもいた。

「ちょっと探偵さん！」

こんなところに何の用があるんだよ!？」

確かに翔太郎がここに来る必要はないが、
行かないわけにはい
かない。

そんな衝動に駆られ野次馬の中に紛れ込む。

翔太郎は大体察しがつくが現状を把握するために野次馬を一人捕ま

える。

「なあ、そのあんた！

何があつたんだ？」

「銀行強盗だつてさ。

しかも人質とつてるんだつて」

「銀行強盗……やっぱりそんな展開か……」

予想通りの展開に思わずため息が出る。

すでに機動隊が銀行を取り囲み、玄関前には刑事と思われる人物が拡声器を持って立っている。

「犯人に告ぐ！！お前らは包囲されている！！」

馬鹿なことはやめて人質解放して出てこい！！」

ドラマでよく聞く台詞を刑事が吐くと、

銀行の玄関のガラスに犯人らしき人物が姿を見せた。

右手には拳銃、左手で人質の女性を抱えている。

その光景に野次馬は動揺し、ざわめきが起こる。

「ひっ、人質を解放しろ！」

犯人は人質の頭に銃を突きつける。

さらに野次馬がどよめく。

さすがに警官たちも落ち着いてはられない。

「よ、要求はなんだ!？」

野次馬の中の翔太郎にも要求を叫ぶ犯人の様子が見てとれる。

「うーん……ドーパントって感じでもな…

まあ、念のため……」

「ちよっ、ちよっと探偵さん!!」

突然隣の禍木が翔太郎の腕にしがみついてきた。

何故か慌てている。

「何!?!いきなり何!?!」

「いや、あれ！」

禍木は銀行の玄関の方を指差す。

「あれって……………」

「夏美だよ！行方知れずの！」

「……………ああ！！」

人質の女性を指差して絶叫する翔太郎の声だけがこだました。

強襲のMノ今回の狙いは…（後書き）

8月の実家で夏休みです。そーです。執筆サボってました！

サボってる間に一周年だしオーズは終わるし……

フォーゼが終わるまでにはこの話が終わるようお願いながら執筆していきます。

それでは（．．．）ノシ

強襲のM／見解の相違（前書き）

お久しぶりであります。

今回もやっつけ仕事！！

それでもおkという方のみ閲覧してくださいませ。

それではどござー！

強襲のM／見解の相違

5月19日 - - -

「うっそ！？マジか！？」

AM10:50 - - -

「どーすんだよ探偵さん！！」

風都銀行前 - - -

「いやいやいやいや！？」

「なんであんなところに！？」

犯人の抱えている女性は何度見ても依頼の捜索対象、三輪夏美だ。

その光景に周りの野次馬が引くくらい騒ぐ二人。

「どーすんだよ!?!どーすんだよ!?!」

「あああ、ちょっと待って!

知り合いの刑事探してくる!?!」

野次馬を押し退けながらひたすら周囲を見回す。

と、パトカーの近くにいる刃野を見つけた。

「刃さん!!刃さん!!」

「……………ん？」

「刃さんこつち！！」

「おお、翔太郎。」

「何してんだお前？」

「ああ……………つと……………」

「今俺は依頼で人を探してて…」

「おお…」

「その探し人があの人質の女性なんだ！！」

「えらいこつちやだな」

「いや、何を冷静に……」

「お前はあれだろ？」

人質助けたいんだろ？

けどな、俺は今回応援で来てるからお前のわがまま聞いてられん」

2143

こんな短い会話でいたい察する刃野に流石と言いたげな翔太郎だが、

このまま引き下がるわけにはいかない。

「頼むよ！そこをなんとか……」

「俺たちだって人質助けたいんだからさあ、任してくれよ」

「っ……………！」

拳を握りしめ、翔太郎は踵を返していく。

そんな翔太郎に刃野は

「そうだ。翔太郎、照井知らないか？」

「……………竜？」

「裏口に配置するつもりだったんだが……………見つけたら言っといでくれ」

「……………」

！
わかった、伝えとく！！」

意気揚々と刃野に手を振り、翔太郎は禍木のもとへ戻っていく。

「あ、探偵さん。」

「どこ行くんだよ？」

「え？ああ、裏口」

そう言うと翔太郎は禍木を置いて人混みの中を進みだした。

禍木も翔太郎のあとを追う。

AM 11:00 - -

風花町二丁目 - -

「ぐああっ!?!」

アスファルトの上をアクセルが転がっていく。

その頭上にシャフトを振り上げたメタルが飛び降りてくる。

「ぬうああああー!!」

「くっ!!」

両手を交差し、重いシャフトの一撃を受け止める。

衝撃でアスファルトに亀裂が入る。

「はっ!! どうした？」

逮捕するんじゃないかったか？」

「……………だったらおとなしくしろっ!!」

がら空きになったメタルの腹部を蹴りあげ、後転して距離をとる。

エンジンブレードはアスファルトに転がったまま。

それを確認するとエンジンブレードに飛びつく。

それより早くルナがエンジンブレードを蹴り飛ばした。

「あっ!？」

宙を舞うエンジンブレードに目を奪われている隙に、
顔面にメタルがシャフトを叩き込む。

「ぶっ……!？」

二、三度跳ねながら壁に衝突した。

倒れたアクセルのすぐ目の前にエンジンブレードが突き刺さる。

「……こんなもんじゃないだろう？」

「手え抜いてんのか？」

メタルはシャフトをアスファルトに突き立て、それに寄りかかる。

「まあ、任務が楽に済みそうだからいいか……」

メタルが構えを解いている間に起き上がろうとするも、

ルナが背中を踏みつける。

その力は変身態とはいえ女性のものとは思えない。

「……………同情はするけどな」

「……………同……………情……………？」

「ああ。これ以上虐めたくもないしな。

だからもう抵抗するな」

『ルナ！マキシマムドライブ！！』

ルナは左手でアクセルの首を掴んで持ち上げる。

そして右手を発光させながら振りかざす。

「……………まだ……………」

消えそうな声で呟くと、アクセルはルナの右肩を蹴りつけた。

さらに胸も蹴りつけると宙返りで間合いを広げてエンジンブレードを抜き放つ。

「殺られてたまるかよ」

再びエンジンブレードを構えると

メタルはシャフトを掌で回し、両手で持って構える。

「……まだ元気だったか……」

対して、ルナは構えを解いてフラフラとメタルのもとへ行く。

そして身ぶり手振りでメタルに何か伝えた。

「……………そうか……………なら、ちょっと下がってる」

突然アクセルの視界からメタルが消えた。

「!?!?」

驚いていると視界が僅かに暗くなる。

「上か!?!」

そう叫ぶのと同時にエンジンブレードを振り上げた。

メタルの振り下ろすシャフトとぶつかり、火花が飛び散る。

「おらあ!?!」

メタルは空中で体を捻り、さらにシャフトを振るう。

それをしゃがんで避けるとエンジンメモリを装填し、引き金を引く。

『ジエツト!?!』

メタルの着地するところを狙って斬撃を放つ。

が、メタルはシャフトでビルの壁を突いて宙を転がって斬撃を避けた。

「くそっ！」

悪態をつくアクセルを舞のような攻撃で攻めるメタル。
その勢いは止まらない。

「っ……………！」

「もう終わりかっ!?!」

メタルが足払いをしてくる。

それにタイミングを合わせてエンジンブレードで受け止めると、

『エレクトリック!』

「うっ!？」

電流にメタルが怯むとシャフトを握る力が弱くなる。

その瞬間にシャフトを踏みつけ、エンジンブレードを真っ直ぐ振り下ろした。

「ちっ……………!」

「ふん!—!」

胸を押さえるメタルに蹴りを放つ。

メタルは二、三步さがると押さえていた胸を何故か叩いてみせた。

「……………効かねえ……………っていうアピール？」

「そんな感じだな。」

もう少し踏み込まれてたらヤバかったけどな」

と、後ろのルナの方を向き

「おい、ちょっと貸してくれ」

「……………」

ルナは少しだけ動きを止め、ドライバーのルナメモリを外してメタルに投げた。

「？ なんだ？」

アクセルにはその行動の意味がよく解らなかつた。

ルナメモリが綺麗な放物線を描いている間、メタルはシャフトを回転させる。

「……さて……」

メモリをキャッチするとシャフトのマキシмумスロットに装填した。

『ルナ！マキシмумドライブ！！』

再びシャフトを回転させると徐々にシャフトがしなり、先端が輝きだす。

「終わりだ」

回転するシャフトから光輪がいくつも形成されていく。

そしてシャフトを大きく振ると光輪はアクセルめがけて放たれた。

「おっと！」

意外にも一つ一つを難なく回避していく。

が、光輪はビルを切り裂きながらアクセルを取り囲んだ。

「うっそ……………!？」

AM 11:20 - -

風都銀行裏 - -

「ちよつ…………と、探偵さん！」

「なんでこんなところに…………」

翔太郎と禍木は今、風都銀行の裏の方。

「さつき知り合いの刑事に聞いたら、一人お巡りさんが配置についてないんだと」

「そ、れで…………なんで？」

「配置についてないってことは人が足りてないかもしれない。」

銀行に入るんなら裏口が一番手薄の可能性が高い」

という理由で裏口に向かっている。

「でも手薄じゃないかもしれないだろ？」

「いや、一番可能性あるのは裏口だ」

「その自信はどっから……」

「探偵の勘」

「ああ……ダメかもしれない」

若干の温度差を感じながら二人は細い路地を抜けた。

「えーと……」

あ、銀行あそこだ！」

銀行を見つけ、裏口に急ぐ禍木。

しかし、その手を翔太郎が掴む。

「ちょっと待て！」

「うゝえ!?!」

「妙だ………」

翔太郎の目付きが変わる。

「何が!?!」

「裏口なのに手薄だ」

「ちょっと何言ってるかわかんないんですけど」

とりあえず腕を離してもらい

「何言ってるんだよ！」

探偵さん、自分で裏口は手薄だって言ったじゃん……！」

「確かに言った。」

けど、一人配置についてないって聞いてたが

なんで誰もいない……！」

「へ？」

翔太郎に言われてよく確認する。

確かに誰もいない。

強盗が起きているのに関わらず。

「確かに妙だ……」

「警官が持ち場を離れるとは考えられないな……」

「……………！」

「警官と強盗がグル！？」

「それで済んだらいい方だよな……………」

「え？かなり不味くない？」

「もっと嫌な予感がする」

「もっと……って何があんだよ……」

翔太郎はビビる禍木を連れて裏口に向かう。

禍木は完全に翔太郎を盾にしている。

そして後方を必死で見渡している。

「……しかし……心なしか銀行内から悲鳴が聞こえるような……」

「怖いこと言っちなよ探偵さん……」

つて、あああああ！」

突然禍木が絶叫した。

「ちよっ、声デカイ!!！」

「探偵さんあれ、警官だ！」

禍木が指差す方には警官たちが倒れていた。

正確には壁にもたれ掛かるようになっていた。

「ちよっと！大丈夫か!？」

二人が警官たちに呼び掛けるが気絶していて目覚める気配がない。

「死んで……ないよな!？」

「ああ。けど配置された警官が気絶してるってことは中だ……」

ドンドン……!

「!?!?!」

銀行内から銃声が轟いた。

「今のって……」

禍木が何か言おうとしたが翔太郎は聞かずに銀行内に飛び込んだ。

飛び込んでみると中は銃声と悲鳴で満ちていた。

頭を押さえ、姿勢を低くして中を見回す。

人質と思われる人たちが耳と頭を押さえつつずくまっている。

依頼の三輪もいるようだ。

しかし銃声が止まない。

やがて窓ガラスの割れる音が銃声に混ざった。

銃声を聞いた警察側が強硬突入したのだろう。

それを合図に銀行内は静まり返った。

「警察だ！全員武器を下ろせ！」

「何をしている！？早くその刃物を下ろせ！」

「おい何処に行く！？」

「動くな！！」

警官の怒号と一発の銃声が響いた。

「なんだ？」

状況を把握しようとして中腰になった途端、

翔太郎の目の前に大鎌を持った件の死神が舞い降りた。

「はっ！？」

目が点になる翔太郎を死神が蹴り飛ばす。

翔太郎は裏口から外へ転がり出た。

「くっ………そ！」

ゆっくりと銀行から出てきた死神に蹴りかかる。

あっさり避けられ、背後から突き飛ばされる。

「つてえな！」

『ジョーカー!!』

振り向き様にロストドライバーを着け、ジョーカーメモリを起動させた。

メモリを挿す寸前で死神が鎌の石突きで翔太郎の左肩を突く。

「がっ!!」

そのまま壁に押し付けられる。

石突きを退かそうとする翔太郎のジョーカーメモリを死神は見つめていた。

さらにロストドライバー、翔太郎の顔を交互に眺める。

「っ………退けえ!!」

石突きを蹴り払い、脇腹を思い切り殴りつける。

死神は大きく飛び退き、大鎌を構える。

翔太郎も変身しようと構える。

その時、死神の後方、遙か上空に赤いAの字が飛んでいた。

「……………あ？」

呆けた翔太郎の様子を察したのか、死神も後方を見た。

そしてその方に向かって跳躍して行った。

「あつ、逃がすか！」

死神の後を追って駆け出す。

「よかった！生きてた！

ケガないか！？」

心配しての行動のようだ。

多分抱きついてきたのかと。

「いや、今それどころじゃ……」

起き上がろうとしたところで動きを止めた。

脳裏によぎったのは先ほどの赤いAの字。

もう一度空の方を見たが既に消えていた。

「Aって……………」

まさか……………！」

何かに気づき慌てるが、禍木の方を見る。

さらに銀行の方を見て先ほど向いていた方を見る。

もう一度禍木の方を見て翔太郎は両手を合わせて頭を下げた。

「すまん……！」

「
へ？」

禍木を押し退け、翔太郎は逃げるように駆け出した。

A M 1 1 : 2 4 . . .
風花町二丁目 . . .

「……出てこないな……」

「……………」

メタルとルナは退屈そうに立っている。

二人の前には瓦礫の山。

「……前にも同じようなことがあった気がするな」

肝心のアクセルは瓦礫の中。

メタルの攻撃を全て避けたつもりでいたが、ビルの壁が崩れて巻き込まれてしまったのだ。

そして埋まってから5分以上が経過している。

「仕方ない。無理矢理出てきてもらうか……」

「……………!?」

「ああ。前もこんな感じのことがあったんだが、その時は怒らせた
ら」

ドオン！！

突然瓦礫が吹き飛び、赤いAの字が飛び出した。

その直後に瓦礫の中からアクセルが現れ、ルナに斬りかかる。

「……………!?」

反応できないルナを庇い、メタルが防ぐ。

「……………なんだ、埋まっていた割には元気じゃないか……………」

「出る方法を考えてた……………ただだ!!」

全身から蒸気を放出しながらエンジンブレードを振り抜く。

その力を抑えられず、メタルは吹き飛んだ。

『ジエツト!!』

壁に激突したメタル、後方のルナに斬撃を飛ばす。

メタルには命中したもののルナは大きく跳躍して回避し、

脚を鞭のように伸ばしてアクセルの顔面に蹴りを叩き込んだ。

「……っ、厄介な能力だな……！」

再び伸びてくる脚を避け、間合いを詰める。

が、避けたはずの脚がアクセルの左足に巻きついた。

斬り落とそうとエンジンブレードを真っ直ぐ振り上げるも、ルナの両腕が絡みつく。

「……離すなよ金堂」

『メタル！マキシマムドライブ！！』

メタルが復活し、白く発光したシャフトを構える。

もがくアクセルだがルナの締めつける力が強くなる。

そして目の前にメタルが迫った。

「ぬうりゃあああ！」

『トート…!』

突然何処からともなく炎の塊が飛来、そのままメタルに直撃した。

「うおお!？」

何が起きたか全くわからないまま落ちるメタル。

「……なるほどな。」

どつりで配置につかないわけだ」

薄暗い路地から炎を纏ったジョーカーが姿を見せた。

「……翔太郎！」

「こっちは仕事中だ。」

ちやっちやとケリ着けさせてもらっつー！」

未だアクセルを締め上げるルナに飛びかかる。

そこへメタルが割って入る。

「またてめえか……！」

「ぬんっ……！」

振り回されるシャフトを踏み台に、一気に建物の屋上まで飛び上がる。

「逃がさん……！」

メタルがシャフトを突き立てると、建物の壁が崩れた。

その岩盤を蹴ってメタルが駆ける。

「悪いが……同じ手は喰わねえよ!!」

屋上まで駆け上がってきたメタルに炎を纏ったパンチを撃ち込んだ。

その威力にメタルは吹き飛び、別の建物の屋上を転がった。

ジョーカーは崩れていない足場に着地する。

「……………何故お前がここにいる!？」

「たまたま近くの銀行からな、アイツの救難信号が見えたんでね。」

全速力で来たところだ」

ジョーカーは身動きの取れないアクセルを指差す。

「……お前が来るのは予測になかったが、

仕方がない。

ついでに今ここで始末する……」

「ちっ、竜の助けにも行きたいんだけどな……」

そう言ってアクセルの方を見ると、

全身から高温の蒸気を放って拘束から逃れていた。

「っらあー!!」

視線を戻すとメタルがシャフトを振りかぶって迫っていた。

「っと!!」

ルナの拘束から逃れ、膝をつきながら着地するアクセル。

その背後からルナが攻撃を繰り返してきたが、振り返ることなく避ける。

伸縮自在な手足を使った猛攻を全力で回避した。

後転を繰り返し、間合いを拡げてエンジンブレードの引き金を引く。

『スチーム!!』

「……………」

蒸気がルナの視界を奪うが動じることなく、身構えたまま後ずさる。

『エンジン！マキシマムドライブ!!』

真っ白な景色の中からバイク形態となったアクセルが飛び出した。

今度は手を交差して防御をしたルナだが、その勢いは止まらない。

押しきられて壁に激突するまえに、なんとかアクセルから離れた。

アクセルはその勢いそのまま壁を垂直に走り、空中でバイク形態を解除。

ドライバーのクラッチレバーをきってグリップを捻る。

『アクセル！マキシマムドライブ！！』

その様子を見たルナもメモリをマキシマムスロットに挿す。

『ルナ！マキシマムドライブ！！』

「つと！」

ジョーカーはしゃがんで攻撃を避ける。

追撃を受ける前に間合いを取る。

「……戦いの中によそ見は厳禁、だつたな」

「よく覚えてるじゃないか」

「物覚えがいいんだよ！」

腕の炎を凝縮して火球を放つ。

メタルは火球を左手で握り潰すと足場にシャフトを突き立てた。

「だから同じ手は」

「同じじゃない」

突き立てたシャフトを勢いよく引き抜き、コンクリートの塊をジョーカーめがけて飛ばす。

「ちっ！」

ジョーカーも火球で撃ち落とす。

その瞬間をメタルは見逃さない。

「せやあああああ！」

がら空きの脇腹をシャフトで思い切り突かれた。

その威力で建物から落ちそうになるが、なんとか踏ん張る。

「づう……………！」

痛みを堪えるが完全に隙だらけ。

メタルは腕がジョーカーの首を掴んだ。

「死ねえっ！」

ジョーカーはひび割れた足場に叩きつけられる。

うめき声を出す暇なく二度三度叩きつけられる。

反撃もできないジョーカーを放るとシャフトを振るった。

ジョーカーは野球のボールのように別の建物に突っ込んでいった。

「お前らに殺られた仲間二人分の仇、とらせてもらっ……」

『メタル！マキシマムドライブ！！』

発光するシャフトを握り締めてメタルは跳躍する。

『ヒート！マキシマムドライブ！！』

「ライダーグレネード……」

突っ込んだ建物からジョーカーが跳び出し、炎を集中させた右足で

シャフトを蹴り上げる。

その拍子にメタルメモリが宙を舞う。

「まだそんな力が…」

「まだまだ!!!」

メタルの肩掴み、引き寄せて胸を蹴った。

その勢いで互いに建物の屋上に着地する。

「……………っ、甘く見てたな……………」

「俺たちに殺られたとか言ってるけどな!」

「……………ん？」

「実際にお前の仲間を殺つたのは同じミュージアムだろ！？」

「……………厳密にはな。」

「だがお前らに敗れなければ死ぬことはなかった」

「意味わかんねえ……………」

「失敗くらいで命まで取る必要がどこにある！？」

メタルは宙を舞っていたメモリを掴むと、それを弄りながら続ける。

「……………お前の言いたいことはわかる。が、これが俺たちだ」

「何で割り切れる!？」

「あんたの仲間が死んでんだぞ!？」

「ああ、仲間も死んだ。」

「けどな、俺たちはそんな状況での戦いの中でしか生きていけない連中だ。」

「命をかけた戦いでしかな」

「じゃあ何で仇を……………」

「そんな数少ない馬鹿な連中だ。」

「死ぬことはわかってても、やっぱり辛いし寂しい」

「だったら」

「こんな組織抜けると？」

さっきも言ったが命をかけた戦いでしか生きていけないから無理だ」

「話しても理解できねえな……」

「見解の相違ってやつだ。」

もうお喋りはこれくらいでいいだろう」

いきなり視界からメタルが消えた。

上を見るとメタルがこちらの建物に跳び移って来たのだ。

「……ヒートのメモリで攻撃力を底上げか」

そう言ってもう一度ジョーカーを殴る。

ジョーカーも殴り返す。

今度は回し蹴りをするメタルだが、ジョーカーは転がりながら回避。

そしてジョーカーメモリ、ヒートメモリとは違う青いメモリを取り出す。

「それは……神田の!?!」

「初めて使うけどな……」

『トリガー!!』

トリガーメモリをドライバーに挿す。

と、一瞬だけドライバーから青いオーラが放たれた。

「……………あれ？」

オーラが放たれただけ。

それ以外に変化はない。

「……………え？なんか銃がでるんじゃ……」

「ふんっ！！」

困惑するジョーカーに殴りかかる。

が、目の前からジョーカーが消えた。

「……………あれ？」

背後の声に振り向くとジョーカーが自分の手足を確認していた。

「いつの間にか……………」

「こねってメモリの…」

よそ見をしていると再びメタルが殴りかかる。

またしてもジョーカーは視界から消えた。

「なんだと……」

周囲を見ると別の建物にジョーカーが立っていた。

「そういうことか……」

「これがこのメモリの……」

そう呟き、また姿を消す。

そしてメタルの前に現れた。

「速っ……………」

「おらあっ！！！」

メタルの胸に拳を叩きつけて吹き飛ばす。

空中に投げ出されたメタルに跳び蹴りを浴びせる。

二人は建物に着地し向かい合う。

「……………どうやら、俺自身が弾丸みたいだな。」

まさかスピード特化とは……………」

ドライバーからメモリを抜き、マキシマムスロットに挿す。

『トリガー！マキシマムドライブ！！』

「さて、こいつで決まりだ」

目にも止まらぬ速さで後方の建物に移動し、腰を落として構える。

その状態から駆け出し猛スピードで跳躍、青い光を纏った右足を突き出す。

『メタル！マキシマムドライブ！！』

ジョーカーが迫るギリギリの瞬間、メタルはマキシマムスロットにメモリを挿した。

全身を白く発光させ、防御の姿勢で構える。

「でやああああー!!」

「ぬうんー!!」

凄まじい勢いで衝突。

火花が散る中、マキシマムの均衡は崩れない。

ジョーカーに至っては跳び蹴りの姿勢のままだ。

「…っるおおおああー!!」

力を振り絞り、メタルはジョーカーを上弾いた。

そしてすぐに迎撃するために構える。

ジョーカーは高く弾かれると空中で姿勢を直し、マキシマムスロットからトリガーメモリを抜き取る。

落下しながら自分のジョーカーメモリを挿した。

「……………今度こそこいつで！」

『ジョーカー！マキシマムドライブ！！』

「決まりだ！！」

真っ直ぐ右足を下のメタルに向ける。

「ライダーキック！」

落下の力を使いはしたものの速度は不十分。

しかしメタルは先ほどのマキシマムで消耗したのか防御が間に合わない。

ジョーカーの右足はメタルの両手をすり抜け、みぞおちの辺りを捉えた。

「らあっ！！」

「うあっ……………！」

ライダーキックの威力にメタルは足場に亀裂が入るほどの勢いで撃ちつけられた。

「があっ……………ふ……………！」

悶えるメタルのドライバーから煙が上がる。

それを見たジョーカーがメタルのドライバーに手を伸ばす。

が、メタルはその手を払いのけて起き上がり、足場の端まで後退した。

「お前……まだ……」

「戦える……とでも？」

肩を大きく上下させながら呼吸をするあたり、

戦える状態ではないことは明白だ。

「戦えないなら投降しろ。」

命を取るつもりはない」

「甘…………いな…」

俺たちみたいなのは…………生かしくと厄介だ…………」

突如メタルのドライバーが弾け、メモリが足場を転がった。

変身も強制解除され人間態に戻される。

「左翔太郎……………そんなに甘いと…………この戦いじゃ生きていけない」

「…………どういっ…………」

「後々わかる……………」

「少しずつ、坂下はさがっていく。」

「おい、待て、なんの真似だ？」

やがて一歩踏み出せば落下のところまでさがった。

「……………今回……………アクセルを倒せなかったら……………」

俺は始末される……………」

「なっ……………」

「もう戦えん……………」

だが大人しく始末されるつもりもない……」

そう言うと坂下は不敵に笑った。

その瞬間ジョーカーは走り出した。

坂下を掴もうと手を伸ばす。

黒いその手は坂下を掴めなかった。

掴み損ねた拍子に躓き、倒れこむ。

すぐに起き上がって淵に立つとアスファルトの上で坂下が倒れていた。

「何で……………」

掴めなかった手でコンクリートの足場を殴りつける。

「意味わかんねえ……」

わかんねえよ……………」

ジョーカーは倒れている坂下のもとへ飛び降りた。

『アクセル!』

『ルナ!』

『『マキシマムドライブ!』!』』

アクセルは空中で身体を捻り、ルナは腕を伸ばしながら跳躍する。

「はっ!」

後ろ回し蹴りを放つが空中で上体を反らされて避けられる。

「なっ!?!」

空中で身動きできないアクセルにルナの腕が迫った。

ルナの拳がアクセルの顔面にヒットする寸前、

二人に何かがぶつかった。

「「!?」」

何が起きたかわからず二人はアスファルトに背中から着地した。

「つつ………」

「………!」

横たわる二人のもとへローブを纏い、大きな鎌を持った死神が現れた。

「まさか………例の死神？」

困惑しながらゆっくり起きるアクセルに対し、ルナはすぐに立って死神に襲いかかった。

死神はルナを避けて大鎌を振り抜く。

「次から次に何なんだよ!!」

アクセルも殴りかかるが蹴飛ばされてしまう。

ルナもアクセルも完全に手玉にとられていた。

「……………落ち着け……………」

「落ち着けば勝てる!!」

そう自分に言い聞かせてもう一度死神に攻撃を仕掛ける。

アクセルが動いたから少し間を空けてルナも動く。

しかし死神は二人の波状攻撃を完璧に捌いた。

そして大鎌に何らかのメモリを装填する。

「……………！」

「ガイアメモリ……………！？」

二人は危険を察知し、別々の方向に跳んだ。

『デス！マキシマムドライブ！！』

電子音が響くと、死神は赤い稲妻を帯びた大鎌をアクセルに向けて投げた。

「くそっ！」

なんとか防御したものの、赤い稲妻がアクセルにまとわりついてくる。

さらに大鎌はブーメランのようにルナのもとへ飛んでいく。

「……………！」

逃げようと建物に腕を巻きつけて移動するも、大鎌は何処までも追いかける。

観念したルナも大鎌を防御して着地した。

アクセル同様、赤い稲妻がまとわりついてくる。

「……………何だこの赤いの？」

まわりついてくる割には何も異常はない。

それにマキシマムを受けたのにダメージが全くとっていいほどない。

「!?!」

突然ルナが胸を押さえて倒れた。

足をバタバタさせて悶絶している。

「……………何だ……………？」

急に糸の切れたマリオネットのように動かなくなった。

そこに死神が歩み寄り、大鎌でドライバーを斬った。

動かないまま変身を解除させ、ルナメモリを取り出す。

まじまじと見つめ、大鎌のメモリと見比べる。

「……………おい、お前何をした!？」

死神は驚いたようにアクセルを見る。

「……………生きてる?」

小さく呟くと、アクセルに迫って大鎌で切り裂いた。

「うあ!?!」

先ほどと同じように赤い稲妻がまとわりつくが、やはり変化はない。

「……………調子悪っ」

「お前!

そいつに何を……………」

「……………君、何?」

「……………は？」

「もういい。今日は見逃す」

そう言うと大鎌でアスファルトを切りつける。

火花が飛び散り、それに目を覆う。

気づけば、死神の姿はなかった。

「……………あいつは!？」

辺りを確認しても見当たらない。

それがわかると倒れている金堂のもとへ走る。

その様子を建物の屋上から死神が見ていた。

「……………赤いのは…………ミュージアムではないのか…………？」

真下でアクセルが金堂に話しかけている。

「……………やはりミュージアム……………？」

まあ……直にわかるか……」

大鎌を担ぎ、死神はオフィス街へと消えていった。

強襲のM / 見解の相違 (後書き)

夏休み満喫しすぎて執筆してなかった、XN - RISERです。

何か更新する度に作品のクオリティーがさがっていく……

もともとないんですけどねWWW

最近はどうも執筆が進みません。

話は考えてあるのにどうにも進みません。

皆さんはそういつ時ありますか？

誰かアドバイスください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1798n/>

左翔太郎探偵物語

2011年10月10日15時43分発行